好箇西來意、㋰人の共に家を出づるなし。」師云く、「㋒耳を掩ふて鈴を偸む。」僧云く、「㋻和尚多くはこれ學人を成褫す。」師云く、「老僧儞に向つて甚麼とか道つし。」僧云く、「㋨當面に蹉過す。」師云く、㋔座上に老僧なく、目前に闍梨なし。㋗聻。」僧云く、「㋳夾山の背後に向つて叉手すること莫れ。」師云く、「㋮老僧儞に靠倒せらる。」乃ち云く、「㋘明明に汝に向つて道ふ、㋫得の得は不得なり、㋙不得の得は得なり、㋓自ら是れ諸人雙眼淸寒にして、㋢無事甲裏に坐在す。㋐直饒ひ彌勒即今下生して、㋚三頭六臂を現ずとも、也た儞を救ふこと得じ。」

臘八上堂、僧問ふ、「釋迦老子、㋖金輪の寶位を棄て、㋴雪山に苦行すること六年、臘月八夜に於て、忽ち㋱明星を覩悟り去る。㋯還つて端的なりや也た無や。」師云く、「㋛人をして長く李將軍を憶はしむ。」僧云く、「㋽後來一藏の葛藤を說いて、㋪技を牽き蔓を引き、㋲尿を拋じ屙を撒して、今に至るまで未だ已まず。」師云く、「㋝獅子身中の蟲。」僧㋜坐具を擲下して云く、「未だ明星を見ざる時、㋑還つて箇の消息ありや也た無や。」師云へ、「㋺髻を把つて衙に投ず。」乃ち拄杖を卓して云く、「㋩是は則ち是、㋥窮するときは則ち變じ、變ずるときは則ち通ず、只だ㋭三更半夜の如きんば、㋬衆星朗然たり。知らず是れ㋣那箇の星を見てか悟り去る。㋠急急に出で來つて、一轉語を下して、者の老子を蓋覆せよ。然らずんば、㋷後悔を貽すこと毋れ」といつて、㋦拄杖を靠く。

㋸華藏和尚至る上堂、僧問ふ、「㋾我が手何ぞ佛

㋰無人共出家。珠云く、こゝの處を見徹したならば、又貪瞋痴の生死の家を出づべきに。

㋒掩耳偸鈴。これを日本で云ふならば、「頭かくして尻かくさず」なり、鈴は羊につける小さい鈴のこと、我が耳を掩ふて他人の聞かざるを欲す、是れ鈍感の謂なり、淮南子や呂氏春秋に出でゐる、珠云く、「おれは出たが、人は家を出ないと云ふた。」

㋻成褫學人。褫は音池、褥を藉くなり、他を成就重待する意、俗語の引立つるなり、珠云く「和尚の左樣仰せ下さるは、私をおひきたて下さるのじや」と、又わたくしづれの者を御印可なされて迷惑でござりますと。

㋨當面蹉過。珠云く、「人天衆前大きなしぞこなひをなされました」蹉過は虛堂の上を云ふ。

㋔座上老僧。珠云く、「成褫底の老僧も成褫せらるゝ底の闍黎もない。」

㋗聻。へいどうですかと云ふて看よなり。

㋳夾山背後。これは古人を詆襲するを責むるなり、洛浦の傳にある故事の昔に付いてまはりはいたさぬとなり。

㋮老僧儞靠例。靠倒は唐宋時代の俗語で、だしぬけをくうと云ふの意、又不意討にあふと云ふの意、反問さるゝなり、虛堂がきさまに不意打に逢ふて、かへつて反問されたとのこと。

㋘明明向汝。珠云く、「日の如く月の如く、ちりほどもうそは云はぬ。」

㋫得得不得。得は行なつて所得あるなり、言ふ所の得中の眞得は即ち不得なり、故に般若心經に「無智亦無得」とあり、

珠云く、「此の二句、無事甲裏か塗毒鼓か倚天長劔か。」

㋙不得得得。不得にして得る、これ所謂眞の得なり、得は所得の相なき故なり。

㋓自是諸人。空見の相なり、如上の惠照なき故に、珠云く、それに自己とみなが皆、淨躶躶地の處を認取す。」

㋢無事甲裡。不得の言跡を認むる故に、珠云く「無事是れ貴人。」

㋐直饒彌勒。此のやうに世がわるくなつてと云ふものは寶林は彌勒垂迹の地なれば之を言ふ。

㋚三頭六臂。珠云く、「神變不思議をあらはしてもなり、」この上堂は虛堂御家のとつてをきなり。

㋖金輪寶位。四天下を領すべき天子の御位を敝屣の如くすてゝと。

㋴雪山苦行。凡夫と同じやうに

㋱覩明星悟。一佛成道、觀見法界、艸木國土、悉皆成佛と悟れり。

㋯還端的也。端と的とは共に正なり、正理の當然を問ふと、今日の言葉では着眼點、そこにあるかどうかとなり。

㋛憶李將軍。これは溪註に「問話不利人をして、箭虛しく發せざる底の李將軍を憶はしむるなり、或抄に李は釋尊を指すと珠云く「そのやうなばけのかはをしをるのを、引取の名人に射ぬかしたい。」これは彼の雲門の云く、我れ若し昔日在さば、狗子に與へて契却せしめん、貴ぶらくは天下太平を見んと云ふと同じ。」

㋽後來一藏。珠云く、如來が見性悟道したとて、やれ華嚴、阿含方等、般若涅槃じやの何のかんのと。」

（ヒ）牽枝引蔓。珠云く、「經じや、論じや、律じやのと、又西天の四七、東土の二三、歷代の相承をば云ふ。」

（モ）抛尿撒屙。一代時教を云ふ、言句を不淨じやと云ふ、この葛藤は今に於て已まぬ、諸善知識の說法を指す。

（セ）師子身中。溪注に「元來が無所說の法じやに、此の僧妄に法をそしる故に」と、珠云く、「うぬめ、にくいやつじや、佛の一大藏經は大火聚の如く、象王の鼻の如くじやに」或抄に「人をわるく云ふは、己をわるく云ふ。」

（ス）坐具。これは僧家に佛前、又は祖師前に敷いて禮拜するに用ふるもの、梵には尼師壇譯して坐具と云ふ、或は隨坐衣とも云ふ、袈裟の上又は下にかけてゐるもの。

（イ）還箇消息。珠云く、「者箇これを佛も知つたかどうじや」と。

（ロ）把髻投衙。溪注に「歸降の義なり甲をおろしもとゝりを把りて衙に歸投するなり、衙は唐制に、天子の居を衙といふ、行を駕と云ふ、或抄には「死刑するところなり」とあり、珠云く、「甲を卸し降參して來れ、云ふてきかさう」と。

（ハ）是則是。珠云くよきことはよい。世界國土、山河大地皆如來の身體それでは寶のもちぐさり。」又卓拄杖は人々本具じやと評するなり。

（ニ）窮則變。これは易の繫辭のことばなり、溪注に、「工夫窮るときは則ち開發變通あること亦知るべし」と、珠云く、「或は七日二七日乃至接心して骨を折ると、ぐわらりあらはれる、通ずるは久じや。」

（ホ）三曲半夜。正と珠は云へり。

（ヘ）乘星朗然。偏と珠は云へり。

（ト）那箇星。珠云く、「明星と云ふたならば三十棒。」どの星をみての成道か。」

（チ）急急出來。珠云く、「大衆はやばやきて、如來星を覩て悟ると云ふ、其の敗闕の處を蓋覆しかくせ、古佛の慚愧を蓋覆せよ」と。

（リ）毋貽後悔。珠云く、「不然で、さうなくは後悔してあとで先にかういへばよかつたと云ふな。」

（ヌ）靠拄杖。或抄に、「明星を指したところじや」と。

（ル）華藏。未だ其の人を審にせず。

（ヲ）我手佛手。これは下の二問に逗じて黄龍の三關と云ふ、難透難解なり、臨濟、曹洞、雲門などを一束にして唱へ出した。

（ワ）老婦攀眉。我が手を以て佛手に擬するを以ての故事は、報恩錄の部に見えたり、珠云く、「此れまた甚麼ぞ、盧堂門下の大事、出醜はいとゞみにくいじや、しほらしうするほどみつともない。」

（カ）趙州⿰彳京彴。⿰彳京は略に作るべし、獨木の橋を云ふ、珠云く、「これは實に紅旗閃爍と着語す」、趙州の石橋とて、日本などでも田舍の小川などにある飛石のはしなどな又、り水の上に一寸木をよこにしてある

手に似たる。」師云く、「（ワ）老婦眉を顰め醜を出す。」僧云く、「我が脚何ぞ驢脚に似たる。」師云く、「（カ）曾て趙州の⿰彳京彴を蹈む。」僧云く、「人人箇の生緣あり、如何なるか是れ學人が生緣。」師云く、「（ヨ）人前に向つて茄樹を拔くに懶し、南川に去つて化主と作らんことを。」僧禮拜す。師乃ち云く、「（タ）我れ本心に希求する所あることなし、（レ）今此の寶藏、自然にして至る。二林は小衆なり、（ソ）枯枯燥燥として（ツ）鶴望すること多時。（ネ）珊瑚の枕、明月の珠、便に從つて採取す（ナ）只だ是れ諱に觸るゝことを得ず。」

（ラ）上堂、「傳大士（ム）本相現じて、（ウ）一地裏の人を引き得て、前廊後架尿を抛ち屙を撒す。（ヰ）之を龍華の勝會と謂ふ。（ノ）知らず當來の所證、（オ）果して此れありや否や。然らずんば」、拄杖を卓し

（ヨ）向人前拔茄樹。茄は本草綱目に旻陀羅華、一名山茄兒風茄見きちがひなすび、此の花で酒を造りて、一人をして或は笑ひ或は舞はしむと、又支那では問禪問話の僧を拔茄樹と云ふ、一說には唐土に人を嘲けるの語なりと、南川は蜀の地、この僧の生緣か、云ふ意は雜務の慚愧を作すに忍びず鄉里に歸りて托鉢でもするに如かずと、生計を以て生緣を荅ふ、これは溪注に見ゆ、珠云く、「人にわらはれると、年老いてあるいて鄉里へ返つて堂もりでもせよと。」

（タ）我本心希求。この語は法華經の信解品に出づるなり、希は經には悕に作る、珠云く、「華藏和上の御出、中々及びないと思ふて居た。」

（レ）今此寶藏。これも上と同じつゞきの文なり、藏は華藏の藏に托して寶藏の文を引き、以て和尚の自ら招かざるに來り至るを謝す、寶藏は功德の寶藏なり、珠云く、「不意に彼方より御出じや。」

（ソ）枯枯燥燥。枯淡乾燥にして富潤の色なしと、この虛堂が處は貧乏で勝手かがいにわるいと。

（ツ）鶴望多時。つるの長き首をのばしてまつやうに、寶藏のたからぐらを望むこと久しきに至ると。

（ネ）珊瑚枕。藏中有らゆるの寶物無量の故に、隨用缺くることなしと、以て華藏の蘊畜する法寶は無量なるに比す、珠云く、「さあ〳〵、ほしいものはとれ〳〵、寶藏への謝語。」

（ナ）只是觸諱。只だ藏の字に約して佛性の諱に觸れずとなり、珠云く、「鶴望の採取のと云ふ

て、㋗青山綠水、短棹孤舟。」

㋳慈雲和尚至る上堂、僧問ふ、「㋮路に道伴に逢ふて肩を交へて過ぎば、一生參學の事畢る時如何。」師云く、「㋘鵓鳩樹上に啼く。」僧云く、「㋫也た恐る、和尚古人を見ること未だ盡さざらんことを。」師云く、「㋙同道方に知る。」僧云く、「知つて後如何。」師云く、「㋓布袋に錐を盛る、快きもの先づ出づ。」

㋢乃ち云く、「㋐去住無心、㋚卷舒則あり、㋖之を布くときは則ち六合に彌る、六合猶ほ窄し、㋴之を置くときは則ち一毫に斂む、一毫猶ほ寛し。㋱彼の羣生の爲に、何く從りしてか起る。」㋯拄杖を卓して、「㋛帝鄕を飛過し去つて、㋓遠く南山の陰に接す。」

上堂、擧す、㋪風穴因に僧問ふ、「㋲語默離微に

もの〻、その根本の名はわかたぬ」、又云く、「小判を小判と云ふな、玉を玉と云ふなと云ふことじやが」、又云く、「そのお名は申さんが、寺內うるほひ大慶に存じます。」或抄に云く、「不レ得レ觸レ諱とは今、藏の名に託して云ふて、和尚の名に觸れぬ」と。

㋶上堂。これは龍華會の上堂。

㋰本相現。本相は彌勒應身の相圓光寶蓋ありて、此に出現すと珠云く、「彌勒佛の本相がどこへもかしこへも一ぱい顯れ出で」と。

㋒一地裏人。この寶林寺の人をさあ皆來いと、前廊後架、せども街道も、拋尿撒屙と、むさ〳〵ひりちらかすとは誦經禮讃、當齋辨香等じや、溪注に「處々に於て佛法を商量する」の謂なり。

㋼龍華勝會。祖庭事苑七に云く「龍華三會註に龍華は樹なり、その樹華あり、華の形、龍の如し、故に龍華と名づく」と、又經に言ふ、「當來彌勒此の樹の下に於て說法度人三會あり初會に先づ釋迦の未だ度せざる所の者を度し、次にその餘の凡そ六十八億人を度し、第二會に六十六億、第三會に六十四億、故に龍華三會と云ふ」珠云く、「寶林に於て傅大士の會を建て、稱して龍華會と云ふは、大士はこれ彌勒の化身で、當來龍華樹下に於て成道す故と。」

㋨不知當來。受記作佛なりなんとどうであると問ふ意なりと經には云へるが、當來のことが即今か合點いつたか」と珠は云へり。

㋔果有此否。若し所證なくんばなり。

㋗青山綠水。能く〳〵眼を著け

て看よ、即今目前の現境他物に非ず。」

㋳慈雲。浙江嘉興府慈雲寺の和尚。舊說には觀物和禪師なりと、この提綱は雲の字に寄せて、佛事をなすを見れば、この說あたれるか。

㋮路逢道伴。虛堂と慈雲和尚は道伴かこの路逢より、一生參學事畢るまでは長慶の語で、この錄の延福錄に見ゆ、珠云ふ「雪峰門下の吹毛劍、この語は金剛王寶劍の如き大名劍じや、畢る時とは諸勘定さつぱりすむとき。」

㋘鵓鳩樹上、其の意は群を求むるに在り、珠云く、「くく〳〵と鳥類だに伴がなつかしい。」

㋫也恐和尚。意に曰く「古人知道の人に在つて、必ず群を求むるに在らず」、珠云く「どうか和尚に長慶のしん底が見えぬさうな。」

㋙同道方知。汝等が所知にあらずとなり、珠云く「慈雲和上より知つていた。そさうを云ふな。」

㋓布袋盛錐。今は鑱利の道伴に撞著するなり、珠云く、「穎利なるものは直にもぬけ出て、道伴に逢著す。きさまのやうな馬鹿は彌勒下生に至りても逢ふことは出來ぬ」又云く「利鈍早く顯はれ、利はこれ見盡す、鈍はこれ未見盡さずじや。」

㋢乃云。提綱なり。

㋐去住無心。慈雲の雲に託して德を表す、全篇一意珠云く、「此の提綱は始終慈雲の去住自由を述べて自性の妙用に比す。」

㋚卷舒有則。其の自由の進止、則とすべきことあり、白樂天の詩に「舒卷如レ雲得ニ自由一」と云ふがある、珠云く、「藏すべきときは藏す行ふべきときは行ふ、共に祖師門下の規則となる」、卷舒は與奪自在を云ふなり。

㋖彌於六合。六合は天地四方なり、珠云く、「其の妙用を以て之を布くときは、人々具足、如來をとりひろげるとじや」、放行底なり。

㋴置之則。猶窄猶寛とは其の極致を談ぜんと欲す、把住底なり。

㋱爲彼羣生。彼は慈の字を、何の字は雲の字を云ふ、珠云く、「其の中へ文殊の普賢のと云ふものがどこからくるやら、何にからなれば大慈悲心ばかりより。」

㋯卓拄杖。雲の起るところを指して

㋛飛過帝鄕。莊子の天地篇に「彼の白雲に乘じて帝鄕に至らん」とあり、珠云く、「本分家鄕の帝鄕を飛び過ぎ去つて、南山差別の境に趣いて、羣生を利濟す」、忠曰く、「今の南宋は臨安府、則ち浙江の杭州府に都す、これを帝鄕と云ふ」、忠曰く、「飛過は雲にちなむの語なり。」

㋓遠接南山陰。忠曰く、「南屛山即ち淨慈寺なり、臨安府にあり、觀物初の師北磵和尚時に淨慈に住す、嘉興府と臨安府とは稍遠し、故に遠と云ふ、接陰これも雲にちなみし語なり。」

涉る、如何が不犯を通せん。」穴云く、「(セ)長く憶ふ江南三月の裏、鷓鴣啼く處百花香し。」師云く、「(ス)風穴關を破つて敵を受く、(イ)知らず者の僧を蹉過することを。二林に僧ありて出でゝ問はゞ、拄杖を拈じて(ロ)便ち打たん。」

上堂、擧す、趙州因に(ハ)僧問ふ、「(ニ)一物不將來の時如何。」州云く、「(ホ)放下著。」僧云く、「一物不將來、箇の甚麼をか放下せん。」州云く、「放不下ならば(ヘ)擔將し去れ。」師云く、「趙州者の僧の痛處に向つて、(ト)一針を下す、妨げず奇特なることを。(チ)只だ是れ病膏肓に入る、(リ)以て藥を發し難し。」

上堂、(ヌ)明明に道ふ、言語の上に在らず、何ぞ必ずしも三寸の舌頭を用ひて、帶び將ち出來らんと、(ル)會得せば、(ヲ)桐花地に落ちて春將に半

(ヒ)風穴。名は延沼、南院顒に嗣ぐ、臨濟義玄—興化存奬—南院惠顒—風穴延沼。風穴ば唐の昭宗乾寧三年餘杭に生れ、汝州の風穴寺に住す、宋の太祖開寶六年に寂す、日本の圓融天皇の天延元年に當る。

(モ)語默涉離微。溪注に「語默動靜、離微に涉るは道妙なれば如何が犯觸せざることを通達せんとなり」とあり、珠云く、「言ふに付け、だまるにつけ、なにがものがござるとじや」、離微は出息入息、又生滅有無と同じ、離は默、微は語なり通不犯は珠云く、まつかくの時如何が五蘊六塵に染まざることを得るとじや」肇法師の寶藏論に離微の事、くはしく出づ、これによりしものか、是は「大光明藏」の師の傳に云く、「離は正中偏、本分受用微は偏中正差別用。不犯は本分正位を不犯と云ふ。

(セ)長憶江南。鷓鴣「しさご」、古は多く越の地に住めりと云ふ、江南の暖き三月ごろは、愛くるしい鷓鴣は咲きみだれたる百花の下で、自然の恩惠に對して感謝の歌をさゝげて居る、これ離か微か默か語かに即して離微に涉らざるところでないか、現成底ではないかと、珠云く金剛寶戒を風穴がまるけ出した」又云く「釋迦さまも一生此の機を用ふ、禪僧の守りじや」。「長く憶ふ」は正宗贊には「背憶とあり、大光明藏には「常憶」とあり。

(ス)風穴破關。自ら關を開き破つて敵を受くるなり、珠云く、關門を開き破つて敵を受く、いかないかな、一人生かしてはかへさぬ。

ならんとす、(ワ)然らずんば、(カ)杜宇歸を催して月三を過ぐ。」

上堂、擧す、百丈(ヨ)普請して地を鉏く次で、一僧あり、鉏頭を擧起す、忽ち鼓聲を聞いて、乃ち抛下して大笑して便ち歸る、丈云く、(タ)俊なる哉、此れは是れ觀音入理の門なり」といつて、院に歸つて乃ち僧を喚んで問ふ、「適來箇の其麼の道理を見てか、便ち與麼なる。」(レ)僧云く「適來肚飢う、鼓聲を聞いて歸つて飯を喫し去る。」丈乃ち大笑す、師云く、「百丈當面に者の僧に謾ぜらる、若しこれ二林ならば、(ソ)誰だ儞が口欵を管せん、(ツ)未だ招かざるに、便ち闌胸に一踏を與へん。只だ百丈笑ひ者の僧笑ふが如きんば、(ネ)還つて優劣ありや也た無や。」

(ナ)西白和尚至る上堂、僧問ふ、「三日(ラ)說著せず

(イ)不知者僧。風穴は天眞無爲の法を將て、八字に打開し來つて、者の僧の會せざるを奈何んせん」と溪注にあり、珠云く「者の僧をやりすごした、馬耳風じや、虛堂はなぜかういふた、八方に敵を受けたと思たが、つひ此の僧をつんにがした」、或抄に「不會を如何せん」と、蹉過は大失敗のことなり。

(ロ)便打。珠云くこゝにはわけのある故、氣を付けてみよ、離微といふところに拄杖を拈じた、」便打は把住なり。

(ハ)僧問。僧は即ち嚴陽尊者なり名は善信、趙州に嗣ぐ、雲臥紀談の上に詳なり。

(ニ)一物不將來。珠云く、「煩惱菩提、迷悟凡聖、すつきと。しよいもござらぬが、如何がいたさうぞ」と。

(ホ)放下著。すてゝしまへなり。

(ヘ)擔將去。になふてかへれなりこの次に五燈會元や正宗贊には「於二言下一大悟」とあり。

(ト)下一針。一はりさいたといふこと。

(チ)只是病。珠云く、「嚴陽久しく髑髏禪を修してゐた、趙州がところへ來て、何もかも打つぶされたいきのねもあがらん。」

(リ)難以發藥。教化しがたいと。

(ヌ)明明道。あからさまにいふこと、珠云く、「口を以ていふてきかさないでもよい、雀はちふ〳〵犬はわん〳〵と說法してゐる。

(ル)會得。言語上でないといふことをがてんしたならばなり。

(ヲ)桐花落地。珠云くこれは東山下の暗號令、虛堂が云ふたほどに〳〵、なんとも辨のつげやうがない、春將半は二月中旬なり、或抄に「桐花落地は無心自然の境界を會得する底

んば、㋰口邊に白醭を生ず、㋒學人出で去つて四十餘日、作麽生。」師云く、「儞が㋖口邊に靑艸を出さんを待つて、却つて汝に向つて道はん。」僧云く、「㋨低聲低聲、墻壁に耳あり。」師云く、「㋔也た大家知らんことを要す。」僧云く、「只だ口邊に靑艸を出す底の人の如きんば、㋗還つて方便ありや也た無や。」師云く、「大いに方便あり。」㋳僧云く、「那裡か是れ他の方便の處。」師云く、「㋮學人不會。」僧云く、「㋘風穴破屋數間、㋫單丁なるもの七年、㋙後に臨濟の正續と爲る、㋓西白道人は即ち斯の人なり。㋢深雲古木、㋐雙眼淸寒なり㋚大音希聲、㋖豈に常の調に同じからんや。」佛生日上堂、僧問ふ、「㋙鐵壁鐵壁、之を號して佛と曰ふ、㋱常に苦海の中に在つて立つ。㋯

の當位なり。

㋻不然。珠云く、「上句の意、見得せずんば、光陰矢の如く、春過ぎ了りて直に夏來る、あつたら春を過さん」と。

㋕杜宇催歸。杜宇又は催歸と名づく催歸は四月なり、過三は三更をすぎてゐるといふことる。

㋵普請。作務と云ふて禪宗の僧堂では日をきめて雜務をさせる、この百丈は九十五歲までこの作務をせられ、「一日作さゞれば一日食はず」といはれしなり。

㋟俊哉此是。大鼓の音をきいてこれは衆を集める合圖なり、これ鈕をほりだして大笑す、これを百丈がみられて、太だ俊快な奴じや、觀音の入理にかなふてゐると云はれた、これは楞嚴經六に「觀世音は聞思修より三摩地に入る」とあるによる、珠云く、「あつゝ、此の僧佛性を識得す、皆だれでも了悟の者は本心が開く、其の上諸緣をはなる、凡夫はさうでない、諸に觸してばかり居る。」

㋹僧云適來。珠云く、「此の僧久しく百丈下に居て、にがでをくらつてゐた故、さきから、はらがすいてひもじいかつたからとやつた。」

㋞誰管儞口款。誰は虛堂がその方の適來肚飢肚飢と、口款は白狀するのも管せん、かまふものかなり。

㋡未招闌胸。未招は招ぎ承はる招き伏するの招なり、罪人が罪に伏するなり、闌胸は驀直に胸を踏み倒す、これを闌胸一踏と云ふ。

㋧還有優劣。只だと倂しながら百丈も笑ひ者の僧も笑ふやうなれば、まだどちらか優劣があるかどうじやと、珠は云ふ、

「虛堂先づおぬしから云はしやれ、差配をきゝたい。」

㋤西白。未だ審にせず、蓋し韜光晦跡の道人ならん。

㋶說著。此の事をば三日も說きえなかつたならばなり。

㋰口邊白醭。前の冬至小參に見ゆ、不言の義。

㋒學人出去。この禪客久しく外に在つて今かへり來て、此の問を立つ。

㋖日邊靑艸。これは死人なり、靑草が舌の上にはえると、これも把住して云ふなり、不言の義なり。

㋨低聲々々。「其の聲、雷の如き故に」と溪注にあり、珠云く、「この僧は大低のやつではない。」かべに耳ありとなり。

㋔要大家知。衆人同知すべしとなり珠云く、「おらが大衆にもきかせたい。」

㋗還有方便。或抄に「不說底、かへつて垂手爲人の處あり麽。」

㋳牛搏馬踏。溪注に「大無心無方便これ眞の方便」、珠云く、「牛がふまうが馬がはねやうが、とんとかまはぬ、口邊に靑草を出す底の方便」

㋮學人不會。珠云く、「それでは到りえません、こいつよほどよき坊主じや。」

㋘破屋數間。外の書には數椽に作る數は幾なり、五六間なり。

㋫單丁。たつた一人、影ばうしとともにくらしてゐられた單は獨なり丁は伴侶なきを云ふ。

㋙臨濟正續。後唐の明宗長興二年、汝水に至りて艸屋數椽、山に依つて逃亡の人家の如くなるを見て、田家父老曰く、古の風穴寺なり、風穴入りて、留止す日は村落に乞ひ、夜は松脂を燃く、單丁なるもの七年、檀信之を新にして業林と成る、天福二年州の牧、其の風を聞いて、禮を盡して之を致す、上元の日開法す、南院に嗣ぐ、また雲門は生れてゐられて、師の風穴に住す、前年の長興元年に靈樹寺に入院、これ韶州なり、日本では醍醐帝の延長八年である、珠云く「まがひかくれない、臨濟第四祖と稱す。」

㋓西白道人。珠云く、「此の西白道人は彼の風穴の如く七年も隱遁してゐられるが、爲人底なし」と。

㋢深雲古木。溪注に「白雲深き處、古木寒嵓に安住す」とあり、珠云く「すみあかり立ちあがり、深雲にかれ木の立ちあがつたやうな。」

㋐雙眼淸寒。眞の靜退なり、眼前一點の塵俗なし、珠云く、「暖かな目もとはすきとない、すきとほり切りて、悟りも迷ひも、今時那邊眼にかゝるもはない」と、又云く、ほめたやうなが虛堂の氣にはいらぬ。」

㋚大音希聲。これは老子經の下に、大方は無隅、大器は晚成、大音は希聲、大象は無形、」却つてこれ大音聲佛事なり、これ箇の妙唱舌に干らず、故に尋常の調に同じから

只だ今日の如きんば、降生底が是、苦海の中に立つ底が是。」師云く、「二り倶に不是。」僧云く、(シ)「天上天下唯我獨尊、(エ)聻。」師云く、「(ヒ)籠頭を脫却し角駄を卸せ。」僧云く、「恁麼ならば則ち(モ)三尺と一丈六と、且つ(セ)同じく手を携へて歸る。」師云く、「(ス)爾道へ、他幾莖の蓋膽毛かある。」(イ)僧便ち喝す、(ロ)師亦喝す。乃ち拄杖を卓して云く、「(ハ)看よ看よ、(ニ)九龍水を吐いて、金軀を灌沐することを、(ホ)紫毫相の光、幽として燭さずといふことなし。(ヘ)直に得たり、(ト)嘉禾の老比丘、(チ)一足を跛却して、(リ)走りて廣南の光泰寺裏に到つて、(ヌ)口あれども也た讚嘆し及ばざることを。何が故ぞ、(ル)物主を見て眼卓竪す。」結夏上堂、「(ヲ)山に登らば須らく頂に到るべし、

ず、今出世說法せざるが故なり、溪注に見ゆ珠云く、「雷の如くなる、平生說法してゐられる。」

(キ)豈同常調。珠云く、「皆がきゝとらぬも尤もじや、世の陽春白雪のやうなことでなし。」

(コ)鐵壁々々。難關につきあたるを云ふなり、珠云く、「惡ざう妄想をひつくるめ、其の上へ萬空法空をとつてのける」と、外は鐵壁々々、又この座しきもせども、かい道も一ぱい、天魔波旬も、つらだしはならぬ、或抄に「堅固法身底。」

(メ)苦海中立。溪註に「鐵壁に寄せて言ふ、或は因地歷劫、勤苦を謂ふ」と、常とは二七時なり。苦海は娑婆世界なり、苦具とも云ふ、法身理體、人々具足底なり、「立は化身を云ふ。

(ミ)只如今日。是の如きんば應身降生底とは生身佛がほんとうか、苦海中は化身佛がほんとうか。

(シ)天上天下。珠云く、「恁麼ならばぢや、」こは佛降生の初の言なり、」瑞應經に出づといふ、「これをも不足とはいはれまい」と或抄にいへり。

(エ)聻。こりやなんと形付けたものぢや。

(ヒ)脫却籠頭。この語ほ前に見えたり、籠頭は降生底、角駄は苦海底、「已に與麼ならば、苦海降生の窟を脫出す」と溪註に見ゆるが、この語の說明を今一度すべし、先のは或は不當かもしれぬ、籠頭は馬の口に籠の形のものを箝める馬の口箝のことで、飲食の自由を縛するもの、角駄は牛の角に角かくしをかぶせて、これも自由を束練するものなり、つまりいへば思想の自由を束縛するの意に用ふる語なり、碧岩十七則の頌に出づる或抄に委しく見えたり、これは新譯にて妥當なり。この束縛思想を脫却せよとの語なり、珠云く「むさ〳〵しい獨尊のなんのと、邪魔ものをはづしておろしてしまへ。」

(モ)三尺一丈六。三尺は凡器で僧が自らを比す。丈六佛身で、丈六の法身じや。

(セ)同携手歸。これ凡聖不二の義なり珠云く「佛と不二一體で、ありがとう存じます。」

(ス)他有幾莖。溪注に「他は佛を指す、丈夫に自ら蓋膽毛(ムナゲ)あり、爾今佛と同途、必ず能く之を知んと弄して問ふなり」とあり、珠云く「佛にも幾筋の胸毛があるか、さあ云ふて見よとなり。」

(イ)僧便喝。或抄に「毛がいかほどあるぞ、ごらんぜよと指し出した。」

(ロ)師亦喝。或抄に「此れは鋒を交へた一喝なり、まだこゝにもあるぞと一喝した。」

(ハ)看看。珠云く、「見たか、誕生佛をあらうを、」又云く「是れが見えると地獄の衆生の、ぎやつぎやつとなくも見える。」

(ニ)九龍吐水。これは普耀經に「釋梵香雨ふらし、九龍香水を下して身を浴す」因果經にも「難陀兄弟の二龍王虛空の中に於て清淨の水を吐いて、一溫一涼以て太子に灌く身黃金色にして、三十二相大光明を放つて、三千界を照し玉ふ」とあり。

(ホ)紫毫相光。眉間の毫相、照燭ぜずと云ふことなし、珠云く「紫金光白毫相、これを衲僧の正法眼とも云ふ」、又云く「これも只だではない是れ全く虛堂、かう見たと云ふでもない、面白さへ見れば。」

(ヘ)直得。其の證據にはなり、この直に得たりは或抄に「日本のことばにすると、なんのことはない、又それこそと云ふに似た言葉なり」と。

(ト)嘉禾老比丘。これは雲門匡眞禪師を指して云ふ、嘉禾は前に出てゐるが、雲門は嘉興の生れで姑蘇である、上海の南方にあたり、蘇州と杭州との中間に位して居るところであるといふ、比丘は沙門なり。

(チ)跛却一足。これは雲門がその師の睦州に參じて、州便ちひとつとらへて曰く「道へ道へ」と、師擬議す、州便ち推し出して曰く「秦の時の轆轢鑽(あばう宮をこしらへたのみ)と、遂に門をぴちんとしめきる、そのはづみに師の一本の足をけがさした、これがちんばの本なるが、雲門は此に於て大悟した、これを云ふたもの、しかし嗣法は雪峰存に嗣ぐ。

(リ)走到廣南。韶州雲門山光泰院の文偃禪師と云ふ廣南東路に屬す、宋ではそこに韶州府がある、この光泰寺は雲門光泰院なり、この開山である、後に日州の靈壽寺にも住す、姓は張氏、師は後漢の高祖乾

（ワ）海を渉らば須らく底に到るべし。頂に到るときは、（カ）則ち宇宙の寬廓なることを知り、底に到るときは、（ヨ）則ち大海の淺深を知る。故に我が釋迦老子、九夏の月を以て、剋期取證して（タ）法中の龍象の、其の山の高さ、海の深さを知らんことを欲す。苟も或は飽食安眠して、（レ）略愧を知ることなくんば、是れ大罪人ならん、（ソ）言ふこと莫れ道はずと。」

上堂、僧問ふ、「結夏（ツ）已に半月、衲僧家、（ネ）牙劍樹の如く、口血盆に似たり、還つて虛堂の一句子を透得すや也た無や。」師云く、「（ナ）老僧曾て殺生害命せず。」僧云く、「（ラ）和尚太煞だ慈悲なり。」師云く、「（ム）墦間飢飽し易し。」僧云く、「（ウ）有る一人は、常に途中に在りて、家舎を離れず。有る一人は、常に家舎に在りて、途中を離れず

祐二年四月十日、日本の村上天皇天暦三年寂す。

（ヌ）有口也讃。雲門云く、「我れ當時若し見ば、一棒に打殺して狗子に與へて喫せしめんには貴ぶらくは天下の太平を圖ることを」と、珠曰く、「釋迦と云ふものはどうもほめようがなかつた、故にしかたなく昔日云云とやつた。

（ル）物見主眼。「何が故ぞ、箇の小孩を見て、奇異の想を生じて眼を卓竪すと也」と溪注に見ゆ、珠云く、「目かどがちがつた故、後世に取りちがへしならんと思へり。」忠曰く、「舊點は非なり、」虛舟錄に靈隱錄に曰く、「物若見主兩眼卓竪也」と、主眼は非なること明けし、忠曰く、「眞佛を徹見して驚いて茫然として、讃歎することを得さるなり」と、又目かどをきつとたてゝなり、物は佛なり、主は雲門なり。

（ヲ）登山須到頂。珠云く、「總じて參禪辨道はかうじや、轉た悟れば轉た參ずべし。」

（ワ）涉海須到。珠云く、「龍宮の納戸のすみまでさがせ。」

（カ）宇宙之寬廓。珠云く、「富士山にのぼれば日本は一目じや、宗乘向上を盡すと、十界が手に入るじや、」宇は天地四方を云ふ、宙は往古來今を云ふ。

（ヨ）大海之淺深。珠云く、「看經の眼で、大法の淺深麁細が分る」

（タ）法中龍象。祖庭事苑の七には大毘婆娑に云く、「大龍象あり信を以て手と爲す、捨を以て牙と爲す、慧を以て頭と爲す、念を以て頸と爲す、其の兩肩に於て善法を擔集す」とあり、珠云く、「大願心大威力、大法を荷擔するものを云ふ。」

（レ）無知愧。珠云く、「閻老子飯錢を乞はん、佛法中の大罪人」

（ヰ）且く道へ、（ノ）那一人、人天の供養を受く合き。」師云く、「（オ）水をも也た他の一滴を消することを得じ。」僧云く、「甚に因つてか此の如くなる。」師云く、「（ク）蓋し他布袋裡に在りて毬を輥すればなり。」僧禮拜す。

師乃ち擧す、（ヤ）雪峰一日（マ）觀和尚の（ケ）門を敲く、觀云く、「誰ぞ。」峰云く、「（フ）鳳凰兒。」觀云く、（コ）「甚麽をか作す。」峰云く、（エ）老觀を啗く。」觀（テ）便ち門を開いて搊住して云く、「道へ道へ。」（テ）峰擬議す。（ア）觀に推し出さる。雪峯住して後に云く、「（サ）我れ當時に若し老觀の門に入得せば、（キ）爾者の一隊噇酒糟の漢、甚の處に向つて摸索せん。」師云く、「雪峰の擬議、老觀の推出、若し（ユ）其の錙銖を較べば、則ち固に重輕あり、知らず雪峰當時、（メ）合に甚麽の語を下し得てか

と。

（ソ）莫言不道。珠云く、「閻魔の廳で、難義するときに、おれが云はなんだと云ふな。」

（ツ）已半月。珠云く、「六月且になつた。」

（ネ）牙如劍樹。珠云く、「衲僧家は佛を咬みころし、祖を咬みころし、古則公案をかみくだく」溪曰く、「一會の衆、安居加行未だ幾くならざるに、取證顯脫なり。」

（ナ）老僧曾殺。溪曰く、「一句子の人を縛殺して、其の慧命を害するなし」と、珠曰く、「こりなんじや、誰か知る遠き烟涙やに別に好思量あることをじや」。と又云く、「好肉瘡を剜らず、人々具足なれば、つひにいぢりちらかしはせぬ、」又云く事理透貫の語じや、盤に和して托出す夜明珠じや。」

（ラ）和尚太煞。溪曰く、「把住の言を指して、却つて慈悲と稱す、珠云く、「機に投合するやつ。」

（ム）墦間飢飽。溪曰く、「言句餘殘を咬むの故に」と、溪は墦間「はかばやきば」なり、珠曰く、「うぬはしぶと場へゆきて乞ひてくふ」、又云く、「うぬがやうな早や呑みこみするやつ、くひさいすればよいこと、少を得て足れりとすじや。」

（ウ）有一人常。これは臨濟上堂の全文を擧して問ふ、少異あり、溪曰く、「途中は世諦を表し家舍は本分を表す、」或抄に「途中受用、本分家舍」とあり、途中は入鄽垂手家舍本分向上珠曰く、「有一人は正偏回互を手に入れねば相談はできぬ、常在途中は萬法の中において本心本性を離れず、差別の途中本分の家舍じや」と。

（ヰ）且道。「まあ、ちよつと云つて

以て老觀の門に入得すべき。」

上堂、擧す、(ミ)五祖道く、「(シ)諸莊の收らざること、以て憂と爲ず、百數の衲子、一箇も狗子佛性の話を透得するものなきを、誠に以て憂と爲」と。師云く、「(ヱ)五祖、大いに關中を破つて、圖書を收むるに似たり。」

(ヒ)承天の(モ)短蓬遠和尚の遺書至る上堂、僧問ふ、(セ)「昔本此を離れず、今朝亦來らず、(ス)且く道へ、承天老子、甚麼の處に向つてか去る。」師云く、「(イ)人を趕つて趕ひ上ることを得ず。」僧云く「是れ(ロ)不生不滅の處に向つて去ること莫し麼」師云く、「儞要することなかれ、(ハ)者の氣鼓の老僧を撩撥せんと。」僧云く、「(ニ)他觸著すれば便ち三毒起る。」師云く、「(ホ)多少の人仰望すれども及ばず、僧云く、「(ヘ)洞山遷化して、愚癡齋を設く

見よ」で、「暫の時とちがふ、これ時間のしばらくじやが、且は姑とおなじなり」と或抄に見ゆ、參考とすべし、珠云く、「巳下は臨濟が拈じ來つて吹毛となす。」

(ノ)那一人。珠云く、「臨濟の骨髓はこゝにある」「或抄にはたうとさはどちらか」とあり。

(オ)水也他一滴。溪曰く、「況んや人天の供養を乎」と、珠云く、虛堂の云ふのは、「毒を以て人にあぶせかけるぞ、必ず油斷すな、若し一なめでもすると、喪身失命、供養どころか水一なめもなめることはならぬ。」他は忠曰く、「即ち上の水を指すなり」と。

(ク)盞他布袋。「袋の中で毬をつく、途中家舍の處は自在なるに似て不自在なと抑したなりと或抄に見ゆ、他は上の二人をさす、溪曰く、「人天の知見するところに非ず」と、珠云く「おれも蹴つて見たが、蹴らるゝものでない、他は臨濟をさす、幌毬は手脚動されぬ、不自由千萬じや、」又云く、「嗚呼上堂の問答、又々まんまりあるまい、祖師人の窠窟を破り、眼膜を抜く腕力がきびしい。」

(ヤ)雪峰。名は義存、德山に嗣ぐ。

(マ)觀和尚。福州烏石山靈觀時には老觀と稱す、前に見ゆ。

(ケ)敲門。ほと〳〵とおとづれた

(フ)鳳凰兒。珠云く、「そつちはみさご、こつちはほうわう。」

(コ)作甚麼。なにをすると、鶻と觀とは音通ず、水鳥で鴻のたぐひ、和名こふのとり。」

(エ)嗒老觀。ひしやごと云ふ鳥。

(テ)峰擬議。珠云く、「峰、合點で擬議したか。」

(ア)被觀推出。珠云く、「峰も手もちぶさたでそれにござりませ

せと云ふてかへつた。」

(サ)我當時。珠云く、「實に一千五百人の師家じや、昔し若し好く言ひ得て、老觀の門に入得したならば」と。

(キ)儞者一隊。どうしゆざうの漢は、皆罵辱のことなり、儞等がとてもよりつくことはならぬ、入り得ざりし故に、摸索せられるのであると、一事をまけて學人を釣る。

(ユ)較其錙銖。珠云く、「微細の差別を較量するなり、錙銖はなほ毫釐と言ふが如し、一りん一毛じや。」

(ヌ)合。下得甚麼語。合には合應などと同じ、かなふたことでちやうどなどゝおなじきか。べしの意もある、珠云く、「さあ〳〵人々、どう云ふたならば老觀の門に入得しような云ふてみよ、合は方語に會不捨離とあり。

(ミ)五祖。名は法演、白雲端に嗣ぐ、この語は靈源に答ふる書に云ふ、大惠書の下、禪門寶訓の上に見ゆ。

(シ)諸莊不收。村々の領地から寺への年貢のとれぬことは、憂ふはせぬが、此の示衆は釋迦も達磨もつら出しはならぬ、波瀾廣大にして人の命根を奪ふた人じやゆゑに」と珠は云へり。

(ヱ)五祖大關中。溪曰く、「收圖書は要領を得るの謂なり」、珠云く、「五祖の示衆と虛堂の評判とどうしたことじや、破關中とは漢の蕭何の權柄手に入ること、收圖書とは智惠あるものは來年知るべしと、」史記五十三の蕭何世家にこの故事あり見るべし、忠曰く、「金帛財物を以て諸莊の禾穀に喩へ、圖書を以て狗子の話に喩ふ、言ろは意を緊要物に繫けて、餘物を管せざるなり取らざるなり」と。

(ヒ)承天。能仁禪師、蘇州平江に在り宋には永天寺と名づく、支那甲刹の一なり。

(モ)短蓬遠和尚。天童如淨に嗣ぐ、眞歇五世日本の道元禪師の法兄弟なり、枯崖漫錄の中にも事蹟見ゆ。

(セ)昔本不離此。溪云く、「法身に約して問端を立つ。」珠云く、「本離此れは本覺心法身はじや、正眼に見來ればじや。」

(ス)且道。珠云く、「それじやので遺書なんどゝは」と。

(イ)趕人趕上。溪云く、「承天の去處を逐ひ逼ることなかれ。」珠云く、「犬をおひちらかすやうな虛堂じやが見處はどこじや」と。

(ロ)不生不滅。珠云く、「如是柳綠花紅の上、全體眞空、無相般若の端的に向つて去ると云ふは承天の瞋を起すべし。」

(ハ)者氣皷老僧。撩撥はそゝのかしおだてるなり、氣鼓は氣の短きを云ふ、この短蓬は短氣な老僧じやほどにと。むざとなぶりそゝのかして不生滅のところへ去らしめんとするなり、立腹せられんとなり。

(ニ)他觸著。溪云く、「瞋恚の毒を謂ふ嵓頭の所謂刺帽子の如き故なり、

承天遷化、何の㋣分付かある。」師云く、「分付あり。」僧云く、「甚の分付かある。」師云く、「儞をして㋠近前退後して、㋷牢く話頭を記せしめん。」

僧云く、「㋦也たこれ口業を惜まざる漢。」

㋸師乃ち云く、「㋾遠くして及ぶこと莫し、故に短と曰ふ、㋻蹤へども即かず、故に蓬と曰ふ。㋕波波浪浪、㋵西西東東、㋟直鈎已に掛く雙峨の碧、㋹一槐香散ず蘆花の風。」

解夏小參僧問ふ、「衲僧家、四月十五、㋞他を結することを得ず、七月十五、㋡他を解すること得ず、㋧畢竟甚の處に向つて㋤安身立命せん。」師云く、「㋶針鋒頭上に筋斗を翻す。」僧云く、「與麼に自由自在なることを得たり。」師云く、「㋰儞石灰籮裏に向つて反眼すること莫れ。」僧云く、「㋒謂つべし、一夏虛しく光陰を度らずと。」

珠云く、「他は承天、三毒起はいける人でなし。」或抄に「三毒は瞋恚のことを云はん爲なり。」言ろは然らば短蓬は惡辣にして近傍かたからんとなり

㋭多少人。溪曰く、「承天平昔辛辣の故に近望しがたし」と、珠云く、「人天八萬三賢四果も目の付ることとならぬ」と、不及はとゞかぬこと。

㋬洞山遷化。溪云く、「洞山良价禪師は臨終の時、乃ち剃沐し端然として坐逝す、大衆號慟時を移す、師忽眼を開いて云く、「夫れ出家の人は心物に附かず、是れ眞の修行勞生、死を息く悲に於ては何かあらん乃ち主事をして愚癡齋一中を辨じて、蓋し其の戀情を責むなり、衆なほ戀慕已まず、延いて七日に至りて食具方に備ふ、師も亦したがつて齋し畢る云云、八日に至りて化す。」

珠曰く、「承天和尙、曹洞宗ゆゑ擧揚したもの」と。

㋣分付。遺物どもはござらぬか

㋠近前退後。おのれ近前退後、それあちこちへさはりまはる

㋷牢記話頭。短蓬分付の那箇の話頭をおぼえてをらしむと。

㋦也是口業。溪云く、「只た三毒起るのみにあらず、也たこれ口業を惜まざること、此の如く分付すとなり。」珠云く、「承天は只だ衆生の爲に口業を惜まず」と。

㋸乃云。提綱なり、短蓬遠の名字に因つて以て其の德を稱し賜ふ、短蓬は小舟なり。

㋾遠之莫及。溪云く、「遠く馳求して及ぶことなきは長ぜざるの謂なり。」と、珠云く、「遠く求めてはなんぼうでもとゞかぬ、なんで短蓬と名づけたのじやな、「短は去レ此不レ遠の意。」又云く、「眞の承天は目の

師云く、「㋼刀錐の利。」僧云く、「前程に忽ち人ありて問ふ、和尙今夏何を將つてか人に示すと。」師云く、「㋨多に添へ少に減ず。」僧云く、「㋔三世の諸佛も也た理會すること得じ。」師云く、「山僧も㋗更にこれ理會すること得ず。」僧云く、「㋳和尙今夜情を盡して、學人に說與し了れり」といつて、也た便ち禮拜す。

師乃ち㋮拄杖を拈じて云く、「㋘便ち與麼に去るも、㋫早く是れ節外に枝を生じ、㋙更に若し短を較べ長を論ぜば、㋽何ぞ啻崖州萬里のみならん。㋢所以に道ふ、㋐太陽門下、㋚日日三秋、㋖明月堂前、㋴時時九夏と、㋱何ぞ用ひん、舟を刻んで劍を尋ね、木に緣つて魚を求むることを。㋯西天此土、㋛佛法平沈して、末代の比丘全く慚愧なし。㋓甚の正因の二字、㋪言薦㋲賞

さき耳のさき」と。

㋻蹤之不即。溪曰く、「蹤迹するは其の行蹤を尋逐するの謂なり、これ舟篷の故に即くべからず、」珠云く、「やれ〳〵と、外へ向つて逐ひ尋ねてはとりつかれぬ、はせる舟のあとを追ふやうなもの」と。

㋕波波浪浪。溪曰く、「蹤の句を結ぶ。」珠曰、く「舟をやることは自由自在、この和上どこへ往つたか一向しれない、」或抄に「短蓬に乘じて波浪をあなたと東西して釣を垂るるなり此れまでは生前の度生爲人の體を云ふ」と。

㋵西西東東。溪云く、「遠の句を結ぶ、巳上は法號に約して其の深遠の德を嘆ず、」珠云く、「西の西、西方十萬億土、東の東、東方八千土」と。

㋟直鈎已掛。溪云く、「直鈎は正法を以て餌と爲し、衆生を接する故に常に異なるなり、巳掛は用ひざるの謂なり、遷化の故に、雙峨はこれは承天寺に三境あり、雙峨峰、萬佛閣碧玉盤と云ふ。」珠云く、「直鈎は一切衆生を利益するになぞらへていへり、これまで直鈎を以て大魚を釣つてゐられた遷化なればもふいらぬ故、巳掛は釣をやめらたた、又直鈎は蘇東坡詩集紀行に、太公直鈎を以て釣ると、盧同詩に人鈎は曲、我鈎は直、嗟哉我が鈎反つて食むこと無しと。

㋹一槐香散。溪云く、「巳上の兩句は化緣巳に終り、滅後の風物を述ぶ、句法短長、韻を押す、」珠云く、「槐音饒、楫なり小舟にのり、沼のあし間をおしわけ、何くへ行かれたか。」或抄に「花も香もちつた」と。

㋞結他。那一人なり、珠云く、「面目坊はしばつておくこと

もどうすることもならぬ。」或抄に「本色の衲僧、即ち上に所謂衲僧家」と。

㋡解他。他は是れ阿誰ぞ、そんならと云ふて、ほどいてやることもならぬ。

㋧畢竟。此の面目坊はひつきやう。

㋤立身立命。他の歸處を問ふ。

㋶針鋒頭上。筋斗は倒立なり、陡通じて斗に作る、峻立なり、溪云く「不思議大活自在、蓋し他の安立を表す。」珠云く「それは針の上にてとんぼ回りしてゐる、さるかへりしてゐる。」

㋰儞石灰籮。溪云く「儞が語に隨つて見を生ずるを罵る」と、珠云く、筋斗の處を奇特と思はゞ、それは眼中翳と云ふ、そのやうなことではない、子細のある語なり。」石灰籮は灰だはらにつゞらつゝこんで目ばち〱すると目に灰が入る、反眼に目たゞき、平たくいへは、石灰をふるふところでぬ目をあけるなと。

㋒可謂一夏。珠云く「目たゝきするなと云ふことか、それなら一夏中あつぱれやりました。」

㋼刀錐之利。小利を求むるを錐刀の末と云ふことあり、小事に喩ふるなり、珠云く「少を得て足れりとす、うぬが云ふは大きなことを云ふけれども、すこしのことじや」と。

㋨多添少減。溪云く「宗師の手段常情に隨はず、芭蕉の拄杖子の類の如し。」珠云く「是れ甚麼ぞと、うぬがやうなばかには、馬鹿をたんとそへてやる」と、又云く「背觸透過の上士には、折角誵訛の因緣をあたへ、無量の法門を與ふ、隻手音聲、兩重の關を透らぬものは斷命根の工夫をさせて、それぞれに根氣を見計りて與奪するなり、此に虛堂の申さるゝは子細あらん」と。

㋔三世諸佛。珠云く「その處は三世の諸佛もさへのに此方づれが中々及びもないこと。」

㋗更是理會。珠云く「是れで三文がものもない、くさされたへご雜水それはしれたこと、虛堂でさへ知らない。」

㋳盡情學人。珠云く「盡情は丁寧の義、又出精の義私へ十分の說法でござります。」

㋮拈拄杖云。珠云く「今時に非ず、那邊に非す、空に非ず、假に非ず。」

㋘便與麼去。珠云く「此れからうして居る、了々分明なれども」と。

㋫早是節外。溪云く「拄杖によせて節外枝を生ず、一重の無用處を言ふ。」珠云く「はや毛がはえるで、まだ〱節外に枝を生ず。」

㋙更若較短。龍　く「杖子の長短に託して、長期短期の功課を較論するを謂ふ。」長期百二十日、中期は百日、短期は九十日なり。

㋓何啻崖州。「遠くして遠し」と溪は云へり、崖州は瓊州府なり、京師

を距ること九千四百九十里と、珠云く「とてもとゞかぬ。」

㋢所以道。洞山价禪師、玄中銘に曰く。

㋐太陽門下。溪云く「太陽明月は日月なり、門下堂前は文を互にして別の由なし、只だ日下月前のみ、日に三秋、時に九夏更に餘時に於て思索すべからず。」珠云く「太陽門下は偏なり、あつき上に寒きところあり。」

㋚日日三秋。珠云く「正。」冷なるうへにあつきことあり、これ洞下の修行底吹毛斬れども入らず。」

㋖明月堂前。珠云く、「正。」盤に和す。

㋴時時九夏。珠云く「偏。」

㋱何用刺舟。孟子の一に出づる語、注に言は不可得なりと、珠云く、「何ぞ用ひんと、此の端的佛法の玄妙を求むるならば、劍を尋ぬる上の洞山の語で涙をこぼせ、」又云く、「修行じやの接心じやの、やれ參禪じやのと云ふも、みな是れ餘方をかせぐのじや」と。

㋯西天此土。西天の二十八祖、東土の六祖と歷てとなり。

㋛佛法平沈。眞實の佛法はれいらくしてと。

㋽說甚正因。これは報恩錄の解夏小參にも見ゆる語なり、珠云く「末世になつて悟りの何のと云ふことはない、夫婦いさかひせんが大きなこと。」又云く「涅槃經三因佛性たゞ今は心性の道理」と。

㋪言薦。忠曰く「解夏の時、師家學者の見解を辨驗す、其の工夫の巧あるものをば則ち一言一句之を稱譽す、此を言薦と云ふ。」

㋲賞勞。前に見ゆ。

㋝古人隨機。珠云く「洞山衆生の機にしたがうことがさらひであつたさうな」と。

㋜二林只實効。珠云く「虛堂は機に應するやうに說いて、一夏のそのしるしを得させたいと思ひはかる。」又云く「向上を言はず、中下の機の爲に効驗を圖る」と。

㋑七佛行處。溪云く「この當山の行道塔。」珠云く「こりや何のことじや、上に用はない、此の語難透」と。

㋺因茲寸艸。溪云く「千古の奇瑞じや是の如くならば則ち實に怪むべし。」珠云く「虛堂の云つたところと洞山のとかけ合せて見るゝ、になへば棒がをれる」又其の迹今に至るまで寸草生ぜず。

㋩快出來。珠云く「さあ、ふんぐりがあらばさひよく」と。

㋥九夏闕疑。九夏已來のかけめを補へと。

㋭南泉。名は普願。馬祖に嗣ぐ、趙州の師なり。

㋬麻谷。名は寶徹、馬祖に嗣ぐ。

㋣歸宗。名は智常、馬祖に嗣ぐ、廬山に住す。

㋠同往。同行同道の意。

㋷忠國師。南陽山慧忠、六祖能に嗣

勞とか說かん。㋝古人隨機を解せず、㋜二林は只だ實効を圖る。然も是の如くなりと雖も、且く道へ、㋑七佛の行處、㋺甚に因つてか寸艸生ぜざる。㋩快に出で來つて一轉語を下して、㋥以て九夏の闕疑を補せよ」といつて、拄杖を卓す。

復た擧す、㋭南泉、㋬歸宗、㋣麻谷、㋠同じく往いて、㋷忠國師を禮拜せんとす、泉、㋤路に至つて㋸一圓相を畫して云く、「道ひ得ば即ち去らん。」歸宗、圓相の内に於て坐す、麻谷、㋾女人拜を作す。泉云く、「恁麼ならば則ち去らじ。」宗云く、「是れ㋻甚麼の心行ぞ。」師云く、「王老師既に人に道破せらる、未だ好手と爲ず。」麻谷、女人拜を作す、國師を見得せり。」

㋕次の日上堂、「㋵一夏未だ嘗て諸人と㋟朝思暮

ぐ、此の公案のあらましを譯すれば、ある日南泉、歸宗、麻谷の三人が、江西の馬祖山を出發して、はるばると長安の忠國師が飛鳥も落す樣な勢に居るをきいて、よい敎訓を蒙らうと思つて、半分みちほどきたときに、南泉が大地の上に一圓相をかいておいて云ふのには「だれぞ、何か眞理の絕對にはまるやうな一句を云ふならば」と、はじめ約定どほり長安まで行くことにするが、さもなくばやめじやと云ひ出した、すると歸宗はその一圓相の中にはいつて坐つた麻谷この樣子を見て、早速歸宗の前にゆき、女が觀音さまか地藏さまををがむやうに叮嚀に歸宗を禮拜した、南泉はこの二人の芝居の眞似見たやうなことをするのを見て、「そのやうなことをするならば、私はまう長安行きをやめる」と云ふた、歸宗は「今更何を云ふのか、こゝまで來ておいて、長安行きはやめとは一體どんなはらで、そのやうなことを云ふのか」と詰問したと或抄にあり、珠云く、「これは向上の因緣なりと、又女人拜を作すは、あゝ見事なものじや、國師相見底なり」と、又是れ甚麼の心行ぞとは、そりやどう云ふ存じよりじや。心行は和語の「こゝろね」と、虛堂の評の既ニ被ニ人道破ーは歸宗にこれ甚麼の心行ぞと云はれて、未爲好手は虛堂が目からはまだまだあつぱれ手ぎはでない。見得は南泉がこの時のはらの中より、麻谷は三十年後、こりや師翁の著語なり又虛堂が評判じやとやら云ふて、こんなことを云ふと、碧岩の六十九則にも出てゐる、

想せずんばあらず、㋹今朝期滿じて、㋞驀忽相應ず、㋡方に知る、山は是れ山、水は是れ水なることを。㋧向來豈に山は是れ山、水は是れ水なることを知らざらんや。今日方に山は是れ山、水は是れ水と㋤道ふことを知る。汝若し信ぜずんば、㋶三十年後自ら人の知るあらん。」

上堂執事を謝す、「㋰松に操あるときは則ち歲寒けれども凋まず、㋒竹に節あるときは則ち虛心澹靜なり、衲子㋼義に勇むときは、㋨以て叢林に表率たるべし。㋔刄を事海に游するに、自然に㋗左右其の原に逢ふ。」

中秋上堂、拄杖を以て、一圓相を打して云く、「裏面に一株樹あり、之を名けて㋳娑婆樹と曰ふ。㋮下に一兎あり、長時に藥を搗く、㋘尋常見得するは、甚だ眞ならず。惟だ今宵のみあつ

王老師は南泉を云ふ、王老はものしりをやじや、唐宋の俗語なり。

㋤至路。途中、意はこの三人は大方馬祖のところで出發して忠國師は長安の光宅寺に居つたので、行くつもりでありしならんと。

㋸一圓相。これは禪宗では、或は手まねで、空中に圓相をかきたゞ一指頭を立てたり喝といひ咦と叫び、思想を表現する一種の方便とみてよい。

㋾女人拜。これは立ちながら兩手をむねに當て、すこし腰をかゞめ敬禮するなり。

㋻什麼心行。これは日本語の「何たる料簡じや」とか「今になつて何を云つてをるのか」とか「どんなつもりでそんなことを云ふのか」と或抄に見ゆ、心行とは今日の言ばでいふならば「動機のこと」とあり。

㋕次日上堂。十六日のことなり珠云く「此の間の上堂大に拖泥」と。

㋵一夏未甞。珠云く「この上堂は此の中での上堂なり、なんでも五家七宗をまぜくりちらかして」と。

㋟朝思暮想。溪云く、「工夫提撕」と。

㋹期滿。九十月の期限がみちたるが故に頓に、本來と相應ずるなり。」驀忽は正字通に迅疾の完とあり。

㋞驀忽相應。溪云く「取證時到

㋡方知。方には初めてなり、珠云く「知りてと云ふ點もある山はなるほど山じや、水はなるほど水じや」と。

㋧向來。さきつかたよりなり、珠云く、「ぎやつと云ふから、知つてゐたけれども、背觸と云ふつはものがすまなんだ」

て㋡極めて是れ分曉なり、諸人還つて見る麼。」拄杖を卓して「之を見んとならば、則ち㋙妄に眸を擡げざれ、然らずんば、㋓明は暗に如かじ。」

上堂、擧す、馬祖因に㋢百丈再び參ず、祖㋐目を以て禪牀角の拂子を視る。丈云く「㋚此の用に即するか此の用を離するか。」祖云く、「㋖爾㋴向後㋱兩片皮を開いて、何を將つてか人の爲にせん。」丈、㋯拂子を取つて竪起す、祖云く「此の用に即するか此の用を離するか。」丈、拂子を舊處に掛く、祖、威を震つて一喝す。丈云く、「我れ直に得たり三日耳聾することを。」師云く、「豈に百丈の三日耳聾するのみに止らんや直に㋛盡天下の人をして、事を聽くこと眞ならず、㋽鐘を喚んで甕と作さしめば、㋪方に馬師

と。

㋤知道。珠云く、「知つてと云ふ點もあり。」知道すと點すべし知道は俗語なることをしるべし、道の字には意なし。

㋶三十年後。溪云く、「唯だ將來を記して、別の表示あるに非す、」或抄に「上に所謂千古の下、豈に人なからんやの義と同じ」と。

㋰松有操。溪云く、「把持なり、又節操は操守するところなり災害に遇ふとも其の操を失はざるなり、正直に不退屈に寺務をとるにたとへる。」珠云く「松有操云は行者根大智がしつかりとしてあると、心境一切に昧まさるゝものでない又云く「春夏は同じく綠といへども、秋冬は同じからず、凋零す。」

㋒竹有節。溪云く、「邪曲の心なきこと、竹中の虛濬なるが如し、濬靜は水の貌節は簡要なり」珠云く、「節はほど〱、又くくり、虛は中、虛心は實心、濬は泊、靜は恬。」

㋼勇於義。珠云く、「世法佛法、一切に於て宜しく理あることには見捨をかす、」この語は論語の「見レ義不レ爲無レ勇也」に出づ。

㋨表率叢林。率音りつ、表的なり、めあてなり、百丈清規にも前堂の下に「表率叢林」とあり、人天の眼なるものなりとあり、珠云く、「首座を表率と爲すは、衆人目を屬することは此の人に在り、表的の如し今借りて美執事と云ふ。

㋔游刄事海。溪云く、「游刄は莊子の養生主の篇に「庖丁牛を解く、恢恢乎として其れ刄を游ばしむる於て必ず餘地あり」と事海は事務無量以て海に喩ふるなり」珠云く、「執事は世

に契はん。」

上堂、擧す、「汾陽の㋲無業國師、衆に示す、「若し㋝一毫も㋜聖凡の情念未だ盡きざるあらば未だ㋑驢胎馬腹に入ることを免れず」○白雲又道ふ、「直饒ひ一毫の聖凡の情念㋺頓に盡くるも、㋩亦未だ驢胎馬腹に入ることを免れず」と。師云く、「二大老、㋥無心の中に向つて、㋭一場の口面を撰出す。」拄杖を卓して、「近日㋬王令稍嚴なり。」

開爐上堂、「㋣箇の裡、㋠峻機妙用の人に與へて湊泊せしむるなし、㋷老來寒を畏る、只だ些の火爐頭の話を說かんことを要す。且く道へ、火爐頭に甚麼の話をか說かん、恐らくは㋦冷灰の豆爆して諸人の鼻孔を彈破せん。」

達磨㋸第三忌の拈香、㋾十萬里、水雲の蹤跡、

間の逆順の境に入り涉りて、少しも煩しとせず、甚だ餘裕あり、游は理害をよく分つこと、刄は氣象を云ふ」と。

㋕左右逢其原。溪云く、「孟子の離婁にもあり、左右は兩旁、言ふ意は至近にして一處に非ず、逢は猶値の如し、原は本なり、水の來れるところなり今執事の施爲一一其の理に合ふなり」珠云く、「世法佛法、どうしても單傳心印の妙道にみな一體になること。」

㋳婆婆樹。古抄に「これ婆娑なり、傳寫の誤乎、顚字の格乎書林に桂なり、けだし月中の桂樹を謂ふ、爾雅に「婆娑は舞なり。」註に云く、「舞者の容なり。」溪曰く「桂樹の光影閃爍して盤辟の舞に似たり、故に娑婆樹と稱する乎」或抄に「婆娑は草木の盛なる貌」。

㋮下有一兎。珠云く、「その樹の下に玉兎あり、金杵を操りて不老不死の丹藥を搗きねると云ふ。」

㋘尋常見得。珠云く、「常の月光ではない。」

㋫極是分曉。珠云く、「本覺の心月はじや。」

㋙不妄擡眸。珠云く、「外へ向つてはみえぬ、只だ氣海丹田へ氣をおとしつけ。」

㋓明不如暗。溪云く、「物に託して眞を辨ず、尋常の見に非ずじや。」珠云く、「大切な此の明月、又つい見ることならぬ。」これが虛堂の奧の手じや、明暗にしかんと云ふことか、そではない。」

㋢百丈再參。これは碧岩十一則の評にも出てゐる、珠云く、「百丈再參の因緣、臨濟破夏の則なくんば、臨濟宗は泯滅せん」と、誠なるかな此の言又云

く、「路頭窮まる處、再び經過すじや、大切な因緣。」
(ア)以目視。珠云く「じろりとしられた。」
(サ)即此用離此用。球云く「即は建立なり、離は掃蕩なり、これは拂子を以て御示しなさるか、拂子を離れて御示しなさるか、」と。
(キ)儞。珠云く「即離の大事を吞み込んでのこと、こりやまあよいは」と。
(ユ)向後。珠云く「してこれからは東道西話、應接するに」と。
(メ)兩片皮。口をいふ。
(ミ)取拂子。珠云く「すさまじい手もと」と。
(シ)使盡天下人。珠云く「三千大千世界の所有のもの、地獄の苦む聲を芝居の三味線の聲とききき、經をよむのを馬の尻をたゝく聲とききく、不眞とはこのきゝぞこなひはありがたい」と。
(エ)喚鐘作甕。或抄に「耳聾する體」とあり。
(ヒ)方契馬師。珠云く「やゝはじめて大師のにこりとめされた」或抄は「一喝の意を云ふ」とあり。
(モ)無業。大達國師と謚す、唐十一代憲宗召せども出でず。馬祖に嗣ぐ。
(セ)一毫。珠云く「上佛なく下衆生なきところを見よ。」
(ス)聖凡情。珠云く「石になれと云ふことか、それより外はあるまい。」
(イ)驢胎馬腹。珠云く「そればかりではない、三塗地獄へいる、」或抄に「畜生道三惡道じや」とあり。
(ロ)頓盡。珠云く「是れでなければ魔界に入ることはなるまい」と。
(ハ)亦未免。珠云く「又宗旨の穿鑿。」
(ニ)向無心中。珠云く「世間の是非をはなれ切つてと云ふこと。」
(ホ)一場口面。或は口或は面、珠云く「一場は一所と同じこと、口面は言語を云ふから云ふことかあゝ云ふことかと、工面し出された撰出なり。」
(ヘ)王令稍嚴。嚴は敎命急なり、玄沙の語、この錄の頌古の部に見ゆ。これは二大老の賊心を許さずとなり珠云く「法度がきびしい、うつかりとするなと、虛堂これ何んじや。」
(ト)箇裡。珠云く「虛堂ひまなに依つて色々のことを思ひ付く。」
(チ)峻機妙用。珠云く「峻機妙用の悟を人に與へてと、湊泊とは佛も達磨もこはいことはない。さとりも迷ひもよりつき處はないと。峻機はけだかいこと。
(リ)老來畏寒。珠云く「たゞ年をとれば寒むいことがいやじや」と。
(ヌ)冷灰豆爆。珠云く「たゞきづかひなことは、火爐頭の話をかたらうと思ふが、冷灰の中から豆が一つぶ飛んで、こなたの鼻の孔にあたるとならん、先づおきませう」と。溪曰く「恐らくは頓脫の出で來る底あらん」と。

(ワ)七百年、(カ)西竺の陳人、(ヨ)眼睛烏律卒、(タ)面子黑鱗皴、(レ)傳衣付法、(ソ)埃塵を惹起す。(ツ)如今紅紫朱亂して、紛然として出づ、(ネ)豈に少林五葉一花の春に止らんや。斯に遠諱に臨んで(ナ)此の溪蘋を薦む、(ラ)萬古千秋子孫を累はす。」(ム)上堂「一たび出でゝより數日、(ウ)至る所の溪山の風物、(ヰ)歷歷として目に在り、(ノ)歸り來つて鼓を撾つて陞堂。(オ)從頭又擧すること一遍す會す麽。(ク)眼力の到る處、人の謾を被らず。」(ヤ)冬至小參、一氣順昇して、(マ)百昌萠動す。(ケ)是において時の人有ることを知らば、(フ)還つて有ることを知らざる者あることを知らん。(コ)寒暑の推遷を被らす、(エ)四時の消長を逐はず、(テ)靜にして善く應じ、(ア)卓爾として羣ならず、若し(キ)尺二の眉毛領下に生ずと謂はゞ、(ユ)此れ

(ル)第三忌。劉善富が田を捨して供を設く、これ第三忌なり。
(ヲ)十萬里。佛祖統記に曰く「摩伽陀國より益州に至る途、九萬九千三百八十里を經る」とあり。
(ワ)七百年。達磨示寂の年より、北魏の孝宗永安元年、梁武帝大通二年十月五日、日本の繼體天皇二十二年に當る、南宋理宗に至りてなり。
(カ)西竺陳人。西竺は印度、陳人は莊子の寓言にある人として人道なきこれを陳人と謂ふ、「注に陳人は世間陳久、無用の人を謂ふ」と故にまだ世すて人なり、古なり、おきぶるしのことを陳と云ふ。
(ヨ)眼睛烏律卒。珠云く「俗談の黑の義、又烏律漆に作る、眼睛突出のこと。」
(タ)面子黑鱗皴。子は助語なり、面目共に黑く、しわあるを云ふ。
(レ)傳衣付法。珠云く「傳衣でござるの、得髓でござるの」と。
(ソ)惹起埃塵。珠云く「そこばくの埃塵をひきおこす。」
(ツ)紅紫亂朱。溪云く「後代に至りて五家七宗、宗技門葉一色に非ざるなりと、珠云く「如今の坊主は實の達磨の子孫乎又盜人乎、まんざい乎、ことふれ乎、紅紫は間色で、朱は本色、紛然はみだれ出づるじや。」
(ネ)豈止。珠云く「豈に達磨ばかりではない。」
(ネ)五葉一花。五葉は二祖より六祖までなり、一花の春とは底意に子孫の繁榮を言ふ。
(ナ)薦此溪蘋。池の水草などを、ざつとした供へものを御上げして、蘋蘩の菜行潦の水などなり。
(ラ)萬古千秋。孫は頌倫の切、「ひ

又是れ他を見ること未だ盡さず。山僧尋常、(ヌ)口礫盤に似たり、未だ嘗て容易に人の與に道破せず。儞若し(ミ)見得分曉ならば、(シ)黑豆芽を生じ、(エ)繡紋線を添ふるも、也た是れ(ヒ)尋常の時節ならん。且く道へ、(モ)今夜還つて來つて、果子を喫すや否や。」拄杖を卓して、(セ)飯を嚼んで嬰兒を餵ふ。

(ス)復た擧す、五祖因に僧問ふ、如何なるか是れ道。」祖云く、「(イ)始平郡。」僧又問ふ「如何なるか是れ道中の人。」祖云く、「(ロ)赤心を主と爲す。」師云く、「五祖、者の僧の信根未だ深からざらんことを恐る、(ハ)之に囑して又囑す。且く道へ、(ニ)節文甚麼の處にか在る、(ホ)源河を逗し泰華を擘くことは、(ヘ)須らくこれ其の人なるべし。

上堂して秉拂を謝す、「(ト)此の拂子、(チ)吹毛の劍

ん」と音をよむくせなり、「あゝ達磨と云ふぢゞが西天より東土へきて、あの則とほれ、この則とほれと、子孫を累はすと珠は云へり。

(ム)上堂。或抄に「虛堂遊山してかへりて上堂なり、他行して五六日にもなるなり」珠云く「絕妙の上堂。」

(ウ)所至溪山。珠云く、日本でならば須磨をとほり吉野へもきて、宇治に宿り、そこゝで說法してゐたといふの意。

(ヰ)歷歷在目。ありありと目をたのしましめた。

(ノ)歸來撾鼓。又かへりてきて說法する。

(オ)從頭。はじめより一々殘らずと更に一回遊山の事を擧す。

(ク)眼力到處。眼力は風物につきて、山はこれ山、水はこれ水と境に轉せられず、現量の故になり、珠云く「法性を以て云ふときは野も山も何もかも本心じや、生滅を以て云ふときは五蘊六欲にひつたくられる、是れ謾を被るなり、豈に虛堂のみならんや。」

(ヤ)一氣順昇。溪云く「一陽來復して次第に順昇す。」珠云く、大死一番底。」

(マ)百昌萌動。昌は美なり、盛なり、艸木美盛を謂ふ、禮記の月令に「天地和同し、艸木萌動す」みな芽をふき出す。

(ケ)是時人知有。溪云く「不傳の妙道あることを知るならばなり。」

(フ)還知有。溪云く「物外の那一人を指す。」珠云く「とつくり知つて見なならば立ちもどつて」と。

(コ)不被寒暑。珠云く「有ることを知る底は、寒暑の推遷もならぬ。」

(エ)不遂四時。春夏は長、秋冬は

如りも過ぎたり、善く用ふるものは、坐ながら(リ)太平を致す、善く用ひざるものは、(ヌ)鋒を傷り手を犯す。二林に(ル)厩を出づる良駒の、鞭影を勞せざる底あること莫しや。」拂子を擲下して、「(ヲ)看よ看よ。」

(ワ)上堂、僧問ふ、「雲門因に僧問ふ、「(カ)不起一念、還つて過ありや也た無や。」門云く、「(ヨ)須彌山」と、此の意如何。」師云く、「(タ)鐵を買ふて金を得たり。」僧云く、「(レ)和尚平生、古人を凌辱す、今日甚に因つてか全く雲門を肯ふ。」師云く、「(ソ)冷處に把火を著く。」僧云く、「學人一冬、(ツ)外に在つて奔波す、(ネ)還つて過ありや也た無や。」師云く、「(ナ)秤椎井に落つ。」僧云く、「(ラ)許多の施利、常住に歸す、甚に因つて(ム)全く些子の功勞なき。」師云く、「(ウ)來つて我れを掩彩すること莫

消珠云く「十二時にもつかはれず」と。

(テ)靜而善應。祖英集に靜而善應の二首あり、珠云く「寂靜にして善應は喫茶飯」と。

(ア)卓爾不羣。溪云く「物外の那一人を讚歎す。」珠云く「佛乎祖乎、凡歟聖歟、くらべものが毛ほどもない。

(キ)尺二眉毛。一尺二寸、珠云く「大人の異相を具すと云はゞ」と。

(ユ)此又是見。他は那一人を指す

(メ)口似礫盤。溪曰く「口重くして動かず、柱下の礫盤に似たり、不言のこと。」

(ミ)若見得分曉。珠云く「有を知る底の人。」

(シ)黑豆生芽。珠云く「靜にしてなり」と。黑豆の事は前に出づ。

(エ)繡紋添線。これは報恩錄にさきに出づ、次第々々に陽氣が回復して、日が長くならんと冬至の起る緣なり。

(ヒ)尋常時節。奇特とするにたらず。

(モ)今夜還來。珠云く「卓爾たる客人はじや、那一人來りて果子を喫するや否や、冬至の果子をもじや」と。

(セ)嚼飯餵嬰兒。自ら謂へり、老婆の說話と、珠云く「虛堂が此のところでこのやうなことを云ふ、おそろしい、とつくりかんだ、さあむせるなよ」と。

(ス)復擧。拈提なり。

(イ)始平郡。これは始平郡と外書にあり、五祖演の海會錄中の語なり、これは柳文二十六聽壁の記の注に「始平は京都二十三縣の一なり」とあり、或抄に「大道長安に透る」と、珠云く「人跡不到の處、雲門の須彌山と同じ。」

(ロ)赤心爲主。溪云く「誠實のみ

れ。」

乃ち云く、(キ)其の機用を盡して、(ノ)只だ一句と作して、諸人に布施せん。」良久して、拄杖を卓して、「(オ)大海若し足ることを知らば、百川應に倒流すべし。」

臘八上堂。僧問ふ、「(ク)枯木寒巖に倚つて、三冬暖氣なし、此の意如何。」師云く、「(ヤ)牙根水を瀝さず。」僧云く、「婆子甚に因つてか庵を燒却す。」師云く、「(マ)爭か賭籌を交へん。」僧云く、「和尚也た胡亂に(ケ)古人の公案を穿鑿することを得ざれ。」師云く、「(フ)子に非ずんば委せじ。」僧云く、「(コ)老胡今日成道、何の祥瑞かある。」師云く、「山深うして雪未だ消せず。」僧云く、「(エ)諾諾。」(テ)師拂を以て一指す。(ア)乃ち云く、「釋迦老子、雪山六年、功成り行滿

にして餘蘊なし、」珠云く、「そこつめたい苔じや、赤心を主位とす。」

(ハ)囑之又囑。重重叮嚀の故、珠云く、「しちくどく云ひきかせられた。」

(ニ)節文在甚麼處。珠云く、「肝要かなめの處、殺訛を云ふ。」

(ホ)逗源河。源河は黃河の源なり逗は忠曰く「住なり投合なり等の訓あり、透徹の義となすべき乎、泰華元一山、巨靈擘開して以て河流を通ず。

(ヘ)須是其人。溪曰く「大法を荷擔し、衆生を開導するときは須らくこれ、有力畢底なるべし。」其の人とは五祖を指す。

(ト)此拂子。珠云く「用ひざれば蠅拂ひに劣る。」

(チ)吹毛劍。珠云く「日本でならば天國、草薙なり。」

(リ)歇太平。珠云く「地獄、修羅、大焦熱の中も太平じや、」この語は與罣錄に見えたり。

(ヌ)傷鋼犯手。珠云く、「なま兵法のものに持たせたら、きつさきをそんじ手あやまち」と。

(ル)出廐良駒。珠云く、「俊利底のもの、鞭の影を見てにげるは眞の良駒でない。」

…看看。溪云く「拂子に託して其の人に示す、」珠云く「首座のことか、あかべの茶の子じや。」

(ヲ)上堂。この上堂は寶林の化主外より歸りて、この法筵をまうくるなり。

(カ)不起念。何の心も起らぬ時。

(ヨ)須彌山。珠云く「須彌山ほどあると云ふこと乎、ないと云ふこと乎、是れは雲門の宗旨の言句なり、」或抄に「鐵橛子」と。

(タ)買鐵得金。溪曰く、「小事を問ふて巨益を得たり、」珠云く、「此の僧仕合せものじや、」或抄に僧が鐵を買はんとて、往いて却つて金を得た」と。

(レ)平生淩辱古人。和尚常平生、古の佛祖たちをこぼちぬかれる。

(ソ)冷處著火把。火把は一束の火なり合好の義なり、珠云く、「雲門と手を把つて共に行く底の語、寒きとさは一くべたいてあたるが、かたじけない。」

(ツ)在外奔波。外に在りて化主となり衆の爲めにす、奔波は東西かけまはりました、奔走すること波の起騰するが如し。

(ネ)還有過也無。溪云く、「舉話は靜時即今は閙時、又是れ過ありや無しや」となり。

(ナ)秤推落井。出期なきの義なり、方語に不得出頭、珠云く、「とがと云ふこと乎、寸步を動ぜしや」と。

(ラ)許多施利。化主となりて受けた施物の品にはみなだいどころにをさめてしまひました。

(ム)無些子功勞。溪云く、「奔波勞役すること此の如し、此の功なさことは何ぞや、」珠云く、「功勞ははらび」と。

(ウ)莫來掩彩我。溪云く、「施利を以て我が光彩を掩ふことなかれ、」掩彩は塗抹の義なり、珠云く、「我が面よごしてくれるな」と。

(キ)盡其機用。珠云く、「千佛萬祖の大機用を括盡して」と。

(ノ)只作一句。溪云く、「提要の義、且く道へ、これ什麼の一句ぞ。」

(オ)大海若知。溪云く、「辟聞は少欲知足菩薩は多求廣施なり、なほ大海の倒に流れざるが如し。」珠云く、「是の語無量の妙義、恒沙の意を含む、虛堂の腹の中を見たくば此の句を見よ。」

(ク)枯木倚寒巖。この話は頌古に見ゆ時節相應に依つて問端と作す、この話は婆子燒菴の則に云ふ、昔一婆子あつて一の庵主を供養して二十年を經たり、常に一人の二八の女子をして飯を送りて給仕せしむ一日女子を抱定「かゝへたが」しめて云く、「正與麼の時如何、」庵主は「この枯木云云」の句をとなへ出した、女子が皈りて婆子に擧示したところが、婆子の云く「我れ二十年只だ箇の俗漢を供養するに俗漢の爲にするとて遂におひ出して庵をやく「枯木は性のないかれ木なり、寒巖はあまつさへ凍り切りたるいはほによつて、年が老いてまう身體に生氣がない」と珠は云へり。

(ヤ)牙根不瀝水。溪云く、「口を合して水氣を瀝さゞるなり、水をもらすは外言の義、これは把住の境界なり。」珠云く、「よい云ひわけじや、此の僧歯をくひしばりて精を出す苦集滅道の四諦を斷じ、不淨を觀じ、中に一滴ももらさん」と。

(マ)爭交賭籌。溪云く、「賭は音覩、圍碁はなんとか博奕して財を取るなり、籌は算なり、婆子、庵を燒却するも、爭か這の僧に敵對せんとなり、珠云く、「じやくむや、

ちて、臘月八夜に到つて、㋚一條の路子を討得して、後人に與へて行かしむ。若し㋖他明星を見て悟り去ると謂はば、已に是れ㋴謗談未だ息まざるならん。」

上堂、僧問ふ、「馬祖因に龐居士問ふ、「㋱萬法と侶たらざる者、是れ甚麼人ぞ」と、此の意如何。」師云く、「㋯乞兒飯椀を弄ず。」僧云く、「只だ馬大師の如きんば、㋛汝が一口に西江水を吸盡せんを待つて、却つて汝に向つて道はんと道ふ、聻。」，師云く、「㋽劈腹剜心。」僧云く、且く道へ、龐老子、此の一問を興す、是れ會し了つて問ふか、會し了らずして問ふか。」師云く、「㋪會し了つて問ふ。」僧云く、「既にこれ會し了つて問はゞ、㋲何ぞ必ずしも悟り去らん。」師云く、「㋝悟らずんば爭か會することを得ん。」僧云く、「人天衆前、

からにしてしまふた」或抄に「大把住なり、勝負なし」と。

㋕古人公案。婆子燒菴。

㋫非子不委。委細領會せざらん珠云く「いかさま、なるほどじや」と。

㋙山深雪未消。天眞の祥瑞。

㋓諸々。此の僧ががてんいかん彼ばくち位であらう、此れは領話なり。

㋢以拂一指。點破の意、汝が事かと弄したところ、諸々と云ふところをば點破す。

㋐乃云。横綱なり。

㋚一條路子。是れ什麼の路ぞ、家山への道筋なり。

㋖他。佛世尊を云ふ。

㋴謗談未息。是れ小機曲見の故に、金剛經に所謂則爲謗佛の意なり、珠云く「如來をそしりころすものじや」。

㋱不與萬法爲侶。珠云く「これは龐居士、石頭に參じた處を力一ぱいに出て來た、山をみても川をみても、男をみても、女をみても、一切と共たらざるものあり、これ甚麼人ぞとふた。」

㋯乞食弄飯椀。溪云く、「不侶の者を認めて究竟と爲す、その伎倆賤しむべし、」珠云く、「乞食が飯をもらうて來つてたのしみもてあそぶなり。」

㋛汝一口西江。大光明　云く「これは龐居士の傳をみると、居士言下に於て旨を領ず、乃ち留めて參承して、經涉することに載」とあり。

㋽劈腹剜心。溪云く、「情を盡して道破す、」珠云く、「馬師にはらわたを取り出して、親切に五臟六腑をゑぐり出して示されたぞ」と。

㋪師云會了。珠云く、「それはしれたこと、石頭が處で會し了りて問ふたのじや」と。

㋜豈に方便なからんや。」師云く、「㋑泥を踏む漢。」

乃ち云く、「㋺自家の田地、㋩肯て實に從つて履踐せず、只だ㋥姓を冒して官田を佃にせんことを要す。㋭還つて二祖の達磨に對して、禮三拜して位に依つて立つことを知る麼。」

除夜小參、僧問ふ、㋬年窮り歲逼り、烏龜壁に上ると、㋣豈に是れ和尚の語にあらずや。」師云く、「㋠只だ自己が命を傷ることを得たり。」僧云く、「忽然として衆中に㋷箇の通方の作者ありて㋦冷笑一聲せば、老師未だ㋸面熱し汗下ることを免れず師云く、「爾更に㋾近前して我れを驗して看よ。」僧㋻近前して云く、「了。」師云く、「㋕果然。」

乃ち云く、「㋵日日日は東に上り、日日日は西に

㋲何必悟去。居士は馬祖の此の語の下に於て、大悟すればなり。

㋝不悟爭得會。珠云く「今日悟らないで、きのふ會することがなんで出來やう」。

㋜豈無方便。溪云く「人情に順つて開說すべし。」珠云く「なんと私の爲に一超直入の方便を御示し下され」と。

㋑踏泥漢。溪云く「自ら難澁して進まず、却つて方便を求む」となり、珠云く「くそ、このどろもうめ」と。

㋺自家田地。珠云く「佛祖のおせわにも誰のせわにもならぬ田地を取り失ふて、輪延の暗に沈む。」

㋩不肯從實。珠云く「自心は法王の王と成りてゐながら自身から臣下に成りて公僕の田を作らんと思ふ。」

㋥冒姓細官田。冒は貪なり犯なり、他の姓を貪り犯すなり、史記の衛將軍傳に「衛は他人の姓を冒して衛氏となる」この故事を引く、佃は土を治むるなり、官田は公田なり。

㋭還知二祖。溪云く「眞實契當の去就を顯示して、他の言語方便の境上に涉る者を甄別する得骨得髓のことを並べたてる依位立とは二祖が髓を得るを賞せられたことを云ふ。

㋬年窮歲逼。溪云く「心思路絕する底の禪話なり。」珠云く、「如何んく\と究め來り究め去る底の時、石龜が壁に上る」或抄に「烏龜上壁は物のゆきつまりて窮りたるを云ふ、」鵠林大師(白隱)曰く「此の語は金槌打てども破れず、吹毛截れども斬らず」と云はれてある。

㋣豈和尙語。この語、徑山錄の除夜にも亦この問あり。」

沈む、㋟無爲無事の者、子細に好く推尋せよ。既に是れ無爲無事、又箇の甚麼をか推尋せんと㋹若し佛法の要妙を推尋せば、毎日起き來つて㋞奴を呵し、婢を使ひ、東と說き西と道ふ、㋡他の影子裏に在るに非ずといふことなし。㋧若し舊歲末だ去らず、新歲末だ來らざることを推尋せば、㋤東村の王老夜錢を燒く、㋶野鬼閑神倶に飽足す。「㋰者裏又儞が嘴を揷む處なし畢竟して如何。」拂子を擊つて、㋒一年三百六十日、㋼斷斷月は寅を建すを首と爲。」

㋨復た擧す、㋔晦堂因に「如何なるか是れ㋗多福の一叢竹。㋳一莖兩莖は斜なり、學人不會㋮三莖四莖は曲れり」といふを看して、㋘驀然として契悟す。師云く、「㋫往往多くは是れ竹を知つて、多福を知らず、多福を知つで竹を知ら

㋠只自傷已命。溪曰く「自作自受、他人の傷害するところに非ず、これは潙山の語なり、前の觧夏小參に見ゆ、珠云く「をほさ是れを命根截斷底の時節とも云ふ、外からさすことはならぬ。」

㋷通方作者。「通方とは通達大方れいりのものと云ふこと。

㋦冷笑。珠云く「かげわらひ、かの烏龜壁に上ると云ふ語を輕侮して笑ふやつ。」

㋸面熱汗下。始めて慚愧を知べしと。

㋾近前驗我看。珠云く「勘破了也なり、おれが汗をかいたかかゝぬかと、とくとちかよりてみよ」と。

㋻近前云了。珠云く「此の僧よいかげんにつんぼう、てつぼう、よいかげんに驗過し了るなり。」

㋕果然。釣に上り來れりで、作家の宗匠なり。

㋵日日。珠云く「これは塗毒鼓の語じや。」

㋟無爲無事者。珠云く「禪宗のやくにたたぬ、無事これ貴人と、くその貴人」又云く「學者を驢胎や馬腹に入るに三途の衆生とする根元、」鵠林大師(白隱)曰く「經を讀んでわるいことさへせねばよい、なにを知らずともよいと、三毒五欲は腹くら一ぱい知りて居て何にも知らぬの願力を成就したはのと、そりや牛馬は、みよ牛馬は何んにも知らぬ、あれがよからうか、法門無量誓願學と佛も立てられたではないか、爲レ僧不レ通レ理反レ身還ニ信施一と云ふたは水も消し難しとは、こいつがことじや、無爲と云ふやつは地獄へ落ちぬやつはない」と仰せられた。

㋹佛法要妙。珠云く「眞諦門に

約せば。」

㋞呵奴使婢。珠云く「佛法は日用の上にある事なれば」と。

㋡他影子裏。珠云く「他は佛法、影子裏は光明裏じや、全體本來の面目大道の中にゐないものはない。」

㋧歲末去。珠云く「今夜除夜じやが世諦門に約せば、しほざかひ。」

㋤東村王老。陰陽師の類なり、除夜に紙錢を燒き、疫鬼を逐ふ、王老は張三李四の類、權兵衞、太郎兵衞といふと同じ、珠云く「如是の祭りするも、衲僧境界、向上宗乘の一路子、」この觧は前の興聖錄に見ゆ。

㋶野鬼閑神。珠云く「道祖神も疫病の神も、きげんよく行けならば行く、をれならをらうと紙錢の供をうけてまん足す。

㋰者裏又儞。溪云く「これ又時節任運の事言論を著くべからず、」珠云く「こゝの處は虛堂が處は中々儞すつても見ることもならぬ、此れはがいにりきんだな」と。

㋒一年三百六十日。珠云く「虛堂がはじめは日日日出東云云と云ふて又しまいに以て來て、このやうなことを云ふ、此れは虛堂家』の大事じや。」

㋼斷斷月建寅。溪云く「斷は決なり重ねて之を言ふは、毎歲此の如くなるを以てなり、畢竟任運法爾異念を生ずべからず、」珠云く「斷々は決定の義たしかに〱、十二ヶ月の月始りを正月といふは、いつでも寅の月じや、建寅これが無爲無事に見えるならば、おれが耳なと鼻なと切つてやる。」

㋨復擧。珠云く「晦堂と眞淨がある故、黃龍の威光が盛なり。」

㋔晦堂。名は祖心、隆興府黃龍寶覺禪師、黃龍南禪師に嗣ぐ、慈明三世なり、この話は傳燈錄を讀んでこの語をみて大悟す。

㋗多福一叢竹。杭州の多福和尚は趙州諗に嗣ぐ。珠云く「此の僧見地に坐在して不可思議なる故、問ふ假諦門なればじや。」

㋳一莖兩莖斜。これは多福の荅。

㋮三莖四莖曲。これも多福の荅。

㋘驀然契悟。驀然は忽ちなり、珠云く「無爲の漢には耳に口を付けて百日呼んでもへうたんが屋根から落ちたで、なかなか契悟はならぬ」

㋫往往多是。珠云く、「往往(をりをり)虛堂家裏、毒藥醍醐、一時に行ずる。」多是とはさうであらう。知竹は偏位外觧脫、不知多福は正位内解脫。不知竹偏位外解脫、溪云く「人の一邊を見るを呵す。」

㋙緇素得出。或抄に「この話を辨得し悟る人の知るところ全分が全分にあらざるかをじや」と。

㋓許儞親見。「見處一般の故に」と溪注にあり。珠云く「虛堂和上、いらぬことを仰せてござる。」

㋢使府陞座。龍云く、「使君の府第(官邸)に就いて說法して、今この

ず。人ありて(コ)緇素得出せば、(エ)儞に許す親しく晦堂を見ることを。」

(テ)使府に陞座して回る上堂、僧問ふ、「(ア)毘耶城裏に法を說いて、(サ)雙檮樹下に玄を談ず、如何なるか是れ(キ)不動尊。」師云く、「(ユ)東走西走。」僧云く、既に是れ不動尊、甚麼としてか東走西走す。」師云く、「(メ)癡人面前、夢を說くことを得ず。」僧云く、「是れ動則ち不動、不動則ち動なること莫し麼。」師云く、「(ミ)寶所近きに在り、更に一步を進めよ。」僧云く、「忽然として動と不動とを將つて、一時に(シ)無生國裡に貶向して、却つて問ふ、如何なるか是れ不動尊。」師云く、「(ヱ)東走西走。」僧云く、「(ヒ)和尙也た只だ一半を救ひ得たり。」師云く、「(モ)信根の者少し。」乃ち云く、(セ)或は指し或は掌す、(ス)是れ太平の

寶林寺に回り來りて上堂するなり、使君は蓋し判府直院侍郎なり前に見ゆるが如し」と、珠云く「金華府の使君なり、守護所なり。」

(ア)毘耶城裏。毘耶は維摩居士の所居の城、今居士の緣を用ふ。報恩錄に見ゆ、珠云く「予使君の府第を云ふ、說法は化身佛を現しては種々の說法なされます。」

(サ)雙檮樹下。珠云く「雙檮樹下では敎外別傳・單傳心印點滴も施さず、談玄は一切の要をいふ。

(キ)不動尊。不動尊は應身なり、孤山智圓曰く「不動は中諦法身の德を讃する也」と、溪云く「此の問の意は、蓋し孤山の義に據れり。」

(ユ)東走西走。溪云く「此の荅の意はさきの脚注にある應身の意なり」」珠云く「おゝさ其の不動尊がけふは飯がこはかつた汁がからいと、きやつ〲いふて居らつしやる。」

(メ)癡人面前。大慧禪師が榮侍郎に　ふるの書にも「癡人面前に夢を說くことを得ず、便ち實法の會を作ずとあり、この語は仰山にある僧が問ふたとき答へられた第二句目の語なり、實法の會を作して悟りは皆第二頭に落つるといふて、只だ靜處を守るを簡要とするを呵せられたのである。珠云く「うぬが夢がさめないせどかいだうも、大屋もみな不動尊じや。」

(ミ)寶所在近。これ法華の文略してこの錄の興聖錄に在り、珠云く「そのところをとつくり呑み込むと、あまり遠くはない。」

(シ)貶向無生國裡。珠云く「一念不起の無生國裡、貶向はぬか

戈矛に非ずといふことなし、(イ)二林に捷徑あること莫し麼。」拄杖を卓して、(ロ)兎子何ぞ曾て窟を離得せん。」

元霄上堂、僧問ふ、(ハ)香林因に僧問ふ、如何なるか是れ(ニ)室內一椀の燈。」林云く、「(ホ)三人龜を證して鼈と成す」と、意旨如何。」師云く、「(ヘ)奴は婢を見て殷勤。」僧云く、「(ト)擧人禮謝し去らん。」師云く、「(チ)虛を承け響を接す。」乃ち云く、「(リ)火を以て燈に續ぐを晝と名け、燈を以て火に續ぐを夜と爲す、(ヌ)晝夜相續いで燈盡くることなし。(ル)驀然として黑地裏に(ヲ)露柱に撞著せば、(ワ)阿誰をか怪み得ん。」

(カ)妙勝和尙至る上堂、僧問ふ、「(ヨ)雪峯、僧の來參するを見て、低頭して庵に歸る、此の意如何。」師云く、「(タ)誰か知る席帽下に(レ)此の昔愁人ある

らぬやつがなり、却問は一步を進めた處乎、」或抄に「貶向はとが人をながずやうに、無生國は他方世界をいふ。」萬法無生の心、この語はこの錄の淨慈後錄にも見ゆ。

(ヱ)東走西走。溪曰く「波を離れて水を求むべからずの故に」と。

(ヒ)和尙也只。溪曰く「只だこれ別の方便なきの故にと、三光(東嶺)老師云く「この句はこれは能くいふた」と。

(モ)信根者少。溪曰く「日月盛明ありと雖も、覆盆の下を照さず、」或抄に「信根の者はすくないが、奇特とせう」と證明しられた、珠云く「なるほどうぬは馬鹿ではないて。」

(セ)或指或掌。或は指して之を示し、或は掌して之を罰す、珠云く「これは龐居士が藥山を辭する因緣を用ふる歟、或は指すとは隻手の聲をきけ音聲を止めよと指し示す、或は掌すはさうでもない、からでもないとはうげたをいはせる。」

(ス)太平戈矛。溪云く「本無事、强ひて事を生ずるが故に」と。珠云く「戈矛は太平をはかるの道具なり、」又云く「正眼のものからみると、いらざることを、然れども、夫はさうでない、むねの中は八島、壇浦の合戰じやと。

(イ)二林捷徑。珠云く「干戈を動ぜずして安然としてちかみちがあるであらう。」

(ロ)兎子何曾。溪云く「兎徑ありといへども、只だこれ窟を離るる底の兎なきなり、以て傾脫英俊の學者なきに喩ふ。」珠云く「穴にしやがんでゐては、障の穴にしやがみたがる二我が宗別の生涯あることはしれぬ、」或抄に「兎子ば學者修

ことを。」僧云く、「未審し二林僧を見んには、作麼生か接せん。」師云く、「(ソ)手を把つて拽けども入らず。」

乃ち云く、「(ツ)洪波深き處赤立す、(ネ)妙、一毫に資らず、(ナ)香積世界に用を藏す。(ラ)勝、一握に盈たず、(ム)是の如くなるときは則ち(ウ)坦夷の處嶮巇、(キ)木訥の處酬い難し。且く道へ、此れは是れ(ノ)何人ぞ」といつて、(オ)拄杖を卓す。

上堂、僧問ふ、「二月巳に過ぎて、三月巳に來る(ク)桃花李花零亂し、(ヤ)桑條柳條陰を成す。(マ)萬縁に渉らず、如何が顧鑑せん。」師云く、「(ケ)覺えず日又夜、爭か人をして少年ならしめん。」僧云く、「(フ)和尚豈に方便なからんや。」師云く、「(コ)生薑終に辣きことを改めず。」僧云く、「一人あり、十二時中、(エ)一物に依倚せざる時如何。」師云く

行者にたとへる」。

(ハ)香林。「さやうりん」と讀むもこれは【かうりん】の方が正しかるべし、香林澄遠和尚は雲門偃に嗣ぐ、雲門に　十八年も隨侍してゐた、香林寺は益州の靑城にあり、八十歳にて示寂す、宋の太宗雍熈四年で日本の一條天皇永延元年に當る、この上堂は正月十六日なり。

(ニ)室內一椀燈。溪云く、【寂定中の智明を表す」】或抄に【衲僧の命根を截斷する底の所問なり」】この話は前にも見ゆ。

(ホ)三人證龜。三人證なるときは人必ず之を信す、珠云く、【おらがところは貧乏で油がないので、三人龜を證して鼈となす】、又云く、【これは意到句到と云ふて、宗旨がある】と、或抄に【言ふこゝろはいかな大智光明も二念に渉れどはや暗になるぞ、その如くなるは龜を證して鼈と爲すやうなものぞ。」】

(ト)學人禮謝。師の答を以て頓に此の話を領すればなり。

(ヘ)奴見婢殷勤。溪云く【賓主共に抑下、所謂問處眞ならざれば荅へ來ること莽鹵なり」】或抄に、【奴は香林、婢は僧を指す】と、珠云く、【是れは香林に又ぼつこへた處がある、此れが三人證龜作鼈にかなふ乎。」】

(チ)承虛接響。溪云く、「不實を領取して禮謝し去らんと道ふが故に」と、珠云く、「うぬは人の評判ばかり聞いて、つぢうらなひばかりをして」」と。或抄に「虛は言句」」又云く、「僧の悟處を抑下するなり。」】

(リ)以火續燈。珠云く、【日輪は君の火、燈は人間の相火、火は本有の自性、燈は正念工夫。」】溪云く、【晝は火を用ひ、夜は燈を用ふ。」】

(ヌ)晝夜相續。珠云く、「十二時中念々相續、釋迦如來一度燃燈より乃至達磨に至り、今に及ぶまで燈々盡くることなしじや」」溪云く、「元霄の燈火に託して、學般若者の慧炬相續して、曾て間斷なきことを表す」と。

(ル)驀然黑地。ふいつと、黑地は無念無想のうちになり、溪云く、「暗地を以て正位と爲す。」

(ヲ)撞著露柱。溪云く、「大悟の端的を表す」」珠云く、「露柱は本來の面目じや、これに撞著せば、神儒佛一時に衆ぬ。」

(ワ)怪得阿誰。溪云く、「元來自家更に阿誰をか怪み得ん」と、珠云く、「佛を怪まず祖を怪まず。」或抄に大悟してあらばじや「と、生死の命根をたべはてたところで、誰じやと怪み得てん。」

(カ)妙勝和尚。笑翁堪禪師、明州妙勝に住す、無準範に嗣ぐ。

(ヨ)雪峰僧來。この故事因緣は、この錄の頌古の部に出づ、雪峰住庵のとき僧あり、門を敲く、峰身を放つて出でて云く、「是れ甚麼ぞ」」僧亦云く、「是れ甚麼ぞ」」峰低頭歸庵、僧嵒頭に擧似す、頭云く、「我れ當時若し伊に向つて末後の句を道はましかば、天下雪老を奈何んともせず」」と云ふ因緣なり。

(タ)誰知席帽。席帽はもと羌服、羊毛を以て之を爲る「あみがさ」なり、珠云く、「誰も知つたものはない、虛堂は知つてをる、あみ笠をかぶるるのはあやしい、いかなる人じややらしれぬ」」又云く、「低頭歸菴は何たる浪人だかしれん。」或抄にかさきてしのびあるく人なり、とは非なり、これは寒山子にある語より出づ、その抄に席は蓆の誤りで、今日富貴の人と云ふ意味。

(レ)此昔愁人。寒山子には「元是　昔愁人」とあり、或抄に「昔々種々愁へたが」と云ふ、この昔愁は貧を愁へたるなり、珠云く、「そこばくのかなしいじゆつない、畢竟雲峰の全體作用の處を知るものあるまいと云ふて、虛堂こそ知つた、」溪云く、」人を顧みざる處、却つてこれ接得なり、この意實に知り難し。」

(ソ)把手拽不入。即今儞進入せざるなり、珠云く、「此の語極めて難透。」禪門類聚に雪峰、衆に示して云く盡大地是れ解脫門、手を把つて伊を拽けとも、肯て入らず」とあり、或抄に「天下の學者門に入り得ず」と。

(ツ)洪波深處。溪云く、「不思議自在の妙機、所謂深深たる海底、行いて脚を濕ほさゞる境界なり、赤立は赤體裸形にして立つなり」」珠云く、「洪波は浩渺の大海、赤立は赤脚裸形に獨立して」と。

(ネ)妙一毫。妙の字を打す、貧は賴なり、珠云く、「妙と云ふも奇と云ふも、此の和尚面前には一毫のさき

程でもない。」

(ナ)香積世界、又是れ不思議自在の勝用なり。香積は維摩經の香積佛品に出づ、禪宗寺院では庫裏のことを香積界と云ふ、妙勝和尙は久しく典座(飯頭)をして居られた。藏用は珠云く「大機妙用をかくしてしつこんで居られる、德をつゝむ陰德家じや。」

(ラ)勝一握。これは勝の字を打す、溪云く「一毫一握は細微の謂、言は此の如くの殊勝の事を以て自ら足れりと爲す。」珠云く、「殊勝な境界は妙勝面前一握りにもあたられぬ。」又云く、大きな隱德があれども、一握は無一物のとこ、無盡藏べや「或抄に一握は至つてすくなきを云ふ、不盈はあたらず」と。

(ム)如是則。是の如き境界なればなりと。

(ウ)坦夷處巇嶮。溪云く「巇は山相對して危嶮、又妙處を說く、所謂平坦却つて進趣し難しと是なり、」珠云く「瞌睡の處、孤危嶮峻がありこれは洪波の句を受く。

(キ)朝衲處難酬。溪云く「木訥は仁に近しとの語は論語にあり、木は質樸、訥は遲鈍、又勝の處を說く、所謂樸鈍却つて酬對し難しと是なり、皆妙勝の處なり、」珠云く「木訥は無言のところ、無碍辯才難酬はいかな〳〵、四辯八音でも富樓那の舌でも應對はできぬこれは香積の句を受く。」

(ノ)此是何人。其の人に歸結す。

(オ)卓拄杖。珠云く「妙勝和尙でなくてどうするものじや。」

(ク)桃花李花。珠云く「もゝのはなやすもゝのはなが、うつくしいと思ふうちには、零亂とちつてしまふ」

(ヤ)桑條柳條。くはのえだややなぎのえだ、青々と芽をふいてさかえてきた。

(マ)不涉萬緣。溪云く「目前の萬緣に涉らず、」如何が見得せんとなり「雲門は每に僧を見て、之を顧みて即ち曰く、」鑑「と僧擬議すれば門即ち曰く、」咦「と、而して之を錄するもの、顧鑑咦と曰ふ、珠曰く正與麼の時節じや、萬緣は直に見直に聞く。佛になさず、法になさず、時になさず、境になさず、なまで見聞す、或抄に、顧鑑は示さんの心なり。」

(ケ)不覺日又。これは三體詩の三に、又唐僧弘秀集三にも出てゐる五言律の詩なり、栖蟾といふ僧の宿ニ巴江一詩に曰く、江聲五千里、瀉レ碧急ニ於絃一、不レ覺日又夜、爭教ニ人少年一、一汀巫峽月、兩岸子規天、山影似ニ相伴一、濃遮到ニ客船一「と此の詩に出づるなり、三體詩の雪心抄にはかう云つてゐる」峽中は兩岸の山が高うして、日月の光をも見えぬほどに、晝夜をしらぬぞかくある處を舟にて透るほどに、頭が俄に白髮するぞ、さて人を少年のまゝにして置くことは、爭であらん「と、珠云く、」是れ事理具

足の答へなり「祖師も多く問答あれども、此のやうな名句はあるまい教人少年で、再びわかうなることは無い。」

(フ)和尙豈方便。珠云く「これ和尙その樣なえしれぬことをいはずと」。

(コ)生薑終改辣。溪云く「始終把住」、珠云く「うぬは鈍漢、いくら云ふてきかせても、利口にはならぬやつ。」

(エ)不依倚一物。或抄に「獨立無碍の時」と。

(テ)髓臭布彩。溪云く「此の意趙州放下着の如し。」珠云く、鶻臭はふるいわんぼうで、之れは脫却「ぬいでしまへ」いやはや通身これ口じや、鶻臭は知見解會を云ふ、この解は前にもあり。

(ア)細嚼難飢。溪曰く「根本無明の粮食斷えざるに喩ふ、又の義に子細に此の旨を翫味せば當に飽參すべし」となり。珠云く「諸方の安見解をつめこみ〳〵した故、おれが云ふこと腹のへつた處へ食ふやうにとくとをさまらぬ、又うぬが習氣煩惱をばつめこみ〳〵して」と。

(サ)乃舉。拈提なり。

(キ)入龍、名は智洪、鼎州の大龍山に住す、白兆志圓に嗣ぐ、德山四世。

(ユ)色身敗壞。色身とは法身に(靈)に對する語で、この肉體のことを云ふ、地水火風の四大でできたもの

(メ)堅固法身。堅固は不滅の意なり、この靈魂は不滅なりと云ふ、又生死をはなれたるを云ふ。

(ミ)澗水。この話は碧岩の第八十二則にも出てゐる。ある禪僧が大龍山の智洪和尙に佛法ではこのわたしらのからだを靈魂と肉體との二つから見てこの肉體即ち色身の方は生理の上からは死んでしまへば共に腐敗し破壞してしまふがその靈魂即ち法身の方は死んだからとてそれは滅びはせぬ常住不壞でありますが、さあ其の不滅の法身とは如何なるものを云ふのでありますか「と問ふた、すると、智洪和尙は、」左樣左樣、この吾れ吾れの靈魂は堅固不滅であるから、吾人の死ぬると共になくなりはせぬが、しかしその靈魂が「死後に於て一塊の物體が」極樂へ行つたり高天原に旅行したりするものではない野や山の花は、あれあの通りきれいに錦の如く咲きみだれて居る、谷川の水もあれあのとほりにすみきつて、きれいに藍色を流したやうに湛へてをる、あそこに吾人の靈魂即ち堅固不滅の法身を現してゐる、現成公案そのまゝであると見たならば沒交涉じやと或人亦いつてをる。

(シ)也苦地在。溪云く「大龍法身に答ふ、未だ一場の苦屈を免れずと」珠云く「佛祖も粉骨碎身めされたくるしい、」或抄に「大珠も屈を免れず」と。

(モ)垢面漢。龍云く「堅固法身の面目を表す、」珠云く「問話の僧を罵る

㋢「鶻臭布衫、須らく脱却すべし。」僧云く、「既に一物に依倚せず、又箇の甚麽をか脱せん。」師云く、「㋐細嚼飢ゑがたし。」

㋚乃ち擧す、㋖大龍因に僧問ふ、「㋴色身敗壞如何なるか是れ㋱堅固法身。」龍云く、「山花開いて錦に似たり、㋯澗水湛へて藍の如し。」師云く「若し是れ堅固法身ならば、㋛也た苦地なること在り、雲黄に問ふものあらば、只だ他に對して道はん、㋓垢面の漢。㋪我れ二十年、長老と做る、㋲未だ嘗て人の與に過話せず。」

上堂、擧す、㋝烏臼因に玄紹の二上座來參す、臼問ふ、「近離甚の處ぞ。」僧云く、「㋜江西。」臼便ち打つ、僧云く、「㋑也た知る和尚に此の機要あることを。」臼云く、儞既に會せず、第二の禪客近前し來れ。」僧擬議す、臼亦打つ、師云く、

なり、うぬはよこづらのむさ〱しい。」

㋪我二十年。珠云く、「若いときは筋骨ぬいて辛苦した故」又云く「あゝ虛堂は七翰林の才とあるに依つて叢林の長老となる。

㋲未嘗與人。珠云く「いひぞこなひはいかな〱した覺えはないといふこと。」

㋝烏臼。馬祖に嗣ぐ。

㋜江西。江西の方からきましたと、珠云く「賓頭の漢」と。

㋑也知和尚。珠云く「これは好く云つた、知はしり得たじや、機用は要領などじや」

㋺如登龍門。溪云く「共に容接せらるゝが故に」珠云く「僧見二烏臼一は師家も學者も中々大低の者ではない、如燈龍門さりとてけはしいものじやに二僧の志、貴いことじや、」或抄に「烏臼の機鋒の嶮峻に比す如しといふ字に心を付くべし。」

㋩長年鬧市。珠云く「布袋はくる年も〱、山に入られたことはない、さはがしい市中ばかりで」と。

㋥終日魚籃。珠云く「觀世音はくる日も〱、なまぐさいさかなうり。」

㋭禁居安居。珠云く「江西湖南禁足安居なんのまねじや」。

㋬當圖何事。二大士の高蹤に異なるが故に。

㋣擊筒木響。溪曰く「皆これ眞妄一致の境界なり、夫の竹筒をうつて木響に比方する、その意入鄽と安居と一致の境界を明めんことを要す。」珠云く
竹筒と木響は拆木のひゞきじや、沒滋味鐵橛子と見たら大ちがひ。「又云く、」此の僧は二聖の市鄽の佛事を認めて、己も二聖の境界を學ばんと思

二僧の烏臼に見ゆるは、㋺龍門に登るが如し。」

結夏小參、僧問ふ、「布袋㋩長年鬧市、觀音㋥終日魚籃、㋭禁足安居、㋬當に何事をか圖るべき。」師云く、「㋣筒を擊つて木響に方ぶ。」僧云く、「與麽ならば則ち㋠深密の處、㋷觀光すべきに足れり。」師云く、「㋦之を毫釐に差ふ。」僧云く、「和尚の答處㋸辛辣なり、學人如何が㋾湊泊せん。」師云く、「㋻湊泊なき處に向つて領取せよ。」乃ち拄杖を拈じて云く、「㋕一事を擧するときは則ち理に迷ひ、㋵一機を措くときは則ち用を失す。㋟衲僧家、智、象外に游び、㋹妙、環中に入るも、猶ほ是れ㋞家常の茶飯。㋡端なく、釋迦老子に㋧無絲の線を以て、脚跟を擊却せられて、㋤直に得たり、東西南北、㋶去路從ふことなきことを。是に於て九十日の內、㋰古塚を守

ふは竹筒を打つて木響に方ぶるが如しじや、」或抄に「筒は禁足安居を、木響は布袋觀音にたとへる」と。

㋠深密處。珠云く、「二聖の境界の深密のところ。」

㋷足可觀光。把住の處放開を見るに足る。珠云く、「とつくりよみ、へたなり。」

㋦差之毫釐。珠云く、「的をいるには毛すぢも差へば先きでは大ちがひ。」

㋸辛辣。きびしい。

㋾湊泊。よりつかれぬ。

㋻無湊泊處。珠云く、「この語は鵠林「白隱」大師も「此の語は虛堂の語に非ず」と仰せられた、三光「東嶺」先師は曰く、能々見れば惡語にあらず、無湊泊處とみれば惡し、難湊泊とみれば好しと仰らる。

㋕擧一事則。珠云く「事の現するときは理藏る、理の現するときは事藏る、」或抄に「事に即するときは即ち理を失す、その事についてどうかういへば、はや機用を失す、理は理論で事は實際じや。」

㋵措一機則。珠云く、「機は心の發する所なり、一機を捨て措くときは則ち其の作用を失す機は見性悟道失用は石佛も同じやうじや。」溪云く「至理は無爲妙用は無作の故に。」

㋟衲僧家。珠云く、「衲僧家はそれではならん、擧もせず措もせずじや、象外は格外じや、」溪云く、「萬象の外、世智の及ぶところに非ず。」

㋹妙入環中。或抄に「大道虛無をいふ、わの中なり、妙は環中に入るところにとゞまらぬ游と入の二字に着眼すべし、」この語は莊子の齊物篇に、「樞始めて其の環中を得て以て無窮に應ず」と云ふに出づるな

る鬼の如し、之を禁足、安居、剋期、取證と謂ふ、亦(ウ)未だ知らず、證するところのもの何事ぞ。(ヰ)驀然として(ノ)箇の危亡を顧みざる底あつて、(オ)圓覺の伽藍を掀翻し、(ク)平等性智を毀罵せば、山僧只だ(ヤ)退身分あることを得ん。何が故ぞ。」拄杖を卓して、(マ)老いて筋力を以て能と爲ず。」

復た擧す、(ケ)雪峯衆に示す、「(フ)盡大地(コ)撮し來るに、(エ)粟粒の如し、(テ)面前に(ア)拋向す、(サ)漆桶不會、鼓を打つて(キ)普請して看よ。」師云く、「雪老當時與麼、(ユ)殊に知らず、(メ)今日あることを。二林今夏、亦諸人をして密密地に(ミ)與麼ならしむ。(シ)但だ必ずしも普請せしめず、(ヱ)更に若し會せずんば、儞自ら雪峯に孤負せん。(ヒ)虛堂に於て、初より與ることなし。」

り、珠云く、「妙處は無心無心即ち妙處」又云く、「殺人刀活人劍、百萬の軍兵の中に入りて一日にころす。」

(ソ)家常茶飯。未だ分外とはせず

(ツ)無端。ひよいと、元來さう云ふ者じやに釋迦が出てと。

(ネ)無絲線。九十日の禁足安居を云ふ、溪云く、「法を以て繫縛して禁足せしむればなり。」

(ナ)東西南北。珠云く、「今日からは、まう東へでも西へでも。」

(ラ)無從。心のまゝにならぬ。正字通に云く、「從はなほ因の如し」とあり。

(ム)如守古塚鬼。まつくらい處へ入りて、死人の番人を見たやうに。

(ウ)未知所證。珠云く、「何を悟るのじや。とんとすゝめん、別の事ではない。」

(ヰ)驀然。しかれども、又たちまちに。

(ノ)箇不顧危亡。珠云く、「箇の伶利の漢がありて、法の爲めならば切られても刻まれてもなんとも思はぬもの。」

(オ)圓覺伽藍。圓覺は前に見たたり、根本大智なり、掀翻ははねとばすこと、珠云く、「虛空へけとばしてしまへ。」

(ク)平等性智。平等性智は後得智なり、毀罵はくそ〳〵と顧みずと、この二語前の興聖錄に見えたり。

(ヤ)退身有分。珠云く、「虛堂もそれではあとしさりするほどのことじや」又云く、「虛堂もはや。ごくらうでござりましたと云ふて」と、或抄に「退休して吾れに代りて說法せしめんとなり。」

(マ)老以筋力。この語は禮記の曲禮に貧者は貨財を以て禮と爲さず、「老者は筋力を以て禮と爲す」と云ふに出づるなり、溪

曰く、「我れ老者の故に令を行はず」と、平語でいふと、年よりてうでだては無用といふことなり、ちからわざを以てはならぬことなりと云ふて大機用を奪ふ、珠云く、「是れ又今迄云つたのを坐斷したのじや」又云く、「夜深けて轉々單于の調に入る乎、實に斷腸々々。」

(ケ)雪峯。名は義存、德山宣鑒に嗣ぐ雪峰山は福州附近で、屋島の獅子岩に似た象骨巖といふがあると云ふ、雪峰は唐の穆宗長慶二年生る日本では嵯峨天皇の弘仁十三年に當る、支那の福建の泉州の人。

(フ)盡大地。以下この字解は或抄によると全宇宙のこと。

(コ)撮來。手の指でつまみあげるなり來の字は助辭で、語勢をつよめる爲につかふ、これは「さつらい」と音でよむが正當なりといふ說あり

(エ)粟粒。これも日本で云ふ粟粒ではない、もみがらをかぶつてゐる米粒でもみ粒である。

(テ)面前。御互のめのまへ。

(ア)拋向。これも拋擲ではない、拋棄してあることで、存在して居ると云ふほどのこと。

(サ)漆桶不會。さつぱりわからぬといふ意。これは、唐宋時代の俗語なり。日本俗語の「暗夜の烏」「盲人の垣のぞき」などに似て居る、漆桶はうるしで、黑くして木の性のわからぬ桶のこと、不會は黑くぬりであるから、木か金か石か何か一向わからぬこと。

(キ)普請。あまねくたのむことで、寺中の僧侶が共同作業で掃除とか草引きとか薪仕とか園頭とか米つきとかをすること、大仕事のときは合山禪僧の身仕度が出來れば、普請鼓と云ふて「太鼓の打ちかた」今日の普請と云ふ語は、禪宗から出た語なり。この公案の大體を話せばかういふことになる、雪峰和尙が座下の禪僧たちに示さるゝには、盡大地、この宇宙は廣大無邊のひろきものであるが、指のさきでつまみ上げてみると、實に米粒の大きさしかない、さうしてその米粒のやうな世界が、今めいめいたちの眼前に橫はつて居るが、漆桶不會で、ちやうど盲人さんの垣のぞきと同じで、そのやうなわからずやには何か何やら一向がてんがまゐらぬわい、さあ米粒ほどの宇宙を、手指のさきで撮み上げやうと思ふならば、一つ普請鼓をならして、大衆一同總がゝりでさがして看よと、この話は多分華嚴敎の轉用であるから、一つ華嚴：の立場から、文字の詮索をしてみるのも、第一主要である、どの話は碧岩の第五則にも出てゐる。珠云く、「此の示衆は雲門宗の親元じや、意到句到徹細のところがある、三光先師も此の則は雲門言句の根を明かすといはれた。」

(ユ)殊不知。珠云く、「虛堂もこの通りじや、虛堂ばかりではない」又云

次の日上堂、「諸方は(モ)期を以て効を取つて、(セ)時刻忘せず、我が者裏は、(ス)山邊水邊、(イ)便に從つて走作す。何が故ぞ。」拂子を擊つて(ロ)細を棄て大を錄して以て知己を待つ。」

(ハ)上堂、僧問ふ、「(ニ)臨濟(ホ)會下、(ヘ)兩堂首座相見、齊しく(ト)一喝を下す、此の意如何。」師云く(チ)「貧を闘はしめて富を闘はしめず。」僧云く、「僧あり問ふ、『此の兩喝、(リ)還つて賓主ありや也た無や。』濟云く、『賓主歷然』と、又作麼生。」師云く、「(ヌ)隻手にして日を遮る。」僧云く、「二林の頭首、(ル)峻機妙用、(ヲ)衆眼謾じ難し、還つて(ワ)者の兩喝と是れ同か是れ別か。」師云く、「(カ)儞自ら他を勘して看よ。」僧云く、「人天衆前。」(ヨ)也た伊を蓋覆すること得ざれ。」師云く、「(タ)儞道へ(レ)那箇か賓、那箇か主。」僧便ち喝す。」師云く、「

ぐ、「虚堂か今日如是なることを雪峯もとんと知らずして。」

(メ)今日。溪云く、「今日は休歇了會の時節なり。」

(ミ)與麼。珠云く、「漆桶不會の處に坐せしむ、」

(シ)不必普請。密々に與麼に指示して、鼓を打つて普請して看せしめずとなり。

(エ)更若不會。珠云く、「それでもまた不會ならば、我れとわがでしるのみこまぬと云ふものなり、」又云く、「しかしながら三人よれば文殊の智惠と云ふから、えいとう、なうとうと普請して見よ。」

(ヒ)於虛堂初。珠云く、「最初より少しもぐいあいはないと、底意は自知せよの意。」

(モ)以期取効。尅期取證。

(セ)時刻不忘。晨香、夕燈、夜禪晝踊、珠云く、「十二時中、不忘念に住す、」或抄に「一夏九旬の期限なり。」

(ス)山邊水邊。遊山翫水の活衲僧の三昧なり。

(イ)從使走作。溪云く、「安居の法縛を受けず。」珠云く、「人人すきなやうな心のまゝ、じつとしてはゐぬ。」遊山して自由自在なり。

(ロ)棄細錄大。溪云く、「上の兩節を結ぶ、言は聲聞の細務を棄て、菩薩の大行を記して、後の識者を待つなり、」珠云く、「細戒細行を棄却し、大知見を收錄して、以て待知己は互に繫つ舞つするやうなものがほしい。」或抄に「大悟知己は大機用のある人。」

(ハ)上堂。この上堂は兩頭首の秉拂を謝するなり。

(ニ)臨濟。名は義玄、唐の宣宗咸通八年、日本の清和天皇、貞觀十年に當る、黃檗希運に嗣ぐ。

(ホ)會下。臨濟和尙の下に就いて修行する雲水の僧たちを云ふ、會はあつまるで、よりあふこと、一會又は會裡などと云ふ。

(ヘ)兩堂。前堂、後堂、又は前版後版とも云ふ、これは會下の頭首たち

(ト)一喝。これは臨濟門下の宗風、或抄に、「箭鋒相拄」とあり。

(チ)闘貧不闘富。珠云く、「互に貧乏じまん、」又云く、「世間の貧にあらず三毒をなくしてしまつて。」この語は前に見ゆ。

(リ)賓主。珠云く、「賓家主家權實あり。」

(ヌ)隻手遮日。溪云く、「强ひて賓主歷然と言ふ、猶ほ隻手を以て大日輪を遮るが如し」と。珠云く、「これが主賓が此の四字の内に賓主歷然。」

(ル)峻機妙用。珠云く、「格外不測の働き。」

(ヲ)衆眼難謾。或抄に「人人見てあるが大衆皆知る。」

(ワ)與者兩喝。下のこの兩喝と、又云く、「臨濟下の僧と虛堂下の學者と同か別か」と。

(カ)勘他看。珠云く、「他は二林の頭首を勘辨して同か別かな。」

(ヨ)也蓋覆伊。溪云く、「宜しく分明に辨折すべし」と。珠云く「人天衆前脫白露淨、さう云はずにあからさまに仰せられて、ようござる、」或抄に「蓋覆はひいき、ひいきしてかくしたりとて、かくさせまい。」

(タ)儞道。もとへ立ちかへつだ。

(レ)那箇賓。或抄に「一喝の上で。」

(ソ)脫身鬼子。溪云く、「羅籠を出づる底の死漢、抑揚機權あり。」珠云く「脫卯の鬼の意か、前に云ふ脫卯なり、帳はづれ、亡靈中有にさまよふうろたへもの。」

(ツ)師子嚬呻。事苑四に、「敵讎自在無畏、嚬呻はしかむうめくで、四體を展舒通暢する狀なり、師子は文殊の智で、嚬呻がこはい、この語前に見ゆ。

(ネ)象王回顧。兩頭首各自に威勇を逞うす、象王の廻るか如きは、身首倶に轉ずるなり、輕擧なき故に、以上二句とも華嚴經の入法界品などにある世尊入師子嚬呻三昧などから出でし語か。象王は普賢の行で、回顧がいやらしと。

(ナ)齊眉共躅。溪云く、「短長高下なし兩頭首見處一般なることを表す。」珠云く、「せいくらべじや、兩頭首互に長短優劣はない。」

(ラ)跨釜之作。釜は竈に作るべし、書言故事の子孫の部に父に過ぐるを跨竈と爲す」と、注に勝なり、或ば云ふ、かまどの上に釜あり、借りて以て言を爲す耳、珠云く、「超師の作略なり。」

(ム)竪起拂子。珠云く、「それこゝじや見そこなふな」と。

(ウ)新羅人過海。溪云く、「那一人を指出し、然して蹤跡を以て見得べからず。」珠云く、「毛唐人が海外の雲のあなたへつゝぱしつた、きのふ

㋞「脫身の鬼子、乃ち云ふ、㋡師子嚬呻、㋧象王回顧、此れ猶ほこれ㋤眉を齊うし蹋を共にす。㋶跨釜の作を見んと要す麼。」㋰拂子を竪起して㋒「新羅の人海を過ぐ。」

㋼上堂、僧問ふ、「㋨一句子の儞に到るあらば、㋔拔舌犁耕、㋕一句子の儞に到るなくんば、㋳自ら殃禍を招く、甚麼邊の事をか明らめん。」師云く、「㋮彼此出家兒。」僧云く、「㋘和尚封疆を把定して、水泄を通せず。」師云く、「㋫是れ少林の客にあらず。」

㋙乃ち擧す、仰山、㋓東寺に參じて纔かに門に跨る、寺云く、己に相見し了れり、上來することを用ひざれ。」仰云く、「㋢與麼の相見、得ずといふこと莫し麼。」寺便ち方丈に歸つて門を閉却す、仰山歸つて潙山に擧似す、潙云く、「㋐子こ

のそらに飛鳥のあとじや、」又云く、「此の拈語を見そこなふな、」或抄に「眨眼すれば則ち蹉過す、速疾の義にとる、新羅の人は能く舟にのる。」

㋼上堂。珠云く、「上堂中の絕妙。」

㋨一句子到儞。この語は應菴の華和尚の語なりと云ふ、珠云く「佛祖も見ることならぬ言句じや、それを言句上でさばいたら、儞に到るは學者を呼ぶ、」或抄に「有說底。」

㋔拔舌犁耕、無間地獄のありざま、珠云く、「師家得報此くの如し。」

㋕無一句子到儞。雪竇の示衆、珠云く、「此の二句、百煉千煆して初めて知るべし、」或抄に「無說底。」

㋳自招禍殃。溪云く、「有句無句共に謗法の故に、皆苦を受け禍を招くなり。」珠云く、「手前から拵へ出す洋銅じや。」

㋮彼此出家兒。溪云く、「有句無句、彼此皆佛法中の人、豈に恁麼の事あらんやの意なり、正しく兩段の語を奪得す、」珠云く「一句子を得たも得ぬも、三界出離のをのこ兒じやなぜなれば三途の衆生も、眞如の日輪は照りかゞやいてゐる、」或抄に云ふ「みな佛法中の人と用ゐて云ふて、上の二件をさす。」

㋘和尚把定封疆。溪云く、「問話を領受せざるが故に 爾か云ふ、」珠云く、「海外でも手形があれば通行ができることじやに、餘り和上はきびしい、不自在なことじや。」

㋫不是少林客。溪云く、「不知音底、作家の禪客にあらず」と。珠云く、「うぬは達磨の子孫ではない。」

㋙乃擧。拈提なり。

れ甚麼の心行ぞ。」仰云く、「㋚若し與麼ならずんば、爭か伊を識得せん。」師云く、「東寺㋖便ち方丈に歸る、㋴千古の楷模、仰山㋦潙山に擧似す㋯邪に因つて正を打す。」

上堂、㋛僧問ふ、「㋓劉鐵磨、㋪潙山を訪ふ、山云く、『㋲老牸牛汝來也』と、此の意如何。」師云く、「㋝一箭紅心に中る。」僧云く、「劉鐵磨云く、來日㋜臺山に㋑大會齋あり、山㋺臥す勢を作す㋩磨便ち出づ、㋥嚮。」師云く、「㋭果然。」僧云く「謂つべし二り倶に作家 。」師云く、「㋬謗斯經故獲罪如是。」僧禮拜 。

㋣乃ち云く、「㋠師曠が聰、離婁が明、甚に因てか眼あつて㋷終日鼻孔を見ざる、一轉語を下し得て、㋦老僧に合ひ得ば、㋸樹下塚間、㋾儞に許す忘想することを。然らずんば、㋻老胡望を

㋓東寺。如會、馬祖に嗣ぐ、湘南東寺如會、唐の穆宗長慶三年八月十九日寂す、壽八十、勅して傳明大師と諡す、日本の嵯峨天皇弘仁十四年に當る

㋢與麼相見。これは本は莫不當否に作る「珠云く「己相見了と、その相見ならば、そりやすんでゐる」と、又云く、「そりやさうとして、與麼の相見、こりやでき申すまいかいかど。」と。

㋐子是甚麼。珠云く、「仰山おぬしが返答はあまりぬるこいおぬしが心根はどうじやぞ。」

㋚若不與麼。傳燈錄には「他となす、」即ち東寺を指す、」珠云く「かうもしてみれば、向の手本がみえませぬ。」

㋖便歸方丈。珠云く、「そのするどさ、寒毛卓竪する。」

㋴千古楷模。楷は法なり、摩竭に室を掩ひ、少林に面壁等は千古の法樣と謂ふべし。

㋦擧似潙山。珠云く、「やう〳〵手前の無調法となほした。」

㋯因邪打正。權道なり、邪に因るとは經に反するの謂なり、打正とば道に合するの謂なり其の意見るべし、珠云く「三光先師も「是れ好心にあらずと入れたい」と仰山邪山の心潙山に何の心行ぞと云はれてやう〳〵とりなほした、」或抄に「邪は仰山潙山を、正は東寺を指す」と。

㋛僧問。この話は碧岩第二十四則にも出てゐる。

㋓劉鐵磨。尼なり、徑山の二世洪諲に嗣ぐ、諲は潙山に嗣ぐ久しく參じて機鋒峭峻なり、人號して劉鐵磨と爲す、潙山を去ること十里にして、庵を卓す。

㋪潙山。湖南省の潭州長沙府にあり、岳州の東南にあたり、

失せん。」

上堂、僧問ふ、「㋕久雨晴れざる時如何。」師云く㋵「庚に逢はゞ則ち變せん。」僧云く、「久雨忽ち晴るゝ時如何。」師云く、「㋟處處以て皮艸を晒晾すべし。」僧云く、「與麽の荅話、㋹諸方未だ肯はざること在り。」師云く、「㋞鷄を割くの刄。」僧云く。」㋡二祖禮三拜して、位に依つて立つ。」師云く、「㋧漆器を呈す。」僧云く、「達磨云く、「汝吾が髓を得たり」と。師云く、「㋤覆水收め難し。」僧云く、「學人纔に和尚の陞堂を見て、便ち出でて禮拜す、㋶箇の甚麽をか得ん。」師云く、「㋰他時退欵することを得ざれ。」僧云く、㋒且喜すらくは㋼水米交りなきことを。」師云く、「㋨早くこれ退欵し了れり。」僧㋔便ち喝す、㋗師亦喝す。乃ち云く、「山僧、尋常㋳曾て人を抑逼せず、㋮

洞庭湖を距ることあまり遠くもない。

㋲老牸牛。老いぼれ牝牛。

㋝一箭中紅心。溪云く、「赤心と一般、潙山の箭、虚りに發せず。」「唐土の的は星を赤くするなり、心はまん中のことなり」と珠は云へり。

㋜臺山五臺。山のことである、前に見ゆ、潙山とよほどへだつてゐる。

㋑大會齋。大法會。

㋺臥勢。大の字なりにねるまね。この話は劉鐵磨と云ふ老尼が潙山和尚のところにある日やつてゐた、潙山が「おい老いぼれ牝牛、よく來たなあ」と云ふと、老尼は「近いうちに五臺山に大法會があると云ふことでありますが、和尚さんも御出でになりますか、なになら御伴致したいものですが」と云ふ、するに潙山和尚は老尼の尋には何とも答へず、「あゝ今日はくたびれた」と云はぬばかり、大字なりに臥ろまねをした、流石の牝牛も閉口してすぐさま歸つてしまつたと云ふ。

㋩磨便出。とつくり御休みなされと、

㋥聻。如何ととがめること。

㋭果然。そりや見たか。

㋬謗斯經故。溪云く、「胡亂に證明する故に、これは法華經の譬喩品にある文なり。」珠云く「鵠林大師もこれは東山下の古賓と仰せられた、勿體ない大切な法門をそしる故、其の罪のがれることはならぬ。」

㋣乃云。これは前の提綱なり。

㋠師曠。これは孟子の離婁に出づ、師曠は晉の樂師、離婁は古の明目の者。

㋷終日鼻孔。聰明此の如くなるも自己を見ず、珠云く、「朝か

ら晩まで、ひろひなか明かな中に居ながら、不見鼻孔で、無理かあくたいか、小魚大魚を呑む、合點せねばいけぬこと。

㋦合得老僧。珠云く「おれににつこりさせたならば。」

㋸樹下塚間。これは十二頭陀の行處に五つあり、一には蘭若、二には塚間、三には樹下、四には露坐、五には隨坐、出家の居るところはどこでもかしこでも。

㋾許儞妄想。坐禪觀念を云ふ。

㋻老胡失望。老胡は達磨を云ふ、失望は吾れ本玆の土に來る、法を傳へて迷情を救ふの望を失するなり。珠云く「さもなくば達磨のおもわくともちがふ。」

㋕久雨不晴時。珠云く、法にかけまい。」又云く、「さても〳〵ふると云ふものではない、はてしのない時はいがゞじや」と。

㋵逢庚則變。庚は變更之始めなり、十干は戊己を中と爲す、中を過ぐるときは則ち變ず、故に之を庚といふ、又庚は巽を卦に配す、巽は風なり、雨風を得て晴るゝなり、庚は更なり。

㋟處處皮艸。晒は曬に作るべし、さらすこと、晾は明なり、皮艸は蓑なり、處々は珠云く「血滴々親言じや。」

㋹諸方未肯在。そのやうなざつとした荅話は人が肯ふまい。

㋞割鷄之刄。小器何ぞ大を解することを得ん。珠云く「それつらのことは取るに足らんと云ふことか。」

㋡二祖禮三拜。前に見ゆ。

呈漆器。漆桶一般、無分曉不淨潔。珠云く、「二祖破道具をさし出した。」

㋤覆水難收。初祖の錯りて許可するを抑ふ、珠云く、「達磨も云ひそこなひ、こぼした水を再び瓶へは入れにくい。」

㋶得箇甚麼。皮肉骨髓か、又は別に此ある麼。

㋰不得退欵。退欵は俗語で云ひなほし、又はれがひさげのことなり、或抄に「汝分明に白狀せよ、退いてかげでするな。」

㋒且喜。珠云く「それはまあうれしいことなり、弄して云ふこと。」

㋼水米無交。水米相交はるときは、則ち物必ず調熟、無なるときは然らず、今言ろは師資緣會調熟せざるなり、分皮等の附囑なき故にと珠云く、「水は師、米は資なり、即今の師學機々相投ぜず、ちよつともかゝり合ひなきことなり。」

㋨早是退欵。珠云く、「それみよ、云ひ直ししなつたは。」

㋔便喝。或抄に「掃蕩機なり。」

㋗師亦喝。或抄に「交鋒なり。」

㋳不曾抑逼人。或抄に「むりにさとらしめはせぬ。」珠云く、「茶でもまゐれ、水でもまゐれと、すゝめはせぬ、せめはせぬ。」

㋮退步楷磨。楷は摩なり、自らに就いて修練せしむるなり、心中の垢

只だ退歩して楷磨せしむ。(ケ)但だ心死し意消すること一番子を得て、自然に(フ)胡亂に匙を拈じ筋を放たざれ。然らずんば、盡くこれ(コ)念話の杜家ならん。」

上堂、擧す、(エ)洛浦因に龐居士來參す、禮拜して起つて云く、「(テ)仲夏毒熱、孟冬薄寒。」浦云く(ア)「錯ることなかれ。」士云く、「龐公(サ)年老んたり。」浦云く、「何ぞ寒には便ち寒と道ひ、熱には便ち熱と道はざる。」士云く、「(キ)聾を患ひて作麼かせん。」浦云く、「(ユ)儞に三十棒を放す。」士云く、「(メ)我が口を啞却し、儞が耳を塞却す。」師云く、「洛浦當時、若し龐公年老んたりといふ處に向つて、一喝を下し得ば、(ミ)彼此の葛藤を免れ得ん。」

上堂、僧問ふ、「(シ)熱の時、寒甚麼の處に向つてか去る。」師云く、「(ネ)儞我が痒處に抓著す。」僧云く、「(ヒ)寒の時、熱甚麼の處に向つてか去る。」師云く、「(モ)乾鑼頭上に甚麼の汁をか覓めん。」僧云く、「(セ)寒暑に涉らざる底の人、甚麼の處にか在る。」師云く、「(ス)鬧市裏に尋取せよ。」僧云く、「尋ね得て後如何。」師云く、「(イ)三界の(ロ)二十五有を出でん。」僧云く、「(ハ)也た未だ是れ極則にあらず。」師云く、「作麼生か是れ極則。」(ニ)僧便ち喝す。師云く、「也た未だ是れ極則にあらず。」乃ち擧す、(ホ)天童の啓和尙、因に(ヘ)僧問ふ、「(ト)學人卓卓として上來す、請ふ師(チ)的的、」啓云く「我が者裏、(リ)一屙して便ち了ず、甚麼の卓卓的的とか說かん。」僧云く、「(ヌ)和尙與麼に荅話せば、更に艸鞋を買つて行脚せよ。」啓云く、「近前來。」僧近前す、啓云く、「(ル)老僧與麼の荅話、甚

な楷磨淨盡せしむ、又或抄に回光返照して、切磋琢磨するの義」と。

(ケ)心死意消。珠云く、「心識は七識なり、懸崖手を撒するの時節なり、意消は第六識なり、」或抄に云く、「無心至極になつたらばなり、大死一番と同じ」

(フ)胡亂拈匙。これは開單展鉢なり、珠云く、「胡亂に禪宗の飯をくはん。」或抄に云く、「一回悟得するときんば、左右源に逢ふ。」匙はさじ、筋ははし。

(コ)念話杜家。念話は學語の謂なり、杜家は杜撰胡亂底なり、念は虛念、話は話頭なり。

(エ)洛浦。夾山善會に嗣ぐ、唐の光化元年十二月二日寂年六十五。名は元安、臨濟禪師の侍者たりし人「この問答は親切血滴々の問答なり」と珠長老はいへり。」

(テ)仲夏毒熱。珠云く「一氣含んで、以來言中にひびきありじや、」この仲夏は五月甚だあつし、孟冬は十月うすら寒いこと。

(ア)莫錯。これ麁忽を云ふまいぞと。

(サ)年老。珠云く「この語はすさまじい、」又或抄に「萬事御ゆるし下されじや、」又云く「或抄に陷虎の機あり。」と

(キ)放儞。或抄に「儞に放すといふも與ふの道理。」

(ユ)患聾。つんぼのまねをして何にしやうぞと、洛浦を罵るなり、ききわけぬを云ふ。

(メ)啞却我口。珠云く「おれが口をあかせにや、そこもとの耳をふさいでやる。」溪云く「彼此便を得ず。」

(ミ)彼此葛藤。彼は龐居士、此は洛浦、葛藤は言語を云ふ。

(シ)熱時寒。珠云く「悲い時嬉しいのもどこへゆき申すぞ。」

(ネ)儞我痒處。溪云く、「一手擡。」珠云く、「そりやあつぱれの氣の付きところ、」或抄に「僧を褒美するなり」と。

(ヒ)寒時熱。珠云く、「貧の時、定力はどこへ。」

(モ)乾鑼頭上。溪云く、「一手搦、乾鑼はざるいかき、めをこまかにあむかご。」珠云く、「さう逐ひまはつてもいけぬと。」

(セ)不涉寒暑。珠云く、「本地の風光、本來の面目。」

(ス)鬧市裏尋取。溪云く、「那一人の所在地を直示す。」珠云く、「三條四條の店を尋ねて見よ」と。

(イ)三界。欲界、色界、無色界、これ生死の窠窟なり。

(ロ)二十五有。略頌に云く、「四洲四惡趣、六欲、幷に梵天四禪、四空處、無想及び那含。」

(ハ)也未是極則。珠云く、「向上の宗乘ではござらぬ、螢火を以て日月に向ふやうなもの。」

(ニ)便喝。珠云く、「此の妄喝なりうぬが喝を百云ふても、也た未だこれ極則にあらずじや。」

(ホ)天童啓和尙。名は咸啓、洞山价に嗣ぐ。

(ヘ)僧問。會元の本傳に龍大德問と作す。

(ト)卓々上來。卓は特立なり、珠云く「佛法に依らず、今時那邊に依らず、乾坤只だ一人。」

(チ)的的。溪云く、「端的底のみにして、物を指出すること莫れ」と」珠云く、「正的、たしかなところ。」

(リ)一屙便了。珠云く、「佛病祖病ぐわらりとこぎだした。」溪云く、「尙ほ更に閑話の中の伴子を掃へ。」

(ヌ)與麼荅話。珠云く、「あゝそんな荅話では、宗門の大事はおぼつかない。」

(ル)老僧與麼。珠云く、「近前した

麼の過かある。」㋾僧無語、啓便ち打つ、師云く
者の僧喚べば、既に近前す、㋻何ぞ便ち本分の
艸料を與へざる、㋕只だ刄を下すこと嚴ならざ
るに因つて、㋵返つて暗に墻壁を窺はる。
解夏小參、「㋟各各鼻貫巳に脱す、㋹秋風影の裡
㋞尾を擺ひ頭を搖かす、㋡老安、㋧則ち善能く
跡を訪ふと雖も、㋤終竟に尋ね難し、㋶寂子「
㋰只だ樹下に軀を忘るゝことを知る、㋒何ぞ曾
て牧することを解せん。㋼露逈逈、㋨雲山目に
溢る、㋔飽齁々、野艸天に連る。㋗須ひず短笛
歸を催すことを、㋳千聖も也た覓むる處なし、
驀然として、㋮傅公子出で來つて道く、㋘汝等
頭角の士、九十日の內、㋫此の檮陰に託す、未
だ嘗て㋙半蹄の功の、我が常住の㋓一塊の泥𡋯
を踏破すること、何ぞ㋢此の如く快活なること

ところに於て、なぜ一蹈に蹈
倒せなんだ。」
㋶僧無語。珠云く「此の僧こま
つての無語でもない。」
㋻本分艸料。溪云く「艸料は資
粮なり、直に聰明意識、思量
計較の外に向つて棒を行じ喝
を下して學者をして今時の人
情に墮せざらしむ、之を以て
入道の資粮と爲して、水牯牛
の飽足するに至る、故に本分
の艸料と曰ふ。」珠云く「ちや
うとかひばのあてがひ處、手
おくれがした。」
㋕下刄不嚴。珠云く「足もとが
ゆるかつた故。」
㋵返暗墻壁。溪云く「這の僧無
語、其の實は咸啓の墻壁を窺
ふことを要す、」珠云く「此の
僧に足もとを窺はれた、さて
うかゞはれたならだいじか、
此れくらゐの坊主に見られて
も大事ない、」又云く「暗はど
こやらがじや。」
㋟各各鼻貫。溪云く「全く牛に
寄せて言を立つ、今解制、各
各隨徃無礙、猶ほ牛の鼻索巳
に脱して、所繫なきが如し」
珠云く「解夏のことゆへ、各
各はなつらをつはなしてし
まつて。」
㋹秋風影裡。解夏の節、すゞ風
はそよふく。
㋞擺尾搖頭。各自便を得るなり
自由自在に東西へ。
㋡老安。長慶大安禪師、又懶安
と號す、百丈海に嗣ぐ、水牯
牛の因緣を云ふ、會元本傳に
出づ。
㋧善能訪跡。蹄は跡なり、珠云
く「百丈に牛の行く方を問ふ
ことは根葉をからした。」
㋔終竟難尋。珠云く「全牛を尋
ねがたく、こまりはした。」
㋶寂子。仰山惠寂牛を看るの因
緣を云ふ「類聚」牛鹿に出づ。

を得たる。山僧㋐只だ他の與に一轉語を代るこ
とを得たり。」
㋚復た德山托鉢の公案を擧して、師云く「德山
師子遊行すれば百獸㋖股栗するが如し、嵓頭、
其の威を假つて、㋴陰風人に逼る。㋱後の來る
もの、㋯土を捧げ木を揭ぐ。」
上堂、僧問ふ、㋛大隋㋓龜を蓋ふ時如何。」師云
く、「㋪神照に此の作なし。」僧云く、「㋲初秋夏末
衲子往來す、㋝牢く者の一轉語を記取して、諸
方に擧似せん。」師云く、「㋜苦なる哉。」
乃ち擧す、㋑天台の幽棲和尚、一日鐘を鳴して
上堂、衆纔に集る、棲云く、「㋺誰か鐘を打つ。」
僧云く、「維那。」棲云く、「近前來。」僧近前す、棲
遂に一掌を與へて方丈に歸る。師云く、「㋬賤き
ことは泥沙の如く、㋥貴きことは金璧の如し。」

㋰樹下忘軀。珠云く「山河大地
全身となりえては、別に身
のあらうはづなし。」
㋒付曾解牧。珠云く「かう人に
かはるる牛があつては、全牛
でないから、しらぬはづ。」
㋼露逈逈。珠云く、面前まるは
だか、十方世界、森羅萬象、
或抄に「牛をぐわらりと山野
に放ち出す、活脱なるを云ふ」
㋨雲山溢目。珠云く「雲又雲、
山又山、首乎尾乎、見わから
ぬ。」
㋔飽齁々。水艸に飽いて、熟睡
するなり、齁は鼻息なり雲山
も野艸も放牛をいふ、珠云く
「忘想煩惱、みなわが草料と
なる。」
㋗不須短笛。珠云く「本分の家
山へかへつてのなんのと云ふ
まい、さあ大ひまあいたのな
んのとゆふまい。」
㋳千聖也覓。珠云く「どこにい
つたか牛に逢ふと、あとかげ
もなくなるなり、」溪云く「儞
等諸人、自ら水牯牛純熟す、
牧笛を吹いて歸を催すことな
かれ、たとひ老安寂子等の如
き、千聖も也た這の牛跡を覓
むる處なし。」
㋮傅公子。開山の傅大士を呼ん
で證據せしむ。
㋘頭角之士。溪云く「牛に託し
て出群超邁の衆を稱揚す、」珠
云く、「一等の中のめだつも
の。」
㋫託此檮陰。九十日の內よりし
てこの寶林に來てなり。
㋙半蹄之功。或抄に「九旬の禁
足安居を言ふ」と、剋刻取證を
云ふて半分足動かずと、功は
功勞なり、忠云く「未だ曾て
修行工夫の効あらざるを云ふ
と。」
㋓一塊泥𡋯、𡋯は塵なり、一と
かたまりの土と云ふこと。

(テ)如此快活。踐履快活、輕脫の故に一夏行いて未だ曾てに行かず、珠云く、「擺尾搖頭のこきみよい働乎。」

(ア)只與他。他は一衆を指す、然も只だ無言を以て代語と爲す「珠云くだれにも言ひもせずと大きに云つておいた。」

(サ)德山托鉢。この公案は無門關にも出づ、この末後の句あり、後果して三年にして遷化すといふ。

(キ)股栗。あしふるうなり、戰栗恐懼するを云ふ。

(ユ)陰風逼人。師子の殺氣、除風怒號す、珠云く「師子の威をかり乍ら兎角に豪勇を働いた。」

(メ)後之來者。これは雲門法眼の兩家を云ふ。珠云く「それからして後の列祖。」

(ミ)捧土揭木。又是れ師子の威風なり他家の兒孫、或抄に「普請の手つだひなどしてまはる、此の如くの話を使ひ得ずして、却つて此の話つかはる。」珠云く「いつかどやると思もはれても、やつぱり岩頭しりつぽに付いて、げびた日傭とりわざをするやうなもの。」

(シ)大隋。名は法眞、神照大師と賜ふ長慶大安に嗣ぐ、本傳に庵側に一龜あり、僧問ふ「一切衆生皮骨をつゝむ、這箇衆生甚としてか骨皮たつゝむ。」師、艸履を拈じて龜の指上をおほふ、僧無語、蓋は傳燈に著とあり。

(エ)蓋龜。或抄に「萬物それ〴〵の上で、鳥は黑く鷺は白く、長者は長法身、短者は短法身なれば、疑はしきことはなきに甚としてか骨皮を裹むなど云ふは、此の龜の上に又一重皮を蓋ふたやうなといふ示しぞ。」

(ヒ)神照。大隋禪師の賜號は神照大師蜀主之をたもふ、溪云く意は大隋と龜を蓋ふと一般、」珠云く「神照が艸履をおいたと云ふことはきかない。」

(モ)初秋夏末。行脚の僧の出替りどきなり。

(セ)牢者一轉語。珠云く「めづらしい荅話でござるから、この神照、無二此作一と云ふ一轉語をばじや。」

(ス)苦哉。溪云く「僧の領話せざることを嘆息す、」珠云く「あゝそれは迷惑なことでおじやる。」

(イ)天台幽棲。名は道幽、洞山价に嗣く、傳燈十一、師の傳に云く「師將に滅を示さんとす、僧あり、問ふて曰く、和尙百年の後、什麼の處に向てか去る、師曰く「調然調然と言ひ訖つて坐亡す。」

(ロ)誰打鐘。珠云く「無レ風波レ起。」

(ハ)賤如泥沙。珠云く「幽棲のはたらき、」又云く「不知音のものは、」或抄に「最初の老婆心切の處。」

(ニ)貴如金壁。溪云く「法爾分曉、」珠云く「知音の者は、」或抄に「與ニ一掌一歸ニ方丈一處。」

(ホ)當時。珠云く、「虛堂向ニ天台一背後不レ合レ掌。」

(ホ)當時若し(ヘ)安詳にして、座に登らば、者の僧を活得せん。」

(ト)中秋上堂、僧問ふ、「天上は(ト)月圓に、人間は(チ)月半なり。是れ人(リ)有ることを知る、未審し(ヌ)中間の樹子、甚麼人にか屬す。」師云く、「(ル)契劵あるもの得。」僧云く、「(ヲ)恁麼ならば則ち天香の桂子、落ちて紛紛。」師云く、「儞(ワ)早く錯つて認め了れり。」僧云く、「(カ)馬大師、月を翫ぶ次で一人は道く、(ヨ)正好供養と、一人は道く、(タ)正好修行と、一人は(レ)驟步して便ち行く、此の意如何。」師云く、「(ソ)一畝の地、(ツ)三蛇九鼠。」僧云く、「馬大師道く、(ネ)經は藏に入り、(ナ)禪は海に歸す。(ラ)唯だ普願のみありて、(ム)獨り物外に超ゆと。」師云く、「(ウ)驢を打つて馬の如ることを聽す、僧禮拜す、師(ヰ)噓一聲す。

(ヘ)安詳登座。安詳は安閑詳審にして、敢て卒暴ならず、珠云く「鐘が鳴つたら座に登りて說法しがよい、」鵠林大師も云はれた「虛堂のこの拈語は狼毒の味乎、醍醐の味乎」と、安詳はやすらかに、又はしづ〴〵と、溪云く「幽棲當時、貴賤辨ぜず、金沙分たず、卒暴にして作す、故に却つて者の僧を打殺す、若し安閑審詳にして作さば、者の僧を活得せん」と。

(ト)月圓。まるくしてかけめはない。

(チ)月半。ちやうど一月の三十日が半分なり。

(リ)知有。人人箇々。

(ヌ)中間樹子。溪云く「月中の桂樹に託して那一物を表す。」

(ル)契劵。溪云く「心印を傳ふるものなり、」珠云く「わりふ、證文じや、」又云く「本地風光本來面目と云ふ手形をもたれば。」

(ヲ)恁麼則天香。溪云く「恁麼ならば則ち中間の樹子、我れに屬せんと」なり、珠云く「さやうなれば、月の下をてらす如く、人々本具佛性でござるで、それは心易きことでござる、」又云く「たれ〳〵が手にも入るであらう、桂子はかつらのみなり、もくせい」なり。

(ワ)早錯認了。珠云く「そりやみたか、わるいがてん。」

(カ)馬大師翫月。この緣はこの錄の續輯井に徑山の後錄に出づ

(ヨ)正好供養。知藏西堂。

(タ)正好修行。百丈。珠云く「好き修行のしどころでござります。」

(レ)驟步便行。南泉。ちよこ〳〵ばしり。

(ソ)一畝之地。珠云く「馬大師の會下には百丈、知藏、南泉の

乃ち曰く、「(ノ)日と運を雙べて、(オ)物を鑑して私なし、(ク)自ら是れ暗中の人、(ヤ)冬裘を責めて夏葛に比す、(マ)此の良夜(ケ)衆星、推し遜るの時に當つて、(フ)憐むべし、(コ)華亭寥を見ざることを。(エ)冷じく海濤を照して空しく渺瀰たり。」

上堂、僧問ふ、(テ)資福の(ア)刹竿を望み見て便ち回るも、脚跟下(サ)好く三十を與ふるに、此の意如何。」師云く、「(キ)臭肉蠅を來す。」僧云く、「(ユ)雪峯を望み見て、便ち主事に參ずと、又作麼生。」師云く、「(メ)何樓の漆器拈出することを休めよ。」僧云へ、「寶林の(ミ)雙楊塔の尖を望み見て、便ち悟り去る。」師云く、「(シ)沙裏を金を淘る。」僧云く「和尚也た是れ(エ)年老いて心孤なり。」師云く、(ヒ)「人の過を宣ぶる、未だ好手と爲ず。」

乃ち擧す、(モ)欽山、巖頭雪峯と同じく、德山に

と云ふすさまじいものがある方語に狼藉不少。

(ツ)三蛇九鼠。珠云く、「その外、蛇や鼠のやうなものはいくらもある、えしられぬいきもの多く集りゐる、此の語に故事あり、爾雅の翼註に出づ。」

(ネ)經入藏。珠云く、「經相に達したものは知藏西堂。」

(ナ)禪歸海。我が宗の大事は百丈懷海の腹の中に收めてある。

(ラ)唯有普願。南泉普願。

(ム)獨超物外。珠云く、「如來禪に依らず。祖師禪に依らず。」

(ウ)打驢聽馬知。驢は南泉を馬は百丈知藏を指す。溪云く、「馬祖三大老を品評して、傍觀の者をはげまさんことを要す、三師同得同證、豈に優劣あらんや。」

(ヰ)噓一聲。からうそふく、珠云く、「あつはれなり、まだのこつたことがある」と。

(ノ)與日雙運。溪云く、「月なり、全く形容模寫して、佛事を作す。」珠云く、「日上り月下ろ、互に休息はない。」運は運行なり、自己の靈光に比す」と或抄にいへり。

(オ)鑑物無私。溪云く、「瓊樓茅舍天鑑私なし。」珠云く、「光明遍照、十方世界、萬物をてらしてえこひいきはない、天子將軍のすみかでも、山がつ賤のわらやでも」と。

(ク)自是暗中人。珠云く、「此の如き明中に居ながら、人々まつくらい生死のちまたにうろつく衆生じや、暗中の人とは本心具足の日月じやに」と。

(ヤ)責冬裘比夏葛。珠云く、「一超直入の妙道を呵責して、布施じやの持戒じやの、念佛懺悔じやのと云ふ、方便乘のくらべものにする、」又云く、「面目をみるはむづかしい、心安い

到つて、(セ)乃ち問ふ、「(ス)天皇も也た(イ)與麼に道ふ、(ロ)龍潭も也た與麼に道ふ。」未審し、德山作麼生か道ふ。」德山云く、「汝試に天皇龍潭底を擧せよ看ん。」欽(ハ)擬議す、(ニ)德山便ち打つ、遂に延壽に至る、云く、「(ホ)是は則ち是、我れを打つこと太煞だし。」巖頭云く、「儞與麼ならば、(ヘ)他後德山に見ゆと道ふことを得ざれ。」師云く(ト)「欽山只だ箇れ擬議す、德山巖頭倶に(チ)敗闕を納る。若しこれ(リ)龍門の上客ならば、(ヌ)必ず爲に點頭せん。(ル)其れ如し響を聽くの流ななば、(ヲ)區宇に墮在せん。」

(ワ)上堂、「(カ)九九の節、之を重陽と謂ふ、(ヨ)陽德既に剛、(タ)元化以て洽し。(レ)衲子分上、甚麼邊の事をか明め得ん。」柱杖を卓して、「(ソ)交。」

上堂、(ツ)一大藏敎、箇の(ネ)鵶鳴鵲噪を出でず。

念佛がよい」と。溪云く、「味者は天眞任運、各その時節あることを知らず、漫に中秋を將つて常夜に比するなり」或抄に「冬裘は修行に、夏葛は無爲無事に比す。」

(マ)當此良夜。中秋明月。

(ケ)衆星推遜。衆星は廿八星、月の光に推されて光を失す、溪云く、「其の明を月遜るなり、月明なれば、則ち星稀なる故に」と。

(フ)可憐。悲憐すべきなり、珠云く、「此れは虛堂家裏の大事、そそうに見るとけがをする。」

(コ)不見華亭寥。船子德誠禪師の事なり、前の中秋に見ゆる因緣なり、參照すべし「那一人を拈出す」と溪は云へり。

(エ)冷照海濤。冷は清寒、渺は水長、瀰は水の盛なる貌、溪云く、「良夜好月憐むべし、滿船載せかへる底の人を見ず、海濤の渺瀰たるを冷照するのみ意は深く學生擾々とし、明月に對するもの少しなることを嘆ずるなり」と。珠云く、冷照ははらはたまでもしみわたるほど照しぬいた、海濤空はうなばらのすご〳〵と廣き氣色をながめやる。」

(テ)資福。資福第二世、名は貞邃第一世資福の如寶に嗣ぐ、仰山四世。

(ア)望見刹竿。刹梵には刹摩釋して此に土田といふ、竿は梵には刺瑟胝、此には竿といふ、幡の柱なり、珠云く、「川向から資福寺じやさうなと見たくらゐ取りてかへるはほんたうに到り得たと云ふものでなし。」一見便見の伶利の衲僧でも、刹竿ははたをたてるはしらなり、傳灯には「隔レ江見二資福刹一」とあり。

(サ)好與三十。吾が門では三十棒

(ナ)九經諸史、(ラ)箇の之乎者也を出でず。(ム)會得せば、雲は華嶽に歸り、(ウ)水は瀟相に到る。然らずんば、(ヰ)伴あらば即ち來らん、(ノ)切に須らく記取すべし。」

達磨第四忌の拈香、一圓相を打して、(オ)香至國王の子、(ク)神光斷臂の師、(ヤ)耽憨たる面背、(マ)恐らくは亦これ伊、(ケ)兒孫必ずしも更に疑を懷かざれ、(フ)故に我が達磨(コ)鼻祖(エ)圓覺大師、(テ)濬く靈機を發して、(ア)有無の宗頓に釋く、(サ)廓然無聖第一の義昭然たり、(キ)前梁後魏、(ユ)人我相高ぶり、(メ)此土西天、(ミ)是非競ひ起る。(シ)茲の末運に丁つて、(エ)遐かに餘光を想ふ、(ヒ)藻を列ね蘋を陳ねて、(モ)用つて慈蔭に酬ゆ。」

上堂、擧す、(セ)南泉因に(ス)兩堂首座、(イ)猫兒を爭ふ、泉云く、(ロ)道ひ得ば即ち斬らじ。兩堂無語

なくれるによい、況や江を過ぎ來るをやじや。

(キ)臭肉來蠅。資福興慶に云ふ、その實は人を引かんことを要す。

(ユ)望見雪峰。珠云く「「方丈の門にまたげて、ちらりと望み見て、」「主事は太原孚なり、」前に見ゆ。

(メ)何樓漆器。むかし宋朝に何樓といふあり、その下に賣る所の物は虛僞多き故にいふ、今樓は廢して語なほ相傳ふと書言故事に出づ。溪云く「「虛僞の話を拈出すること休めよとなり」珠云く「「安物買ひの錢失ひ、外の町へもつてゆけ」と。

(ミ)雙楊塔尖。行道が塔尖は末をいふ。

(シ)沙裏淘金。沙中に向つて金を求むるときは、永劫それ得べけん乎と、僧の得悟を抑ふ、珠云く「「汝の悟りは沙中に金を求むるが如し、決定之なし」

(ヱ)年老心孤。孤危峭峻、氣が短かになつて。

(ヒ)宣人之過。珠云く「「人のあなを云ふ、あんまりできたことでない。」

(モ)欽山。名は文邃、洞山价に嗣ぐ、年二十七にして澧州欽山に止る。

(セ)乃問。珠云く「「よい所問、尤の評判。」

(ス)天皇。名道悟、石頭遷に嗣ぐこの名の天皇は天皇道悟と云ふ人、馬祖下にあり「「くわうとよむべし」と珠は云へり。

(イ)興慶道。言外の句を指す。

(ロ)龍譚。名は崇信、天皇悟に嗣ぐ。

(ハ)擬議。珠云く「「ぐうぐう」と云ふなり、この擬議で、宗旨が手に入る、此の擬議で德山もけふの今日も存分手が出て。

もおがみ奉つろことじや。」

(ニ)德山便打。珠云く「「腰骨を打ちのめした、遂に腰骨を傷損したで、」

(ホ)是則是。珠云く、欽山云く、延壽堂（病僧寮）へかきこんだ。」師家の學者を打つは、無理はない、あまりひどい。」

(ヘ)他後德山。珠曰く「「これから德山の室中へ入つたとは云はれぬ。」

(ト)欽山只箇。溪云く、「別の造作なし。」珠云く「「此の拈語奇妙きたいな。」

(チ)俱納敗闕。溪云く「「强を仰へて弱き扶く。」珠云く「「此の拈語を知らんと思はゞ虛堂の堂に上り室に入りて共に行け。」

(リ)龍門上客。溪云く「「心空及第の上流を云ふ、」龍門とは三級といづて支那の河南省龍門縣に屬し、むかし禹か黃河の大汎濫を治めたとき龍門山の險をうがつて三級にしだところを云ふので、禪宗では悟道上の難關にたとへて云ふ。

(ヌ)必爲點頭。此の旨を領會して必ず首肯すべし。

(ル)具如聽響。溪云く「「虛假不實を認めて心開を得ざる底なり」、珠云く、「佛法を推量する底。」

(ヲ)二在區宇。境界に墮して別の出身の方なきなり、前の結夏にも見ゆ區宇は珠云く「「迷悟の窠窟」と。

(ワ)上堂。重陽の節。

(カ)九九之節。九月九日、九は陽の數なり。

(ヨ)陽德既剛。忠の曰く「「二の九みな陽數故に陽剛といふ。」

(タ)元化以洽。元者萬物の始め、化は成なり洽は浹なり、重陽の故に、陽德剛健にして、息むことなし矣、之に依りて、萬機の元化、洽浹周偏す、珠云く「「乾の四德の一、」又云く「「一元氣の生成。」

(レ)衲子分上。珠云く「「坊主共此の中坐禪をする、どのやうな坐禪するや。」

(ソ)交。交參して見ゆと、是れ索話に似たり「「交なり、泰なり」と或抄に云ふ、又鐵櫪子。

(ツ)一大藏教。珠云く「「五時八敎三百六十餘會。この上堂は絕妙なり、天魔波旬もきもをひやす。」

(ネ)鴉鳴散噪。此は抑下して爾が云ふ阿彌陀經の水鳥樹林、念佛念法のやうに。

(ナ)九經諸史。天下の治亂を記する詩書禮樂三史及び二十一史なり。

(ラ)不出箇之乎者也。珠云く「「本文眞實のことではない、助字じや、舞曲のはやし、淨瑠璃の「ちんてんと」なり。無着忠曰く「「內を言へば大藏經、空しく名言音聲のみあり、外を言へば九經諸史、徒に閑文字のみあり、是の故に內外典籍元實用なきなり。」

(ム)雲歸華嶽。華嶽は西安府に在り、即ち西嶽なり、此の處を會得すればなり、ひぐれの比ながめやればひらりひらりと雲は西の隅へ收る、又云く「「こりや向上の聯句じや。」

(ウ)水到瀟湘。湘瀟は長沙府の湘江、永州に至りて瀟水と合して瀟湘と云ふ、日本で云ふならば、さらり〳〵と鴨河は淀河へ流れこむ、以上は珠長老の抄なり、溪云く「物各歸到する所あり、若し上の旨を會得せば、一切の語言に轉ぜられず、自ら歸著あらん」と。

(ヰ)有伴即來。溪云く「獨脫無依なること能はず、古人の閑名句を帶び來るなり。」忠曰く「苟し語文字に託して義解卜度する處に現し來るの理なり、これ無依獨脫、眞理に非ず、譬へば人の伴あるを待つて敢て來ることを得て、伴侶を借らざるが如し、所謂依艸附木の精靈なり、」珠云く「上古をしる人はあれども、此の句をしる人はまれなり。」

(ノ)切須記取。珠云く「此の八字は虛堂家裏の大事なり。」

(オ)香至國王。南天竺國の香至國王の第三子にして、名は菩提多羅といふ、姓は刹帝利。

(ク)神光斷臂。は前に見ゆ。

(ヤ)耽憨面觜。耽は耳の大に垂るるなり、憨は愚なり、面口の異相を表す、ぶかつかふなかほつきなり。

(マ)恐亦是伊。溪云く「其の人に非ずして誰ぞや、」珠云く「こりや、なにものぞ、思へばあれじやそうなり、此の通りじやが、此の一圓相の中を出すじや。」伊は一圓相をさす。

(ケ)兒孫必更。已上押韻、珠云く「それじやのにやれ坐禪じやの工夫じやのと、うたがひちらかして」と。

(フ)故我達磨。達磨は通大の義。

(コ)鼻祖。鼻は始なり、人の胚胎に鼻先づ形を受く、故に始祖を謂ふて鼻祖となす。

(エ)圓覺大師。唐の代宗之を諡す。

(テ)濬發靈機。濬は浚と同じ、深なり妙靈大機を發揚す。

(ア)有無之宗。有相宗無相宗の事ば初忌のところに見ゆ、氷のとくる如く、ぐわら〳〵ととけて見たら。

(サ)廓然無聖。梁の武帝達磨に問ふ、如何なるか是れ聖諦第一義、」磨云く「廓然無聖」と、これは聖諦は眞俗二諦の中の眞諦を意味すこれはたゞ禪の第一義は根本原理究竟の眞理は如何なるものであるかと磨云く、廓然として。がらりとした、無聖とて凡聖眞俗を超越したものである」となり。

(キ)前梁後魏。はじめは梁に、後に魏にゆく。

(ユ)人我相高。宗風高くなつた故。

(メ)此土西天。支那では光統流支、西天では六宗。

(ミ)是非競起。我相は相を斥けて心を指す、他宗は之に反して其の是非優劣天地懸に隔つ。

(シ)丁茲末運。丁は當なり、今季世、衰替の時に當つてなり。

(ヱ)遐想餘光。追遠懷舊、珠云く、大師の時のことを慕ひます。

(ヒ)列藻陳蘩。麁末ながら、大根やら又芹や水菜を手向けて「みつぐさしろよもぎじや。」

(モ)用酬慈蔭。慈悲覆蔭に御恩に酬ゆ

(セ)南泉。名は普願、馬祖に嗣ぐ、唐の玄宗天寶七年に生る、日本の聖武天皇天平二十年に丁る、唐敬宗大和八年、日本の仁明天皇承和元年十二月二十五日寂す、壽八十七池州の南泉寺に住す。

(ス)兩堂首座。東西兩堂のかしらたる首座たち。

(イ)爭猫兒。東堂の猫の牡と、西堂の牝の猫のあひだに出來た兒であるこちらの猫じや、そちらのじやと所有あらそひ。

(ロ)道得即不斬。道得よ即ちで即は則のあて字である。道不㆑得斬㆑之と珠云く「佛法の玄妙を脫却して」雪竇も『賴得㆔南泉能擧令㆓一刀兩段㆒任㆓偏頗㆒』といへり。

(ハ)脫艸鞋安。趙州が外よりかへるに因つて、南泉が斬猫の話をせられた、さうすると、州は一疋の猫の所有權を大衆等が爭ふなどは愚なことなりと、かれら大衆の迷想を表象した。

(ニ)子若在。珠云く「やいばにはかけまいものを」と。

(ホ)借手拈香。趙州は南泉の手を借りて兩堂首座のためにすと。屈は恥なり、雪は洗なり、はぢをすゝぐことをすると。

(ヘ)殊不知。珠云く「趙州もとんと氣がつかぬ。」

(ト)狸奴已死。狸奴は猫なり、珠云く「猫はとつくに、南泉の手にかゝつて死んで仕舞ふたあとの祭。」

(チ)直至如今。珠云く「斬却してより思量卜度の者多きなり、」又云く、此の語尤も毒なり、意句共に具せり。」

(リ)鼠子多。溪云く「千古學道の者、偸心歇まず。」この南泉斬猫の話は碧岩六十三と六十四の兩則に出てゐる、無門關にも出てゐる、參照すべし、

ある日、南泉和尚の寺で、東西兩堂の雲水僧たちが、一疋の猫の兒に就いてその所有權を爭つてゐた南泉は最初はこの喧嘩を面白半分に見てゐたが、いよ〳〵はげしくなるので、早速にその場に行き、猫をひつとらまへて、おまへ等はゐるが、常に御悟りひらいたやうな顏してゐるのには不つり合じや、これに就いて何か一つ悟り文句を下してみよ、さもなくばこの猫兒を斬り殺してしまふぞ、」と叱り付けたが、大衆は對ふるものがないそこで南泉は遂に之を斬つてしまつた、これは當頭の第一機を示すなり、一刀兩斷は世界的にやるべきじやと云はぬばかり、するとその日の夕方、趙州が外より歸るを見て、南泉はおゝおゝおまへかかへるのを待つてゐた、けふかうか

泉、遂に之を斬る。趙州外より歸る、泉前話を擧す、(ハ)州草鞋を脫いで、頭上に安じて出づ。泉云く、(ニ)子若し在らましかば、猫兒を救ひ得ん。」師云く、「趙州(ホ)手を借つて香を拈じて、(ト)兩堂の與に屈を雪めんと要す。(ヘ)殊に知らず、狸奴已に南泉の手に死してより、(チ)直に如今に至るまで(リ)鼠子多きことを。」

冬至小參、(ヌ)陰魔沮伏して、(ル)暖氣未だ昇らず(ヲ)好箇衲僧の消息、若し能く直下に承當せば、(ワ)四時の消長を逐はず、便ち見ん、(カ)深山巖崖人跡不到の處、(ヨ)爛葛藤、枝を抽んで蔓を引くことを。其れ若し未だ然らずんば、且つ(タ)舊曆日の上に向つて、(レ)指頭子を點じて數過せよ。只だ陰魔沮伏し、暖氣未だ昇らざるが如きんば是れ衲僧(ソ)甚の麼消息ぞ。」拄杖を卓して、「(ツ)魚

うであつたと趙州の意見なきいた、趙州は早速にはいてゐたわらぢをぬぎ、それを頭の上にのせて出て行つた、南泉は「おまへがあのとき居たならば、わしはあの猫の兒を殺すのではなかつたのに」と、大悟徹底した趙州ならば、便休せよ、長安城裏任に閑遊」すと、無門の云はれし南泉乞命なり

(ヌ)陰魔沮伏。溪云く「易の泰の卦に陽を君子と爲す、陰を小人と爲すと魔は名義集に惡者と言ふ、故に陰氣を謂つて陰魔と爲す、沮は壞なり底理は五陰の魔の消伏するに況へんことを要す。」珠云く「おんまと云へば五陰のこと、こゝでいんまと云ふがよからう、陰魔の根がきれたなり、沮は止なり、過なり、伏は隱伏なり潛なり。」

(ル)暖氣未昇。溪云く「一陽來復すと雖も暖氣未だ昇進せず、底裡は皺慧現ぜんと欲して未だ現ぜず、これ當に精彩を著くべきの時なり」珠云く「此の通りの時節あると、くわらりと一陽來復す。」

(ヲ)好箇衲僧。溪云く「降魔と成道と交徹、好箇の消息といふべし、」珠云く「佛法人を得る底の時節じや。」

(ワ)不逐四時消長。溪云く「泰の卦に君子道長し、小人道消すと、否の卦に小人道長じ、君子道消す、義は前の冬至の小參に見ゆ、」珠云く「四時にあづからぬ、春は花、夏は冷しき風もなし、秋は月なく冬は雪なしと、とんと逐ひまはるものはない。」

(カ)深山巖崖。これは玄沙の語、前の顯孝錄に見ゆ。

(ヨ)爛葛藤。溪云く「一分處盡く陽氣來復して、爛枯の艸木一

行けば水濁り、鳥飛べば毛落つ。」

復た擧す、潙山(ネ)向火する次で、仰山に問ふ、(ナ)「終日、向火す、(ラ)甚に因つてか暖氣なき。」仰向火の勢を作す。潙云く、「(ム)子只だ物體を得たり、(ウ)能所は未在。」仰云く、「某甲只だ此の如し、和尚作麼生。」潙も亦向火の勢を爲す、仰云く、「和尚只だ(ヰ)物體を得たり、能所は未在。」潙云く、「(ノ)如是如是。」師云く、「(オ)盡く謂ふ、潙仰父子、兩口一舌と、殊に知らず、(ク)風虎威を竊んで能く艸を偃し、(ヤ)水龍臥を欺いて前山を出づることを。」

除夜小參、(マ)新底は舊底の已に往くことを知らず、舊底は新底の已に來ることを知らず、(ケ)新舊相知らず、(フ)物物還つて對偶す。衲僧家、(コ)以て極則と爲す、殊に知らず、半夜三更、蒲團

一枝蔓を生ずるなり、底裡は一切種智を發明するに況へんことを要す。」珠云く「かれたるつだからつらまで再びしげつてくろ、葛藤も全く一枝の佛法、鐵樹抽枝枯木花笑じや」らんかんとうは冬葉のおちたくづ。

(タ)舊曆日上。陳年の曆は無用處の物なり、從前看過するとごろの公案に況ふ。珠云く「佛祖の動行、此の則彼の則のと」

(レ)點指頭子。溪云く「指を點じ曆を數へて、當に時節の遷流を知るべし、底裡は依前工夫提撕するに況ふ、」珠云く「子丑寅卯と指頭を點じてかぞへてみよ。」

(ソ)甚麼消息。再び擧起して激發せんことを要す。

(ツ)魚行水濁。時節至れば則ち自然に蹤跡現成す。

(ネ)向火。「きやんこ」とよます、火に向ふ、あたることなり。

(ナ)終日向火。珠云く「日をぼそめてぬつぼりと。」

(ラ)因甚暖氣。珠云く「こりやどうじや、雪覆三千山、孤峰因レ甚不レ白、これはどうじや。」

(ム)子只物體。珠云く、「子(なんぢ)は法窟の爪牙、平等の物體を得て」と。或抄に「仰山向火の勢を作すところの本分のはたらきじや程に、只だ體のみを得て未だ用を得ずじや、」又云く「柳は綠じや」と。

(ウ)能所未在。溪云く「只だ體を得るのみ、能緣所緣、具足することと未在なり」と。珠云く、「差別の能所は未在じや」と、或抄に「能所は用を謂ふ、喩へば月の自然明かなるは體なり放光照物は用なり、照に能照所照あり、總べて是れ用なり」と。

(ヰ)只得物體。珠云く「陰陽不到

上に(エ)脊梁を竪起して、(テ)誰か儞が漏箭の推遷(ア)更點の遲速を管せんといふも、(サ)猶ほ人に喚んで、無轉智の大王と作さるることを。何に況んや、(キ)矮子の戲を看るが如く、人に隨つて上下するをや。然りと雖も、(ユ)只だ知る(ヌ)暖日の芳艸を生ずることを。(ミ)那ぞ料らん(シ)春風の暗に人に著くことを。」

復た擧す、僧、雲門に問ふ「如何なるか是れ(ヱ)雲門の一曲。」門云く、「臘月二十五。」師云く、「雲門(ヒ)汗血の功高し、(モ)惜い乎、五日を放過し了ることを。當時、若し箇の(セ)恰好に、(ス)臘月三十夜と道ひ得ば、者の僧(イ)必ず觀つんべきことあらん。(ロ)今則ち既に往きしをば咎めず、只だ(ハ)順時保愛することを得たり、(ニ)雲黄の一曲を問ふものあらば、只だ他に向つて道はん。(ホ)半

の處、一片の好風光」と。又云く、「師資巴鼻を露はさず。」

(ノ)如是如是。珠云く、「さうだ／＼と印可證明めされた。」

(オ)盡謂潙仰。溪云く、「異說なきが故に」と。珠云く、「盡謂は四海五湖の衲子どもが。」

(ク)風竊虎威。或抄に、「風は仰山に比し、虎は潙山に比す、これは仰山潙山の語を取りて、和尙只だ物體を得る等を謂ふところ。」又或抄に、「この二句は仰山潙山の威を竊んで、能く機用を振ふ、潙山仰山を欺いて機を藏し、全身を現ず」と、珠云く、「いかなる衲僧も油をしぼる」と。又云く、「これ又何ぞ、虛堂これが云ひたいばかり、」忠曰く、「偃草は把住なり、」其抄に、「能く機用を振ふなり　、仰山向火は風なりと。」

(ヤ)水欺龍臥。溪云く、「この二句は眞妄一致の境界なり、意に云ぐ、「世間只だ言句の同を知りて、見處の一致を知らず」と、忠曰く、「龍臥は仰山の某甲只だ如此のところなり、水出ニ前山一は潙山向火の處。」此れは是れ放行なり、師資各大に體用を發揮し了るなり、溪の解註は非なりと。珠云く、「此れ山の景色を云ふた語じや、虛堂がこゝへ以て來てはさとりにくい。」

(マ)新底不知。新歲舊年、珠云く「新舊しほざかひ、またなじやる、午の年は立ちゆく、巳年をしらぬ、」又云く、「實際地理においては去る年の來る年の相貌はない。」

(ケ)新舊不相知。珠云く、「大地黒漫漫。」

(フ)物物還對偶。珠云く、「差別の中の無差別處で、やつぱりひるがあれば夜があり、山があれば川があり、知つても知らないでもしようことがない、」或抄に、「無心の物と無心の物と、新舊相對偶なり。」

(コ)以爲極則。溪云く、「新舊相共に無心自然に相對偶す、這の無心自然の法を以て極則と爲すなり。」

(エ)竪起脊梁。坐禪するすがたを云ふ枯木や塞岩の如くに。

(テ)誰儞漏箭。珠云く、「誰か管せんとは、とんとかまひない、心にあづかることないと云ふとも、漏箭は五つ四つと時刻がおしうつる、ろうとうじや。」漏箭はとけいなり。

(ア)更點遲速。誰れか此の如くの事を管せんと道ふて、一向に作し將ち去るなり、時の太鼓がおそからうと早やからうと。

(サ)猶被人喚。溪云く、「轉に轉捨轉得の義あり、所謂八識を轉捨して四智を轉得する等なり、廣くは性相の說の如し、今轉智とは一向に習禪して、轉智の慧なし、是れ則ち默を守るの癡禪なり、大王とは其の黨の首魁なり」珠云く、「人には明眼の人。」

(キ)矮子看戲。溪云く、「傍家に就いて解を求む、是れ則ち文を尋ぬるの狂惠なり、上に併せて又此の一類の徒を戒む」珠云く、「せいのひくいものゝ狂言を見るとき、せいの高い者に逢つて、あちらへむき、こちらへむき、人に隨つてゐて、」又云く、「未悟とも云はれず、悟は不徹中間に居てまたあはする、隨人は人にとりつきてじや、上下するなり。」

(ユ)只知。虛堂底は、珠云く、「此れからは虛堂が奥の手。」

(ヌ)暖日生芳艸。珠云く、「春の日ののどかになると、青いくさがはえる、現成底なり。」

(ミ)那料。なんたることにもしれぬ。

(シ)春風暗著人。溪云く、「この二句は天眞任運の境界で、甚の新舊禪惠等の工夫かあらん。」珠云く、「春風がどこともなう身にしみつくことはとなり、」暗は思ず、著の暖ならんと云ふはなし。

(ヱ)雲門一曲。溪云く、「史綱の黄帝紀に大容に命じて咸池の樂を作ると註に帝大容に命じて承雲の樂を作る、是れを雲門大卷と爲す云云。」熊氏曰く、「雲門大卷は倶に樂の名黄帝の作る所、言ふ意は其の德雲氣の出入に象る、周人冬至に之を舞ふ、以て天神を祀るなり、」今之を借りて以て雲門の宗唱を探る。

(ヒ)汗血功高。溪云く、「俊狀奔逸其の功高邁なり。」珠云く、「汗血は名馬なり、おらが先祖じやが、いらぬ錢があらは、面へぶちつけてやりたい」。

(モ)惜乎放過。珠云く、「殘念千萬なこと、まう五日ゆるめられた。」

(セ)恰好。珠云く、「ちやうど算用して云はれたなら」と。

(ス)臘月三十夜。「珠云く、「ちがびなうよい見物ごとかあらうに。」或抄

ば行雲を遏むと。」

元霄上堂、(ヘ)世間の燈は、心燈の最明に若くは莫く、心燈一たび擧するときは則ち(ト)毫芒刹海光明晝の如く、其の間、善く(チ)剔撥せざるものは、(リ)有りと雖も無きがごとし、心燈を見んと要す麼。」拄杖を卓して、(ヌ)仰山𤲞を開き、(ル)歸宗石を拽く。」

寶林寺語錄　終

に「且く道へ、二十五夜と三十夜とこれ同かこれ別か。」

(イ)必有可觀。珠云く、「大死一番。」

(ロ)今則既往。珠云く、「今日ではまう昔しのこと、咎めなどするは詮ないこと。」

(ハ)順時保愛。珠云く、「暑いときは暑いやう、寒むいときは寒いやう、病氣でも起らぬやうに大切に身を守る、」或抄に、「虛堂は古人の上はともあれかまはぬ、只だ寒氣の時分なれば、我が自分のとりまはしをするぞと」なり、この語は正灯錄に五祖演の語なりとあり

(ニ)雲黃一曲。この雲黃山になる虛堂の宗風一著子。

(ホ)半遏行雲。これは聲振二林木一響遏二行雲一など云ふ古語よりとりしものなり、列子の湯問にあるなり。溪云く、「汝が唱和すべきなきの意なり」と、珠云く、「半はとどめん。」或抄に亡く「亦全體ではない、雲門の玄妙の機を發つて平常に云ふ。」

(ヘ)世間之燈。溪云ふ、「これは達磨大師の寶珠の辨に所謂此れは是れ世明諸明の中、心明を上と爲すの意なり、」珠云く、「日本でいふならば如何なる高野山の百萬燈でも、墻壁をへだててはまつくらい、心燈最明とは、釋迦達磨でも不足のない。」

(ト)毫芒刹海。溪云く、「微塵數の刹界海なりかすかのものまでも(毫芒)處々どこまでのきはまりない(刹海)。」

(チ)剔撥。かきたてるなり、心燈を剔決挑撥するなり。

(リ)雖有如無。心燈をいふ。

(ヌ)仰山開𤲞。前の僻夏の小參に見ゆ。

(ル)歸宗拽石。これは溪云く、格外の心燈情見を容るへからずじや、珠云く、「仰山が𤲞を開くにも、皈宗が石を拽くにも用はない、虛堂和尙が少しこゝに用がある、」宗門統要に云く、「廬山歸宗智常禪師、因に普請す、乃ち維那に問ふ、什麼をか作す、那云く、石を拽く、師云く、「中間の樹子を動かすことを得ざれ」と、これは五燈會元の南泉傳にのするといふ。

國譯虛堂和尙語錄卷之三

(イ)慶元府(ロ)阿育王山廣利禪寺語錄

侍者(ハ)德惟、似溼、(ホ)如阜、編

(ト)朝散郞(チ)集英殿修撰(リ)知慶元軍府事

(ヌ)兼管內勸農使(ル)兼沿海制置使陳昉撰

(ヘ)慶元府の請疏

(ヲ)右伏して以れば、(ワ)尊者光明を放つて、(カ)八祥六勝の地を指す。(ヨ)育王、舍利を捧げて(タ)十洲三島の區に現ず。(レ)箇はこれ釋迦の古道(ソ)場、(ツ)直に須らく覺士の正丈室なるべし。四衆より選んで、

(イ)慶元府。明州、今浙江省の中寧波府。

(ロ)阿育王山。鄮峰育王廣利禪寺晉の太康中に并州の人、劉薩訶といふもの、阿育王の塔を此に得たり、因つて名づく。又晉の義熙の初に建つ、一には廣利寺と名づく、梁の武帝今の名を賜ふ、阿育王の造るところの眞身の舍利塔あり、「妙勝之殿」と南宋第二主孝宗勅額を賜ふ、又宸奎閣あり、宋の仁宗御書を賜ふて、蘇東坡記を作る、開山は宣密素禪師で、虛堂和尙は四十一世である。支那五山の一。

(ハ)德惟似涇。この二人は偈頌の部に見ゆ。

(ホ)如阜。未だ傳審かならず。

(ヘ)慶元府諸跡。珠云く「跡文は一字位を低くして書すべきなり、これは育王の其所の大守有司節齋尙書陳公の請待の跡なり。

(ト)朝散郎。溪云く、「朝散大夫の屬官」と。

(チ)集英殿修撰。集賢は集英と同じき乎、修撰は詔書の稿を修撰するの官なり。

(リ)知。主宰なり。

(ヌ)兼管內勸農使。前の興聖錄に見ゆ

(ル)兼沿海制置使。學を興し士を好み名義を以て重しと爲す。軍民之を愛戴すと、巡見奉行なり。

(ヲ)右伏以。これより以下、九重に至るまでは育王の境致を讃して、住持を請するを說く、この三字を置くは、跡の前の序言なれば柄語と名づく、前の興聖錄入寺の初に見ゆ、日本の五山では「いうふうい」と音でよむこともありといふ。

(ワ)尊者放光明。佛の滅後百年、中天竺の阿育王釋迦の舍利を取つて八萬四千の寶塔を作る、時に耶舍尊者、五指の間に於て八萬四千道の光明を放つ、諸天夜叉衆、各光明の中に隨つて四天下に往いて八吉祥六殊勝の地に遇ふ、乃ち一塔を安ず、云云、贊寧の舍利寶塔傳に出づ。

(カ)八祥六勝。八祥は八大靈塔處名號經に、第一迦毘羅城彌園是佛の生處、第二、摩迦陀國尼連河邊、菩提樹下は佛證果を證する所、第三加尸國波羅奈城は大法輪を轉ずる處、第四、含衞國祇陀園は大神通を現ずる處、第五、曲女城は忉利天從り下降の處、第六、王舍城聲聞分別佛爲に化度する處、第七、廣嚴城靈塔常量を思念する處、第八、狗尸羅城汝羅林の內大双樹の間入涅拌の處、如是八大靈塔云云」七勝は義楚六帖二十一に曰く、「寶林傳に曰く、耶舍尊者育王の爲に五指輪に於て八萬四千の光を放つ光の盡くる處に隨つて塔を其の地に下す、是れ諸佛入滅と菩薩化度と羅漢神通と導師三昧と修習禪定と賢聖證果と、この六妙の地に塔を安すべし。」按ずるに六勝の地は皆佛菩薩の聖迹なり、然らば八吉祥亦八大靈塔處乎。

(ヨ)育王棒舍利。阿育王此には無憂王と云ふ、舍利此には骨身といふ。

(タ)十洲三島。此の利禪寺もその一靈區なり、前の寶林にも見ゆ、或抄に「三島十洲は實に育王の十洲三島あるにはあらず、只だ其の地の靈を言ふ、且つ八祥六勝に對するのみ」と。

(レ)釋迦古道場。眞身の舍利在すが故に珠云く「此の廣利寺は直に取りもなほさず釋迦の衆生を化度なされし祇園精舍なり」と。

(ソ)覺士正丈室。今日直に覺士は大菩薩なり、佛は所居の正寢殿。

(ネ)九重より斷りたまふ。(ナ)虛堂愚公長老禪師は(ラ)慧海の慈航、宗門の心印なり。(ム)堂虛うして明月を貯ふ、(ウ)片點の塵埃を絕無す。(ヰ)林邃うして淸風を摵す、諸般の障礙を掃ひ盡す。(ノ)遍く浙江の名刹を主り、(オ)暫く靈隱の閑雲に眠る(ク)好し玉几峯に向つて、(ヤ)橫に一枝を出すに、(マ)便ち金獅子座に據つて、(ケ)旁に四句を行ぜよ(フ)東歸の衣錦、(コ)再び鷲嶺の燈を傳ふ、(エ)北面の瓣香、(テ)仰いで(ア)聖人の壽を祝せよ。謹んで跣す。

(サ)寶祐四年四月初七日、(キ)靈隱の鷲峯菴に在つて請を受けて、十九日に入寺す。

(ユ)山門を指して、(メ)道不及の處、方便儘多く。(ミ)只だ是れ見易くして入り難く、(シ)諸人氣宇王の如く、(エ)門頭戶底を認むること莫し。

(ツ)選從四衆。禪衲毅然として陳べ乞ふ故にと、又四來の大衆よりと。

(ネ)斷自九重。珠云く「しかるべしと判斷あつて、刺史陳昉に勅命あり、已上は蒙肇先づ靈地を跣す、九重とは天子の居は禁衞九重と名藍の故に尊重すること是の如し。」

(ナ)虛堂愚公。これより以下「閑雲に至るまでは虛堂を讃す。

(ラ)慧海慈航。溪云く「慧海と宗門とは惣べて法中を指し、慈航と心印とは、單に當人を稱す。」珠云く「惠がなくては普く應機はできぬ。」海でなくては廣く衆生を容ることはならぬ、慈航は無緣の慈を以て般若の舟をこぎ出づること、宗門は楞伽經に曰く「佛語心を宗と爲す、無門を法門と爲す」と。

(マ)堂虛貯明月。溪云く「暗に虛堂の號を打す、兼ねて育王の境を跣す、虛堂の眞讃の末に云く「育王の明月堂に書す」と、その肖像は京都の大本山妙心寺に現在すと、この解は珠や忠は非なり、何となれば未だ虛堂は育王に住せざればなり」と。珠云く「佛もないが莊嚴もない、」或抄に「中に就いていふ。」

(ウ)片點塵埃。溪云く「胸宇物なければ心月玲瓏淸冷たること此の如し」と、或抄に「此の一聯は人境相應の處を言ふ」と。

(ヰ)林邃淸風。溪云く「古寺の喬木等に寄せて道行の魔累なきことを述ぶ、己上は師の德を嘆するなり。」珠云く「林は栴檀林なり、淸風は無碍辦を振ふをいふ、底意は無量の法は、林樹の森森の如しとなり。」或抄に、「外に就いていふ。」

(ノ)主浙江名刹。嘉興府の興聖、報恩、慶元府の顯孝、瑞嵓、延福、婺州府の寶林、共に浙江なればなり。

(オ)眠靈隱閑雲。鷲峰に閑眠する故に已上は師の化迹を疏す、珠云く、暫時世間を離る、十年の間なり、今請を受くるところは靈隱なり。」

(ク)向玉几峰。當山なり、或抄に「一說に育王の前に小峰あり、玉几峰と名づく、」これより下は虛堂を請するの語なり。

(ヤ)橫出一枝。一枝の佛法なり。

(マ)據金獅座。便は「すぐさま」無畏の座に。

(ケ)旁行四句。旁は溥なり、あまねくなり、」溪云く「正提旁按の手段あり、蓋し言句に涉る者は正行に非ず、故に云ふ旁に行なり、四句は汾陽の四句などの類。」珠云く「廣く言ふときは則ち四字句と爲し、四句を偈と爲すと云ふから、豈に汾陽の句にかゝはらんや。」

(フ)東歸衣錦。溪云く「寧波府は會稽郡、又吳州に隷す、是れ東吳の地にして、虛堂生緣の鄕なり、故に此の事を用ふ。」珠云く「慶元府は虛堂生緣の鄕なり。」

(コ)傳鷲嶺燈。溪云く、「再とは此の地師の生緣の故なり、師時に鷲峰菴に在つて、即ち松源祖師の塔なり今再び佛祖の正燈を傳へ來るなり、」忠曰く「世尊昔靈鷲に在つて法燈を諸人に傳ふ、虛堂今當に育王に住して法燈を諸人に傳ふべきなり、再の字、松源に約し說くは非なり、鷲峰菴は育王の境に非ず」と。

(エ)北面瓣香。北面は詔に應ずる臣僧なるが故なり、珠云く「天子は南面、之に朝するものは北面なり、」瓣香はこの錄に前の寶林の達磨初忌に見ゆ。

(テ)仰祝。祝延なり。

(ア)聖人之壽。今上皇帝の聖壽無疆を祝す、已上は敎請の旨を疏す。

(サ)寶祐四年。南宋四代理宗帝の年號丙辰なり行狀に戊午といふは誤、師年七十二、日本の後深草天皇康元元年則ち建長八年の四月なり。

(キ)靈隱鷲峰。珠云く「十年隱遁せらる、鷲峰庵は靈隱にある松源の塔下なり。」

(ユ)道不及處。溪云く「道は言なり、妙處は、言はんと欲して言ひ及さず」珠云く、「不得の處の衲僧左右」或抄に「眞路みちたえた處。」

(メ)方便儘多。溪云く「得入の方便多きなり」忠曰く「行棒下喝、拈鎚堅拂等、悉く是れ方便。」珠云く、「方便とは龍の水を得るが如く、脫洒自在、儘は皆なり極なり」或抄に「一言一句一機一境」又漚和倶舍羅此に方便と云ふ「方便を以て父と爲す」と維摩經にあり、肇云く「方便は即ち智の別用而已。」

(ミ)易見難入。溪云く「趙州の云ふが如し、諸方は見難くして識り易し我が這裏は見易くして識り難しと今山門の故に識を入と改む。」珠云

佛殿を指して、(ヒ)老子傍若無人、(モ)到る處尊と稱し、(セ)今日自ら理虧くることを知らば、(ス)我れに一坐具の地を還せ。」(イ)具を展べて云く「(ロ)大衆退後。」

(ハ)方丈に據つて、橫に拄杖を按じて云く、(ニ)生れながらにして知れるもの有ること莫し麼。(ホ)入り來れ我が者裏、(ヘ)帽を買ふに頭を相す、(ト)盲枷瞎棒するに比せず。」主丈を靠く。

師、(チ)法座の前に至つて、香を焚いて

(リ)闕を(ヌ)望んで、

(ル)恩を謝し畢つて、

(ヲ)勅黄を(ワ)捧げて、衆に示して云く、「(カ)萬象を約束し、(ヨ)人天を聳動す、(タ)風雲の會合、(レ)日邊自り來る、(ソ)縱饒ひ海口も亦宣べ難し。」

(ツ)制府の跡を拈じて、(ネ)聖人の妙を宣發するこ

く「大事は只だ是れじや。」

(シ)諸人氣宇。溪云く「人の差排を受けざるの義なり、この錄の報恩錄に見ゆ。」珠云く「諸人は滿堂の大衆。」

(ヱ)門頭戶底。溪云く「山門に當つて云ふ、言ふ意は直に須らく入得すべし、外邊を認むることなきなり、」珠云く、」少々入處得力今人皆是の如し、直に八識田中に向つて一刀を下すべし「認㆓門頭戶底㆒莫㆑作㆓佛殿方丈㆒。」或抄に「直下に道ひ及ぼさざるの處に入る戶底は或抄に「元來無門を法門と爲す故なり、內家裏のことを知らればなり。」

(ヒ)老子。珠云く「釋尊をさす、此の老子、人もなげにどこへ行つてもおれは本尊じやと云ふて」と。

(モ)到處稱尊。自ら天上天下唯我獨尊と稱す故に。

(セ)今日理虧。自ら非を知るの謂なり。珠云く「大ちやくなことば、わるいと思ふたならば」と。

(ス)一坐具地。天上天下を占むる故、珠云く「老子虛堂が。かして於いた地をかへせ。」坐具は前に解す見よ。

(イ)展具云。坐具を展べては。ひろげてなり、御拜をするときなり。

(ロ)大衆退後。速に大衆に歸して宜しく退後して罪を謝すべし珠云く「虛堂、おれもこなたの處へかしておいた、退後とば何の事じやと云ふものあれかしと思ふてなり」或抄に、「虛堂の意氣、人を衝く底」と。

(ハ)據方丈。據室。

(ニ)生而知之。中庸に或は生れながらにして之を知り「或は學んで之を知り、或は困んで之を知る云云。」論語の述而に子

の日はく「我れ生れながらにして之を知れる者には非ず、古を好んで敏にして以て之を求めたるもの也」とあり。珠云く、「悟を添へず迷を添へず、生死を捨てず涅槃を取らず。」

㋭入來。さあ、あらばじや、入來れと。

㋬買帽相頭。溪云く、機に應じて物を接すじや。」珠云く、「夫れ〱三根機に應じて」と、又事に恰好の義又或抄に二說あり、一にはかつかふ相應義、二には帽を買ひて後に頭を相す、その時は鈍のことに用ふ、其の人相應に說き聞かせんとなり。

㋣盲枷瞎棒。溪云く、「諸方の惡知識の來者を辨ぜず、虛りに令を行ずるに比せず。」珠云く、「不比は學者の善惡をも見わけず。」或抄に「盲枷瞎棒はめくらうちにうちはせぬなり。」

㋠法座。須彌壇上に設けある法座。

㋷望。仰ぎのぞんで。

㋦闕。北闕なり、官門を云ふ。

㋸謝恩。勅命の恩を御禮申し上げて

㋾捧。兩手に捧げ承けて。

㋻勅黃。勅書なり、黃は紙色を云ふ黃色の紙を勅書には用ふる故なり

㋕約束萬象。珠云く、「約の音は「ようう」、束は「しゆ」言語要結戒めて檢束せしむ、皆約束といふ、「かれくゝる」、それは人王の位に立ち、其の德化を蒙らぬものはないと云ふこと。」或抄に「此の勅黃は(綸旨)の中に萬象をとりあつむる義、此れは德をいふ、萬象は世界國王をさす。」

㋵聳動人天。聳は驚なり、萬象を約束して放逸ならしめず、人天を驚動して自便せしあず、詔命の嚴肅なることは實に此の如し、珠云く衲子は臂に奪命の符を掛く、聳動は法王の位をいふ、此れは威をいふなり。」

㋟風雲會合。溪云く、「君主臣僧道合するを謂ふ。」珠云く、「佛法と王法との會合じや、」或抄に「勅黃の文章を云ふ、風雲際會時節相應、叡慮にかなふて勅黃を下さるゝを云ふ」

㋹來自日邊。溪云く、「天上の紫綸降り來るなり」、珠云く、「此の勅黃かたじけなくも、九重城裏より來る」

㋞縱饒海口。押韻なり、たとひ海を以て口となすも、此の恩は以て宣謝し難し、珠云く、「如上の端的は佛法貴しと雖も、國王大臣の荷擔に因らずんば、全う行ふことはできぬ、今日の寵遇の厚恩は詞ではお禮申しつくしがたし。」

㋡制府。制置使陳昉。

㋧聖人之妙。鰲背云く、「陳氏の德化を述ぶるをいふ、」又天子の妙德化をさす。」忠曰く、「今陳昉、天子の内德を以て四海に傳布することはじや。」

㋤春行萬國。溪云く、「聖人の德化の

と、㋤春の萬國に行くが如く、㋶豈に三寸舌端の重ねて新に點出するに在らんや。㋰苟し或は尙ほ知解を存せば、㋒高く聽官を聳かせ。」㋼諸山の疏を拈じて、㋨刹竿標はるゝ處、㋔鐘梵相聞ゆ、㋗暖氣相噓することを知らんと要せば、㋳總て裏許に在り。」㋮山門の疏を拈じて、同門に出入す、㋘未だ嘗て爾諸人を謾ぜず、㋫苟し或は粉飾太だ過ぎば、㋙山僧只だ耳を掩ふことを得ん。」法座を指して、㋓人人脚跟下に、㋢此の座子あり、㋐何ぞ必ずしも平地に高きに昇らん。㋚爾若し蹈得著せば、㋖燈王身を退くに分あらん。」師、陞座、拈香して云く、「此の一瓣の香は、爐中に㋴爇向して、恭しく爲に今上皇帝、聖躬萬歲萬歲萬萬歲を祝延したて

妙を宣疏し發揚することは、譬へば春の萬國に行いて自然に和氣周流するが如し。」忠曰く、「言意は到らざるところなしてある。」珠云く、「制府の役人がよいでじや」と。

㋶豈三寸筆端。溪云く、「三寸の舌言、筆端文字深く、疏語の聖德、自然の妙化に達することを嘆ず。」忠曰く、「陳昉が疏を撰し、口に之を宣べ筆之を書して點出することを待たず聖德顯然として、世に宣發するなり」、「重新の二字が眼なり」

㋰苟或尙存。溪云く、「大衆尙ほ知解を存して、之を是非せばじや。」珠云く、「知解は疑惑なり」、」或抄に筆端の上に向つてじや」と。

㋒高聳聽官。聳は高なり、耳を高くして聽取せよとなり、聽官は耳官を謂ふ、五官は耳目鼻口形をいふ、高聳は維那といふ役僧がこの疏をよみあげるをきくとのこと。

㋼諸山近隣。諸山の請狀疏の法は輿聖錄に見ゆ。

㋨刹竿標處。このこと寶林錄に見ゆ、珠云く、「前後左右、あそこにもこゝにも刹竿立ちをるところ、互に標はるゝところなり。」

㋔鐘梵相聞。列刹相望む故に、鐘聲梵音等互に相聞ゆ、珠云く「互に隣寺のことなれば、經をよむ聲じや。」

㋗暖氣相噓。暖氣は隣交の溫和の氣を表す、噓は吹噓なり、蓋し他に代つて氣を出すの義珠云く、暖和の氣より、一切がそだつ如く、諸山の吹噓に依つて虛堂もそだつ。」噓は「よろしい」なり。

㋳總在裏許。即ち疏中を指すなり。裏許は這裏の如し、俗に云ふ「つこ」と云ふことばなり

こゝで維那が宣讀するなり。

(マ)山門。山門の兩序、勤舊法中の僧の老少ども、住持と同途に進止す山門のゆゑに特に門と稱す、珠云く「諸役位山門よりの請狀同門相互に出入。

(ケ)護儞諸人。溪云く「眼眼相對する故に、未だ甞て欺謾せず」と、珠云く「住持するからには誠實敬愼を以て出合ひあしらふことじや、こなたか他をばかにするではない、相互じや」と。

(フ)粉飾大過。或抄に「華藻の文章などが飾り過ぎる。」太過とはほむることがあまりすぎるとなり、粉飾は潤色を加ふるなり、珠云く「なまじひに。ばかほめにじや、只だ互にあのまゝがよい。」

(コ)山僧只耳。溪云く「若し黼黻の文を以て我が德を粧飾する太だ過ぎば、我れ耳を掩ふてきくべからず」と。珠云く「輕薄かざりか過ぎると虛堂はきかぬぞ、此の以後とてもかまへてなれ」或抄に「掩耳で逃げ去らん」と、こゝにて又維那宣讀す。

(エ)人人脚跟下。珠云く「佛祖に在つても增さず、衆生に在つても減ぜずじや。」

(テ)有此座子。子は付け字なり、古句に「人人脚跟下に一坐具の地」あり。

(ア)何必平地。溪云く「平地上に高きに昇りて甚麼をか爲ん」と。珠云く「虛堂此の度じや。」或抄に「無事を含む、高に上りと云ふもはや。」

(サ)儞若踏得。本有底の一座子、珠云く「背觸或は不入涅槃でも、寺に入れたら、踏得著さもなくば」と。

(キ)燈王退身。或抄に「使令燈王の座の高廣にして嚴飾第一なるも、儞が踏得底の座子に比せば、些子許も較らざるが故に」珠云く「是れ虛堂が知見で云ふではない、退身御免なされと云ふて」又云く「だれかはらにも備へてある。」燈王のことは維摩の不思議品に「文殊師利言く、居士東方三十六恒河沙の國を度るに世界あり、須彌相と名づく、其の佛を須彌燈王と號す、今現在す云云」によるなり。

(ユ)爇。燒なり、音「ぜつ」なり。

(メ)堯仁廣被。昔の堯王の如き仁澤廣被、一天下の內に。

(ミ)舜德日新。昔の舜王の德化の如く今日に至りて相替はらず。

(シ)大丞相樞。謝方叔なり、歷史綱鑑に淳和十一年、謝方叔を以て左丞相觀文殿大學士惠國公と爲す」とあり。

(ヱ)同知樞密。賈似道なり、綱鑑に、「寶祐二年、賈似道に同知樞密院の事を加ふ、四年賈似道に參治政事を加ふ」とあり。

(ヒ)文武百僚。僚は官僚なり、通じて僚に作る。

(モ)增崇祿算。爵祿壽算なり。

(セ)尊崇廊廟。天子の宮、大廟などを。

(ス)撫鎭華夷。京も田舍もなり、中國

まつる。陛下恭み願はくは、(メ)堯仁廣く被らしめ、(ミ)舜德日に新ならんことを。」

次に拈香して云く、「此の一瓣の香は、爐中に爇向して、(シ)大丞相樞使國公、(ヱ)同知樞密參政相公、(ヒ)洎び文武百僚の爲に、(モ)祿算を增崇し奉る。伏して願はくば、(セ)廊廟を尊崇して、(ス)華夷を撫鎭したまはんことを。

次に拈香して云く「此の一瓣の香は、爐中に爇向して、(イ)判府制師集撰侍郎洎び(ロ)郡縣文武官僚の爲に祿算を增崇し奉る。伏して願はくば、(ハ)邦家に杜石として、(ニ)祖道に金湯たらんことを。」

「此の香、(ホ)氣息を絕する者久し矣、端なく冷灰を撥着して、重ねて新に燄を騰ぐ。前住安吉州道場山(ヘ)護聖萬歲禪寺先師運庵和尙の爲に、

夷國の內外を撫育鎭護すること。

(イ)判府制師。これは陳昉が官を摘んで稱す、慶元府の府事沿海の制置使集英殿の修撰朝散郎。

(ロ)郡縣文武。前は朝廷の文武官僚、此には郡縣に在る文武官。

(ハ)杜石邦家。國のためおもみをなす人。

(ニ)金蕩祖道。金城湯地なり、祖道則ち禪宗の外護たらんことを願ふ。

(ホ)絕氣息者。珠云く「これは嗣香なり「報恩住山の後は拈ぜず、故にしかいふ」又云く、無事甲裏に久しく、いくらもあげておいた。」或抄に云く、師は靈隱の鷲峰菴に退居するもの十年、今また出世開堂する故に此の法語の中、その意ある乎。」

(ヘ)護聖萬壽。十刹の二なり、運菴錄には萬歲寺とあり、湖州烏程縣にあり、開山如訥禪師伏虎と號す。

(ト)索話。編者の言なり、學者を呼出す釣語なり、搭索の心。

(チ)人天交接。これは法華の授記品に出づる語なり、珠云く「地獄と極樂と一つになりて」と。

(リ)不承二云々。珠云く「一代時敎も、一千七百則にも用はない。」句に滯るものは迷ふと、これは伶利の衲僧ぬり麼と言葉をうけしたがふ。

(ヌ)有僧問。溪云く「頌を以て出陣の句となす。」

(ル)一般擔板。龍云く「一般の擔板は虛堂自らを抑下托上するなり、大法の爲めには人情を交へざる故に」溪云く「此れは師の一向に本分を守りて人情に順ぜざるを嘆ず。」

(ヲ)十載深雲。溪云く「淳祐の末より寶林を退居して、北山の

爐中に爇向して法乳に酬い奉る。師、衣を斂めて、座に就いて㋣索話す、「㋠人天交接、兩得相見、㋷言を承けず、句に滯らざる底あること莫し麼。」時に㋦僧あり問ふ、「㋸一般の擔板、人の憎を得たり、㋾十載深雲獨り扃を掩ふ。㋻今日大方親しく勅を捧ぐ、㋕阿師眞箇藥頭靈なり、㋵學人上來、㋟請ふ師祝聖。」師云く、「㋹雲靜にして日月正し。」僧云く、昔日㋞梵王、佛を請ずることは、蓋し羣生の爲なり㋡今朝聖主特差す、㋧何の祥瑞かある。」師云く、「㋤天の高きも蓋ひ盡さず。」僧云く、「與麼ならば則ち四衆恩に㋶霑ひ去れり也。」師云く、「㋰誰か恩を承けざらん。」僧云く、「只だ判府制帥集撰侍郎の如きんば、㋒忠正剛大の道を以て、㋼法の爲に人を擇ぶ。還つて學人が㋨水を借つて

深雲に居す、今寶祐四年におよびてその間十載に當る」と已上は從前の事を述ぶ。

㋻今日大方。溪云く「大方は公界(しよさん)を指す、言ふは國家勅黄を捧げ來りて敎請するなり、珠云く「天子を始め奉り、慶元府刺史陳昉等。古抄に諸方列刹の宗師勅黄を捧げ虛堂を請するなり。」

㋕阿師眞箇。阿は付け字なり、師は師を指す、頭の字、心なし、虛堂をさす、溪云く「師の蘊むところの眞藥の靈驗なるがごとくにして、能く衆生必死の病を救濟することを讃す、眞藥の語緣はこの錄の頌古船子の話に見ゆ、已上は即今底なり」珠云く「和上には煩惱の病、菩提の病迷悟の病を治するが奇妙じや。」

㋵學人上來。上來は罷り出ましたとなり。

㋟請師祝聖。臨席の句。

㋹雲靜日月正。溪云く「太平無事の境界、」珠云く「雲は群臣靜は事理貫透の語、日は天子月は公方(大丞相)。」

㋞梵王請佛。或抄に云く「人天眼目下に宗門雜錄上に云く、梵王、靈山會上金色の波羅華を以て佛に獻じ、捨身を床座と爲し、佛を請じ群生の爲に說法云云。」拈華微笑の時の事なり。

㋡今朝聖主。珠云く「聖主は今上皇帝。とりわけ、わざ〳〵大勢の中でなり、」溪云く「差は初住の切。擇なり、後錄の如く、いはゆる新差住持勅差住持なり、言ろは特に爲に差擇して住持の職に任ずるなり。」忠曰く「育王は本勅差住持に非ず、いま勅命を賜ふて特に虛堂其の人を賞するなり、故に特差と云ふ、正字通に差は叉

韻音釵。使なり。珠云く、「六種震動の如く。」

㋧有何祥瑞。

㋤天高蓋盡。溪云く、「眞箇の皇恩、廣大の祥瑞なるが故に」と珠云く「皆の咳唾も花柳も、たしかの祥瑞。」

㋶霑恩。天恩に浴したてまつる。

㋰誰不承恩。四衆のみに非ず。珠云く「四衆はいつそのこと、山河大地もみな〳〵」と。

㋒忠正剛大。溪云く「只だ丹誠のみにして邪心なきを忠正の德と爲す此の德剛にして息むことなく、廣大にして容ることあり、故に云ふ」珠云く「忠心正直、剛堅弘大なり」或抄に「忠あれば其の內正なり、」剛はものにくにせぬ、長人を云ふ大は物にさへられぬを云ふ。

㋼爲法擇人。溪曰く「上には聖主の恩命を云ひ、此には賢臣の外護を云ふ。」珠云く「爲法は佛法を興隆し一切を利益せんと、擇人は虛堂の如き明眼の人をじや。」

㋨借水獻花。溪云く「これ千歲一遇の好時節なり、其の使を借りて咨參すべきや、またいなやとなり、方語に幸に便宜を得。」珠云く「あなたに法門を承りたい、」或抄に「便を賴んで事を成すの謂なり、開堂の次によつて咨參を通ずるなり」忠曰く「譬へば佛前に水器あり、乃ち花を獻ずるに此の水を借るが如し、賢臣師を擇び、師來つて此の寺に住するは水あるが如し。」學人別に求めずして咨參することを得るは花を獻ずるが如し。」方語解には「俗話にしうとのもので、あひむこをもてなすの類なり」と。或抄に「借水は侍郎、虛堂が水を獻花は見處。」

㋔迦葉門前。迦葉門前は延福錄に見ゆ「千聖不傳底なり、今便を借りて咨參することを許さずの意なり、方語に「覿面相呈す」と。珠云く「畢波羅窟中に於て阿難を接得する底、禪宗接得の始めなり。」或抄に云く「迦葉は禪の根本なり、言ろは、宗風はげしきと云ふ義なり。」或抄に「花を吹き散ずるなり向上の門風此の上更に問不問に及はず。」凛凛ぎびしいこと。

㋗若如是則。如是把住ならば、さやうなればなり。

㋳名滿天下。溪云く「祖門從上來の宗風近傍すべからず」珠云く「あなたは天下の虛堂、昔しの迦葉と第二はござらぬ。」名は虛堂の高名で、去るは托上なり。

㋮儞不得忘却。溪云く「宜しく此の深旨を記取すべし。」珠云く「おぬし、わすれるなよ、室中へまゐらば三十棒じや。」

㋘僧禮拜。珠云く「あつあ、その三十棒をうけたうございます」とて

㋫黄面老漢。釋尊なり。

㋙末上放乖。溪云く「末上は最初の義、放乖は本分の理に背いて護に付囑を說くを云ふ。」珠云く「まつ

花を獻ずることを許さんや也た無や。」師云く、㋔「迦葉門前風凛凛。」僧云く、「㋗若し是の如くならば、則ち㋳名天下に滿ち去れり也。」師云く㋮偭忘却することを得ざれ。」㋘僧禮拜す。師乃ち云く、㋫黄面老漢、㋙末上に放乖して、㋓靈山會上萬百衆の前に向つて、佛法を以て國王大臣有力の檀那に付囑す。㋢今に迨んで二千餘年、㋐代賢に乏しからず、㋚我が沙門釋子をして、㋖以て慧命を流通して、㋴仰いで國風を助くることを得せしむ。㋱若し佛法果して付囑ありと謂はゞ、則ち黄面老子を謗するならん、若し佛法果して付囑なしと謂はゞ、則ち㋯今日王舍城中、君聖に臣賢にして、㋛遞に相欽奉して、以て海內の生靈をして、同じく㋽麗正の光、㋪松柏の茂するを瞻ずといふことなきこと

さいしよ、靈山會上に拈華微笑、此のしくじりぞめ。」或抄に「非道の義、胡亂の義を放乖と云ふ、又道理に應ぜざるなり」と、又云く「抑下なり。」

㋓靈山會上。仁王經の囑累品と涅槃經の第三壽命品に說き玉ふ有力の檀那は能く大法を荷擔して佛僧に奉施するの人なり。

㋢迨今二千餘年。南宋の今日にいるまでなり。

㋐代不乏賢。歷代の賢王賢臣方の歷歷が出來て、佛の付囑を受くと。

㋚沙門釋子。沙門は肇法師の云く「出家の都名なり」と。

㋖流通慧命。龍云く「慧命をして斷絕せしめず。」珠云く、佛が入滅して、今日まで展轉して流通す、慧命あれば僧は飢寒はせぬ。」

㋴仰助國風。溪云く「示すに因果等の法を以てして、惡を斷じ善を修し、仰いで國家の風度を讚助する也。」珠云く「佛法は暗に王法を助く、けふの今日、日本は別して佛法を以て國風を助く。」

㋱佛法付囑。珠云く「知られば こそあれ、無始よりそなへてある。」「若し人如來に所說の法ありといはゞ、即ち佛を謗ずると爲す故に」と溪は注せり。

㋯今日王舍。羅閱祇伽羅此に王舍城と云ふ、摩伽陀國中の城の名、今はこの寶祐四年の四月十九日みやこにおいてとなり育王は大宋の王の舍つるところの義に用ふ。

㋛遞相欽奉。君臣相尙ふに道を以てするなり、欽奉はつかふるなり。

㋽麗正之光。これは易離の卦の象に曰く「離は麗なり、日月

を致す。畢竟何を以てか據と爲ん。」拄杖を卓して、「㋲南嶽峯頭八字の碑。」

復た擧す、本朝の㋝太宗皇帝、因に僧、㋜朝見す、帝㋑宣對す、僧奏して云く、「陛下還つて記得すや否や、」帝曰く、「何れの處にか相見し來る。」僧云く、「靈山に一たび別れて自從り、直に今に至る。」帝曰く、「何を以てか驗と爲。」僧對なし。後來雪竇代つて云く、㋺貧道得得として來る、」師云く、㋩垂衣端拱、㋥百國來賓す。者の僧これ對なきにあらず、㋭天威人に逼ることを奈ともすることなし。」

當晩小參、今夜略佛法の㋬玄妙機關を去けて、㋣單單に諸人の與に、㋠些の細大の法門を說いて、以て㋷進寺識面の初を表せん。諸人も又㋦等閑に㋸情識裡に入在して、㋾胡卜亂卜を作す

は天に麗く、百穀艸木は地に麗く、重明にして以て正に麗く」乃ち天下を化成すと云ふに出づる語なり、星の名といふ說もあり、又美なりで、天子の德を指す、聖德あれば王道正しく行はるを云ふ。

㋪松栢之茂。臣の節操をたとふ賢臣忠を行ふの故に、古語に松柏の姿は霜を經て尤も茂るといふ。

㋲南嶽峰頭。祝語なり。前の寶林語錄の中に見ゆ、これは禹王之を建つるところの碑、神禹の碑なり、天長地久、國泰民安の八字なり、日本でならば「君が代は千代に八千代にさゞれいしの、いはほとなりて苔のむす萬傳」なり。

㋝太宗皇帝。趙宗第二代の主、聖德の天子なり、この語はさきの瑞岩錄に見ゆ。

㋜朝見。參內なり。

㋑宣對。帝宣示して對す、直問せざるなり、宣室は天子の所居を云ふ、宣は召すなり。

㋺貧道得得。貧道は謙損して私がじや、得々はわざ〳〵まいりました、得得は自得逍遙の意是を以て驗と爲す。

㋩垂衣端拱。溪云く「衣裳を垂れて甲冑を披ず、端坐拱手して干戈を把らず、皆至治無爲の象なり。拱はこまぬく、兩方の大指を相拄ふる也。」珠云く「太宗は聖德ゆえ、穆々として南面するのみ。」又云く、「雪豆の代語あつた匕じや、依つて又々好拈語じや。」

㋥百國來賓。みな歸服して命を奉ずるなり、賓はつく、服從するなり、干戈を動さず、太平を致す。

㋭天威逼人。恐懼戰栗して進語すること能はず、珠云く「天威は德盛なるが故に、無奈は

べからず、若し舍利初め(ワ)烏石嶺頭より、飛んで山中に入つて、光を放ち瑞を現ずることを説かば、此れ又是れ、(カ)諸人の共に知ることを出でず、若し(ヨ)六殊勝の地を説かば、(タ)寶幢市より四十五里、直に(レ)明州に到るまで、此れ又是れ、諸人の共に見ることを出でず、作麽生か(ソ)知見に落ちざることを得去らん。(ツ)所以に道ふ(ネ)法は見聞覺知を離るゝと、若し見聞覺知を行ぜば、これ則ち見聞覺知にして、(ナ)求法に非ずと。況んや(ラ)古鄮の禪叢、(ム)俊衲市の如し、(ウ)箇箇附託するに(ヰ)人を得るをや。(ノ)誰か肯て(オ)儞が者般の(ク)祭鬼の飯食を受けけん。」(ヤ)驀に侍者を喚んで云く、「(マ)鞏縣の茶餅を(ケ)收起せよ。」(フ)陳操尙書、一日(コ)衆官と同じく樓に登る、遙に數僧を見る、中間の一士云く、「來

だまづたも好い、これは僧をたすけて天子の威勢を云ふ。」
(ヘ)玄妙機關。珠云く、「不思議希代なことはよしにして」と。或抄に「細大法門の事相なり、玄妙は理なり。」
(ト)單々。純にして餘義なきの義なり、獨脫無依の義なり。
(チ)些細大法門。龍云く、「事相の法門は細あり大あり、蓋し事相を談じて理體に歸す、小參の體裁なり。」珠云く、「細は事觀細戒なり、大は理觀大戒なり。」
(リ)進寺識面。始めて入院大衆と相見を表示するなり。
(ヌ)等閑。ざつと覺えて、なげやりさまに。
(ル)情識裡。思量分別の上に。
(ヲ)胡卜亂卜。溪云く、「玄妙にあらざるが故に、胡亂に思量卜度するに及ばず。」
(ワ)烏石嶺。晉の武帝大康二年幷州の劉薩訶弋獵を業として暴かに卒す、夢みることあり、阿育王の塔を拜す、頂禮懺悔す、梵僧七人現ず、一僧化して、烏石となるによりて名づく。」
(カ)諸人共和。諸人がこの緣起をば共に知りてゐる。
(ヨ)六殊勝地。諸天舍利を安ずるの地をいふ。
(タ)寶幢市。鄞縣の市場。
(レ)明州。明州は即ちこれは大明のときは「みんしう」とよむなり、府城鄞州なり、育王は府城の東五十里にあり、この市は山下にあり、みな鄞縣の封內なり。
(ソ)不落知見。溪云く覺知見聞なり、共に知る、共に見る、みな事相の故なり、今微詰して知見に落ちざる底の理體に歸せんことを要す。」

者は總にこれ行脚の僧なり。」尙書云く、「(エ)不是。」士云く、「焉ぞ其の不是なることを知ることを得ん。」尙書云く、「近づかんを待つて諸公の與に勘過せん。」須臾にして僧至る、尙書召して云く、「(テ)上座。」僧悉く首を擧ぐ、尙書云く、「(ア)道ふことを信ぜずや。」師云く、「(サ)盡く謂ふ、清明の下(キ)昧者尤も多しと、(ユ)殊に知らず、(メ)壺中の天地別に、日月あることを。山僧此者(ミ)來つて育王に赴く、首め帥府節(シ)齋陳侍郎に見えて、(ヱ)一問一答するに、(ヒ)和氣前に滿てり、(モ)要且つ許多の勘辨なし。且く道へ、陳操尙書と(セ)相去ること多少ぞ。」拄杖を卓して、(ス)情閑にして嵒樹看れば愈好し、(イ)室靜にして磵泉聞けば轉た幽なり。
(ロ)行禮して(ハ)大慈に到る上堂を請ふ、(ニ)不見の

(ツ)所以道。これは維摩經の不思議品にいづるを以て引證す。
(ネ)法離見聞覺知。この文維摩には「法不ㇾ可㆓見聞覺知㆒」となす。
(ナ)非求法也。眞實求法の人に非ずとなり。
(ラ)古鄮禪叢。阿育王山、舊には鄮山と名づく。
(ム)俊衲如市。惡辣の俊衲、網にもわなにもかゝらぬもの。
(ウ)箇箇。どれも〳〵佛法の大事を。
(ヰ)附託得人。學者の附託して敎を受くる底の鉅禪碩德ありと或抄に「附託は大法を附託する人なり、人とは俊衲を指す明眼の子を得たりとなり。」
(ノ)誰肯。珠云く、「どうして、なるほどと納得して」と。
(オ)儞者般。儞は虛堂自を云ふ、者般は上の見聞覺知のなんどない。

(ク)祭鬼飯食。龍云く、「東郭墦間の事前の方の寶林錄に見ゆ、今は言句の餘殘を表す、言ふ意は我が指敎を受けざるなり」珠云く、「葬禮のそなへ、殘りのくひものじや」忠曰く、「上の所謂舍利放光現瑞や」また六殊勝地やらを云ふ。
(ヤ)驀喚侍者。珠云く、「此の上堂始終貫透した。」
(マ)收起。仕まつておけとなり。
(ケ)鞏縣茶餅。鞏縣より產するところの茶餅、兩觜あり、多口の義に取る。
(フ)陳操。睦州の刺史、唐時代で韓退之や柳宗元と同時の人で睦州の陳尊宿に參じた、尙書は官名。
(コ)衆官。並み居る諸侯方と。
(エ)不是。靑い眼では禪宗坊主の目きゝはできぬ。
(テ)上座。雲水僧を呼んで云ふ禪士といふがごとし。

(ア)不信道。忠云く「左禮波古會じや俺のいふ通りだらう、」或抄に前に行脚の僧でない」と。珠云く「おれが言ふことを虛言と思はるが。」

(サ)清明之下。日月のごとを云ふて、こゝには陳操を云ふ、陳操はあまりに淸明すぎると。

(キ)昧者。衆官并に僧たちを云ふ、溪云く「諸方盡くいふ、者の僧、白日途に迷ふと。」

(ユ)殊不知。珠云く「とんとの相違、その事ではない陳操ごとき人人あるを知らぬ」となり。

(メ)壺中天地。溪云く「僧の穩當にして首を擧ぐるを扶けて爾云ふ。」壺中の天地とは後漢の費長房の故事なり、日、月は淸明を請けていふ或抄に云く「壺中は此の僧を云ふ又の義に陳操勘破の處、格外の意あるを云ふ。」

(ミ)來赴育王。靈隱の鷲峰菴より來りて。

(シ)陳侍郎。溪云く「此の公は陳氏にして且つ尙書なり、故に陳操尙書が緣を引いて以て結座す。

(ヱ)一問一答。珠云く「此れや彼れやと御咄し申すにじや」と。

(ヒ)和氣滿前。時節氐と相應穩和で、常態じや。

(モ)許多勘辨。珠云く「さまぐ、しちむづかしい、首を傾けるやうなことはない。」

(セ)相去多少。溪云く「勘辨ありとなしとを詰問す。」珠云く「尙書と虛堂との手ぎは、どれだけのちがひがあるぞ」と。

(ス)情閑嵩樹。珠云く「虛堂のところからちよつと見てさへよい、嵩樹はしなよきはえたありさま、これは安閑自適の境界。

(イ)室靜磵泉。珠云く「吾が居處は磵泉、やさしい風流、閑轉幽とはなんとなくひとしほすみかへり、彼此無心應緣じや。」

(ロ)行禮。入寺の後、諸山を巡行して禮謝を致すを云ふ。

(ハ)大慈。慶元府明州の東湖に在り、忠獻史衛王の建つるところなり、今の住持は物初大觀なり、觀は北磵簡に嗣ぐ、簡は佛照光に、光は大惠杲に嗣ぐ、大慈の住持觀物初、初め先づ上堂し了りて、次に虛堂の上堂を請ふなり、故に直に物初上堂挨拶を擧するなり。

(ニ)見不見之形。珠云く「大慈と云ふから觀音を以て始終を云ふ、不見の處を見付けると、觀音を見る、自己をみる、こゝには觀物初を指して、今虛堂之を相見すと、無相の眞形をじや。」

(ホ)對揚有準。溪云く「言ふは無相の眞形を見得するときは、則ち自然に賓主應對之を擧揚するの時に於て準則の看るべきあり、」珠云く、「よのつれ、衆機に對し、單傳心印擧揚するに。」

(ヘ)察不察之色。察は明なり、言ふは不明の本色を察辨するときは、覺海涯垠なき故に、珠云く「靑黃赤

形を見るときは、(ホ)對揚するに準あり、(ヘ)不察の色を察するときは、(ト)撈摝するに垠なし。(チ)若し能く那邊に轉向すれば、(リ)鴉飛んで度らず(ヌ)形器を以て拘らず、(ル)色塵を以て礙へられず自然に(ヲ)諸聖の塵を超え、(ワ)大方の表に出で、(カ)溪山雲月、處處歸を同じし、(ヨ)水鳥樹林、互に相顯發せん、然も是の如くなりと雖も、爭奈せん、我が(タ)慈峯老子の、未だ肯て(レ)横に點頭だもせざることと在ることを。何が故ぞ。拄杖を卓して、(ソ)壺中に自ら佳山水あり、終に重ねて(ツ)五老峯を尋ねず。」(ネ)復た擧す。(ナ)堂頭(ラ)物初和尙、(ム)五祖の如何なるかこれ祖師西來意、庭前の柏樹子、恁麼に會せば便ち不是了也、如何なるかこれ祖師西來意、庭前の柏樹子、恁麼に會せば(ウ)方に始めて

白にあらず、その不察の色を見付くると重々無盡の境界不察は本地の風光なり、色は顏容顏氣なり、不察之色は無相の本色なり。

(ト)撈摝無垠。撈摝はとりとらふるを得べからずと、自己受用と同じ、無垠はすくはれぬとず、珠云く「無形を見無色を察す、なほこれ者邊の事、轉はばこぶ運なり、那邊にとは見察よつくそこへ到ると、天下第一じや。」或抄にその機のはやきことはじや。」又云く、「本分向上不見不察を云ふ。」

(チ)若能轉向那邊。形色の外を指

(リ)鴉飛不度。溪云く「見地高邁心涯廣大の故に、たとひ飛鳥といへども及ぶべからず。」珠云く「如是那邊に轉ぜば鳥もかよはぬ。」或抄に「物初和尙一點のけがれもなし。」

(ヌ)不以形器拘。これは不見の句を結ぶなり」珠云く「形器は長短好醜方圓じや、不拘はとゞこほるものがじや。」

(ル)不以色塵礙。これは不察の句を結ぶ、那邊に轉向する故に其の功用此の如し、珠云く、喜怒愛樂等の七情四威儀等を色塵といふ。

(ヲ)超諸聖塵。或抄に云く「塵は市塵なり、今は聚會の義を取るなり、」諸聖は佛祖の境界塵は上に云ふところの俊衲市の如しの義を云ふ。

(ワ)出大方表。一切の界礙なし、珠云く、大方は萬物の出は此の天地の內には居ない。」

(カ)溪山雲月。これは傳燈にある樂普の傳に、夾山曰く「溪山各異、雲月是同の語にとる、かの大慈山もこの虛堂　、犬の鳴くも猫の鳴くも何もかも普門圓通じやと珠抄にいへり。どこでも我他彼此はないと。

是」と道ふことを擧して、師云く、五祖當時、一時に㋼落艸、自ら謂へり㋨土曠く人稀なりと㋔殊に知らず、今日慈峯老子に㋗咽喉を掐定せられて、直に得たり㋳氣を取る處なきことを。育王㋮此に到つて、㋘客主裁を聽く、㋫只だ放過することを得たり。何が故ぞ、㋙人情做し得㋓寃家結び得たり。

㋢杖錫和尙至る上堂、「盤山の地の㋐山を擊げて、山の孤峻なることを知らざるに似、石の㋚玉を含んで、玉の瑕なきを知らざるが如し。若し能く是の如くならば、これ眞の出家」といふを擧して、師云く、「盤山其の實は只だ出家兒の㋖萬法相到らざらんことを要す。山僧昔㋴霞谷に寄せしとき、㋱棘林老子と與にすることも、㋯也た是の如し。別れ去つて一十餘年、今日相

㋵水鳥樹林。これは彌陀經の「水鳥樹林、悉皆念佛念法」にとる、諸法實相の當位なり、珠云く、「或る時は主となり、或時は賓となる、互に宗旨を顯發する。」

㋟慈峯老子。觀物初なり。

㋹橫點頭。首肯せざるなり。

㋞窟中自有佳山。慈峯の自家好風光あり、他の廬阜の佳境を尋ねざるなり、意比知すべし或抄に、「この二句は大慈を指して讃歎するなり、重ねてはその上にじや、物初の面前に自ら一段の好消息あり、何ぞ虛堂が恁麼說話を用ひん、所謂橫點頭だもせざるなり。」

㋧徐擧。忠曰く、これ必ず物初の引座して此の話を擧するならん、然るに物初の大慈錄を檢するに、虛堂を請するの上堂引座の語を載せず又曰く他寺の尊宿來訪の時は首座勸請の說法せしむ、住持先づ陞座して以て尊宿當に衆の爲に闡揚すべきの意を申す、此を引座と云ふて他の陞座を導引する也云云。或抄に虛堂の來臨に因て物初和尙上堂の法式を設く、然らば則ち物初其日の上堂の拈提也。

㋤堂頭。（だうてう）とよむくせなり、その寺の住持の人の稱號。

㋶物初。（ぶそ）とよむくせなり「もつしよ」とよむ人もあり。

㋰五祖道。云云不是了也。これまでは此は五祖法演禪師の語

㋒方是始。これまでは物初の語

㋼落艸。おちぶれる、或抄に邪路に入るの義なりと云も非也と濁に下るの義なり。

㋨土曠人稀。無知音の義前にも見ゆ、又或抄に向上第一五祖

見するも亦是の如し。且く道へ、㋛其の中の意作麽生。」拄杖を卓して、「㋽是の如く是の如き而巳矣。」

解夏小參、㋪微を防ぎ漸を杜ぢて、㋲深切著明なるも、㋝也た是れ風なきに帀帀たる波あり、更に若し㋜制を立てゝ安居せば、何ぞ㋑珠を破つて影を求むるに異ならん。衲僧家、㋺智、象外に游び、妙、環中に入つて、㋩生佛の未興を點破して、㋥古今の窠臼に落ちず、甚麽の㋭鰻湫濇潔、㋬玉几高寒とか說かん。㋣直饒ひ㋠頭を擧得し來るも、㋷早くこれ枯桑水と變ず。㋦育王恁麽の告報、常情を出でず。㋸只だ剋期取證の一句の如きんば、又作麽生。」拄杖を卓して、㋾善く柳下惠を學んで、終に其の跡を師とせず。」

に知音がないと思はれたなりと。

㋔殊不知。五祖に當るなり。

㋗掐定咽喉。掐は取なり援く也今は把定の謂也「のどくびをさへられて」也。

㋳取氣。氣息を出するを謂ふ。

㋮到此。この大慈寺にきてじや咽喉を掐定するの處。

㋘客聽主裁。裁は判段也客と作ては須く主人の制斷割裁を聽くべし、珠云く、「一句子の五祖をすくうべき處見のがしにする處でなけれども主人のさばきにしたがはねばならぬ。」

㋫得放過。自ら行ふことを得ざるなり、珠云く、「此の是不是については、金屑は眼中の翳となるのこと、眞金色を失すること、瓦礫光を放つこと、そこばく穿さく、ことあれども客ぶりがわるければ、まあそのまゝよと、石火炎を胸板へとほされたよりえらい。」

㋙人情做得。珠云く、「分明に五祖をすくひえた語乎、主裁に隨ふの語乎。」

㋓寃家結得。人情は惡情なり、却つてこれ眞箇知音の義なり

㋢杖錫。杖錫棘林杷和尙は足庵鑑に嗣ぐ、鑑は大休珏に、珏は眞歇了に、了は丹霞淳に嗣ぐ、杖錫山は鄞縣に在り、延勝院といふ、唐の龍紀元年建つ宋寶元二年額を賜ふ。

㋐擊山。日本ならば富士山なり

㋚含玉。夜光の玉、この語は會元の盤山傳幷に事苑一に出づ又禪林類聚にも出づ。

㋖萬法不相到。如是徹底無心ならば則ち萬法何ぞ到らん、信心銘に一心不生なれば萬法咎なしと云ふが如し。珠云く「六塵諸法に不染底の法をえさせんと思ふ。」或抄に「萬事心頭に到らす、無心底なり。」

(ヨ)寄霞谷。珠云く、「このこと延福錄に見ゆ、師、瑞岩を退居して霞谷に退居するもの三年、頌古代別を作る、寄は同聚なり、寄跡なり、引込んでゐたと。

(ヌ)棘林。仗錫和尚なり。

(ミ)也如是。地の山を擎ぐが如し。

(シ)其中。珠云く「昔にも倚らず、今にも倚らず、まつ正中。」

(エ)如是如是。彼此徹底無心。珠云く無事禪を云つたてはないぞ、東山下の大事を含んでゐたぞ、無縫罅二龍以爭レ珠、然雖レ如レ是少しも無縫罅の名人なり、而已矣は助字なり、決定したることにつかふ。

(ヒ)防微杜漸。寶藏論の文なり、言ろは微細の惑を防護して生ぜざらしむ、漸流の業を杜塞して作さゞらしむ。珠云く、「妄想惡業を防ぐこと敵賊の如くす、又綿密をつとめる、漸は事の端、先覩の始め。」或抄に「防微は衲僧工夫提撕して妄念妄惡を拂ふを云ふ、杜漸は物のきざす處、一滴の水も漸々多くなるやうなもの。」

(モ)深切著明。工夫を著くること是の如く、明白なるものと能々十二時中深切著明なるも。

(セ)無風帀帀。この語寶林錄にもあり前に見ゆ、也是とは衲僧の上よりみればなり、珠云く「本來微の防ぐべきなく、漸の杜づべきなり、動を止むれば止に歸す、止更に彌よ動ずじや。」

(ス)立制安居。九十日の制限を立てゝなり。

(イ)破珠求影。喩は即ち解くべし、未だ所出を審にせず、或抄に「影は光影なり、又の義に珠中に現ずるところの物象の影なり、珠を破つてひかりをみんとするの義、愚痴の至りなり。」

(ロ)智游象外。これも寶林錄に見えたり、珠云く「見性の大智を以て象外に游び差別の玄妙を會して向上宗乘些子の環中に入つてじや。」或抄に萬象の外じや、至道の環中じやと、妙は無窮義なり。自由自在なり。

(ハ)生佛未興。衆生諸佛の一機、未だ興起せざる巳前を點破するなり、珠云く「混沌未分をも點破するなり、」未興はわからぬなり。

(ニ)古今窠臼。古今の葛藤の窠窟に落ちず」と。珠云く、「佛祖の窠臼にじや」と。或抄に「結夏解夏、或は言語葛藤の窠窟じや。」

(ホ)鰻湫濬潔。育王の境致なり、育王の鎭守なり、又は聖井魚と云ふ、鄮山舍利寺の東一里に聖井鰻鱺あり、出でんと欲するときは則ち二紅蟹あり、前驅の者の若し湫は北人水池を呼んで名づく、濬は幽深なり、さても深い清潔なるものなり、これは淨裸々洒々落々を云ふ

(ヘ)玉几高寒。玉几は玉几峰、玉几亭とてみな育王の境致なり、これは當山の境致に寄せて、是の法平等無有高下の境界を示す、門前の小

山なり、高寒は向上を云ふ。

(ト)直饒。珠云く「このとき如何と見るか、遲八刻、此の處、なる程と契當するものじや。

(チ)擧得頭來。或抄に「もとをとびこえてじや」と、又云く「上の無事と玄妙との二途を脫してじや」又云く「虛堂恁麼の語下に於て回心し悟り了るも早く是れ遲了也」と、珠云く「頭を擧得するも遲八刻」と。

(リ)枯桑變水。「三たび變ずるときは海水桑田と爲る」と、麻姑壇の記にあり、桑田海水と爲る、故に枯桑水と變ず。或抄に「枯桑は格外俊邁の機じや、俊邁に沒溺せん」と珠云く「年代へだつてふるめかしいといふ事なり。」

(ヌ)恁麼告報。珠云く「だれも〳〵云ふことじや、ふるめかしいと、別なることではない。」

(ル)剋期取證。珠云く「なんと大衆たち、一句と云ふに格外のあるありじや、又どうじや」と。

(ヲ)善學柳下惠。柳下惠の故事は孔子家語の好生篇に詳し、魯人と嫠婦との問話より起る、魯人曰く「柳下惠は則ち句なり、吾れは國に不可なり、吾れ將に吾れの不可を以て柳下惠が可を學ばんや」と、孔子之を聞いての玉はく「柳下惠を學ばんと欲するものの未だ此に似る者あらず、至善を期して其の爲ることを襲はず、智と謂ふべけんや」と。溪云く「善を期して襲はざるの義なり。」珠云く、「善學二柳下惠一とは聖制に隨ひて聖制の所繫を受げずじや、」又云く「九十日安居して、たゞ修證の大事が肝要、古人今人の行履を必としてまねはせぬ、虛堂何をいひだすか是れ什麼ぞ、鰻湫玉几と說きあげて來た上のとゞめに以て來た語じや。」或抄に古人の迹を踏まず」「剋期修證の解縛を受けず」又云く「善く如來の大法を學ぶものは、聖制安居の跡を師とせず、これ即ち取證の處なり。

(ツ)平地上死。敎縛せらる底なり、無事の坑に墮する底なり、珠云く、「無事是れ貴人と留めて居る、ぎろかわ〳〵有氣の死人無數じや。」

(カ)出得荊棘林。荊棘は所謂縛なり、珠云く「金剛王を以で難透の話をきつて〳〵きりぬいて出る、これ好手と、てぎはものじや、發明ものじや、」荊棘は或抄に「向上の一路じや」と。

(ヨ)堂中第一座。雲門下の首座。

(タ)有長處也。珠云く「何が長處じやせいが高いか鼻がたかいか、人に過ぎたる處かあるか。」

(レ)蘇嚧々々。或は蘇嚕に作る。所謂一道の眞言、義解すべからず。或抄に「荊棘林中一條路を開示す、」盧は「かたる、をしむ」ことで、蘇は「よみがへる」即ち甘露の水を洒がれて、蘇るを云ふと。

(ソ)任公子。これは雲門の意は鉅禪碩

復た擧す、雲門衆に示す、「(ワ)平地上に死人無數、(カ)荊棘林を出得するもの是れ好手」と。時に僧あり、出でゝ云く、「恁麼ならば則ち(ヨ)堂中の第一座、(タ)長處ありや。」門云く、「(レ)蘇嚧蘇嚧。」師云く、「雲門は大いに(ソ)任公子が、設くるに五十の犗を以てして、竿を投じて東溟に釣るに似たり山僧尋常(ツ)包荒を善くす、(ネ)人の過を宣ぶることを欲せず、甚に因つてか此の如くなる。」拂子を擊つて、(ナ)何の官にか私なく、(ラ)何れの水にか魚なき。」

次の日上堂、長期百二十日、(ム)短期九十日、(ウ)夏月蟲蟻多し。黃面老子、儞が東走西走して、殺生害命せんことを恐るゝ故に制を立てゝ以て之を禁ず。今朝期滿ず、鄮峯門下、未だ嘗て一人も敢て(ヰ)容易に脚を下すものあらず。何が

德を索むるに在り。莊子の外物に任公子の故事出て詳し、竿を東海に投じて旦旦（あさな〳〵）釣る、期年まで魚を得ず、已にして大魚之を食ふ云云。」犗は牛なり。五十の犗を餌にして無類の大魚をつらんと、格外の一物を得ん爲め東海に釣るなり、これは大機大用なり。

(ツ)善包荒。易の泰の九二包荒と云ふより出づる語なり。珠云く、「人のあらをかくすがすきじや、大抵見ぬふり聞かぬふりする、胸中の廣きを云ふ。」

(ネ)宣人之過。死人無數と道はず或抄に「平地死人あらば、あるまいに捨ておきはせぬで、いらぬことよとなり。

(ナ)何官無私。珠云く、「人のあらと云ふこと乎、平地上死人無數と云つたところに能くあひますがおほ〳〵あうとも〳〵

無私じや、見たふり聞いたふり、それで一切がそだつてゆく、無私の處。」或抄に「畢竟皆荊棘林を出でざるものはなき」となり、公儀のことにも私なくては叶はぬで、それと同じで雲門にとがはあるも云はぬとなり。

(ラ)何水無魚。上の句の喩へなり珠云く、「魚は水に住めども住むとも思はずしてをる。」

(ム)短期九十日。圓覺經の圓覺菩薩章には、下期八十日と作す

(ウ)夏月蟲蟻多。報恩の禁足護生興聖錄に見ゆ。

(ヰ)容易下脚。綿密に制を守りふむべきところをぢつとふんでをる。

(ノ)恐踏著。珠云く、「ふみあてたならば、破戒しさうなと、脚を下さなんだと云ふことか。」或抄に「外面は蟲蟻を踏殺す

故ぞ。」拄杖を卓して、(ノ)恐らくは踏着して、(オ)突吉羅罪を犯さんことをと。」

徑山の(ク)石溪和尙の(ヤ)遺書至る上堂、(マ)雞足峯前、(ケ)黃梅渡口、(フ)冷泉に逗到して幾か肘を掣く。(コ)若し凌雪正傳に非ずと謂はゞ、畢竟、(エ)衣法誰が手にか屬す。(テ)野犴鳴獅子吼、(ア)虛空昨夜筋斗を翻す。」

上堂、擧す、(サ)讓和尙、馬祖に問うて云く、「汝(キ)坐禪を學ぶか坐佛を學ばんと爲るか、若し坐禪を學ばゞ、禪は(ユ)坐臥に非ず、若し(メ)坐佛を學ばゞ、(ミ)佛は定相に非ず、無住の相に於て、(シ)取捨すべからず」と。師云く、「南嶽、馬祖を引いて、(ヱ)牛角裏に入つて老鼠の活計を作す、忽然として(ヒ)箇の出路を得ば、却つて南嶽の裏許に坐在することを笑はん。」

と言ふ底の意、底意は黃面を弄しての言ひなり。」又云く、「わづかに足をふみ出したならばじや。」

(オ)突吉羅罪。一瓶をも踏著せず地を掘り艸を拔く等の小罪、その數一百、突吉羅と云ふは突は惡なり、吉羅は作なり、胡僧は守戒と翻す、此の罪微細、之を持つこと極めて難し故に隨ひ學び隨ひ守る、以て名を立つ、梵網には輕垢罪といふ律には突吉羅といふ。

(ク)石溪。名は心月、掩室開に嗣ぐ、開は松源岳に嗣ぐ、虛堂とはまたいとこでしである、石溪は西蜀の人。

(ヤ)遺書至。興聖錄に見ゆ。

(マ)雞足峯前。此の二句は石溪正傳衣法の由を述ぶ、屈屈吒播陀唐には雞足山と言ふ、峻起する三峰あり、迦葉既に入り玉ふとき三峰斂覆せり、三會

說法の後餘に無量憍慢の衆生あり、慈氏將に此の山に登らんとす、彈指すれば峰開く、迦葉衣を授けて火化して入滅す。

(ケ)黃梅渡口。黃州府九江城にあり、黃梅縣の西南七十里にあり、これは六祖壇經に因緣委はしく出づ、溪云く、「石溪曾て正傳の衣を拈ず、今其の事を摘んで正的の宗師なることを讚嘆す、故に此の兩句は衣法の源委を標す、黃梅は五祖弘忍大師の居るところ、夜半に五祖の六祖能を送られしところ。」

(フ)逗到冷泉。冷泉は松源、靈隱に住して正傳の衣法の主なるが故に、肘を掣くとは人をして惱亂せしむるの義なり、忠曰く、「白雲の傳衣松源に到りて少しき留碍あり、此れを掣肘と云ふ。」透は物相投合する

(モ)上堂、(セ)天寒人寒、(ス)大家者裏に在つて、(イ)與麼に會得せば、(ロ)鐵板障も也た須らく退縫すべし。(ハ)然らずんば、(ニ)本(ホ)龍を屠らんと擬して、翻つて虎を射ることを成す。」

上堂、擧す、(ヘ)嵓頭、德山に見えて(ト)便ち問ふ「是れ凡か是れ聖か。」德山便ち喝す、(チ)頭便ち禮拜す。後來(リ)洞山聞いて云く、「當時若しこれ奯公にあらずんば、也た(ヌ)大いに承當し難からん。」巖頭聞いて云く、「洞山老漢、(ル)好惡を識らず、(ヲ)錯つて名言を下す。(ワ)我れ當時(カ)一手擡一手搦。」師云く「巖頭大いに(ヨ)明上座が、(タ)盧行者を趁ふて、(レ)大庾嶺頭に到つて、(ソ)却回して同伴に向つて、(ツ)此去つて杳として消息なしと道ふに似たり。」

上堂、擧す、(ネ)雪峯衆に示す、(ナ)望州亭にも(ラ)

なり、掣肘は人のさはりになろを云ふ、逗到は的々相承して、冷泉は亭は靈隱にあり、松源を指す、逗はもらすなり。

(コ)凌霄非正傳。凌霄は徑山なり今石溪此に住す、故に指して稱す、的々正傳なり。

(エ)衣法屬誰手。深く其の正傳を明すの言なり。此の石溪がかけたからは。

(テ)野狂鳴獅子吼。大活自在、或抄に云く、「正傳の證據を示す此れ生前の說法の大活自在なり。」

(ア)虛空昨夜翻斗。上の句は石溪平昔の說法を讃し、此の句は遷化轉身の活三昧を述ぶ、珠云く、「虛空がくらがりでさるがへりをしたと、石溪の遷化を見ごとな活三昧見物じや。」この語は寶林錄にも見ゆ。

(サ)讓和尙。南嶽懷讓禪師は六祖慧能に嗣ぐ、南嶽は今の湖南省の一名衡山五岳の一なり、石頭もこの山にあり、一番高きを祝融峰と云ふ。

(キ)坐禪。中峰和尙坐禪論に曰く「外一切善惡の境界に對して、心念起らず、名づけて坐と爲す、內に自性を見るに動ぜざるを名づけて禪と爲す云々」又「諸法空を坐と爲す、證得を禪と爲す。

(ユ)非坐臥。坐臥の上にあるものでない。

(メ)爲學坐佛。珠云く、「無二無三、唯一佛體を得たいと思ふて歟。」

(ミ)非定相。禪定の定にあらず。

(シ)不應取捨。無住の相に於て云ふは金剛經に見ゆ、一切の凡聖定亂等に住せずして、此の眞如の本相に於て、或は聖を取つて凡を捨て或は定を取つ

て亂を捨つとなり、珠云く「佛はよいで取る、凡夫はわるいで捨てるの」と。取捨は計較安排なり。

(ヱ)入牛角裏。小機圈櫃を作すとなり語錄は顯孝錄に見ゆ、珠云く「狹小の處に入りて、伎倆盡き偸心盡く。」後へも前へも行きやうがない擺擲を見んと要す。

(ヒ)得箇出路。珠云く「馬師牛角に引き入れられたは引き入れられたが箇の出路を得て見れば、却つて南岳の窠窟に坐在することを笑ふ。」裏許は牛角裡なり、取捨の處はない。」

(モ)上堂。鵠林(白隱)曰く「此の上堂は虛堂深き心ありてしたか。」

(セ)天寒人寒。珠云く「京もさむければ田舍も寒し、人天一夜寒氣。」

(ス)大家者裏。珠云く「僧俗男女舊も新到、なんとさむいじやないか。」

(イ)與麼會得。珠云く「雪のふる夜はなるほど寒いと合點せば」と。

(ロ)鐵板障也。たとひ鐵板障之堅固なるも當下に便ち寒裂せん、也た須らく退步して縫合すべし、これ徹底大悟の端的なり、忠曰く「鐵板障、障は屛風の類、鐵を以て造るなり、退縫の退は縮退なり、縫はぎめ退縮は凍裂の狀なり」、珠云く「煩惱障、所知障も、五欲八風もりこつぱい、はりりん〳〵。」或抄に法座の後の障子を云ふ。

(ハ)不然。上の句で見得ぜずんば、ふんべつがちがふ。」

(ニ)本。始あらずといふことなし、素の志には違ふなり、言句の上に向つて求めんとせば。

(ホ)擬屠龍。言ろは修行の本志に違背すとなり、翻つては能く終あること鮮し、えいやつと、やぶになる虎を射るなり、莊子の列禦寇に朱泙漫の屠龍を學びし故事あり。

(ヘ)嵓頭見德山。この話は傳燈の十六、聯燈二十一に見ゆる語、珠云く、德山は衣紋けだかくつくろふてひかへた。」

(ト)便喝。珠云く「棒が出ると思ふたら存外。」

(チ)頭便禮拜。珠云く「してやつた、有りがたし」と。

(リ)洞山。价禪師なり。

(ヌ)大難承當。受取にくい處、さゝへにくい處を、よくもさゝへをほせた。

(ル)不識好惡。洞山老漢、よい年をして居て物のわきまへもない。

(ヲ)錯下名言。とりちがへて銘をうつた、名言は註脚の義。

(ワ)我當時。洞山、嵓頭同じやうな。

(カ)一手擡一手搦。全く肯はざるなり珠云く「一手ではかひなを取つてひきあげた、一手ではくびをおさへて、さあぬかせ〳〵と。」

(ヨ)明上座。蒙山道明、五祖弘忍大師に嗣ぐ。

(タ)盧行者。六祖能大師なり。

(レ)大庾嶺。南安府にあり前に見ゆ。

(ソ)却回。かへりきたるなり。

汝と相見し了れり也、(ム)烏石嶺にも汝と相見し了れり也、僧堂前にも(ウ)汝と相見し了れり也」師云く、「(ヰ)恠しむこと莫れ坐來頻りに酒を勸ることを、別れて後自從り、君を見ること稀ならん。」

上堂、元宵に知事を(ノ)謝す、僧問ふ、「(オ)有句無句は、藤の樹に倚るが如しと、此の意如何。」師云く、(ク)水を掬すれば月手に在り、花を弄すれば香衣に滿つ。」僧云く、「(ヤ)樹倒れ藤枯るれば、句何れの處にか歸せんといふ、(マ)讛。」師云く、(ケ)「黃金を拋却して碌甎を捧ぐ。」僧云く、「潙山(フ)泥盤を放下して、呵呵大笑す、又作麼生。」師云く、(コ)天堂未だ就らざるに地獄先づ成る。」乃ち云く、「今歲元宵、(エ)州家(テ)十分の燈を放つて民と樂を同じうす。(ア)唯だ鄮山の堂殿廊廡のみありて、(サ)半明半滅す、(キ)往來のもの、露柱と肩を交へ、燈籠と額を闘はしむ。(ユ)燈明王(メ)大佛聞き得て、出で來つて(ミ)本光を顯發して、大佛事を作さんと欲す。山僧之が與に(シ)威を震つて一喝す。何が故ぞ。(エ)自ら僧の事を知るあり(モ)何ぞ强ひて出頭するに勞せん。」

(セ)雪竇和尚至る上堂、「(ス)金輪峯頂、錦鏡亭邊に一句子あり、天下の衲僧を殃害す、(イ)未だ一人も點校得出するあらず、育王(ロ)久日の樺來唇、豈に緘默を容れんや。且く道へ、(ハ)是れ那一句ぞ。」拄杖を卓して、「(ニ)見說らく前村風更に惡し杏花春寒を避くるに處なし。」

佛涅槃上堂、(ホ)大覺世尊、(ヘ)衆生の妄を執して本と爲るを見るが爲に、(ト)百花明媚萬葆敷榮するに當つて、(チ)示すに入滅の相を以てす。汝等

(ツ)此去杳無消息。これは明上座が五祖大師の寄に衣法を付して、盧行者に與ふときくに及んで、即ち同志數十人を率ゐて、跡を躡んで追逐して大庾嶺に至りて、巳に開示を得て大悟禮謝し、遽に迴つて嶺下に至つて衆人に謂ふて曰く、向きに崔嵬に陟つて遠く望むに、杳として蹤跡なし、當に別道に之を尋ぬべし」と、皆以爲らく、然りと、この事は傳燈錄の道明の章に詳なり、巖頭巳に喝下に機を投ず、却つて云ふ一手擡等とその機相似たり。

(ネ)雪峰示衆。珠云く「此示衆は實に古今無雙。」

(ナ)望州亭。雪峰の境致なり、雪峰は福州侯官縣にあり、開山は眞覺禪師なり支那十刹の一なり。

(ラ)與汝相見。珠云く。出逢ふたが、兩鏡相照すが如く、見事な出合ひ。

(ム)烏石嶺。雪峰にあり。

(ウ)與汝相見。亭(ちん)でも出合ひ山でも堂前でも全體眉を交へ眉を結んでゐる、汝はこれ阿誰ぞとなり。

(ヰ)莫恠坐來。この二句は杜牧が王十五判官を送るの詩に云ふが如し、「黔陽信使應レ稀少、莫レ怪頻頻勸二酒盃一」と。今は雪峰重重の叮囑を曉さんことを要す。珠云く、「莫レ恠坐來とは、すわるやいなや、ものゝ一つ〳〵と、なぜめつたに、すゝめると思ふておくりやるな、けふ別れてからは、又お目にかゝることは、めつたにならぬと、又云く「けふ別れて又いつあふもしれぬ、いやでも一つ呑んでたも。」虛堂此のやうなことをひつつけおいた、油斷はならぬ。」

(ノ)謝知事。珠云「勤勞の挨拶なめさろ上堂。」

(オ)有句無句。これは潙山と懶安の語、此の話はこの錄の立僧普說に詳かなり、或抄に「有句無句は有無の上共に無心にして、喩へば藤の樹に倚るに藤も樹も共に無心に相立するが如くなり。」

(ク)掬水月在手。これは于良史が春山月夜の詩なり「春山多二勝事一、賞玩夜忘レ歸、掬レ水月在レ手、弄レ花香滿レ衣」と、自然得妙の義なり、言ふ意は語に參ずるは則ち自然に意を得るなり、珠云く、「有句無句の徹底が、いかぬと、此の句がでるものでない、」或抄に本分を用ひ得た上なり、本分を知らせん爲なり、句の字に心なし。」

(ヤ)樹倒藤枯。珠云く、「疎山布單を賣却し、三千里外、特に來りて、和尚に見ゆるの一句じや。」

(マ)讛。すこしははせろなりと、前に解せり、見ろべし、物を指す貌。

(ケ)拋却黃金。語に依つて意に依らず、珠云く、「鷺目を以て玉と爲す、結構な寶をうちやつて、大切さうに小石碌甎を捧ぐと、これは疎山に當るなり、ろくせんば言語にたとへろ、眞旨をしらず閑言語を弄することなり、又或抄に「拋二却黃金一とは、樹倒藤枯といふを、捧碌甎とは句何れの處に歸すといふをさす。」

(フ)放下泥盤。泥盤は、泥をぬるこ手なり、放下はすてろ、ほりすてる。

(コ)天堂未就。此の笑、活人の機少く殺人の機多き故なり、珠云く、「天堂の普請できずして焦熱大焦熱の苦患が一身に集

めてきた、こゝがかたじけないところ。」或抄に云く、「好いことは出來ず、惡しきいやなおそろしい事が出來たとなり、此れ大笑の處に、殺人刀の機鋒にして賊意あるを云ふ。」

(エ)州家。知州の府第で、太守の家舍でなり。

(テ)放十分之燈。この上なき結構な燈籠をともしてと、放は放置つくりおくすべおくなり。

(ア)唯有鄮山。廡は堂下の周屋てあるこの育王山は油が高いのでなり、鄮山は育王の別名。

(サ)半明半滅。ちよろ〳〵燈十分ならざる故になり。

(キ)往來者。これは本分底を指す、暗きゆゑに往き來のものが、露柱とこつつりこをする。

(ユ)燈明王。日月燈明佛、これは寓言。

(メ)聞得出來。衆人のこまるをききだしてきてと。

(ミ)本光。燈明佛の本光なり、これは延福錄に見ゆ。

(シ)震威一喝。天地も震動する位、吹滅のところ。

(ヱ)自有僧知事。珠云く、「知客の副司の知殿のと、役があつて燈明佛が出て、せわやかないでもよいと。人人本具底の世話人がある、佛の神のと他力ならずとも、悟明を得る、知事謝の上堂の故に云ふ。

(モ)何勞強出頭。知事に結屏す、或抄に「人人會具足してゐる」と。

(セ)雪竇。大歇仲謙、松源に嗣ぐ、此の錄後面に遺書至るあり、虛堂和尙の法叔なり、雪竇、雪竇は明州慶元府にあり、東は雪竇、西は虎丘なり開山は常通禪師趙州に嗣ぐ。

(ス)金輪峰錦。ともに雪竇の境致である。こゝにはたゞ雪竇を指していふ。

(イ)未有一人。說法人の點檢計校に落ちず、珠云く、「萬人の內一人もとつくり吟味仕出來すものがない。」

(ロ)久日樺來唇。來は語助である、言ふ意は陳久の樺來唇は乾燥不仁(かはききつたるくちびる)で、緘對默合するに堪へずと、畢竟口を合することを得ずとなり。或抄に「樺來唇は多口の義、來は成の誤か。」

(ハ)是那一句。發頭を回照す。

(ニ)見說前村。禪林風月集中に法俊春日の詩に曰く、「堤雲漠漠雨漫漫、楊柳如レ絲不レ厭レ看、見說前村風更惡、杏花無レ力耐二春寒一。」珠云く、「皆が云ふには、北山邊は日にまし風がひどいと、餘寒のひどさに花もえさかぬとなり。」今は雪竇門風の凛冽たるを表す、この詩の題は春日とあれども、詩の心を以て之を見るに、題は新春雨中となすべしと云ふ、法俊自ら退菴と號す。杜詩に曰く、「春寒花較遲」と此の一聯は風と雨と相互鎖して見るべしと注に見えたり。

(ホ)大覺世尊。釋迦老子を指す、感じて通ず、大覺世尊と名づく。

比丘、若し能く此に於て(リ)一隻眼を着け得ば、釋迦は自ら釋迦、(ヌ)波旬は自ら波旬ならん。」

上堂、擧す、藥山(ル)看經する次で、僧あり問ふ「和尙尋常、人の看經することを許さず、甚麼としてか却つて自ら看す。」山云く「我れ只だ(ヲ)眼を遮らんことを圖る。」僧云く、「某甲還つて看し得てん麼。」山云く、「儞若し看せば、(ワ)牛皮も也た須らく穿つべし。」師云く、「(カ)師も弟子に加かじ。」

茶を摘む次で、(ヨ)清涼和尙至る上堂、僧問ふ、「潙山茶を摘む次で、仰山に問ふて云く、『終日只だ子が聲を聞いて、子が形を見ず』と、仰山(タ)茶樹を撼す、意旨如何。」師云く、「(レ)錢は急家の門より出づ。」僧云く、「潙山云く、『子只だ(ソ)其の用を得て、其の體を得ず』と。」師云く、「(ツ)門

(ヘ)衆生執妄。妄に四大幷に六塵の緣影を認めて、自らの身心の本相と爲す、珠云く、「四大虛假の身妄を執して、眞實堅固とする。」

(ト)百花明媚。桃櫻の百花がきれいにさきそろふて、よめな、たんぽゝのいろ〳〵の草までもゐさかゆるにとなり。

(チ)示以入滅之相。衆生顚倒して無常の妄幻を執して、眞常の本相もなす、故に二月十五日に當りて入滅の相を示す、皆方便の故に、世の無常をば示し玉ふとなり。

(リ)著得一隻眼。言ろは若し妄想の倒見を遮りて、本分の隻眼を開くときは、則ち天はこれ天、地はこれ地、佛はこれ佛、魔はこれ魔、甚麼の安排があらんと珠云く、「山姥が謠曲に邪正一如と見る時は、色即是空其のまゝに、煩惱あれば菩提あり佛あれば衆生あり、衆生あれば山姥もあり、柳は綠花は紅の色々。」又云く、「衲僧の一隻眼は肉眼をはなれてある。」或抄に「長者は長法身。」

(ヌ)波旬。正しくは波畢夜と言ふ此には惡と云ふ、釋迦出世のとき、魔王の名なり、羅什云く「秦には殺者と言ふ、常に人の惠命を斷ぜんと欲するが故に。」

(ル)看經。珠云く、「未到のものは古教を以て心を照す、巳到の者は心を以て古教を照す、用心の次第なり。」

(ヲ)圖遮眼。別に功驗を求むる所なきの義。珠云く、「藥山はおればどうぞ見ぬことを工面する。」或抄に云く、「此れ謂つべし、看經分あり、若し文を追ひ句を尋れば、これ經に轉ぜらるるものなり。」

(ワ)牛皮也須穿。言ろは若し是の

を出でゝ用ひず、頻に叮囑することを。」僧云く「仰山云く、『未審し和尙作麽生』と」、潙山良久す、仰山云く、『和尙只だ其の體を得て、其の用を得ず』と。」師云く、「㋧子は父の爲に隱す。」僧云く、「潙山云く、『㋤子に二十棒を放す』と。」師云く、「㋶手臂終に外に向つて曲らず。」㋰乃ち拈じて云く、「㋒趙州曾て問ふ、南泉老、禮拜燒香㋼只だ舊時、㋨若し是れ清涼の萬菩薩ならば、㋔等閑に聞き著て眉を攢めん。」

㋗結夏小參、㋳旃檀叢林、㋮旃檀圍繞す、之を析くときは則ち㋘片片皆香し。㋫荊棘叢林、荊棘圍繞す、㋙之を揀ぶときは則ち枝枝畏るべし。故に我が㋓釋迦老子、㋢平等性智を以て、㋐諸〳〵の比丘を攝し、㋚同じく大圓覺海に入れて、一百二十日長期の内に於て、㋖撈攄澄濾して、

如く看じ去らば、たとひ頑皮が牛皮の厚きが如きも、也た須らく穿透すべしとなり、珠云く「佛の皮祖の皮、金輪奈落の底までも看つくせ」と。或抄に云く「汝經を看るならば牛皮をも皮をも穿つほどに看ぬかんぞとなり、其れほどに見ることはならぬと也。」

㋕師不如弟子。師資一般の義、上の引く所を以て理會すべきなり、韓文に「弟子も必ずしも師に如かずんば師も必ずしも弟子に賢らず」とあり、珠云く「師は已到底なり、弟子は未到底なり、やつかひものを云ふ、不如はおなじからずなり。」或抄に「藥山を抑へて虛堂の腕力、山もこの僧におとつた。」

㋵清涼和尙。南叟茂禪師、石溪月に嗣ぐ、松源四世。

㋟撼茶樹。潙仰宗の風彩なり、こゝにゐまするなり。

㋹錢出急家門。急家は貧急家なり、潙山の責を得て償を償ふなり、珠云く「仰山も潙山に問はれて、大事の寶物を取り出した、富貴のものは何もかもだくはへおく故、平生錢をださぬが、貧乏のものはせか〳〵と平生だす、俗にいふかせくに追付くびんぼふなしの義なり。」

㋞得其用。珠云く「用は差別の用なり、體は根本の體撼と動とは用に屬す。」

㋡出門不用。鄭重に敎授する故なり。珠云く「いとまごひして行くものには、婦女子をあしろふ如く、あまつこい鼻紙扇子、草履の鼻緒のことまで氣を付けるには及ばぬ。」或抄に云く「門內に居るは體なり今門を出づと言ふは用なり、言ふ意は用の處に潙山か此の如く丁寧に云ふたは、入らざることじやと抑へた、人と別れざまに門を出でゝも、又なにやかやと云ひ付けるなり、今は潙山の拶處の重々丁寧なるを云ふ。

㋧子爲父隱。これは論語の子路篇にある語、「直在二其中一」とあり、これ潙山の家私を覆隱する故なり、其の實は全體即用、甚の得ざることかあらん。」珠云く「すなをな挨拶、互に密意は見せぬ。」或抄に、「潙山の家醜、外に向つて揚ぐるところを、仰山が隱した。」

㋤放子二十棒。或抄に體用の上をえ離れぬ程に棒するぞ」私云く「此の義好からず、只だ此の處賞するか罰するが、如何を見よ。」放は放置なり。」

㋶手臂終。潙山此の令を行ず、實に理の當然なり、手臂の外に向つて曲らざるが如し、珠云く「手臂云云は理の當然、あたりまへとはどう云ふことじや、さうありさうなことさ、それほどたはごと云ふてあとではさう云ふてしまはればならぬこと乎。」

㋰乃拈云。古德師資會遇の緣を拈起して特に頌出す。

㋒趙州曾問。珠云く「師資向上の出合ひ、曾問とはまへつかた問訊なり、趙州は清涼に比し、南泉は自らに比す。」或抄に云く「趙州の南泉を問訊の時、何さま快活奇異なこと有らんと思はれば、何の事もなく只舊規の如くに禮拜燒香せられたまでなりと抑へた。」

㋼只舊時。珠云く古則公案の咄もない只よのつれの。くうつのんつのはなし、しかし淺いか深いか佛祖もせぶみはならぬところ萬仭嶮崖鳥飛不レ涉。

㋨若是清涼萬菩薩。六十華嚴第三十一菩薩住處品に云く、東北方菩薩の住處あり、清涼山と名く、過去菩薩の眷屬常に中に於て住す、彼こに現に菩薩あり、文殊師利と名く一萬の菩薩の眷屬あり常に爲に說法す、これは清涼の緣を用ふるなり、珠云く「根本大智まふ此の上は無いと法柄を取て應接せば此の虛堂が心には叶はぬ、再び花嚴法界に入り四法界細大の法門底を盡し、宗門向上の些子を得てこそ少林の春を回へす眞の種草とも云ふべきに、或抄に、萬菩薩は明眼の衲僧じや、清涼和尙は云に及ばずその會下の大衆までも趙州の如くにはなくて活脫俊邁の漢なれば趙州南泉の體を聞いては眉を攢むそと也、清涼を褒美せんために趙州を抑下す、萬菩清涼會下の大衆に比す。

㋔等閑閑著也攢眉。等閑は格外なほどにいやだ〳〵くさい菩薩くさい〳〵と珠は云へり、言は佛の一字吾れきくことを喜はず、況んや萬菩薩をや、宜しく眉を攢むべし、趙州を以て清涼に比す、南泉を以て自ら當る趙州曾て清涼の行あり、

故に此の緣を用ゆ。事は趙州の傳に見ゆ、攢眉は廬山雜記に遠法師書を以て淵明を召す、明遂に白蓮社に來る、鐘聲をきいて曰く、これ何んの鐘ぞ、答て曰く酒を誡むる鐘と淵明眉を攢めて歸り去る。珠云く趙州南泉の如き問答若し此等の漢あらば、淵明の如く眉をあつめ去らん、只舊時とは今日の相見と舊時の相見と異なることなし

（ク）結夏小參。珠云く「これは絕前絕後の上堂じや。」

（ヤ）旃檀叢林。珠云く、「佛境界善知識」これは育王を指す、師家。

（マ）旃檀圍繞。珠云く「學者亦水晶の珠數、えりぬいたる如くせんだんより出た、學者は荊棘に入れてはらちがあかぬ。」好きもののあつまるを云ふなり、學者。

（カ）片片皆香。珠云く「佛くさい菩薩くさい、こつばまでにほふ、」師學共に旃檀の故に。

（フ）荊棘叢林。珠云く「魔境界、虛堂即ちさうだよ、參天はへあがる、さるとりばらでなければならぬ、是をこぎぬけると、まあ手足にかゝるものはない、此のばらへかち込み〳〵。」法度きびしいを云ふ。

（コ）棟之則枝。珠云く「肝もはらわたまでみなさしぬく」共に荊棘の故に、溪云く「今諸方坐夏の中、師學共に好き處あり、又師學共に好からざる處あり、之を擧ぐるなり」

（エ）釋迦老子。珠云く「釋迦老子も荊棘林だよ、平等性など云ふて」と。

（テ）以平等性智。珠云く「四智の一なり、同一鹽味、日の中するが如く普遍照の大智を以てじや」。これは無差別智なり。

（ア）攝諸比丘。諸とは或は旃檀、或は荊棘なり、珠云く「上中下根、辟緣菩の三乘をさへに諸比丘を攝して、ひつとらへて、捕なり收なり。」

（サ）大圓覺海。所說は興聖錄に見ゆ、海は體深く用ひろき故、海の如し珠云く「九聖同じく、同時成佛、一片の覺海に入れて」。これは安居制禁を云ふ。

（キ）撈摝澄濾。圓覺海に約して再三撈摝して之を澄し、之を濾して始めて得べしとなり、猶ほ切磋琢磨の如し。撈摝はかきまぜたり澄濾はすましたり、えりにえつてなり。

（ユ）成就慧身。佛身に同じ、華嚴經に曰く「一切の法は即心自性なりと知りて、慧身を成就して他に由つて悟らず。」

（メ）要且禁足。圓滿智慧の報身を成就するときは、則ち坐夏の相あることを見ず、これ其の取證なり、珠云く「打成一片なれば禁足じや、安居じやと、覺えはない。」禪堂に居るも常住に居るも、獨居する如く、不見有とは或抄に「有らば定相住相ぞ。」

（ミ）今正是時。法度のときなり。

（シ）合作麼生。珠云く「上三件の子細をひつからげた處はどうじや、」或

（ユ）慧身を成就せしむ。（メ）要且つ禁足安居の相あることを見ず。（ミ）今正に是の時なり、（シ）合に作麼生。」拄杖を卓して、（エ）竹杖龍と化し去る、（ヒ）癡人夜塘を戽む。」

（モ）永明の壽禪師、天台の韶國師の會中に在つて、普請の次で、（セ）隨薪に聲あるを聞いて、豁然契悟す。乃ち云く、（ス）撲落他物に非ず、（イ）縱橫是れ塵にあらず、（ロ）山河幷に大地、全く法王身を露はす」と。師云く「壽禪師、大いに（ハ）窮儒の（ニ）羣玉の府に登つて、（ホ）心に稱ひ意に滿たずといふことなきに似たり。只だ是れ中間に（ヘ）一字子未だ穩ならざるあり。」

上堂、秉拂の（ト）夏齋を謝す、「（チ）一稱南無佛皆已成佛道、（リ）若し說いて金輪水際崑崙（ヌ）山椒に到るとも、（ル）功何れの所にか歸せん。」（ヲ）拂子を擊

抄に「合はしづかと云ふ義。」

（エ）竹杖化龍去。竹杖は費長房が壺翁を辭して歸るときの故事後漢書列傳七十二に出づ、化龍とは威音已前より大活龍と化し去る、無佛無祖の見識なり。

（ヒ）癡人戽夜塘。これは碧岩の頌に「三級浪高くして魚龍と化す、癡人猶ほ戽む夜塘の水」とあり、評に云く、「癡人向ニ言下ニ咬嚼す、夜塘の水を戽んで魚を求むるに相似たり、これは錯で敎迹を守ると也。」珠云く「竹杖龍と化し去り、そこらをさがさば劔去つて久し矣。」虛堂、荊棘林から出たことだで、又云く「やい馬鹿め、なにをする、そこはせゝら水だ、そこにはない」と。禁足安居の相を認むる底の漢なり、或抄に、「癡人へまぬけもの）、戽は淈と同じく魚をとるために水をかへだすを、古來之を「くむ」と訓してゐるが、くみほすの意である、夜塘は夜中に魚をはいらせるために河邊にこしらへてある小さいつゝみの如きもの、日本の田舍でもこれに類似したものをこしらへて、川魚をとる。」一生懸命に夜塘の水をくみとつて、その魚をえやうとしてゐる癡人の憐れさよなり、戽斗は舟中に水を抒むの器なり。

（モ）永明壽。これは傳寫の誤なり興敎洪壽に作るべし、五燈會元幷に禪林類聚等に出づ、杭州興敎に住する洪壽禪師は德州に嗣ぐ、韶は法眼に嗣ぐ。

（セ）隨薪。これは叢林で普請作務のとき、薪作務のをりに、薪をになふてきておくときに大悟したこと、ぐわら〳〵と音のするをきいてなり。

（ス）撲落他物。珠云く「自己分上

のありさまじや、あまりよき頌でない」と。撲ばうつこと、或抄に云り、

(イ)縱橫是塵。一眞法界の故。珠云く「上下四維、人が一人居はせぬ、雀がつひに鳴いたことはない。」或抄に「外塵の境にあらず。」是れ塵は六塵など目前底なり。

(ロ)山河大地。始めて佛身法界に充滿することを見得すべし、或抄に「大悟の用、安居休歇の處を述ぶ。」珠云く「面目どのが鬢をなでゝ飛んで出た。」

(ハ)窮儒。貧乏學者。

(ニ)羣玉府。今の圖書館なり。

(ホ)稱心滿意。貧乏學者なるが故、書籍に乏しく、今羣玉府の書庫に登りて心のまゝに博覽することが出來るやうなもの、平生の志願滿足なり。

(ヘ)一字子。師故意に之を言ふて、人をして疑著せしむ、玄沙が靈雲の投機の頌を聞いて未徹底と曰ふが如し皆宗師の手段なり、白隱和尚も曰く「虛堂の評の中に一字詳ならざるあり、若し言句の細密に達せずんば、覷看しがたきことありと」。或抄に云く「眞箇那一物は何ほど言句を盡すとも、辭には述べられぬ處を云ふ、諸人みよ、節目なきところ節目を添へ、學者入得のためにす。」珠云く「此の一字子眞實擇法相のものにあらずんば見がたし。」

(ト)夏齋。或抄に「夏僧秉拂して後、堂頭和尙を(主席住持)請して齋す故に上堂して之を謝す。」

(チ)一稱南無。法華方便品の偈。

(リ)若說金輪。俱舍論に云く「器世間を安立すること風輪最も下に居り其の量廣きこと無數、厚きこと十六洛叉(億)、次き上に水輪深きこと十一億二萬、下の八洛叉は水餘凝結して金となる、此の金と水と輪との廣さ徑十二洛叉、三千四百半、周圍此れに三倍せり」。

(ヌ)山椒。山の頂を椒又は嶕といふ。

(ル)功歸何所。言ろは巳にこれ一稱の間に皆成佛たとひ說法地下天外に到る甚深高廣を極むとも、何の功の歸する所がある、是れ本分に約して開示して謝を致す也。」巳上は秉拂なり珠云く「どのやうに說きたてゝもむだ骨じや、根本功の歸する所は外にはない、一稱南無佛の首座でなくてなんとしやう」と。

(ヲ)擊拂子。珠云く「初に法華を論じ末には拂子を擊つ是れ什麼ぞ。」

(ワ)吽々。恐怖の義と譯す、吼亦作レ吽、許後切、厚怒(こうこう)の聲で又牛鳴なり、うぬめ、にくいやつなどとなり。

(カ)饆饠䭔子。小麥團子かどらやきもち「ひつら」は餅のたぐひ、「たい」は蒸餅を云ふ、忠曰く「今言ろはたとひ無量恒沙の功德盡く運び持ち來るべきも、這裡收歸の處あらん」この語に托し都寺の夏齋を謝するなり、吐腸甚だ大なり、凡そ

つて、(ワ)吽吽、甚の、(カ)饆饠䭔子の、(ヨ)快に下し將ち來るかあらん。」

上堂、擧す、僧、(タ)香林に問ふ、「如何なるか是れ室內一盞の燈。」香林云く、「三人龜を證して鼈と成す。」師拈じて云く、「香林二十年、雲門の侍者として、(レ)紙衣錄中に向つて、(ソ)此の句子を得たり、(ツ)育王は則ち然らず、忽ち人ありて問はゞ、只だ他に向つて道はん、(ネ)皇天私なし惟れ德是れ輔くと。」

(ナ)石帆和尚至る上堂、擧す、(ラ)雲門行脚して九江に到る、(ム)陳操尙書、請じて齋せしむる次で問うて云く、(ウ)儒書は即ち問はず、(ヰ)三乘十二分敎は、(ノ)自ら講師あり、如何なるか是れ衲僧行脚の事。」門云く、「(オ)曾て幾人にか問ひ來る。」書云く、「(ク)只だ今上座に問ふのみ。」門云く

食物あらば盡く將ち來れ呑噉を勞せず。」

(ヨ)快下將來。言ふ意は甚の句味の快然としてべ云きあらん、是れ則ち一氣轉藏の眞旨なり

(タ)香林。この語は寶林錄に見ゆ、巳上は夏齋を云ふ。

(レ)紙衣錄中。これは禪門類聚の侍者の部に、香林遠禪師久しく雲門の侍者たり、門說法雨の如し、絕ゑて人の其の語を記錄することを喜ばず、見れば必ず罵逐して云く「汝が口用ひず、」反つて吾が語を記す異日に我を裨販し去らん、今室中對機錄みなこれ師紙を以て衣となす、所聞に隨つて即ち之を紙衣の中に書す」と也。三人等は雲門の氣脈の中より得となり。

(ソ)得此句子。珠云く「なみ大抵の一句子ではない。」

(ツ)育王則不然。珠云く「虛堂は古る紙子のうらへ書いて付くるやうな佛法ではない。」

(ネ)皇天無私。これ書經の蔡仲之命に出づる語なり、私は親に作るなれども拈の意に云く、「惟だ證道の者あり、寂照必ず現前す」となり。或抄に云く、「一盞の燈、誰人の手前にかなからん、人々皆具足す。」皇天といふ燈は私照なしとなり。

(ナ)石帆。「じばん」とよむくせなり名は惟衍、運菴に嗣ぐ、天童に住す、虛堂の法弟なり。

(ラ)雲門行脚。この話は聯燈二十四に出づ、雲門錄下にも出づ九江は江西の九江府。

(ム)陳操尙書。雲門がまた文偃の時分、行脚中陳操が師を請待して齋をふるまふて。

(ウ)儒書即不問。儒書は手前御家のもの。

(ヰ)三乘十二。顯孝錄に見ゆ、如來の一代時敎なり。

「只だ今は且く置く、作麽生か是れ敎意。」書云く、「㋳黄巻赤軸。」門云く、「㋮此れはこれ文字語言、作麽生か㋘これ敎意。」書云く、「㋫口談せんと欲して辭喪し、㋙心緣せんと欲して慮亡ず」門云く、「口談せんと欲して辭喪することは、㋓有言に對するが爲なり、心緣せんと欲して慮亡ずることは、㋢妄想に對するが爲なり、作麽生かこれ敎意。」尙書對なし。㋐門云く、「聞く公曾て法華を看すと、是なりや否や。」書云く、「㋚不敢。」門云く、「經中に道く、『㋖治生産業、㋴皆實相と相違背せず』と。且く道へ、㋱非非想天、㋯今日幾人あつてか退位す。」書又對なし、門云く、「尙書且く㋛艸艸なること莫れ。㋓師僧家、㋪十經五論を拋却して、㋲特に叢林に入つて、十年二十年するすら、尙ほ奈何んともせず

㋨自有講師。とりさばきする法師達がありと。講師なり、經論のかうしやくする人。

㋔曾問幾人。珠云く、「あぶないいかな陳操もこれには」と。

㋗今問上座。珠云く、「此れで始終がしれた」又云く、「南無三寶、蹉過了也、早々合點、睦州のてんさくな盡さなんだゆゑ」。

㋳黄巻赤軸。これは遯齋閑覽といふ書に云く、「古今書を寫すに皆黄紙を用ふ、蘗を以て之を染む、蠹を避くる故に、黄卷と曰ふ」珠云く、「陳操おけばよいにまう〱、柳は綠花は紅とか。」

㋮此是文字。おさだまり、南無からたんのうなり。

㋘是敎意。佛のときたてた本懷のことなら、珠云く、「はあゝ、そ

㋫口欲談。口はむぐついても、言はれるものでない。

㋙心欲緣。珠云く、「心で兎や角する内、分別の緒がきれる。」この二句は華嚴演義鈔一二、肇公云く、「口欲レ談而詞喪、心將レ緣而慮亡」、則迥出二於言象之表一矣」より出づる語なり。

㋓爲對有言。珠云く、「よいのわるいのと云ふことを向ひ合つて云はるゝことで、敎意でない。」

㋢爲對忘想。珠云く、」たゞ凡夫の煩惱がなくなつたと云はるゝことで敎意でなし。」

㋐無對。珠云く、「とつく、よしにすればよいに、問ふ人がちがふ、三步に活すと雖も、五步に死に類す、機關にとちられた。」

㋚不敢。さやうでもござらぬ、ちとはみますの意なり、急度見たとは云はぬ、尙書も少々しりこそぼうなつた。

尙書㋝爭か會することを得ん。」書云く、「㋜某甲が罪禍」といつて、便ち作禮す。師云く、「㋺陳操尙書、㋑前面の數語は、雲門を勘すること未だ盡さず、㋩後面の數語は、雲門を㋥勘し盡す。今日忽ち人ありて育王に、如何なるかこれ行脚の事と問はゞ、只だ他に向つて道はん、我れ石帆老子と十餘年、㋭天涯海角に㋬走遍するだも、㋣尙は自ら知らず、今日再會、又これ二十年、㋠贏ち得たり牙蹤に鬢白きことを。㋷甚麽の行脚の事とか說かんと。他の擬議せんを待つて、㋦便ち一喝を與へん。何が故ぞ、㋸覔レ火和レ煙得、擔レ泉帶レ月歸。」㋾上堂、㋻空山人無うして、水流れ花香し、㋻鶖子㋕滿慈、㋵其の智辯を泯し、㋟離婁㋹師曠、㋞其の聰明を黜く。何ぞや、㋡法を識るものは

㋖治生産業。珠云く、「治生は身命を養ふ、産業はすぎはひ、大工は大工、左官は左官、妙法蓮華と少しも相違せず、皆佛性のしわざにて、少しも違はぬ。」語默動靜、擧足下足、本地風光なり。

㋴皆與實相。珠云く、「上王侯より、下萬人に至るまでそれぞれ。」或抄に「極頂の定なるが故に、別して之を擧ぐ、四禪八定も亦稱れて中に在り、これは有相の上なり。」法華の法師功德品に出づる語に依る。」

㋱非非想天。無色界の第四天なり、法相宗の八定を釋するなり、珠云く、「音聲が止らぬ、背觸がいけぬ、そりや此の天に、やつぱり遺留しては四弘願に欠け目が出くる如來の本懷でない。」非非想天は二乘の行者の窠窟、細想あるが故非非想と云ふ。

㋯今日幾人。治生産業みなこれ實相なる時は、則ち當に須らく非非想天の定位を退して人中の散地に來つて度脫す、且く道へ、即今幾く人あつてか彼の天位を退かんとなり、珠云く、「これききえて、何人ほどゝ、却來底婆婆へ出でくるがあらう」と、筋斗をさせたがつて。

㋛莫艸艸。まあ、ざつとおぼえさせるな、卒爾の義なり。

㋓師僧家。行脚の僧、禪學者。

㋪拋却。十經五論、碧岩には三經五論と作す、みな數卷の經論の義なり、ひつくろめて濟世の醫法表顯の說なり。

㋲特入叢林。わざ〱叢林に入りて師を擇ぶ。

㋝爭得會。珠云く、「手の入れやうも脚の入れやうもない。」家に在りて飽食安眠、いかで合點まゐらうぞ。

懼る。」

上堂、擧す、(ネ)龐居士因に(ナ)漉籬を賣る、(ラ)橋を下らんとして攧に遭ふ、女子靈照一見して、父の身邊に就いて臥す。「士云く、「甚麼をか作す。」女云く、「爺の地に倒るゝを見て、(ム)急に來つて(ウ)扶起す。」師云く、「(ヰ)虎、雞觜を憎む、聞くものは之を畏る。(ノ)後人衡鑑高からずして、喚んで(オ)二り倶に險を弄すと作す。」

結夏小參、(ク)破有法王、(ヤ)大陀羅尼門あり、名づけて(マ)圓覺と爲す。(ケ)能く一切の種智を成就し、(フ)一切の法門を破壞す、(コ)夢幻影邊に於て四方の衲子を聚集して、九十日の内、期を立て限を立て、(エ)決めて漆桶を打破し、(テ)慧身を成就せしめんことを要す。然りと雖も、只だ西天の(ア)制令の如きんば、還つて(サ)者の消息ありや

(ス)某甲罪過。陳操雲門に把定せられて、一重好きものになられた、巳上は雲門錄に之を載す。

(イ)前面數語。これは曾問幾人來といふより、尙書對なしといふまでを指す。

(ロ)未盡。半信半疑。

(ハ)後面數語。これは聞公會看法花經といふより某甲罪過に至りて大いに根がある。

(ニ)勘盡。見はされたと。雲門許多の辨論を領會して、某甲が罪過といふ。

(ホ)走遍。かけりまばつたれどとはり、遠方のこと。

(ヘ)天海涯角。天涯は此の界のを

(ト)尙自不知。十餘年の間、同道行脚の事だも、尙ほ自ら知らず、或抄に「知らざる最も親しの意あり。」

(チ)贏得。珠云く、「まうけにはじや、たつた一つのとりえにはじや、互に出合ふた處はなんのへんてつもなけれども、きつう年をよせた。」

(リ)甚麼行脚。別れてより今日再會に至るまで、又二十年其の間は衰老し去るのみにして別事なしと、珠云く、「なんの死んだわこと、行脚の事など、云ふもので」と、又云く、「今日幾人あつてか退位すと云ふのと是れとは、どうじや、はかりにかけてみよ、重いか輕るいか。」

(ヌ)便。やにはになり、突出になり。

(ル)覓火和煙。同伴同門、火と煙と泉と月との如し、自然に和氣投合すとは報恩錄の無準至るの至るを爺れと云ふが如し」鵠林大師云く、「沽め哉沽め哉吾れは價を待つもの也。」珠云く、「虛堂の御はことつておきじや、」又云く、「嗚呼、げすくわずじやきゝてがない、」或抄に云く、「覓火擔泉は行脚に比す、和煙帶月は行脚の事に比す。」

(ヲ)空山無人。人跡不到の處、自然の好風光、珠云く、「脫體現成用ふる底は、殺人刀、活人刀、水流花香で、觀音普門三昧。」

(ワ)鷲子。舍利弗、智惠第一なり。

(カ)滿慈。富樓那、辯舌無碍なり。

(ヨ)泯其智辯。智は舍利弗、辯は富樓那、如上の端的はなり。

(タ)離婁。寶林錄に見ゆ。

(レ)師曠。寶林錄に見ゆ。

(ソ)黜其聰明。聰は師曠、明は離婁、黜は癈なり。

(ツ)識法者懼。珠云く、「識れば云はれぬ、識らればめつたにしやべる。」又云く、「未到底はやれ現成公案じやのなんのと、已到底は法をしるものは懼るじや」と。

(ネ)龐居士。この話は傳燈錄の三、又稽古略三に出づ。

(ナ)漉籬。いかき、又あじか、又みそこしいかき。

(ラ)下橋遭攧。攧は蹎に作るべし、つまづくなり。

(ム)急來。急にかけ付いてたすけおこす。

(ウ)扶起。おこしはしないで伏して居る。

(ヰ)虎憎雞觜。「靈照が意の如く尅對して、爺を看盡さんことを要す、溪注に見ゆ。或抄に云く「先づ本則の意地をよく見るべし、靈照は父の倒れたを眞實に扶起したものぞ、虎憎雞觜とは十二辰の相尅の歌の語なり、虎は寅にして木雞は酉にして、金これ金、尅レ木なり、不祥不吉の運なり、聞者畏レ之とは不吉の運の樣子を聞いてきづかひする體なり、今ば靈照父の倒るるを見て、此れは不慮の禍よと畏るとは氣の毒に思ふた、それ故に急に扶起したとなり、父の身邊に就いて臥したは扶起のし樣なり、それなば後人が會せずしていふは靈照が臥して扶起もせずに、扶起すと云ひたる機關のはたらきにして、機鋒嶮峻なるところを振舞ふたものなりと云ふなり、溪抄は何とやら似たやうなことで、本則の意地に徹せざるなり、又其の同抄に玉浦云く、「虎憎二雞觜一は寅年に生るゝ人は、酉の日時愼み畏るるなり、此れ相尅なり、此の二句は相克の義なり、靈照が居士を扶起すと云ふて、却つて臥すを云ふ君は西秦に向ひ我れは東晉に行くの義、相尅の處、眞箇の智音底なり」と、これは古抄にいふところ。逸堂の講に、今言ふは靈照爺の顚くを見て、忽ちおどろき扶起せんと欲すのみ、虎の雞觜を憎むの相克歌を聞いて、驚き忌む者の如し」となり。又或抄に「照女居士を勘辨せんとす。」鵠林垂語して云へり「鬼一指を立つ」と。珠云く、「此の間で類のない評判。」

也た無や。」拄杖を卓して、「(キ)李廣が神箭、(ユ)張顚が草書。」

復た擧す、(メ)朱行軍、一日(ミ)南際寺に入つて僧に齋す、(シ)香を行く次で、手爐を以て(ヱ)搖曳して云く、「(ヒ)直下是、直下是」と。時に僧あり云く、「(モ)直下是、箇れ甚麼ぞ。」(セ)行軍便ち喝す、(ス)僧云く、「行軍は是れ佛法中の人、問着すれば便ち惡發す。」行軍云く、「儞惡發の會を作す那。」(イ)僧便ち喝す、行軍亦喝して云く、「(ロ)不疑の地に鈎在す。」復た「左右(ハ)者の僧を認取し着せよ」と喚ぶ。師云く、「人は言ふ、(ニ)王母池邊、一株樹あり、名づけて(ホ)蟠桃と曰ふ、三千年に花を開き、三千年に果を結ぶ、更に三千年を待つて、方に纔かに成熟すと。且く道へ、行軍と(ヘ)相見の分あり麽。」拄杖を卓して、「(ト)參。」

(ノ)後人衡鑑。珠云く、「はかりさばきが手に入らぬ、かゞみがくもつてあるから」と。

(オ)二俱弄險。今父子俱に平處に於て險を弄して相攤溢せしむと爾が云ふ、珠云く、「父子二りとゝに足のふみ立てられぬあぶない、なぐさみをする。」「向上嶮峻じや、龎と靈との孤負の處」と或抄に見ゆ。

(ク)破有法王。圓覺經の首章には「作二無上法王一有二大陀羅尼門一。」法華經の藥艸喩品には「破有法王、出二現世間一す」とあり、玆に文を轉換するなり、有を破したまふ法の王なり、有とは生死の因果、相續する世間を有と云ふ。二十五有ありて一切の生死流轉を收む二十五有とは三界を二十五に分つなり、如來は二十五有を破したまふなり。珠云く、「佛如來三界二十五有を破除するなり、」又云く、「人人はてつばらにある面目じや。」或抄に「一切虛妄の有相を破するなり。」

(ヤ)大陀羅尼門。譯して悲持といふ、珠云く、「日本でならば歌じや。」

(マ)圓覺。圓覺體中塵沙の德用あり、從本已來之を持して失はざる故に、陀羅尼と云ふ、珠云く「大圓滿覺とて山河大地一全身じや」と。

(ケ)能一切種智。珠云く、「かの圓覺は能く佛の一切種智を成就す、活人劍じや。」智度論八十四に曰く、「一切種智は是れ佛智なり、一切種智を一切三世法中通達無碍智と名づく」云云或抄に「一切の善法を建立するなり。」これよりは虛堂の云はゝことば、種智は悟得智なり。

(フ)一切法門。珠云く、「四諦十二因緣六度等及び斷惡證理の隔歷の法門を破壞するの殺人刀じや。」又云く、「濟度の門戶をとざして居ては役にたゝぬ、ふみ破り濟度の門をおつぴらくしじや。」溪注に「陀羅尼の徹用を標顯す。」智度論二十七によると、即ち云ふ「陀鄰尼、論に自ら翻して能持と爲す、亦能遮と云ふ、いはゆる種の善法持して失せざらしむ、惡不善の心遮して生ぜさらしむ、能く一切善法の種智を成就し、一切不善の法門を破壞す。」破壞は或抄に掃蕩するなりとあり。

(コ)夢幻影邊。教迹中を謂ふ、楞伽に「所謂實の聖智は言說に在り、故に言迹を以て夢幻泡影の虛假の法に喩ふ、」前の寶林錄にある結夏の次の日に云く、「二千年前底の影子を蹈著すとは是なり、珠云く、「夢幻泡影の如き婆婆において」或抄に「佛の言說のあとをとむるなり」又云く、「影邊は世間法なり、建立なり。」こゝでは三期の禁制を云ふなり。

(エ)決破漆桶。決は定なり、漆桶は膠粘の無明なり、珠云く、「無明煩惱の暗窟じや、」又云く「無分じや。」

(テ)成就慧身。珠云く、「色の外に慧身なばじや、見聞の上直に背觸の端的となる。」

(ア)制令。天竺の制度法令。

(サ)有者消息。珠云く、「こんな樣子があらうか、」或抄に「打二破漆桶一成二就慧身一底の吾が宗の那一著があらうか。」

(キ)李廣神箭。史記の李將軍傳に「廣、人と爲り、長猨臂、其の射を善くする亦天性なり、蓋し天性の故に神箭の故なり。」珠云く「石をも射とほすやうな射手の名人」と。

(ユ)張顚艸書。事文類聚の書法に「張旭艸書を能くす、大醉呼叫して狂走す、乃ち筆を下す、或は頭を以て墨を濡して書す、既に醒めて自ら視て以て神と爲す、復た得べからず、世に張顚と呼ぶ、張旭が艸書は驚蛇の艸に入るが如し、飛鳥の林を出るが如し、」又「張旭三盃艸聖傳ふなど杜詩にあり」溪云く「この二公は修練を假らずして其の技神に入る底なり、以て無修の大行を證す。」珠云く、「醉いたくつてゐて、不思議の能書。」鵠林着語に云く、「魂飯來兮不レ可レ往二上方一魂也飯來兮。」或抄に「物は共に物を忘る、物我雙泯の處、此の妙處あり、虛堂這箇の消息を自在に受用する底なり、いはゆる我れを忘れて、則ち法を忘れたる境界を云ふ。」其の妙處法を忘るるなり。

(メ)朱行軍。廣燈十四、又は類聚の一に出づ、涿州の人、尅符道者の法嗣の居士なり。克付は濟に嗣ぐ、朱は姓で行軍は唐の諸州總管と云ふ普軍の役なり、會元にも出づ。

(シ)行香。行は「ひく」、忠曰く、「官人あり、寺に來る、香を行くを行香といふ、施主あり、自ら寺に來りて行香するを云ふ、僧史略に詳な

り音で「あんかう」とよむ。

(ミ)南際寺齋僧。南際は類聚の賢臣并に會元等には皆南禪に作る、蓋し洛京の南際にあり、故に之を稱する乎、齋僧は大衆に御ちそうをふれまふた。

(エ)搖曳。手爐は柄のついてゐる香爐柄香爐を左右に動搖引曳してと。

(ヒ)直下是。此の端的がさうじやぞよ。

(モ)直下是箇。まつすぐならばとなり又云く、探竿影草と。

(セ)行軍便喝。こりや罵つたか褒めたか、探竿を截斷す。

(ス)惡發。はらたつとじや。

(イ)僧便喝。このごくだうさむらいめ。

(ロ)不疑之地。眞實底を鈎得するの謂なり、珠云く、「不疑は徹證の位を云ふ。或抄に「鈎在は彼此一問一答商量の上に、兩方の手段が忽ち見えてなり、又の義に此の僧が從來我れを疑着して居たか、今一喝の下、此の僧を疑ふことなき處へつりつけた、」珠云く、「つりさがつてゐたを、行軍とつくに見ておいた。」

(ハ)認取者僧。此の僧をよく見知つておけとなり、稱美して言ふなり、珠云く、「皆の衆、この僧をよく見しるしておけ」と。これまで會元等に詳し。

(ニ)王母池邊。珠云く、「桃はめづらしいものじや、朱行軍が見地に譬ふ」或抄に「二人一問一答の上、世に希有なり。」

(ホ)蟠桃。行軍が峻機妙用、世に希有にして又遇ひ難きに喩ふるなり。漢武故事に「東都より短人を獻ず東方朔を呼び至らしむ、短人曰く「王、母桃を種う、三千年一たび花を開き、三千年に一たび子を結ぶ此の兒不良なり「三過之を偸む矣」云々と。池邊は瑤池を謂ふ「周の穆王西王母と瑤池の上に觴す」と事文類の仙部に詳なり。蟠桃は其の樹大にして屈盤すればなり。纔は「ちよつくり、」方は「はじめて」、そこでやう〳〵まことにめづらしきもの、たつといものと。

(ヘ)有相見分。珠云く、手をとり合ふて話がならうか。」或抄に「上件の如くの行軍と、世に希有の桃とじや、人々相見の分量があるであらうか」と。

(ト)參。更に參ぜよ、三十年又鐵橛子珠云く、「參禪のことと云ふ、そのごとではない能く虛堂のねどこへ入りてしれ。」

(チ)雪竇謙。大歇謙、松源岳に嗣ぐ、師の法叔なり。

(リ)敲雲夢破。溪注に夢破舟移ば遷化の意を述ぶと。

(ヌ)漱玉舟移。舊說に二亭の名、共に雪竇に在り、敲雲は雪竇の方丈の額、漱玉は雪竇の境內の水の名なり、言ふ意は雪竇尋常敲雲に於て爲人說法して、夢中に夢を說いて居られたが、いつしか夢もさめ去つたとなり、又平生漱玉に舟を浮

(チ)雪竇謙和尚の遺書至る上堂、(リ)敲雲夢破れ、(ヌ)漱玉舟移る。(ル)時に乘じて虛空を撥轉す、(ヲ)大地了に寸土なし。故に(ワ)我が妙高孤頂の(カ)大歇老人、(ヨ)麩に和して麵を糶つて、(タ)中峯巳墜の宗を起し、(レ)土を嗅ぎ沙を吹いて、(ソ)松源爲人の眼を瞎す。(ツ)秤槌汁を覓む、(ネ)涙は痛腸より出づ。(ナ)箇般の生滅惡冤家、(ラ)萬古千秋終に死せず。」

上堂、(ム)諸方多くは見地を說く、鄧峯は(ウ)只だ宗旨を論ず。見地明かなることは則ち見地の爲に(ヰ)奪はるゝ宗旨通ずるときは則ち宗旨の爲に(ノ)執せらる。如今、(オ)一箇の見地明かならず、宗旨通せざる底を討ね、(ク)出で來つて(ヤ)松源直下の火種と做さんことを要す、(マ)亦難からず乎。」

解夏小參、「百二十日の長期、(ケ)孜孜矻矻、(フ)俊

べ往來を度して安穩の彼岸に到らしめたが、今は舟も移り去たとなり、夢破れ舟移るとは遷化の意を述ぶ。珠云く、「この和上の遷化したと云ふも、舟がどこかへいつた、往き來の人の渡を失す。」

(ル)乘時虛空。珠云く、「こゝを最後と時に乘じて撥轉すとは、とつてかへした、」或抄に「沒蹤跡。」

(ヲ)大地了寸。珠云く、「世界國土ちり一つなくなつた。」溪云く活機輪を撥ぶときは則ち天荒れ地老いる、これ大人入寂の瑞なり」或抄に云く、「遷化の當體、大機大用を云ふ。」

(ワ)妙高孤頂。雪竇の境致。

(カ)大歇老人。續佛燈三に傳あり但だ二頌を載す。

(ヨ)和麩糶麵。麩は粗、麵は精、合和して賣與す、これ賊の手段宗師爲人の體裁なり。珠云く、「羊頭を掛けて狗肉を賣る底、たぶかさにや、兎ても凡を轉じて聖となすことはならぬ。」或抄に「商に手をして賣ること」と。

(タ)中峰巳墜。密菴を中峯といふ密菴、淳熙十一年老を天童に歸し、既に葬りて遺すところの齒髮多く、舍利を生ず、本山の中峯に塔す、密菴錄に出づ、「中峯は天童の山中にあり。」

(レ)嗅土吹沙。說法の樣子をいふ江湖集に、「更拋ㇾ沙土口叨叨」といふが如し。珠云く、「師子の飜擲のあばれるけしきを云ふ。」又云く、「落花狼藉。」古抄に云く、「能く物を辨ずるの義」と。

(ソ)松源爲人。故に我れ巳下は平昔祖考の道を振起することを嘆ず「珠云く、「瞎とはふつつぶしたなり、松源の宗旨を盡しぬいて、超師の作あり、松

源の目の及ばぬ處履踐する故に瞎すと云ふ。

(ツ)秤・槌・覔・汁。珠云く、「是の如き又々得がたきことば秤槌に汁を覔むる如し。」或抄に「鈍漢の謂なり、言ろは大歇老人の分上心に思議すべからず、今妄りに之を談じて强ひて義味を著く、これ亦零涙痛腸の堪へざるに依つてなり。」

(ネ)涙・出・痛・腸。珠云く、「目からはでぬ臍の下からでる。」溪云く、「此の二句は擧哀なり、言ふ意は此の如く痛哭して欽慕すとも、それ又得べからざること、秤槌に汁を覔むるに似たり。」

(ナ)箇・航・生・滅。珠云く、「凡夫の生滅とはちがふ、護法の心强き故に、生滅は煩惱なり。」或抄に云く、「如上の生前滅後の惡辣は活手段のところ。」又一義に云く、「生滅なきところ假りに生滅を示す、此れ實に惡寃家なり。」

(ラ)萬・古・千・秋。凝云く、「この二句は鼻孔を回轉して本地に衒入す、言ろは萬古不生滅の法にして、却つて箇れ般の生滅を示す、謂つべし惡寃家、人を礙塞殺す。」

(ム)諸・方・多・說。自巳の能證の智也、珠云く、「三十あまり、われも面目透過の端的をとく。」或抄に云く、「嚴陽尊者の一物不將來、又甚麼をか放下せんと道ふ底なり。」

(ウ)只・論・宗・旨。法體を指す、所證の法所謂佛祖の大宗正旨なりと。珠云く、「不疑の地の見得では、虛堂は賞玩はせぬ、參天の荊棘をば、ぼつこへ〳〵。」

(ヰ)所・奪。珠云く、「見地のくさみにうはゝる」と。

(ノ)所・執。或は悟處に滯り、或は法體を執す。

(オ)一・箇・見・地。珠云く、「一箇半箇でもだいじないが眼見耳聞飢ゑ來れば喫し渴し來れば飮む、なんのことなき無玷底を討ねだして、祖翁直の子孫と仕たいと思ふ、こりや日中の斗じや。」

(ク)出・來。無心大僻脫底が。

(ヤ)松・源・直・下。松源門下のもの種となさんことをとなり、火種は續焰の種族又は慧命とも云ふ、種類種族の義ではない。

(マ)不・亦・難・乎。嗚呼かたい〳〵、ゐにくいものではあるまいか。

(ケ)孜・孜・矻・矻。勤勞なり、つとめつとむ。

(フ)俊・鶻・巢・雲。蹤由を見るべからざるの境界なり、これ勤勞して本分を踐む故に、珠云く、「俊鶻で自然と氣か高い。」或抄に「これは上の句の着語なり、衲僧が向上に坐在してよく離れぬと抑へた、巢の義は住在といふことなり。」或抄に「此れは夏中、孜々矻と勤勞の當體なり。」

(コ)二・千・年・舊・話。古佛の制禁を興復する故に、珠云く、「迦葉微笑以來、一大藏經面前ぐわらりと最初からあらたにとなり。」或抄に云く、「虛堂自分の上なり、二千年以前の法要を、虛堂今日拈起して示すなり。」

(ヱ)黑・牛・臥・水。無分曉の境界なり水色黑き故に、是の新舊生佛一致の義、上の俊鶻に通じて著語の體。珠云く、「日月星辰一時に暗し、大地も載せ起さず。」又云く、「てまいのか、釋迦のか、どつちかこつちかしれん。」或抄に「黑牛は水は黑色に取る、此の句は無分曉の義又濁を下るの義、此の如く擧話するは無分曉にして、落草して濁に下つたと、虛堂の自分をも抑へた、上の俊鶻の句は向上を抑へ、此の句は向下第二義に下るを抑へた、臥水とは、此の途徹に涉らずじや。」二千年前世尊の擧著する所の一句子、更に法規に拘はらずの當體なり。

(テ)與・麼・會。今日規矩の中長期を守る。

(ア)麁・中・之・細。六麁は見聞覺知を云ふ、その六麁の中の起業相等は、麁中の麁、智相等は麁中の細。珠云く、見聞覺知に就いて、瞥起する六麁といふ、直常流注重淵を透過するに隨つてなくなり。」又云く、「境界を緣と爲して六麁を起す、見思惑と名づけ、これ枝末の惑、其諦の理を障ふ、宜しく、空を修して之を破すべし。」或抄に「麁中の細は俊鶻巢雲を指す、細中の細は黑牛臥水を指すなり。」六麁は業轉現の三細に由つて生ずる故に六麁と名づく。

(サ)細・中・細・猶。三細の中の轉相等は細中の麁無明業相は細中の細なり、故に難易知るべしと、珠云く、「微細の流注じや、更に向上一段の事あり、宗旨の子細なり、些子の大事を傳ふ

鶻雲に巢ふ、(コ)二千年の舊話從つて新なり、(エ)黑牛水に臥す。(テ)與麼に會するときは則ち(ア)麁中の細、猶ほ易と爲、(サ)細中の細、猶ほ難しと爲。故に(キ)我が竺土老師、(ユ)身を檢することを謹まず、(メ)己を以て人に方ぶ、末代の比丘をして太半(ミ)鰕を以て目と爲さしむることを致す。育王の一衆は、(シ)善く時の變を觀て、盡く(ヱ)規矩の外に在り。何が故ぞ。」拄杖を卓して、「(ヒ)有る時溪頭の石を拾ひ得て、(モ)蘚を帶び雲に和して綠陰に枕す。」

復た擧す、(セ)翠嵒の靈參禪師、衆に示して云く「(ス)一夏(イ)兄弟の與に、(ロ)東說西話す、看よ翠嵒が(ハ)眉毛在り麼。」保福云く、「(ニ)賊と作る人、心虛る。」長慶云く、「(ホ)生也。」(ヘ)雲門云く、「關。」師云く、「(ト)三大老、各隻手を出して、(チ)翠嵒の門

或抄に云く「無相方便、至佛知得。」

(キ)我竺土老師。釋迦老師なり、或抄に「私に云ふ麁中の細じや」と。

(ユ)檢身不謹。本分を守らず、漫に敎綱を張る。珠云く「法身向上を守らず、謾に出世放行、」又云く「自分の身の上を引きしめることをせぬじや。」

(メ)以巳方人。世に天生自然智あることを知らず。珠云く「皆も我れと同じやうに一統に思つて自らの斷惑證理を以て方比して、余人も亦然りと爲す。」

(ミ)以鰕爲目。三分の二を太半とす、鰕は蝦に作るべし、前の延福錄に見ゆ。珠云く「五千四十餘卷、經敎に取り付かれば、獨りはたらきのならぬやうに仕なした。」

(シ)善觀時變。固必なしとなり、珠云く「鷄足の眞風地に墜ちた時の變をよく觀念して」と。或抄に云く、「育王の一衆とは細中の細じや」と

(エ)規矩。孟子離婁の注に云く「規は圓を成すの器なり矩は方を成すの器なり、」或抄に「細惑を掃ひ盡して、一點の塵埃なき境界じや、外にありは禁足護生に拘らず。」

(ヒ)有時溪頭。珠云く「理ではあると思はず、麁末ながら安逸の一物を拾ひ得、蘚や雲と一つにぐう〳〵やつてゐる事では風塵世外、人のうかゞひ知ることならぬ處に、れたりおきたりして居ると、師の意は別に參決すべし。」又云く「今まではよかつたが、こゝで異なものになつた。」

(モ)帶蘚和雲。蘚雲の二つのものは石に緣す、これ無心解脫の行履、豈に規矩を存せんや、懶瓚の所謂臥藤蘿下、塊石枕頭の境界なり。

(セ)翠岩。令參和尙は雪峰存に嗣ぐ、翠岩は明州にて化導しゐたので、翠岩と云ふやうになつた、その生死は詳でないが、令參永明といふ、安吉州の人なり。保福從展は漳州の保福禪院に住して居ましたから、通名が保福になれり、參徒七百有餘と、實に盛なり、後唐明宗天成三年に示寂す、日本の醍醐天皇延長六年に當る。長慶慧稜は長樂府(福州)の長慶院に住してゐたので通名となつた、泉州の招慶寺にも住したので、招慶とも云ふ、ともに接近した寺であるから兼帶二十七年間で、參徒は千五百人もあつたと云ふ、この人は杭州の產後唐明宗長興三年示寂す、日本の朱雀天皇承平二年に丁る、翠岩もこの頃の兄弟弟子なれば年代考へつべし。

(ス)夏。夏安居なり。

(イ)與兄弟。云ひまじきことまで兄弟のためにと。

(ロ)東說西話。あゝ說きかうはなしす

(ハ)眉毛在麼。佛法をあまり俗向きにとくと、その罰によりて眉も鬚もおちてしまふと云ふこと、在麼は有麼ではない、あるかないかの意、在麼はまだついてゐるかどうかの

意珠云く「賊意と見たら大ちがひ此等が奪命の符じや」と。

(ニ)作賊人心虛。平らたくいへば、泥坊をするやうなやつに正直者はないの意。珠云く「大だはけの大ふぬけどもが、翠岩が賊意じやなんどと、」鵠林曰く「此の翠岩眉毛の則は就中の奪命の符、向上の秘曲かうより外、辨はない。」同じく曰く「判語分明、臨濟德山亦及ぶべからず」と。

(ホ)生也。眉毛がまだついてゐるも居らぬもない、のびてゐるの意。

(ヘ)雲門云關。雲門はやはりこの同時である、保福の寂した翌年長興元年に韶州靈壽寺に住す。關はこれは唐宋時代の俗語で、本來の意義は函谷關、鎮根の關、白河の關などの字と同意義であるが唐宋時代に於ては、この語を警戒を意味する間投詞として使用した日本の俗語で云ふと、そらはじまるぞ、そらあぶないといふ意なり、雲門は翠岩の說話を關所と見たのである。この話は翠岩が九旬の夏末に於て解制の日となり、これから遊行すると云ふ時に、みなの大衆たちに向つて「夏入以來みなの大衆のために第二義門へ下り、いろ〳〵と說話して、佛がどうの祖師がどうのと申したが、回顧するとどうですか翠岩の眉毛はまだ大丈夫ですか、なくなつては居ませんかと云つた、すると弟子兄弟の保福は「泥坊をするやつに、ろくなものはない、翠岩の言葉に油斷するな」と云ふ。長慶は「眉毛がのこつてゐるどころでない、大のびにのびて居るよ」と云ふ、雲門は「あぶない、あぶない畏にかゝるな、關所があるぞ」と勘破した、それで雲竇も「千古對なし」と頌してゐる、千萬年たつてもこれに應答するものはない。

(ト)三大老各。三人の老師が力をそへて腕力をふるつた。

(チ)翠嵓門戶。珠云く「將に倒れんとする門戶をたすけおこして、雪峰老漢の師恩を報ぜねばならぬ。」

(リ)爭奈同心。志は心の之く所なり、鵠林著語して曰く、「有レ母子寒、無レ母三子寒。」珠云く「第一義諦は相替らぬやうにやることは合點して用ふるときはどうぞと思つてそれはかなはぬこと、是れ什麼ぞ」

(ヌ)龍得雲靈。雲は學者にたとへる、珠云く「大小の身を現じ、荒草を救ふ、法を護すれども雲がなければならぬ。

(ル)虎得風威。易の乾卦に「雲は龍に從ひ風は虎に從ふ」と。

(ヲ)叢林得人。喩を以て人に歸す、人とは大名聲の高士なり、珠云く、德山臨濟を欺く底の人も、その下にあれば」と。

(ワ)則綱目正。大綱條目、禪誦禮樂等を謂ふ、珠云く「叢林では老成の人を重んず、法式威儀正しくなれ

戸を扶樹して、以て雪峰に報いんことを要す。(リ)爭奈せん、只だ心を同じくすることを解して志を同じくすること能はざることを。」

雨班を謝する上堂、(ヌ)龍、雲を得るときは則ち靈あり、(ル)虎、風を得るときは則ち威あり。(ヲ)叢林人を得るときは、(ワ)則ち綱目正しく、(カ)法令嚴なり、(ヨ)自然上下其の居を安ず。然る所以の者何ぞ也。」拄杖を卓して、(タ)歲寒うして松栢の後に凋めることを知る。」

(レ)中秋上堂、「(ソ)人間には無、(ツ)天上には有、往往に(ネ)人の窠臼を脱するなし。(ナ)四海娟娟として玉魂を洗ひ、(ラ)九野茫茫として白兎走る、(ム)寒山子口を闔さず、(ウ)也た馬駒群隊の後に落つ。」

上堂、擧す、徑山の(ヰ)法濟和尙、因に僧問ふ、

ば」と。
(カ)法令嚴。規矩等が嚴重なれば
(ヨ)自然上下。非法行はざる故に心よく辨道修行する、居は居位なり。
(タ)歲寒松栢。論語の子罕に「歲寒くして然る後に松栢の後に彫むことを知る、」注に「卜人の治世に在る、或は君子と異なることとなし、惟だ利害に臨み事の變に遇ふて、然して後君子の守る所見るべし。」貞正の謝を致す、餘は此の錄初めに見ゆ。珠云く「春秀てた時は見わけ手はなけれども、寒中になると餘の雜木と分ちがしれる。」或抄に云く「外面兩班の人節操丈夫の氣、後はおくるゝことなり、凋は屈せぬなり。」
(レ)中秋。このとき無月乎。
(ソ)人間無。中秋無月の故に、或抄に人々眞箇の月あり、以爲らく月は只だ天上のみに在りて人間に在らず」と。
(ツ)天上有。きら〳〵てりかゞやく。
(ネ)人脫窠臼。有無の窠臼に墮して皆光影を弄する底なり、珠云く、「暗といへば暗の窠臼明といへば明の窠臼、無といへば無の窠臼、有といへば有の窠臼。」
(ナ)四海娟娟。上の端的作麼生々生々餓鬼もならくも盆も正月も互に分明、八識をふみ破ると此月は現在す。玉魂は月をいふ、「四海は人間に就ていふ。
(ラ)九野茫々。天に九野あり、天をいふ、九天に偏しと、茫々は方量もない大ぞら、兩句は月明の普きことを述ぶ、四野は四夷八蠻の外でも、一輪の白兎照りかゞやく、九野は天上に就ていふ。
(ム)寒山子口。「吾が心秋月に似

(ノ)「掩息灰の如くなる時如何。」濟云く、「猶ほ是れ時の人の(オ)功幹。」僧云く、(ク)幹くして後如何。」濟云く、(ヤ)耕人田種ゑず。」僧云く、「畢竟如何。」濟云く、「(マ)禾熟して場に臨まず。」應菴和尙拈じて云く、「(ケ)鳳閣(フ)香沈んで、(コ)雪巢夜冷じ(エ)半窻の明月、(テ)和氣藹然。」師云く、「(ア)一人は貧しからん事を要すれども貧しきこと得ず、(サ)一人は富まんことを要すれども富むこと得ず(キ)貧富相當らざることを知らんと要せば、(ユ)且く請ふ各年位に歸して立て。」

達磨大師忌の拈香、(メ)赤幡行に隨ふ、自ら謂へり、神機辯ずること莫しと。(ミ)白鷺洲頭に到るに及んで、(シ)老蕭の言下に死在す。(ヱ)聲、魏國に沈み、(ヒ)影、孤龕を脱す。(モ)法門垂秋の際に當つて、(セ)痛く已往の蹤を思ふ。(ス)此の溪毛を

たり等と前の興聖錄に見ゆ、是れなり、珠云く、「此の臼をこえたがつて詩を作りて高聲によばはつた。」
(ウ)馬駒群隊。馬駒は六祖大師、南嶽に謂ふて曰く「爾後一馬駒を出して天下の人を踏致し去ること在らん、」羣隊も亦羣なり馬祖が翫月、知藏、百丈南泉相聚りて群を成すなり、緣はこの錄の續輯等に出づ、言ふ意は寒山云く、敎ニ我如何說一、是の如く讚歎し得て、口を闔さゞれども、也たみな人後に落づ此の兩句は翫月の故事を述ぶ、全篇押韻。
(ヰ)法濟和尙。洪諲は徑山第三世法濟大師といふ、吳興の人、潙山に嗣ぐ、唐の昭宗光化四年九月二十八日示寂、日本の醍醐天皇延喜元年に丁る。
(ノ)掩息如灰。氣息を掩閉して死灰の如くなるなり、大無心の儀狀を表す、珠云く、「身心共に休罷、大死底隻手の聲をすつかりきいた當體じや。」或抄に「全體念を止め無心になるを云ふ。」
(オ)功幹。幹は事を能くするなり是れ有功用の事なり、珠云く「大いに骨折苦勞するとできる。」
(ク)幹後如何。功能の事了りてのち如何。
(ヤ)耕人田不種。無修を表すなり珠云く、「なはしろはかいたが田は種えぬ、こゝでへんてつがはづれたか、張合ひぬけて」或抄に「無功用なり、純功耕因分修行。」
(マ)禾熟不臨場。字彙に場は禾を收むる圃、もみをこなすところ、無證を表す、已に種えず又收めず、無修無證、眞箇無功用の義なり、珠云く、「畢竟如何と僧がおしとふてくる、

有無功に渉らぬときばどうじや、と濟は禾熱不臨場と無功用を第一とし書を馳せて家に到らずじや、これは悟道の當體じや。」

(ケ)鳳閣。この拈語、應菴錄の再住、歸宗寺錄の上堂にあり。鳳閣は禁闕御所を云ふ、閤は小門。

(フ)香沈。深夜の義、これ達士の直宿するところなり、所謂有功用邊、珠云く禁闕の牛みつ時。」又云く、「正位心王を云ふ、闞辟をそらたきみたしたまう夜ふけがだ。」忠曰く鳳閣香沈は王者の富貴。」この四句は法濟の荅話を拈ず、窮達の有功用無功用を以て解するもの取るべからず。

(コ)雪巢夜冷。此の窮士の宿る所なり所謂無功用邊珠云く、「鳥もいぬ、ものすごい、本分只だしづかのありさま。」忠曰く「雪巢夜冷は野夫の貧態、雪のときは巢を明くるほどに、」「巢の字は家宅の意にみよと或抄にあり。

(エ)半窻明月。珠云く「ちらりと半ばさし入つた處、なにとなく心の和ぎわたつて、歌にも連歌にもよまれぬ、佛祖も說き及ぼすこと能はず、」又云く「こゝの魂膽は知つたものでなければ知られぬ。

(テ)和氣藹然。藹然は當に靄然に作るべし、雲の貌、言ふ意は半窻の明月に對して、則ち自然に和氣靄然而して鳳閣雪巢その樂差異なし、是れ有功用無功用、恁麽と境界に到つて、畢竟一般の義なり、此話兩般あるに似たり、故に此の如く拈破す。

(ア)一人要貧。一人は法濟を指す、貧者無功用珠云く「一人は正中偏、一箇打着、一箇打不着の義、」又云く「隨分はきちぎり、さつぱと洗いぬいてうゐほひないやうにすれども、さうでからちあかぬ。」忠曰く「謂ゆる此の一人は應庵を指す、」言ふは意應菴有功無功を拈じて一般と爲す、其の富已甚だし、貧ならんと欲すと雖も、貧得べからず、一人は貧を要すとも貧なること得ずと點ずるがよしとなり。

(サ)一人要富。一人は偏中正一人は應菴を指す、富者有功用なり、珠云く「無味の處へ味をつけたがるに依つて、なんぼうでも付かぬ。」忠曰く「此の一人は法濟を指すなり言ろは法濟は一向に功用を掃蕩す貧窮徹骨、富まんと欲すと雖も、而も富み得べからず、一人は富を要すとも富むことを得ずと點ずるがよし」となり。

(キ)貧富不相當。有功無功、共に立たざる境界、珠云く「貧は兼中至、不相當は相等しからずで、正偏があつては眞實祖師門下の宗匠とはならぬ。」

(ユ)請各歸本位。法濟は僧の有功用を奪ふ、應菴は法濟の無功用を奪ふ、故に恁麽に拈ず、珠云く「それぞの通り、男に非ず、女に非ず、佛に非ず、衆生に非ず、土民をつか

薦めて、(イ)少しく追遠を伸ぶ、(ロ)霜大野に飛んで、木崇崗に落つ、(ハ)膽裂け心摧けて、未だ話らざるに先づ咽ぶ。

冬至小參、(ニ)一氣潛に回る、(ホ)八角の磨盤空裏に走る。(ヘ)六爻纔に動ず、(ト)無毛の鷄子天に貼いて飛ぶ。(チ)是れ他の時節因緣にして、(リ)四時の消長を逐はず。衲僧家、(ヌ)眼睛瞌地にして、(ル)者裏に坐在す。直饒ひ(ヲ)葭灰末が動せざる已前に向つて、(ワ)西川の鄧師波の、(カ)東山下の左邊底を會得するも、(ヨ)也た未だ是れ枯木花を開く底の時節にあらず。何が故ぞ。」主丈を卓して(タ)冬寒からずんば臘後に看よ。」

復た擧す。(レ)古德因に僧問ふ、「如何なるか是れ(ソ)冬來の事。」德云く、「(ツ)京師大黃を出す。」師云く、「(ネ)朕聞く、(ナ)上古其の風朴略にして、(ラ)

まへて天子とするは、」又云く「佛祖も手をさしはさむことならぬ處が知りたいか。」「この語話は始終洞下偏正の意を以て、見は則ち解し易し」と或抄に見ゆ、或抄に云く「本位とは外面は上堂の時、大衆立班位、此の句は退步の義なり。」

(ヌ)赤幡隨行。赤旛は碧岩十三則の評に「西天(印度)では論議して勝つものは手に赤旛を執る」と、今言ふ意は祖師嘗て六宗に勝ち、赤旛常に行に隨ふ自ら謂へり、神機妙用、辯に當るものなしと、其の威想に見るべし。珠云く「紅の大幡灰ぼうきを一本たてずして、なぜ佛祖も跡をひそむる、自謂へり、大入道のかすなくらふ如くに、のつさ〳〵と。」

(ヘ)白鷺洲。應天府、晉には建康府と名づく、則ち梁の武帝の都する所、白鷺洲は府の西南の江中に在り、李白の詩に「三山半落青天外、一水中分白鷺洲」武帝の內裡なり、十萬里の波濤を越えてこゝに到る。

(シ)老蕭言下。梁の武帝は蕭氏なれば、之を以て老蕭と云ふ、祖師初め對談して契はず、故に爾か云ふ。

(ヱ)聲沈魏國。暗に江を渡り、北魏に到る、其の聲價沈埋して顯發せず、珠云く「九年面壁の當位、なもくさもなくなつた。」

(ヒ)影脫孤龕。形影脫去して棺中隻履を存するのみ、己上は事迹を述ぶ。

(モ)法門垂秋。今祖風零落するなり、珠云く「今秋の木の葉の落ちる如く、法のおとろへたるとき。」際は時なり。

(セ)已徃之蹤。痛は心切に、珠云く「六宗說破のことやら、皮肉骨髓のことやら。」

㋜薦此溪毛。これ前の寶林錄のところにも見えたり、疏菜るゐを獻じてなり。

㋑少伸追遠。おそまつなか、わづかの追慕の供養を致しますと。

㋺霜飛大野。十月なれば初冬祖忌の景慕を擧して、門下暖氣なきことを感ず、珠云く「時節がら霜が身にしむる比ほひ、いとゞあはれは增すばかり、崇崗はたかき山

㋩膽裂心摧。下衰に依つて懷舊甚だしきなり、已上は弔祭を述ぶ、珠云く「秋すがりになつたら、佛法も零落したと思へば」と。

㋥一氣潛回。一氣は陽　氣なり、珠云く「一則の公案、打成一片になる、其の時陰陽一枚になつたる時大死一番、蘇息するときが、一氣ひそかに回るのじや。」我れを知らずと。

㋭八角磨盤。これは一氣の着語なり珠云く「冬至はそんなこともあるものか。」或抄に云く「本分不遷變遷變の上に於て不遷變を見る。」又云く「外面は冬至一氣發動の勢を言ふ、下の無毛の句も亦同じ。」又云く「此れ或説なり、是なることを知らざる乎、實意は一氣潛回は時節遷變じや。」葛藤集に「八角磨盤空裏に走るは本分の語、路理は付けぬ、沒巴鼻(とりつきのところなし)じや。」又沈まぬ一機じや、又或抄に「現成底じや。」

㋬六爻纔動。六爻は皆陰、今下の一爻陽に變ず、故に動と云ふ。

㋣無毛鷂子。一氣の陽回復する故に六爻の陰變動するを潛と曰ひ、纔といふ、其の始の謂なり、八角無毛の句共に禪話沒巴鼻、これ推遷底に於て不遷底を示す、衲僧の用處當に是の如し、これは六爻の着語なり、珠云く「八角も無毛も面目のずがた、無毛は陽爻動の端的一機未發の時に比す。」

㋠是他時節。一氣六爻の推遷底、珠云く「衲僧骨を折りて如何に我れもしらず、いつともなしに」と。

㋷四時消長。或は陽消し陰長じ、或は陰消し陽長ず、八角無毛の不遷底、これ世間相常任の故なり。消は寒なり、長は春夏。

㋦眼瞞瞞地。は目汁の凝るところ目やになり、言ふ意は兩眼瞞昏にして不遷底の本分に出在すと、珠云く「聰明機智を貴ばず、昏蒙として坐在するなり、正眼不活開を云ふ。」

㋸者裏。珠云く「大圓鏡中にいふこと、如上不遷底じや」と。

㋾葭灰未動。好箇投機の時節なり。葭灰は陰陽未發已前なり、この語は報恩錄に見ゆ、直饒は伶利の衲僧あり、師の面前に。

㋻西川鄧師波。西川は蜀なり、五祖演、綿州鄧氏の子なり、師波は師伯なり、伯は長なり、崇敬して云ふ。

㋕東山下左邊。五祖演初め四面山に住し、白雲に遷り、晩に東山に居れり、左邊底は那邊の謂なり言ふ意は五祖下の那事を會得すと也、珠云く「荊棘參犬の臼を推し破り知らせた。」或抄に「東山年老い心孤にして這邊にも亦一句を言ひ、那邊にも亦一句を言ふ、險峻の手段なり」と。

王言絲の如しと、㋰誰か敢て聽かざらん。忽ち人ありて、鄧山に問はゞ、只だ他に向つて道はん、㋒風門海口、㋼風に當り浪を抵くと。㋨也た須らく是れ箇の人にして始めて得べし。」

㋔新天童、㋗蔣山自り來る上堂、㋳鏡容鷹爪、㋮南嶽を掉發して、㋘山を下つて敎化せしめ、㋫檮林を從臾して、御に對して講經せしむ。㋙彊界を守らず、㋓淸平を干犯す。㋢中峰の正法眼を滅得して、㋐破沙盆子の話、方に行ず。」

上堂、擧す、㋚長生、㋖靈雲に問ふ、「㋴混沌未分の時如何。」雲云く、「㋱露柱懷胎。」生云く、㋯「分れて後如何。」雲云く、「㋛片雲の太淸に點ずるが如し。」生云く、「未審し、太淸還つて㋽點を受くるや也た無や。」㋪雲答へず、生云く、「㋲

㋵也未是枯木。未是れ分外奇特の事に非ず、枯木の花は覺華開發に喩ふ、是れ五祖演の所謂黃梅の花は雲中に向つて開くの謂なり、徑山の後錄に見ゆ珠云く「まだ〳〵別の生涯靈妙の處がある、此の處を識得しても、錬りきたへて穿鑿せねばならぬことがある。」或抄に「大悟の時節なり、これ冬至の緣語。」

㋟冬不寒臘。前面は本分の事を剔抉し、落句は現成天眞の事を指出す、珠云く「前頭大に事の在るあり、わかいときつらをつゝかして骨を折らねば知れぬこと。」或抄に「餘寒甚だしきを云ふなり。」

㋹古德。踈山仁禪師。

㋞冬來事。珠云く「寒うなつたとき、一大事はいかゞでござる。」

㋡京師出大黃。珠云く「末代輕薄のものにはげすくはず。」

㋧朕聞。もと唐玄宗皇帝注の孝經序首語を以て踈山の答話に比す、即ち答話の端的なり、京師と言ふに就いて、踈山を以て玄宗と爲して拈ずるなりと或抄に見ゆ。

㋤上古其風。質朴省略にして文飾詳密ならず、風は風俗、朴略はかざりない、簡略にして事少し。

㋶王言如絲。禮記に「王言絲の如し、其の出づること綸の如し」とあり。珠云く「綸如は四海に入りわたる。」

（ム）誰敢不聽。王命を聽かざるものなし、これ昔初の衲子、順直の故に能く此の如くの荅を聽受するに比するなり、今時の肯はざることば知るべきのみ、珠云く「四海八蠻たれでもうけたまはらぬものはない誰敢は僧の會したところ。

（ウ）風門蟄口。寧波府は東の方亘海に漸（ナカ）る所謂海口なり、冬に到らば則ち寒風出入故に風門と云ふ、珠云く「おらが寺は大海に臨んだとこじやで大にさむい、冬になつたらなほ寒い。」

（ヰ）當風抵浪。抵は當なり、山は即ち風門海口の國故に冬來則ち風に當り浪に當る、此の任運境界を以て來問に應ずべし」珠云く「北風は吹きあて、浪はうちかけるじや。」

（ノ）也須是箇。珠云く「その土地の人はよく知りてをる、是れ箇の衲子でなくばいくまい。」或抄に「これ般の人でなくてはえ爲まいぞ。」

（オ）新天童。珠云く「蜜菴の孫、無準の法嗣なる別山祖智、蔣山に在りて新に天童の請を受くる暇乞の心にて、過訪ありしものならん。」此の上堂は寶誌和尙は蔣山の開山なれば、それに託して別山を讃するなり。

（ク）蔣山。一名鐘山といふ、南京の東北にあり、一名艮岳と云ふ、周廻六十里と云ふ、王安石荊公が（半山居士）、宋のとき中興す、漢の秣陵の尉蔣子文盜を逐ふて此に死す、吳の大帝爲に廟を立つ、子が祖の諱は鐘因つて蔣山と改む、同じく靈谷寺は鐘山の東南に在り、晉の建つる所なり、宋には太平興國寺と改む、殿堂の後に寶誌和尙の塔を立つ、今は蔣山と曰ふ、即ち太平興國寺なり、十刹の一、一名鐘阜とも云ふ、痴絕の塔もありといふ。

（ヤ）鏡容鷹爪。編年通論に云く「宋の太始二年大士寶誌は面方にして瑩徹すること鐃の如し、手足皆鳥爪初め金陵東陽の民、朱氏の婦、上己の日、兒の鷹の巢の中に啼くを聞いて、樹に梯して之を得、擧けて以て子となす。」珠云く「面が鏡の如くすきとほつて、ぎら／＼仕てある、手足の爪は鷹の如し「或抄に、」驢腮馬頷と同じ、にく／＼しい「これは寶誌を稱揚して新天童に比するなり。

（マ）掉發南嶽。其の定心を掉擧發動するぞ、誌公和尙が南嶽惠思をなり掉は忠曰く、和語の「そゝのはかす」なり。

（ケ）下山敎化。五燈會元の應化に南嶽惠思の章に、因に誌公人をして傳語して曰く「何ぞ山を下りて衆生を敎化せざる、目に雲漢を視て甚麼にか作さん」と、師曰く「三世の諸佛、我れに一口に呑盡せらる、何れの處にか更に衆生の化すべきあらん」と。考ふるに梁の天監十三年に誌公は化し去る、同天監十四年に南嶽は降生す、其れ實には此

の事あるべからず。

（フ）從臾檮林。檮林は傅大士を云ふ、從臾はすゝめる、猶ほ勉强といふが如し、これは誌がすすめて梁の武帝に對御講經せしむ、事は寶林錄の入寺小參に見ぬ。

（コ）不守彊界。吾が本分の封彊を守らず、下山の句を結ぶ。珠云く「自らを捨てゝ他は爲し手前一分を守らず。」又云く「蔣山の疆界斗を守らず。」

（エ）干犯淸平。他の淸平世界を干犯するなり、他は梁朝なり、對御の句を結ぶ、此の兩句は暗に今の來降を謝す、已上は蔣山より來る故に誌公の事を用ひて比擬して德を讃するなり、珠云く「干犯淸平は自受用三昧、淸潔平穩で居らるゝ宗師達を、いらざる世話をやいて、下化七顚は倒さするなり。」

（テ）中峰正法眼。中峯は密菴咸傑禪師を指す、密は天童の中峯に在りし故なり、珠云く「少しは手前、虛堂の事正法眼を滅得すとはかけがへのなき大切なを無くして仕まつたと。」

（ア）破沙盆子。此れは天童の錄を用ふ言ふ意は密菴の話方に天下に行ふべし、此の話、後の頌古の部に見ゆべし、珠云く「破沙盆はわれすりばちなり、寶志和尙のことかと思へば、新天童のこと實に語言三昧じや、」云く「なんぞとりえがあるやと思へばわれすりばちが大に重寶になつて、世界に流布するやうになつた、」この話の本は應菴室中に密菴に問ふ「如何なるか是れ正法眼」と、密菴云く「破沙盆」と。

（サ）長生。福州長生山の皎然禪師、雪峯に嗣ぐ、傳燈十八に出づ、珠云く「古德は是れを床の掛け物とせしよし。」

（キ）靈雲。志勤、福州靈雲勤禪師、前の報恩錄に見ゆ、潙山大安に嗣ぐ因に桃花を見て啓悟す。

（ユ）混沌未分時。混沌は陰陽未分、或は渾沌に作る、こんどんは元氣なり、珠云く「威音已前の今日のこと世界のはじまらぬさきじや」と。

（メ）露柱懷胎。禪話不可議。珠云く、「大黑柱が子をはらんだ。」又云く、「混沌未分でも陰陽具足。」或抄に云く「一機未發といふ處に、はやなにやらはらんだ。」

（ミ）分後如何。珠云く「大鐵圍も小鐵圍も、世界國土草木それ／＼に分れて、後はどうじや」と。

（シ）片雲太淸。楞嚴の九に「當に知るべし、虛空汝が心內に生ずること猶ほ片雲の太淸裏に點ずるが如し況んや諸世界の虛空に在るを耶。」珠云く「雲のおほぞらにたなびきたる如く、」或抄に云く「たとひ天地がいかほど廣大に開けたりとも向上からみれば、一片の雲の空に點ずるが如く小し、きなり大淸は虛空なり、珠云く、」本より分ちへだてもないことを、さま／＼と妄見する。

恁麽ならば則ち含生不來なりや。」雲亦答へず、生云く「直に(セ)純淸絶點を得る時如何。」雲云く「猶ほ是れ(ス)眞常の流注。」生云く「如何なる是れ眞常の流注。」雲云く「(イ)鏡の長明なるに似たり。」生云く「(ロ)向上還つて事ありや也た無や。」雲云く「有り。」生云く「作麽生か是れ向上の事。」雲云く「(ハ)鏡を打破し來れ、汝と與に相見せん。」師云く、「天下大眼目を具する宗師、盡く鏡を打破し來れ、汝と與に相見せんといふを謂つて、之が極則と爲す。(ニ)殊に知らず、(ホ)山深く水寒うして、(ヘ)客程稍遠きことを。(ト)二老の膠漆相投ずることを知らんと要せば、(チ)先づ須らく兩處の不答を會取すべし。」

除夜小參、(リ)舊去り新來る、(ヌ)送迎するに懶し。(ル)巖間塚下枯形を見る、(ヲ)忍んで殘臘半宵の夢

(ヱ)受點也無。珠云く「けがれをうくるかどうじや」と、又云く「太淸がけがされるものか。」

(ヒ)不荅。珠云く「なぜ荅へぬぞなぜでも、長生と靈雲と共に知音なる故〳〵。」或抄に云く「不荅のところ、そこばく荅へたなりされどもわづかに知解を入れ、言句を用ひば、大に不荅の處に相違せん。」

(モ)恁麽含生。或抄に云く「恁麽とは上の不荅の處を掃蕩と見た故に、此の如く問ふなり。」珠云く「含生不來也とは三界二十五有の度すべき衆生もないじやと」。溪注には「羣生を包含せず」と。

(セ)純淸絶點。珠云く「生死の炎もない乎、一點の無明もなくぬりつけた」又云く「松は松竹は竹、其の身其のままなるところ少しもかけさはりはない。」

(ス)眞常流注。眞常は涅槃なり、流注は煩惱なり、牛頭法融の所謂心正受の爲に縛せらる、之を淨業障と謂ふの類なり、珠云く「眞常は不生滅なり、八識なり、流は生滅なり、煩惱なり、注は地獄天堂の水口みな悟の上の妄想、古來なやむこと。」或抄に「佛見法見に滯在する處なり。」又云く「淨躶々赤洒々じや。」

(イ)似鏡長明。珠云く「胡來れば胡現じ、漢來れば、漢現ず、火は煖に水は寒し、少しも私はいれぬ。」或抄に云く「昭昭靈靈たるところ、それをとめたとなり。」

(ロ)向上還事。珠云く「向上とはあたまの上かと思ふたら櫊の下にある。」或抄に云く「上に段段きりあげて云はるゝ程に此の如く問ふぞ。」事は珠云く「子細の事じや」と。

を作す。(ワ)坐ながら寒檠兩歳の燈に對す。(カ)恁麽の告報、已に今時に落つ、(ヨ)功勳に渉らず、如何が擧似せん。(タ)老僧今夜、忍俊不禁にして(レ)爆竹未だ鳴らざる已前に向つて、諸人の與に(ソ)一條の活路子を開いて、也た諸人をして、(ツ)來日は定んで是れ大年朝なりと道ふことを知らしめん。(ネ)其れ或は未だ然らずんば、(ナ)西河に獅子を弄ず。」

復た擧す、(ラ)米胡、(ム)王常侍を訪ふ、(ウ)判事に値ふ次で、常侍纔に見て、(ヰ)筆を擧して之に示す。胡云く、(ノ)還つて虛空を判じ得てん麽。」侍(オ)筆を擲つて宅堂に歸る、(ク)米胡、疑を致す。次の日、(ヤ)華嚴に憑つて、(マ)茶を置いて問を設けしむ、「米胡和尙、何の言句あつてか、相見することを得ざる。」侍云く、「(ケ)獅子人を咬み、韓

(ハ)打破鏡來。珠云く「たゞはぶちくだけるものでない。」或抄に「その秘藏のかゞみを」と。

(ニ)殊不知。珠云く「なに〳〵まだ〳〵。」

(ホ)山深水寒。行路難を謂ふ、越えも山又山である、或抄に「破鏡を打破する底、未だ極則の處に到らず。」又云く「兩度不荅の處を至極とす。」

(ヘ)客程稍遠。如上の見地終に家郷に歸ること能はざるなり、珠云く「行けば行くほど次第に遠くなる、やつぱり旅路じや。」或抄に云く「境界深遠の處を云ふなり。」

(ト)二老膠。主客機機、一味相應、珠云く「二老の機機の合ふた處。」或抄に云く「知音底のところ同氣相應じ、機機相投ずるの義なり。」

(チ)先須兩處。しまへの卷にある師の行狀に「二十年常に靈雲の兩處不答を擧して、衲子に徵問す、其の意に契ふ者あること少なり、今切に須らく參究すべきものとあり、珠云く「雲の兩處の不荅は尤も好答ならん、併し祖翁、わりを入れられた、これでは一生死水裏ではたす故。」鵠林曰く「虛堂は語言三昧を得て居るからどうなりとも云ふがよいが、恐らくは後人錯りて會せんことを、鵠林はさうでない」古人云く「吾れば愛す韶陽新定の機、一生人の爲に釘を抽き楔を拔く」といはれたり、鏡を打破し來るが賞翫なりと云ひ添へらる。或抄に云く「兩處の不答が此れ極則なり、膠漆相投は二物一色なり、知音底の義なり。」

(リ)舊去新來。或抄に「除夜の故に、舊歳は去り新年は來るが虛堂は世上の如くに、條例を

攀ぢて舊を送り新を迎ふるにも、ものむづかしい」となり。

(ヌ) 懶燄仰。珠云く「山寺に引き籠つて居れば」と。

(ル) 巖間塚下。巖間塚下は沙門行道のところ、十二頭陀に塚間樹下と云ふが如し、又枯形とは其の形相、兀として枯木の如しとなり、く、珠云「あそこにもこゝにも、によこによこ只だ坐禪してゐる枯木の如きものばかり見る。」或抄に云く「會中の除夜の生涯は、いかやうぞとなれば、かじけはてた、なりふりで岩の間や塚の下のあそこゝで、坐禪經行して諸方のやうに賑々しく年をとることも無い」と。

(ヲ) 忍殘臘半。强忍して夢を成すなり、珠云く「虛堂も皆の坐禪するのを見ては、ねられもすまい、皆が辨道に骨を折るもの、ぬく〳〵枕を高うしてねもせられぬ」と。或抄に云く「此の三四の句は夜もふけゆけば、會中の衆がめん〳〵思ひ〳〵に、或は忍んで夢を成すもあり、或は終夜坐して燈に對して居るもあるなり、忍は枯淡飢なり、凍を忍んで寢るなり、」殘臘は十二月なり。

(ワ) 寒檠兩歲。舊歲より新歲に至るなり、頌を以て越し來る、頌意は大無心の境界なり、珠云く「すごい燈籠のぴか〳〵に打ち向ふて、新舊のしほざかひ一燈にて。」寒檠は掛行燈なり、兩歲燈はあかつきまでなり。

(カ) 恁麼告報。曹洞宗には本分を以て空劫の正位と爲す現成を以て今時の偏位と爲す、宏智覺．正中來の問に荅へて云く、「霜眉雪鬢火中出、堂堂於不レ落ニ今時一」と、珠云く「そんならなぜだまつてゐない、そうでない、今時におつるか、どこへ落つる乎、見よ」と云ふ、又云く「一顆の明珠のやうなことを云ふて、おい今時に落つるとはなんのことじや、」或抄に云く、「落ニ今時一は有功用。」

(ヨ) 不涉功勳。正位は君なり無功用と爲す、偏位は臣なり、功勳邊と爲す、言ろは如上の開說已に偏位に落つ、本分の事、如何が擧せんとなり、珠云ぐ「今時那邊正偏にわたらず、はなれ切つて。」或抄に云く「功勳も今時も同じじや、洞下偏位現成底なり、擧似せんは虛堂が大衆一同に。」

(タ) 老僧今夜。珠云く「老僧堪忍袋の緒が切れたから、まゝよ安賣りまけに」と。

(レ) 爆竹未鳴。珠云く「貧乏神を追ひばらふ、」已前は歲越え、儀式の初まらぬまへに、今は一機の未發を表す、爆竹は「さぎちやう、」これは前の興聖錄にも見ゆ。

(ソ) 一條活路子。手を打ち拂ふて。

(ツ) 來日定是。あしたは元日じやでと大年朝は正朔なり、三始と云ふて正月の一日を歲の朝、月の朝、日の朝と爲す、或抄に云く「大年朝

とは一機未發、已前にはや說き了つたが、會したかとなり。

(ネ) 其或未然。或抄に云く「戲論にして了るな、道理をえしらずばじや。」

(ナ) 西河獅子。汾州を西河と名づけ、汾陽と名づく、蓋し西河の人、好んで木を刻んで獅子を造つて之を戲弄するなり、本朝にも亦此の戲あり、汾陽昭禪師垂語して云く「汾陽門下に西河の獅子あり、門に當つて據坐す、但だ來るものあれば即便ち咬殺す、其の物に託して佛事を作すなり、其れ或は未だ會せずんば、徒に戲を爲す耳。」西河弄ニ獅子一は方語に咬レ人太急、古抄に云く「一山云く「西河に師子をまはすなりと。」或抄に云く「西河弄ニ獅子一はもし悟らずんば、虛堂が垂手もあだことに成つたものぞ。」珠云く「本朝の伊勢太神樂と云ふのとおなじじや、弄すとはもちあそべばそれが何の用に立つことじや。」鶻林曰く「是れはおれも殆どこまつた」と云はれた。

(ラ) 米胡。京兆府の米和尙、亦七師といふ、又米七郎といふ、俗名第七なるをいふて米胡と曰ふ、髯美はしき故なり、篇海に云く「胡は頷の鬚なり」とあり、王常侍と同じく潙山靈祐に嗣ぐ、常侍の傳に此の緣を載す、然も皆米和尙と稱す、蓋し米は即ち師の姓、この話大光明藏にも載す。

(ム) 王常侍。名は敬初潙山に嗣ぐ、襄州府主。

(ウ) 値判事。今日は裁判のある日なり

(ヰ) 擧筆示　。珠云く「どなたでもござれと筆頭に點却した。」或抄に云く「このところに全體都露してはたらき出たぞ。」

(ノ) 還判虛空。珠云く「ぬからぬかほで門ちがひ、米胡早やしくじつた」或抄に「虛空に祖師西來意の五字を書すと云ふ類なり。」

(オ) 擲筆歸宅堂。宅はやどころ、室宅內證べや、私宅なり、堂の半巳後をいふ寢室を云ふなり、舌うちして寢室へ歸つてしまふた。

(ク) 米胡致疑。珠云く「おれは隨分あぢやつたが、機嫌そこねた。」

(ヤ) 憑華嚴。珠云く「常侍をとなりへよばせた、」憑はたのむ、あつらへるたのんでやとつてなり、華嚴は會元や大光明藏に鼓山の供養主となす惟みるに王常侍は襄州人なり襄州に華嚴和尙あり。

(マ) 擡茶設問。珠云く「何を以てかお氣に入らぬことがございましたか華嚴に問を設けさせた。」

(ケ) 獅子咬人。珠云く「胸中は見ないで筆頭ばかり見た、獅子咬人じやばかものふゆゑに韓獹逐塊じや、今米胡の閑機境を逐ふことを責む、この語は前の寶林錄に見ゆ、獅子咬の二句は大般若經に出づ、獅子咬人は常侍の擧筆韓獹逐塊は米胡の沒蹤跡。

(フ) 米胡剛得。珠云く「米胡多年の鍛錬昨日よりまつくらになつて居た

獹塊を逐ふ。」㋫米胡聞き得て、出で來つて大笑して云く、「我れ會せり也。」侍云く、「誠に道へ看ん。」胡云く、「㋙請ふ、常侍擧せよ。」侍乃ち㋓一隻筋を擧起す、胡云く、「㋢野狐精。」侍云く、㋐者の漢徹せり也。」師云く、「米胡當時纔に筆を擧するを見て、便ち㋚客位に入らば、㋖席上の珍たることを管取せん。㋴端なく再び茶筵を設けて、他の華嚴を㋱累はして、㋯腦門着地ならしむ。只だ常侍の者の漢徹せりと道ふが如きんば、那裡か是れ㋛他の徹する處、試に一轉語を下せ看ん。」

正旦上堂、時遷り物換り、故を㋽革め新を鼎す。㋪土膏未だ動ぜざるに、㋲商量春を打して、㋝太公釣を垂るゝに意あり、㋜夫子麟を獲るに心なし。」

ゆゑ。

㋙請常侍擧。今一返どうか。

㋓一隻筋。珠云く、「何ぞ葛餅でも食つてゐたか。」

㋢野孤精。珠云く、「古狐箇のばけもの、」又云く、「したけれどもほうとうではない。」ばけもの。

㋐者漢徹也。珠云く、「此れも和上じやと思ふて、このやうなことを云ふ。」はじめてのみこんだ。

㋚入客位。或抄に云く、「おしなほつて居たらば。」

㋖席上之珍。珠云く、「よき馳走にならうものを」と。管取は結構、尊客あしらひにせらるべきものを殘念なと、又或抄に云へり、「俗人にまじはつてなり。」

㋴腦門着地。珠云く、「降參の義又着地は頭を地に着けさせて致敬の義なり、」又云く、「きげんとり業をさらす者がじや。」

㋱無端。やくたいものないと。

㋯累。いとしさうにとなり。

㋛他徹處。珠云く、「なんたることにうけとられぬ。」

㋽革。變革なり、物を革むるものは鼎に若くは莫し、又云く「鼎の名は正なり、古人方と訓ず方は實正なり。」

㋪土膏未動。膏は土潤なり、立春の日未だ來らざるなり、草木のあぶらつくなり、春の催すなり、又は春次第に融して來るなり、動とは陽氣生じて土が融してゆる〳〵となるなり、今は元日の故に、一機未發の處。

㋲商量打春。言ろは春未動巳前に好し、新春佛法の商量を打するに、珠云く、「取り越して日出度いな、諸農相議し同じく早春より佛法の商量接度を作すなり。」商量ははかる、中平を失はざるをいふ。

㋝太公垂釣。史記の齊の世家に「太公望呂尙蓋し嘗て窮困して年老いたり矣、漁釣を以て周の西伯を奸す云云。」忠曰く「上の商量の語を承く、謂はる師家學者の爲に釣竿を垂れて之を勘辨す、猶ほ太公が釣をたれて西伯を干さんと欲するが如し。」珠云く、「肝ふとく志あるゆゑに、ぢつと打成一片に渭水をにらんでゐて、とう〳〵大ものを釣り出した。」これは學人を接得するが爲めにいふ。

㋜夫子獲麟。左傳「哀公十四年春西の方に狩して麟を獲たり」と、傳幷に註に詳なり、又孔子家語の辨物に之を載す。龍溪云く、「意あると心なきと各各差別の境界、これ所謂商量底の樣子なり、又一義に鉅禪を釣るに意あり、祥瑞を獲るに心なし」となり。珠云く、「夫子はたゞ大道一片でゐられた故、希求するところなきが故に、ひよつこり祥瑞があらはれた。」或抄に、「文王は學者をつらんと思ふ心あり、出格の人を得やうと思ふ心はなし。年始に緣あるゆゑ、此の處に云ふ、二句共に天下無事底を云ふ。」忠曰く、「師家の勘辨鍛錬するに依つて、自然に英靈の衲子を得るなり、猶ほ孔子の強く求むるに意なくして、自然に麟を獲るが如し、又麟の字は正旦の祝語なり」と、これは仕度を罷めて休し去るをいふ、鵠林拈じて曰く、「君子は思ㇾ刑小人は思ㇾ惠。」

上堂、擧す、㋑藥山、㋺道吾、㋩雲嵒と遊山する次で、樹の㋥兩株あつて、一枯一榮なるを見て、山乃ち問ふ、㋭榮者が是、㋬枯者が是、㋣雲嵒云く、「榮者是。」山云く、「若し恁麼ならば、㋠一切處㋷光明燦爛し去らん。」㋦道吾云く、「枯者是。」山云く、若し是の如くならば、則ち㋸一切處、㋾放教あれ㋻枯淡にして去らん」と。忽ち㋕高沙彌至る、山亦是の如く問ふ、彌云く「榮者は他の榮に從せ、枯者は他の枯に從す。」山乃ち道㋵吾、雲嵒を顧みて云く、「㋟不是不是。」師云く、「藥山、箇の不是不是を道ふて、他の道吾雲嵒の㋹多少の威光を㋞滅ず。」

上堂、各各㋡本より靈覺妙明の眞體あり、㋧但だ巳見の所障を以て、㋤戈を橫へて㋶直に不疑の地に造ること能はず、蓋し㋰淬勵の工切なら

㋑藥山。名は惟嚴、石頭遷に嗣ぐ。

㋺道吾。潭州道吾山の宗智。

㋩雲嵒。潭川雲嵒の曇晟、この二人とも藥山に嗣ぐ。

（ニ）兩株。一根二幹の木。
（ホ）榮者是。或抄に云く、「建立門度生爲人を肝要と思ふ。」珠云く、「入鄽恁麼かよいや。」
（ヘ）枯者是。珠云く、「不施、」不恁麼かよいや。」或抄に云く、「掃蕩門なり。」
（ト）雲云榮。珠云く、「一切無盡の法門を生ずるが故に、」
（チ）一切處。「珠云く、「人のためにせん、瓦礫光を生ずる底。」
（リ）光明燦爛。「家國興盛の境界で、ひかりかゞやく」と珠はいふ。
（ヌ）道吾云枯。珠云く、「點滴も施さず。」
（ル）一切處。珠云く、「眞金色を失する底。」
（ヲ）放教。さもあらばあれとは、さうあらうとまゝよと、打ちすてたる詞なり。
（ワ）枯淡去。「家國喪亡の境界なり、それでは相似の人も得まい」と珠は云へり。

（カ）高沙彌。澧州の藥山高沙彌、藥山に嗣ぐ、沙彌は此には息慈と翻す小僧の法階なり。
（ヨ）顧道吾雲嵒。或抄に「高沙彌の答話藥山の機にかなふや、道吾雲岩に當てたと。」
（タ）不是不是。珠云く、「うちやつてしまへ。」
（レ）多少威光。珠云く、「莫大のいきほひひかりをなくせられた。」
（ソ）減。珠云く、「まう口のきけぬことにせられた。」この評判は虛堂が藥山と一つねどころから出た評判なり。
（ツ）本靈覺妙明。楞嚴の四に「性覺は妙明」と、疏に云く、「體相寂滅心言ひ及ぶこと能はず、故に妙と稱す靈鑑不昧昏惑暗すこと能はず、故に明と名づく」と、又云く、「寂にして常に照す、故に妙明と稱す。」珠云く、「久遠劫來、山もうつり川もうつり、本のわれと云ふものを具有してゐる。」或抄に「本有の佛性人々具足の上なり。
（ネ）但……。謂く、推求推度邪心觀理是れ則ち所知障なり、珠云く「自己に見を立つ、眞の知見に障子をたつるやうなもの、」或抄に、「己見好惡。」
（ナ）橫戈。快活自在の義なり、珠云く「關羽が七十二斤の青龍刀を提げて、百萬の軍兵の中へ入つたやうなことができた、」しかし不能とは本分へふみごむことならぬとなり
（ラ）直不疑之地。實地を謂ふ、あとさきをかへりみず。
（ム）淬勵之工。勵は富に礪に作るべし磨なり戈の言葉を承けて工夫鍊磨を謂ふ、珠云く、「不入涅槃に骨折りがたらぬ。」
（ウ）墮在滲漏。見地にとゞこほるを云ふ。洞上に三種の滲漏あり、滲漏の事（報恩錄に見ゆ）、已見の所障を以て本有靈覺現前せす、これ見滲漏なり。
（ヰ）靈鑑現前。大智用、珠云く、「法性

ざるに由つて、所以に（ウ）滲漏に隨在す。作麼生か、（ヰ）靈鑑現前することを得去らん。老僧（ノ）眉毛を惜まず、汝諸人の與に、（オ）此の見障を去らん」といつて、（ク）拄杖を擲下す。

（ヤ）事に因る上堂、「（マ）天の雲ある也、（ケ）以て日月を蔽ひ、甘雨を降しつべし。（フ）地の水ある也、（コ）以て舟楫を濟し、焦枯を潤しつべし。（エ）人の心ある也、（テ）以て禍福を興し、剛柔を制しつべし。（ア）三才既に明かにして、（サ）理一揆に歸す、然る所以は何ぞや。」拄杖を卓して、「（キ）大鵬展㆑翅蓋㆓十洲㆒、（ユ）籬邊燕雀空啾啾。」

上堂、擧す、（メ）趙州、沙彌の喝參するを聞いて州云く、（ミ）侍者伊をして去らしめよ。」沙彌（シ）珍重して使ち行く、州旁僧に謂つて云く、「（ヱ）沙彌門に入ることを得、侍者は門外に在り。」師云く

がぐわらりと大地山河と一體となること。」
（ノ）不惜眉毛。忠曰く、「謗法の者は眉鬚墮落す、今離言の正法に於て才に言說あれば、皆是れ謗法なり、眉毛墮落すべし」又眉毛在麼も同じく謗法者を云ふ。
（オ）去此見障。珠云く、「見障は滲漏じや、己見の所障を去らん」
（ク）擲下主丈。珠云く、「主丈を擲下した處に許多くの工夫ありて是れで滲漏は除けたか、のぞけぬか、おれはかまはぬ。」或抄に云く、「見障を除却するの機用、拄杖子を守らざる底。」
（ヤ）因事上堂。或抄に云く、「吳制相譏するに因つて、退院する時の上堂なり、」按ずるた因事とは夫れ宗師の唱道、此の事に因つて語言偈頌ありて、以て學者を接引するにあらずと云ふことなし、豈に誠を世諦に存ずる者ならんや、若し宗師世諦の彼非此是に因つて以て出して人天に示さば、又何ぞ後世の法と爲るに足らんや乃ち洞山、慈明、九峯の事に因つての頌を引いて以て證す焉然りといへども諸錄往往に雖事に因つて、衆を辭するものを皆因事上堂といふ。
（マ）天之雲有。忠曰く、「天地人の三に依つて各吉凶あることを論ずる也なり、先づ雲をは人臣に比す、日月を君の智に比す、甘雨は君の澤に比するなり、言ろは或は人臣あり、讒を構へて君の智を掩ひ、惡政を行はしむ、或は君を扶けて恩澤を降して、窮乏の民を救はしむ、一是一非、皆人臣の爲（しわざ）に依る。」珠云く、「晴れとほうしでは一切が焦枯する。」又云く、「也は則の意なり。」

㋘以蔽日月。珠云く、「結構なものじや。」或抄に「蔽は惡なり、降は善なり。」

㋫地之有水。忠曰く、「此れ又水を臣に比す、是れは但し善德を言ふなり、謂く、能く君の事を成す、水の舟楫を浮べて海を渡るが如し、又能く窮乏を惠むこと、水の焦枯の草木を潤すが如きなり。」珠云く「害をなすこともあれども、乾き切つてもならぬ。」

㋙以濟舟楫枯。珠云く、「調法なものじや、草木の焦枯をうるほすべし」

㋓人之有心。忠曰く、「人は但だ心の向ふ所の善惡に因つて、或は福を興し、或は禍を生じ、或は剛柔を制伏し、或は柔能く剛を制す。」珠云く、「貴ぶ可く恐るべきは心じや」と。

㋢以興禍福。珠云く、「惡行あれば禍仁德あれば福、剛强柔和を制しつべし。」龍溪云く、「興起制斷、二の者は有心有爲の甚だしきなり」と。

㋐三才旣明。文心雕龍に曰く、「仰いで吐耀を觀(天才)、俯して含章を察し(地才)、高卑位を定む、故に兩儀と曰ふ。」儀旣に兩矣。唯だ人之に參はる、性靈の宗とする所、是れを三才といふ。」淮南子十一齊俗訓に曰く、日月明かならんと欲して浮雲之を蓋ふ」とあり、珠云く、「明は正明なり。」

㋚理歸一揆。揆は度るなり、上の三節を結ぶなり、或抄に「揆は趣なり、」珠云く「三即一、一即三、べつたり中よくなつて。」

㋖大鵬展翅。師自らに比す、これは莊子の逍遙遊篇に見ゆ、「珠云く、「此れには虛堂そこばくの工夫あり、」忠曰く、「大鵬展翅の二句、卓主丈の當位なり、息耕大師現在より」と、或抄に十州は世界中じや、卓拄杖は、天地人別れぬさきを示す」と。

㋴籬邊燕雀。燕雀は讒者及び吳制相に喩ふ、事は後面に見ゆ、啾啾は小鼙なり、雀などの、ひちよ／＼なり。珠云く「ぐじや／＼云ふても正途にたゝぬ」龍溪云く、「三才有爲の轉變此如きもの知るや否や、我れ此の理を知る、故に時變の爲に繫縛せられず、大鵬の寰海を翼蔽して世間の燕雀の如き底は啾々として是非を議するに一任す、」或抄に「大鵬のいらぬことゝ燕雀は云ふ、大鵬は虛堂主のことに云ふ大人境界は、此の如くとの敎化なり又云く「三才ある體なり其のほど／＼分際あり、下心は我れは退院する、世上の者何と云ふとままよとなり。」

㋱趙州沙彌。忠曰く「此の話は趙州錄の下にあり、祖忌の喝參あり、訓道の喝參あり、今此れは訓誨を聽かんと欲して喝參するなり、各々座前に參候すと喝唱するなり」」百丈淸規上の二の住持章に詳なり珠云く、「喝參は放參なり、今夜は晩課放參坐禪放參と云ふて觸れて

㋪「生蠶を逼めて繭を作さしむることは則ち易く、㋲特牛を要して兒を產せしむることは較難し。」

師、㋝寶祐戊午、六月十四日、㋜難に罹れり、七月十三日、恭しく聖旨を奉じて、辜なきことを㋑與免せられて、㋺事を謝する上堂、「㋩都省の㋥羅太尉、㋭繳上して、㋬謹んで奏して以て謝す。㋣去時曉露消ニ袢暑一。㋠歸日秋聲滿ニ夕陽一、㋷恩渥重重何以報、㋦望ニ無レ雲處一祝ニ天長一」

あるいたるなり、」或抄に云く「大衆方丈へ參ぜよと唱ふるを云ふ、」或抄には「喝は唱ふる心、喝參は放參の時、沙彌の役に參にあがれと喝するなり、」私に云く、喝參は放參なり、放はゆるすなり、曰く、無參、無參の時、放參の額を掛け、且つ放參を唱ふ、參のあるときは參一字の額を掛く、

㋯侍者敎伊去。珠云く「此の一句子宗旨がこぼれてゐる、」伊は沙彌。

㋛珍重便行。忠曰く、「淸規に規誨を聽き畢つて珍重して退く今此の沙彌未だ訓誨を聽くに及ばずして、即ち珍重して出づ。」

㋴沙彌得入門。珠云く、「州の家常茶飯なり、趙州の門內に」

㋪逼生蠶繭。珠云く、「なぜから云ふた、きなふやけふ、桑もろくにくれないで、やれ／＼とせつきぬいで、」或抄に「逼は侍者を云ふ、難易なき處に於て難易を立て、此れ一手擡一手搦、趙州と一般。」又云く「二人の上を云ふ、無理なることなり、わかき蠶はまゆはなすまい。」

㋲要特牛兒。この語は報恩錄に出づ、共に不可得の中に就いて難易を立つ、趙州の底裡、之を以て見るべし」と龍溪は云へり「珠云く、「こりや出來ぬこと、」或抄に「男牛は兒をばうむまい、人を接すること大義なり、二つともに不成の義をしひた義なり、」要は沙彌を云ふ、要は求むるなり。

㋝寶祐戊午。六年なり。

㋜罹難。掛なり、遭ふなり、師の行狀に「育王に住して三年吳制相讒を信じて隙を懷いて師を辱めて、其の德を損せん

廣利寺語錄 終

と欲す、師怡然自若として始終拒抗すれども、略々變色なし、」古抄に「翁云く、育王に難に罹り、免ぜられ、再び育王に住す、事を謝して退院す、知事と塔頭の地を論じ、知事の訴を被る。」

(イ)與免。與は增韻に許すとあり。

(ロ)謝事。古抄に「一山云く、多くは退院を言ふなり、吳陸は慶元府の太守となる虛堂の口語に因つて、故に之を追ひ獄に入れんと欲す、晦岩物初の數老宿、特に皇帝に奏するに再住を蒙る、今又事を謝して退院す、」住持の事を辭退するなり、この上堂は聖旨を奉じて歸山する謝恩の上堂なり、けれどもこのとき退院するなり。

(ハ)都省。事文類聚尙書省の下に云く「尙書省亦錄令僕射あり、惣べて六尙書の事を理す、之を都省と云ふ内官なり、」これより以下虛堂の謝語なり。」

(ニ)羅大尉。羅は姓なり、大尉は官、偈頌の部に之に寄ずるの頌あり、句意を推するに名德ありて人主の寵渥を得る人なり。

(ホ)上。纒ふ也。紛して爭ひ言ふ、爭諫の義。逸堂曰く、「繳は封の義。」忠曰く、「此の頌を完結して天子に上るなり。」

(ヘ)謹奏以謝。奏聞して天恩を謝し奉る。

(ト)去時曉露。珠云く、「去る時とは六月十四日退きの時分、曉露夜の中に出て袢暑は煩海なり、近身衣なり。

(チ)歸日秋聲。難に罹りて退去する時即ち六月、旨を奉じて來り歸る時即ち七月、その景象知るべし、珠云く、「御赦免を蒙りてかへろ、秋聲(ひぐらしなど)夕陽に滿つとは日の西の山はなを照す時分」或抄に「ざんげんの言葉が休みぬ、夕陽は衰微の義なり、今言ろは讒聲漸く衰へてなり。」

(リ)恩渥重々。渥は澤なり、一に曰く厚漬のこと、珠云く、「立つかたもなき動勘の身の上、いかゞとなるべきに、斯く皈住するとは、」又云く「如是四時行はれるは、皆天子の恩じや。」

(ヌ)望無雲處祝。三四の句は全く天恩を謝す。珠云く、「天子に讒言して雨が降つたり霰が降つたりしたが清明のそなた、皐天長久を祝したてまつる。」又云く「生死涅槃、讒者賢者ば雲なりそのなき處が衲僧の持ちまへ、」或抄に云く「無雲は則ち直に靑天を看るなり、讒言歇むときは親しく天恩を望むの意。」

(ル)栢巖慧照禪寺語錄

(ヲ)侍者　(ワ)似藻編

師、(カ)景定元年八月二十五日に於て(ヨ)入寺、上堂、僧問ふ、(タ)曇華は見易く、(レ)知識は逢ひ難し、(ソ)學人上來、請ふ師祝聖。」答へて云く、(ツ)「威音那畔に突出して看よ。」問うて云く、「(ネ)寶壽開堂、(ナ)三聖、一僧を推し出す、寶壽便ち打つ、此の意如何。」答へて云く、「(ラ)劍閣路險しと雖も、(ム)夜行人更に多し。」問うて云く、「三聖云く、「(ウ)恁麼に爲人せば、惟だ者の僧の眼を(ヰ)瞎却するのみに非ず、(ノ)鎭州一城の人の眼を瞎却し去ること在らん。」寶壽拄杖を(オ)擲下して、便ち方丈に歸る、又作麼生。」答へて云く、「(ク)更

(ル)栢巖慧照。忠曰く、「未だ何の州郡に在るを詳にせず、浙江の寧波府に白岩といふあり、恐らく是なる乎、拍訛りて白に作る耳。」龍溪抄は「溪が胸臆の杜撰は、後の雪蓬に與ふる語に和して、妄に解し了るなり。」

(ヲ)侍者。これは即ち書狀侍者なり、五侍者の一乎、偈頌の部に内記の藻侍者に示すものあり、是なり。

(ワ)似藻。舊説に似藻は南磵と號す、顯東叟に嗣ぐ、文章を能くするに因つて、虛堂に在りて書狀侍者と作る、然るに續傳燈を考ふるに、之れを載せず。

(カ)景定元年。南宋理宗の朝、日本の龜山天皇文應元年に當る師年七十六なり、日本の南浦和尚入宋の二年目なり。元年は庚申なり。

(ヨ)入寺。育王を退いてより二年目なり。

(タ)曇華易見。優曇鉢羅、此には瑞應と譯す、珠云く、「世間の上では、どのやうな希有なることでも、見易く知りやすいと。

(レ)知識難逢。法華方便品に云く「佛、舍利弗に告ぐ、是の如き妙法、諸佛如來時に乃ち之を說く、優曇鉢華の時に一たび

に金鍼を把つて、密密に縫ふ。「問うて云く、「和尙今日開堂祝聖、忽ち人ありて、一僧を推し出さば、又作麼生。」答へて云く、「㋳牛屎香を燒いて、㋮他を供養すとも、未だ分外と爲ず。」問うて云く、「甚に因つて此の如くなる。」答へて云く、蓋し㋘他は是れ本色の衲子。」僧禮拜す。㋫師乃ち云く、「㋙天理還すことを好む、㋓是の處の溪山笑眼を舒ぶ、㋢羣心響のごとくに應ず。㋐信に知んぬ此の道、人を誣ひざることを。所以に、㋚眞僞を掩はず、曲直を藏さず、㋖自然に艸偃し風行いて、㋴太平路を得たり、㋦只だ親しく栢巖に到る一句の如きんば、又作麼生」㋯拄杖を卓して、青松不レ礙二人來往一、㋛野水無心自去留。」復た擧す。㋓須菩提、㋣巖中に宴坐す、㋲諸天

現ずるが如き耳、」又楞伽の四に云く、「佛は値遇すること難し、優曇鉢華の如し」と、珠云く、「最極大因緣なくては、眞正の知識にはあはれぬ。」

㋞學人上來。珠云く、「さるに依てわれら如きも。」

㋡威音那畔。實際理地を表す、說は延福錄に見ゆ。珠云く、先づ隻手の聲を聞けと云ふこと、やい、ばかものめ、父母未生已前に立ちかへつてみよ、上諸佛なく、下衆生なし、即今直下に看よ」と、或抄に「不變不易の處、突出はとび出すなり。」

㋧寶壽開堂。五燈會元十一に、臨濟下の寶壽沼の法嗣寶壽和尙、（第二世）壽遷化に臨むとき、三聖に囑して師を請じて開堂せしむ、師の開堂の日、三聖一僧を推出す第二世の寶壽は失名。

㋤三聖一僧。珠云く、「上堂してまだ一言もいはざるとき、推出は取り持つ。」三聖の惠然、臨濟に嗣ぐ。

㋶劍閣路險。四川保寧府の劍閣は劍州の北三十里に在り、兩崖峻拔、石をうがち閣を架して棧道と爲し、連山絕險なり故に之を劍閣といふ、珠云く、「向上宗乘は中々足ぶみもならぬが、併し寶壽三聖とすさまじいものがでて、」又云く、「すさまじいものがでて、」又云く、「すさまじい往來のなるものではなけれど。」

㋰夜行人更。夜行の賊更に多しとは、三聖、寶壽に當つ、珠云く、「三聖の巾着をきりたがつて、寶壽門庭嶮しと雖も、三聖夜行を打す。」

㋒恁麼爲人。珠云く、「なぜからう云ふた爲人でさふらうと。」

㋼瞎却。目くらにしてのけるであらう。

㋨鎭州。寶壽は鎭州にあるを以てなり、今の河北省にあり。

㋔擲下。ぶつころばして。

㋗迺把金鍼。寶壽、把住綿密にして縫罅を露さず、珠云く、「二人の出合も水ももれん、さて見事じやどうにらんでも手目は見えぬ。」或抄に「綿密把住、密室に風を通ぜずの義じや。」

㋳燒牛屎香。珠云く、「五百年間出とも云べし、世に希有の香寶壽は打し虛堂は供養す。」

㋮供養他來。他は推出の僧、又推出せられた僧なり、楞嚴の七に「佛、阿難に告げての玉はく、若し末世の人願はくば、道場を立てゝ先づ雪山の大力の白牛の、其の山中肥膩の香艸を食するを取れ、此の牛唯だ雪山の清水のみを飲んで其の糞微細なり、その糞を取りて旃檀を和合して以て其の地に泥ヌるべし」注に云く、「雪山の牛乳、純らこれ醍醐有らゆる菇退最も香潔たり。」牛屎香は蓋し之を謂ふ乎。分外は托上のやうにしてちと此の僧を弄する意。

㋘他是本色。道理なき故に、珠云く「彩畫した臨濟の子孫ではない、」又云く、「推し出したものも、推し出だされたものも、他は是れ本色の衲子、」又云く、「めつぼうかいになぶつたなあ」と。

㋫師乃云。提綱なり。

㋙天理好還。昨日は黜屈せられ、今又出世す、所謂天運循環、往いて復らずと云ふこと無きなり、巳下皆この意旨なり、珠云く、「これは虛堂和尙の生國。」或抄に「四季巡行止まず、」日月行みな好還也。」珠云く、「葉落ちて根に歸するが如く一切草木等まで」と。

㋓是處溪山。合浦珠還つて雲山觀を改むるの意なり、「珠云く、「栢岩は明州で、虛堂の生緣の處、」又云く「おれがもどつたればじや、舒二笑眼一とは相迎ふるが如し。」或抄に云く、「入院體の祝語なり、」又云く「我れを知音の如くにして溪山までも」と。

㋢群心響應。衆議一同して此の請を致すなり、珠云く「四衆等一切が歸仰する。」

㋐信知此道。惟忖するに此の道天眞終に無を以て有と爲す、故に群心應ずること此の如し。」珠云く、「信は天の道なり、無理はないぞ、私はならぬ。」誣ひずとは欺かず、人をおしそこなふことをば云ふなり

㋚眞不掩僞。五祖の戒禪師の語なり正しく讒者及び吳制相等に當る、或抄云く「其の差異分明にして、相混ぜず本分の家卿。」

㋖自然艸偃。論語の顏淵篇に君子之德風、小人德艸、艸上之風必偃、」比況自ら分明、珠云く「自然の道理なればに骨折りなしにずら〱と。」或抄に云く、「祝語相應の體なり、天子の號令は萬民をして相隨はしむ

華を雨して、讃歎す。尊者云く、「空中華を雨して、讃歎するは復た梵れ何人ぞ。」云く。「我れは是れ(セ)梵天。」尊者云く、「汝云何が讃歎する。」天云く、「我れ尊者の善く(ス)般若(イ)波羅蜜多を説くことを(ロ)重んず。」尊者云く、「我れ般若に於て、未だ曾て一字をも説かず、汝云何が讃歎する。」天云く、「尊者無說、我れ乃ち無聞、無說無聞是れ眞說の般若波羅蜜多なり」といふて、又復(ハ)地を動じ華を雨す。雪竇云く、「(ニ)喧を避けて靜處を求むることは、(ホ)世未だ其の方あらず、(ヘ)他喦中に在つて宴坐す。(ト)也た者の一隊の漢に伊を塗糊せらる。(チ)更に者の老把不仕なるあり問うて云く、空中に華を雨して讃歎する、復た是れ何人ぞ、(リ)早く敗闕を見了れり也。我れ尊者の善く般若波羅蜜多を説くことを重んず、(ヌ)

るなり。

(ユ)大平得路。處として太平ならずと云ふことなし、珠云く、「亂世には則ち關隘壅塞、太平には則ち路通を得て自在往來濟すぢさはりなしじや。」

(メ)親到栢巖。珠云く、「とつくりこゝへ落ちついた、一句またどうじや。」

(ミ)青松人來往。礙ふること能はさるものは、境界の別なるに依つてなり、珠云く「礙は障礙なりわきから看ればすきまはないやうなれども、ゆくのもかへるのも、いやがりも好みもせぬ。」或抄に「青松は松原なり、育王をあいもなく、退き栢岩へ入院せらる自らに比して去留に拘らざるを、物の爲めに拘せられぬを云ふ或抄に云く「青松は栢岩の境致なり、松原なり、その中あるけばさはりないぞ、わきからみればあるかれさうもない」と云ふなり。

(シ)野水無心。退院進寺は野水の自ら無心なるが如し、珠云く、「野水は師自らに比す、流せばながる、せけばとゞまる。」或抄に云く「栢岩に住するに障碍なきなり、天然自在の體なり。」

(ヱ)須菩提。これは碧岩の第六則の評にも出てゐる、須菩提、此には空生亦善吉、善現等と譯す、釋迦の十大弟子中に於て、解空第一と稱せらる、支那語て空生(空から生れた兒)の意と譯す、須菩提が巖の上に端坐して、般若哲學(空理哲學)の冥惱に耽つてゐると、一人の帝釋天が現はれて來て空中から花を散して讃美の歌をうたつて居た、須菩提がそれを見て何故にそんなことをするのかと問ふと、帝釋天は

…惡水驀頭に潑ぐ。我れ般若に於て未だ曾て一字をも說かず、(ル)艸裏に走る。尊者無說、我れ乃ち無聞、(ヲ)甚麼の好惡をか識らん。(ワ)總に者般底に似たらば、(カ)何れの處にか今日あらん。」復た大衆を召して云く、(ヨ)雪竇幸に是れ無事の人、(タ)爾者裏に來つて、(レ)箇の甚麼をか覔めんといつて、拄杖を以て一時に趂ひ下す。」師云く、「雪竇(ソ)其の兵機を善くせずと雖も、(ツ)要且つ暗に孫吳に合へり。今日栢巖、開堂祝聖、(ネ)甚に因つてか人の華を雨し供養する無き。」(ナ)拂子を擊つて、(ラ)賊は愼家の門に入らず。」

(ム)開爐上堂、擧す、(ウ)古德道く、「(ヰ)法昌今日開爐、行脚の僧一箇もなし、(ノ)惟だ十八の高人あつて、(オ)口を緘ち爐を圍んで打坐す。」師云く、「法昌(ク)使を解することは、家の富貴に由らず、

「あなたが般若の眞理を說法し居るからだ」と云ふ。須菩提が「私は空の眞理なんか說いたことはない」と云ふと、その帝釋天が「あなたも無說私も無聞、無說無聞これが般若(眞の空)である」と云ふて類に花を雨らしたと云ふ。

(ヒ)巖中宴坐。珠云く「人境共に寂靜、般若波羅蜜の端的。」

(モ)雨華讃歎。珠云く、「さてもゝゝとあがめられた、雨華のこと(後のところ見ゆ)。

(セ)梵天。梵迦夷、此には淨身と譯す、初禪梵天淨名の疏に云く「梵は是れ西音、此には離欲と云ふ、或は淨行と云ふ、尸棄大梵なり、光明大梵は二禪天なり。」

(ス)重。尊重なり。

(イ)般若。智惠と譯す。

(ロ)波羅蜜多。到彼岸と譯し、亦事究竟とも譯す、或抄に「生死海を波瀾多さ海に喩へ、寂靜安樂の涅槃を彼岸に喩ふ、即ち彼の生死の海を超えて、涅槃の彼岸に到るの意。」

(ハ)動地雨華。これは法華の序品にある普佛世界六種震動の類なり。雪竇後錄、此の緣の下に、巖中宴坐は即ち分別功德論に、佛、蓮花色比丘尼に謂つて言はく、「須菩提、巖中に於て衣を補ふ、最先に我に見ゆ」と、(且つ宴坐の緣なし)。雨華は即ち大般若八十四に須菩提憍尸迦に謂へらく、「是の花は生花に非ず、亦心樹の生に非ず」と、(且つ讃嘆の緣なし)。即ち大般若八十一に、善現諸天子に告て曰く、「我れ曾て此に於て二字を說かず、汝も亦聞かず、當に何の解する所あらんや」と、之を以て考ふるに、衆經、共に此の意ありと

雖も、而も此の緣なし、實に恐らくは後世の宗匠、借つて此の說を爲すならんと、祖庭事苑にもこれを引いて辨ぜり。

(ニ)避喧求靜。二乘聲聞の分なり、珠云く「古來修行の了簡とは大いに違ふた、是れ實の修行者。」或抄に云く「大いに聲聞の修行を抑下すこの雪竇は終にきかず」となり。

(ホ)世未有其方。珠云く「佛在世より方は方術」或抄に云く「一世聞すら其の道理あらず、是の處ことはり有ることなしの義なり」これまでが總論なり。

(ヘ)他在巖中。靜處を求むるが爲めなり、珠云く「他は須菩提をさす、日本でいふならば印籠の內の富士山をながめてじや。」

(ト)也者一隊。雪竇の着語なり、還つて諸天に喧雜せらるるなり、是れ世に未だ其の方(みち)あらざるなり塗糊は汚穢の謂。「珠云く「一隊の漢は梵天帝釋など、伊は自性じや塗糊は面目をぬりこべたにあはせらる、」又云く「活脫自在の眞人を無栢の無說の如くにしなさる、無分曉にぬりこめるじや。」

(チ)更者老把。著語なり、本分を守ること能はざるを云ふ、珠云く「老は須菩提を云ふ、把不住はとりとめもない、內空外空、內外空空、空大空云云などと、眞の大我をとらへまへぬうろたへものじや、」だれじやともしらぬなり。

(リ)早敗闕了。著語なり、雪竇於句下一一に拈破す、珠云く「問ふ處が直に手前と仕そこなひを見たじや、にが〳〵しい。」

(ヌ)惡水驀頭。著語なり、當に褒讚の機なるべし、珠云く「せゝなぎじるを頭から梵天にあぶせかけられた。」或抄に、「讚嘆にて却つてじや。」

(ル)艸裏走。著語なり。其の聲雷の如し、早く落艸し了れり、珠云く、「向上に云ひ持ち來れ、」又云く、「むさむさしい蛇が、なにそのやうに、もそつと荅へやうもありさうなもの、」或抄に「落草の義なり、けがらはしい、須菩提にあたるなり、早(ハヤ)般若を漏逗し了る」と。

(ヲ)甚麼好惡。着語なり。一向に無分曉の故に、珠云く「なんのそんな泥田棒なんの役にたつことじや。」

(ワ)總者般底。珠云く「總べて修行するもの、前をひつくるめていふ。」

(カ)何處今日。日は即ち出身晉脫の期なり。此の兩句は總べて此の緣を判ず。

(ヨ)雪竇幸是。天花動地等の擾亂なき故なり、珠云く「天の讚歎することもなく、一字を說かず、いろ〳〵云ひわけすることはいらぬ、無事人じや、飢ゑ來れば喫飯し、渴し來れば飮水す、」或抄に云く「吾れは元來無事の人じやに、何ゆゑ汝等は此へ來たぞ」となり。或抄に云く「花をふらすの無聞無說のとて雪竇の祖英集に道は如愚を貴ぶとの頌に云く、「雨過雲凝曉半開。數峯如㆑畫碧崔嵬。空生不㆑解巖中坐。惹㆓得天華動地㆒來」とあり。この頌を譯すると、道は如愚を貴ふ、これは老子經の大知は愚なるが如しとの意をとる、孔子も我れと回と言ふ、終日愚なるが如し、雨過雲凝曉半開、どうもこの氣色は云ひやうもない、數峰如㆑畫碧崔嵬とは言端語端なり、この境は愚なるが如しと、空生不㆑解岩中坐とは空生は須菩提を云ふ、昔し說法するとき、天華亂墜す、惹㆓得天花動地㆒來とは、知見を以つての故なり、猶ほ愚ならば天花も落ちんが佛祖も來し、智惠か愚かと云ふてゐる、又云く「須菩提ば智惠を以て觀照するがゆゑに、天花亂墜した、我れは馬鹿な貌で見て居たゆゑ、天人も氣が付ぬか、天花も動地もすきとないものぞ」と云ふてゐる。

(タ)爾來者裏。珠云く、「梵天、須菩提ども來て。」

(レ)覓箇甚麼。以㆓主丈㆒一時趁下。復召より以下は雪竇別に大活機用を施す、珠云く「一時に趁ひ下すとはこれ雪豆何のきちがひだ、般若乎、天花乎、」或抄に云く「これ即ち雪豆眞箇無說の般若を指出して示すなり。」

(ソ)不善其兵機。兵術の機要なり、珠云く「法戰には得ていぬが、」或抄に云く「雪豆を讚歎するなり、手づから使ふて、することはせねども、善くするは鍛錬せねばどもじや。」

(ツ)要且暗孫。孫子、吳起、各兵書あり、盛に世に行はる、七書の二なり、又史記列傳六十五にも見ゆ、珠云く「きつとまあどこやらが孫吳兵法に合ふ、これは臨機迅速を謂ふなり、」或抄に云く「暗には自然なり。」

(ネ)因甚。珠云く、「こりや、又どうしたものか伺ひ見ることはならぬ。」

(ナ)擊拂子。珠云く、「寳の趁下とはどうじや。」

(ラ)賊愼家門。把住謹嚴の故に、諸天窺ふに門なし、珠云く「亭主の心立性根に依つて、家內のしまりがよい、盜人も入ることはならぬ」或抄に云く「我れ愼んで居るゆゑ諸天も花を捧ぐるに路なく、外道も見ずじや。」

(ム)開爐。十月一日　。

(ウ)古德道。會元の法昌倚遇傳に此の緣を收む、僧寶傳二十九にも出づ。

(ヰ)法昌。續傳燈十五に洪州の法昌遇は北禪賢に嗣ぐ、賢は洞山初に、初は雲門に嗣ぐ、法昌は漳州林氏の子、法昌は分寧の北にあり。

(ノ)惟十八高人。これは泥佛なり「正しく十八羅漢なり、」心宗云く、「十八羅漢を置いて說法せらるゝなり衆なきゆゑに釋氏要覽の護伽藍神の注に「七佛經を引いて十八神あり、伽藍を護す」と。道世法師云く「寺院既に十八神の護あり、居住の

(ヤ)風流豈に着衣の多きに在らんや。栢巖今日開爐、(マ)泥像を聚集することを用ひず、(ケ)暗地裏に他に勝ること一籌。何が故ぞ。(ワ)販齒生レ毛老古錐、(コ)夜深聽レ水爐邊坐」

(エ)首座を謝する上堂、主丈を卓して、「天下の衲子の(テ)偷心を死盡して、方に(ア)此の題目に稱はん。」主丈を卓して、(キ)那邊に轉向するも、(ユ)猶は功勳邊の事に墮す、作麼生か、(メ)恰恰に相應し去ることを得ん。」主丈を卓して、「人天の眼目、(ミ)堂中の上座。」

(シ)正旦上堂、「一年又一年、循環(ヱ)數へ足らず、(ヒ)本分面上の人、猶ほ羅縠を隔つるが如し、(モ)惟だ南極老人のみありて、(セ)天鼓を扣くこと三下し、(ス)北闕を望んで(イ)祝す。何が故ぞ。」主

者亦宜しく自ら勵んで、怠惰して非を爲すことを得ざるべし、恐らくは現報を招かんのみ。」十八高人とは一に美音、二に梵音、三に天鼓、四に歎妙、五に歎美、六に摩妙、七に雷音、八に師子、九に妙歎、十に梵響、十一に人音、十二に佛奴、十三に歎德、十四に廣目、十五に妙眼、十六に徹聽、十七に徹視、十八に遍視なり。

(オ)緘口圍爐。緘は封ずるなり、「それそのはづ、土像さまばかりじやもの、是れ珍重」と或抄に云へり。

(カ)併使家。使を併することは豈に肥馬輕裘の富に由らん乎或抄に云く「よそへ使にゆくには富貴なりで、肥馬輕裘で行くには及ばぬ、只だ口上をよく覺えて事の埒さへ明かればよいぞ、其の如く廃生爲人

するに缺くることなければ、富貴は入らぬ、一義に家内に於て人を使ふ也、或抄に「泥像を聽衆にして說法する也」」珠云く「何へ出してもはづかしいこともない、男振のよい佛祖に代つて化をあげてもあぶなげはない」富貴でも不調法なものもある。

(ヤ)風流豈著衣。解すべし。法昌を喚んで之に告ぐ、言ふ意は多般の高人を用つて甚麼をか爲さんと也。珠云く「錦綾を著飾つたにもよらぬ。」又云く「から云ふた虚堂がさ、法昌の上堂乎、評判乎、是がさ々々々。」風流とは忠曰く「醖藉風流の、態度自ら尊貴凡ならざるものあり、必ずしも好衣を著することの多きにあらざるなり、法昌枯淡、泥像の爲めに說法す、其の高風を仰ぐべし、必ずしも千百の大衆を

頌するに由らざる耳。

(マ)聚集泥像。十八の高人。

(ケ)暗地裡他。他は法昌を指す、籌は投壺の矢なり、又算なり、珠云く「暗地(とこやみ)に、ひとしれずに覺えぬ知らず、法昌に勝ること少しある、」勝他は一と工面ちがふた處がある。或抄に「暗地は自然に、一籌は人人一手かつことを云ふ。」

(ワ)販齒生毛。販齒は當門の兩齒なり毛を生ずとは老成の奇を表す、老古錐は即ち老成なり、錐は穎脫の義を取る、忠曰く、「販齒生毛は方語に說不得とあり、久默の故に毛を生ずるなり、」珠云く「師自ら言ふなり、そなた虚堂のはなんでござるは、販齒毛を生ずじや。」或抄に「むかばなり。」或抄に「不言の貌なり」忠曰く、「老古錐は錐はもと穎利にして古錐は則ち尖り、退き鋒き禿「つぶる」復「ふく」穎脫の能なし以て老來聽敏の機智なきに比する也、今は虚堂自らを稱する也」

(コ)夜深聽水。龍溪云く「幾多の塑像を聚めず、只だ林下の老成、耳爐邊に打坐す」と、珠云く「中夜の後ちんつん〳〵水聲を聞いて爐邊にほや〳〵御茶がわくか」と、又虚堂門下の一隻箭なり、江湖集四、聽水の題下に爐間の額也と、孫菴恭上人の頌に曰く、「聞處何ニ如見處深一(きくところけんしよのふかきにいづれ)」耳根の聞處の境界は眼根の見處の境界とは、何如と比べて見たれは、見處が深いなりと、紅爐焰裡碧波生とは爐間に聽水と額を打つたるところに見處が深いに依つて、活と燒き立てたる火中に碧波が生じたると見出した夜來聒々淸ニ人耳一とは、聒は聒の字ならん、水流の聲、夜來に水の流るゝ聲を聞いて、人耳を淸淨にすると。不下是閑敲ニ火筋一聲上とは聒々たるは水流の聲にてこそあれと、紅爐焰裡碧波の眼處に聲を聞いて取つた、爐間ぢやとて聒々は火筋を拈弄し、敲着する聲にても有らうかと耳根の聞處には惑はぬなり。

(エ)首座。百丈淸規に「前堂首座は叢林に表率として人天の眼目なり、分座說法、後昆を開鑿す」とある實に能く天下の衲子の無明の偷心を死盡して、方に人天の眼目の名題に稱はん、(テ)偷心、珠云く「面目をふみくだかねば皆偷じや。」煩惱賊なり、大惠武庫の序に「儻し偷心盡く死せば急に劍刃上に於て身を飜するときは、則ち死せる諸葛も以て走らしむべく、生ける仲達をばじや、さうでなくは劍去りて久し矣」といふてある。

(ア)稱此題目。首座と云ふ題目。

(サ)偷心。珠云く「坐禪誦經皆妄想じや、佛法を以ておし計り、かうしてよからう、猿がへりしてよからうかじや。」

(キ)那邊。或抄に云く「格外。」

(ユ)猶功勳邊　更に無功用の第一義を

丈を卓して、㋺願はくば我が王の萬福ならんことを。」

激せんことを要す、珠云く、「第七地迄は有功用功勳、第八地からは無功用。」或抄に云く有功用にして第一義にあらず第二義門なり、俗諦なり。」

㋦恰恰相應。珠云く、「ちやうど無上道と不二體なることを得ん。」恰は適當の辭合好義、或抄に云く、「別のものでない、堂中の首座じや。」

㋸堂中上座。卽今の上座相應底の人なり、昔五燈會元に、靈樹敏（長慶大安に嗣ぐ、安は百丈海に嗣ぐ）雲門と稱す、靈樹は韶州なり、廣主將に兵を興さんとす、躬ら院に入りて師に臧否を決せんことをこはんとす。師先きに已に知りて、怡然として坐化す、主、知事に怒りて云く、「和尙何れの時か疾を得たる、」對へて曰く、「師曾て疾あらず、」適々一函子を封じて王の來るを伺ふて之を呈せしむ、主函を開いて一帖子を得たり、書して云く、「人天の眼目は堂中の上座」と、主師の旨を悟つて遂に兵を寢む、乃ち第一座を召して開堂說法せしむ、卽ち雲門偃和尙なり、この緣は傳燈錄の十一に靈樹の傳にも出づ、事苑に云く、「首座は卽ち古之上座」と、珠曰く、「眼目は目あかしなり、」鵲林曰く、「此れは稻荷の鳥居じや、」珠曰く、「上座は法、手本、ちやうど相應するの人。」

㋛正旦上堂。珠云く、「絕妙の上堂、盤に走る珠の如し。」

㋓數不足。珠云く「つくされぬ。」古句に「千手大悲數不足、」或抄に云く、「無盡無窮の故に三句に所謂境界にはたとひ本分の人もなほ親契と爲さず、」又の義に一二句に謂ふところの境界には猶ほ未だ本分の人に契はず、本分の體足らずじや。」

㋪本分面上。時節遷流に於て、縱ひ本分の漢面上も猶ほ一分の障あり宗鏡錄二十三に「等覺未だ一分の無明を盡さず、猶ほ微煙の如し」或は云ふ、「羅穀を隔つるが如し、」珠云く、「本分面上人とは要津に坐する羅穀はうすぎぬなり、はつきりと見えわかぬ、なにがみえぬ、一年又一年。」又云く、「一年三百十日、面前了々とははつきりと見ることはならん、」或抄に「直下にみることはならぬ、」本分面上は向上の人と云ふ義。

㋲南極老人。壽昌星（前の寶林錄に見ゆ）、これより下は皆祝聖なり南極星は虛堂自らを指して暗にいふ。

㋝扣天鼓三。事苑五二、天鼓の注に諸佛境界三昧經に云く、「三十三天善法堂の前に妙法鼓あり、諸天帝

栢巖寺語錄　終

國譯虛堂和尚語錄　卷三

釋、樂を著欲する時、其の鼓自然に聲ありて、無常の法を說く、若し修羅至らんと欲すれば、卽ち寃來ると報ず。」今南極星に依つて天鼓を用ふ、「天鼓は天樂なり、三句の天樂をきいて」と或抄にみえたり。

㋜望北闕。禁庭の方に向つて。

㋑祝。今上皇帝、聖壽萬安を祝し奉る。

㋺願我王萬。理宗皇帝の事。

(ハ)臨安府(ニ)淨慈(ホ)報恩光孝禪寺語錄

侍者至源。文衡。編

師(ト)景定五年正月十六日入寺。(チ)山門を指して、(リ)外閫閉ぢず、(ヌ)天下に跨つて蘄むることなし。(ル)會得せば儞に許す、(ヲ)其の堂に陞り其の室に入ることを。」

佛殿を指して、「(ワ)巍巍たり萬德の尊、(カ)劵舒出沒、(ヨ)方便惟れ多し。是れ汝諸人、甚に因つてか(タ)如來の頂相を見ざる。(レ)咄。只だ太ぞ近きに緣つてなり。」

師、法座の前に至つて、香を焚いて闕を望むんで、

(ツ)恩を謝し畢つて、

(ハ)臨安府。一統志に「杭州府は宋の高宗、南渡都を杭に遷し陞せて臨安府と爲す。」

(ニ)淨慈。方輿勝覽淨慈は西湖の上に在り、周の顯德中に建つ祥符に今の額を改む、寺に五百羅漢あり、各身の高きこと數丈、大なるは數圍、又大鐵鑊あり、蘇東坡淨慈寺に遊んで本長老に謁するの詩に云く「臥聞禪老入二南山一、淨掃二清風一五百間」と支那五山第四に位す。

(ホ)報恩光孝。報恩とは與聖錄に見ゆ、名藍圖に「臨安府の南山淨慈報恩光孝禪寺は、開山は永明壽禪師、宗鏡堂、枯木堂、南屛山、南高峰、惠日山千峰閣、六橋、西湖、六和塔羅漢堂の正偏知閣、霜華岩、雙井等の境あり。」宗鏡堂は法堂、枯木堂は僧堂なり、或抄に云く「山號は南屛山なり、古の國分寺の事なり、徽宗皇帝、北人の爲に生擒せられ、其の次の王、先帝の死生を知らず、料るに謝德の爲めは(若死爲)、延命は(若生爲)諸寺に詔して一寺ごとに天寧と賜ひ(若生爲)、祝萬壽、報恩は(若死爲)、祝萬壽と、四字各謝德と延命との行を修せしむと云ふ。」光孝は孝養の謂なり、徽宗皇帝の北人の爲に試せらる

るを追思するなりと。

(ヘ)至源文衡。二人共未審。

(ト)景定五年。甲子、師年八十。

(チ)指山門。脫體現在、四方八面。

(リ)外閫。門扉なり、珠云く、「十方薄伽梵、一路涅槃門とおつひらいておいた。」閫とぼそなり、八字打開なり、此の門に入得して、たんのうしたらば。

(ヌ)跨天下閫。閫は求むるなり、二句共に荀子の語、皆太平の謂なりと「門閫の緣に寄せて無爲無事の本法を示す」と龍溪はいへり、珠云く、「大千沙界に跨りて、ふつくりくひふくれて、ぬらりと出たばけものせともかいども本具の佛性外に何をか求めん。」或抄に「言ろは箇の一門を跨げ得ば、天下の門に跨つて何に求むることあらん。」

(ル)會得。此の門を透得せばと。

(ヲ)陞其堂。若し無爲の法を會得せば何ぞ只だ門限に止まらん、直に須らく堂に陞り室に入るべし、これは入道の次第に喩ふ、珠云く、「頂門の隻眼が手に入つたなら、末後の大事も手に入る。」或抄に云く、「此の門を透得する底。」儞とは學者(修行者)をさし、堂は虛堂自らをいふ。

(ワ)巍巍萬德。高大の貌、惟みるに三祇熏練、萬德圓成、天上人間、唯我獨尊の故なり、珠云く、「中々丈六のは限量はない、人天の中、比類はない。」或抄に「威のたかきこと」と。

(カ)劵舒出沒。劵は把住、實際理致、舒は放行、佛事門中、出は降生、鹿苑に生を度し、沒は涅槃、摩竭室を掩ひ、或は別別に解すべからず、惣べて一代の事を擧す、或抄に云く、「自由自在佛の上なり、娑婆往來八千返の體なり。」

(ヨ)方便惟多。皆これ開導方便なり、或は其の間の方便多し、珠云く、「衆生の爲の故に、一大藏敎。」

(タ)如來頂相。眞容の無見、頂相を提誨す、頂相の事は楞嚴一の跳井に第七に見ゆ、珠云く、「如是面目は見るものか見ぬものか。」

(レ)咄。咄は上に見ゆ、委曲に眞容の所在を顯示す、是れ眼鼻孔を見さるの意、珠云く、「目で目を見られた如く、あんまり目前にありすぎるに依つてよう見ない。」或抄に云く、「眞箇如來の頂相を咄出するなり。」一說に如來の頂相を咄出して、諸人をして見せしむることを咄破す、又の說に、如來頂相を咄破し、又の說では我が落艸の處を咄破すと、並に非なり、咄は方語に沒巴鼻なり、默破と同じとあり。

(ツ)恩。天恩。

(ネ)世尊三昧。正宗記に、「和修(商那和修尊者)、毱多(優婆毱多尊者)に謂ふて曰く、如來三昧、辟支識らず、辟支三昧、羅漢識らず。」三昧は此に調直定と云ふ(これは前に見ゆ)。珠云く、「面目じや、淨無垢三昧の中、」或抄に「世尊身をうごかし。」

(ナ)金口玉音。佛祖統記の五に、「金口の記する所」とあり、輔行に云く、「如來黃金色身口業の記する所云云。」珠云く、「國王大臣、有力の檀那に囑すじや。」

(ラ)紫泥芝檢。統宗故事三に紫泥芝檢は漢書の舊儀に曰く、「天子信璽六あり、皆武都の紫泥を以て之を封む、靑囊白素をもつて兩端を裹んで縫ふことなし、尺一の板中皇帝と署す」、說文に檢は書の署なり、徐曰く「書函の蓋なり、三へに其の上を刻み、繩をもつて之を緘ず然して後塡むるに泥を以て題書して之を印す」と、珠云く、「靈山付囑を忘れずじや、紫泥は紫でつゝんだこと、綸旨なり、芝檢は紫芝を泥と爲す。」或抄に云く、「芝、此の方にはほくろと云ふくさなり、すつて粘じて用ふるなり、今芝粘を以て之に對する乎、」又云く「檢は箱のふたの上、檢束の心箱へ入れて、其の上をからげる。」

(ム)九重城裏。むかし陳摶、華山に居る、宋の太宗再び召す、摶辭して曰く、「九重の仙詔、丹鳳をして銜み來らしむることを休めよ、一片の野心已に白雲に留住せ被る」と云ふ、珠云く、「禁庭より勅使を立てゝ賜はりたる御宸翰忝ない」と。九重は禁庭はここのへの門あり之を云ふ。

(ウ)再雨露之恩。前に勅を奉じて育王に住す、故に再びと曰ふ、三體詩秪「聖代秪今多ニ雨露ー」その注に「詩の蓼蕭の注に曰く、雨露は天の萬物を潤すところ、王者の恩澤に喩ふ。」

勅黃を捧げて衆に示して云く、(ネ)世尊三昧、(ナ)金口玉音親しく付囑す。(ラ)紫泥芝檢、(ム)九重城裏より鳳銜み來る、(ウ)再び雨露の恩に霑ふて光ー法門の盛を闡く、(ヰ)聲前妙證、聳ニ動羣心ー。」

諸山の疏、「煙(オ)慘淡として、石(ク)玲瓏たり。(ヤ)面面厮覷る、(マ)千峰萬峰、(ケ)一團の和氣、(フ)其の中に在り。」

法座を指して、「法は(コ)空を以て座と爲す、歩を擧ぐるときは、則ち(エ)釋迦前に在り、彌勒後に在り、且く道へ、(テ)中間底、甚麼の法をか說く」(ア)驟歩して座に登る。

師、陞座拈香して云く、「此の一瓣の香、爐中に爇向して、恭しく爲に今上皇帝の聖躬萬歲萬歲萬萬歲を祝延した

(ヰ)光法門之盛。光は大なり、闡は開なり、珠云く「盛とは勅請住持の故に、世出世の盛事を云ふ。」

(ノ)聲前妙證。勅黃を畏敬するが故に未だ讀まざる已前に羣心聳動す謂つべし聲前の妙證ありと、珠云く「まだよみはせねど、聲前の一句、玄妙の證據、群衆の心を驚動す、」紙那未だ勅黃を宣讀せざる已前なり。

(オ)慘淡。感海なり、歐陽修の秋聲の賦に「其の色慘淡として煙霏雲斂まる」とあり、今は山寺炊煙の幽微なるを表す、珠云く「傷むことにも用ふ、盧同が月蝕の詩に、光彩未三蘇來一、慘淡一片白」と。色慘淡は氣色すみわたつてなり、煙慘の淡は山山の景色なり、諸山を望み見るに、どれはをろかはなし尋常ならぬ寺寺ばかり、或抄に、「列剎相望むの體。」秋の悲しいことにも用ふ、こゝでば煙のたなびいたとなり。」

(ク)玲瓏。明なる貌。二句共に隣寺所見の物色を擧す、或抄に云く「玉の聲、諸山の體なり。」

(ヤ)面々斷覷。珠云く、「あなたを見こなたを見るに、」又云く「山と山見合はせて、」或抄に「直に相見たやうなり。」

(マ)千峯萬峯。列剎相望むなり、珠云く「千峯萬峯相並んである諸山じや、蘊奧不可測じや。」

(ケ)一團和氣。性理大全程明道の下に云く「上蔡の謝氏が曰く、先生坐すること泥塑の人の如く、人々接するときは則ち渾べて是れ一團の和氣。」珠云く「互に會合の交りの好いことは、」或抄に云く「諸山衆と虛堂と溫和にあしらふなり。」

(フ)在其中。言ろは諸山列剎の中、渾一にして他心なし、互に相融和するなり、珠云く「其の疏中にありじや。」

(コ)以空爲座。法華の法師功德品に、如來座者、一切法空是」と。珠云く心法は諸法空を以て、座と爲すの義。

(エ)釋迦在前。「法空の座を歩するときは、則ち諸如來、實に其の前後に在るべしと簡淡は云へり、珠云く「擧歩」は緣起法界じや、着語して云く「塹着磕着。」梵天琪の證道歌の注に云く「念々釋迦出世彌勒歩々下生、分別現二文珠之心一、動用運二普賢之行一。」

(テ)中間底甚。前後二佛の中間珠云く「虛堂はなんの法を說く。」

(ア)驟歩登座。自ら今日の教主に當る珠云く「傅大士ならば大士講經畢んぬと云ふべき、」或抄に云く「一虛堂畢竟、釋迦達磨にもはゞからぬ一物あり。」

(サ)天基永茂。理宗皇帝の生日を天基節と曰ふ、之に託して皇基の鞏固運祚の永茂を祝す、珠云く「一彼蒼無窮の天の基本じや。」

(キ)舜日長命。舜日長命は天子の德を

てまつる。陛下恭み願はくば(サ)天基永く茂し、(キ)舜日長へに明かなり。載び周雅の詩を歌ひ(ユ)三たび華封の祝を聽しましまさんことを。」次に拈香して云く、「此の一瓣の香は、爐中に爇向して、恭しく(メ)中宮皇后聖躬萬福の爲にす。此の一瓣の香は、恭しく(ミ)皇太子殿下の爲に、福壽を增崇したてまつる。此の一瓣の香は、(シ)太傅(ヱ)宮師(ヒ)樞使大丞相國公(モ)大參相公(セ)大參相公(ス)樞密相公合朝文武(イ)百僚の爲に、同じく祿算を增し奉る、伏して願はくば(ロ)高く堯舜を扶け(ハ)下伊周に視へ、(ニ)千載の雅風を集めて、(ホ)萬邦の春色を鎖したまはんこ

云ふ。載は恐らくは貳に作るべし。詩の大序に「若し夫れ雅と、朱子の序に雅は正なり頌の篇は則ち皆成周の世、朝廷郊廟樂歌の詞なり、其の語和にして莊に、其の義寬にして密なり、其の作者往往に聖人の徒なり、固に萬世の法程と爲して易ふべからざる所以の者なり。貳び成周正雅の治を復しつべしと」なり。珠云く「周雅はふるいしらべ、太平の調なり。」

(ユ)三聽華封。莊子の天地の篇に「堯華を觀る、華の封人の曰く、噫聖人なり、請ふ聖人を祝せん、聖人をして壽からしめん、堯の曰く、辭す、聖人をして富ましめん、堯の曰く、辭す、聖人をして男子多からしめん、堯の曰く、辭す。」堯の辭する所の壽と富と多男子と三の者、願はく此の祝を聽許し玉へ。

(メ)中宮。「皇帝の正嫡を皇后といふ、天子の配之を后といふ、后は君なりと」白虎通に見ゆ。

(ミ)皇太子。世子を稱する尊號、儲君を云ふ。

(シ)太傅。日本でならば左大臣にあたる、賈似道を云ふ。

(ヱ)宮師。未審、蓋し太師を謂ふか、東宮の太師か。

(ヒ)樞使大丞相國公。日本の太政大臣、時にこの次の官は此の官人二人あり、故に之を言ふ大參相公二名。

(モ)大參相公。徐清叟を云ふ、相は輔相の義なり。

(セ)大參相公。何夢然。

(ス)樞密相公。馬光祖。

(イ)百僚。珠云く「つかへびと、官なり、ともがら、同官を僚と云ふ。

(ロ)高扶堯舜。珠云く「堯は皇帝

とを、㋬此の一瓣の香は、㋣判府安撫提領大卿都運殿撰大卿、洎び㋠郡縣官僚の爲に、同じく祿算を増し奉る。」

次に拈香し云く、「此れは是れ
㋷門司提擧太尉恭しく、
聖旨を奉つて、㋦送つて寺に入れしめて、㋸趙州八十行脚の因緣を問ふ。用て祿算を資く。㋾此の香、多くは是れ㋻貴く買ふて賤く賣る、㋕南番の舶主に遇ふこと罕なり。今日㋵人天普く㋟會す、㋹敢て囊藏せず、爐中に爇向して、前住安吉州道場山護聖萬歲禪寺先師運菴和尚の爲に、用て法乳に酬い奉る。」

師衣を歛めて、座に就いて、㋞乃ち云く、「大覺世尊、靈山會上に在つて、人天㋡性命の道を以て、國王大臣㋧有力の檀那に付囑して、外護流通して、斷絕せしむること毋らしむ。㋤今則ち人天普く㋶會して、祝
聖開堂す。㋰此の旨を領得する者あること莫し麼。」時に僧あり問ふ、㋒頂門に眼を具して乾坤に耀く、㋼聲價轟轟として四海聞く。㋨丞相、面りに
天子の問を承つて、㋔九重より詔を飛して深雲を出づ、㋗祖道を中興すること、正に玆の時に在り、㋳一句機に投ず、願はくば、祝聖を聞かん。」師云く「㋮南山北闕に朝して、㋘夜夜明星を觀る。」僧云く、「㋫只だ㋙一味無心の法を將つて仰いで堯天舜日の明を祝す。」師云く、「㋓風靜にして日月正しく、㋢雪晴れて天地春なり。」

僧禮拜す。

師乃ち云く、「㋐春湖山に入る㋚先放の花御苑を

に、舜は太子に、仁德ある父子。」

㋩下視伊周。視は比なり、伊尹と周公旦とに。珠云く、「仁慈忠節德義ある二賢臣、萬民を撫育す。」

㋥千載之雅風　詩經の國風の注に、「風は民俗歌謠の詩なり、之を風と謂ふことは、其の上の化を被むるを以て、言ふことあり、而して其の言、又以て人を感ずるに足れり、物は風の動に因つて以て聲あるが如くにして、其の聲又以て物を動すに足る」と。千載已往の雅正の風化を集大成せんことを願ふなり。珠云く、「左あるときは上古三代の雅しき風敎を集め布さ播して、自然に民にならはしめて」。雅は正なり、風雅と云ふは則ち六義あり、雅風と言ふは則ち正風なり。

㋭萬邦之春色。鎖は或は鎭に作る、管領の意なり、春色は温和慈仁の德儀を表す。珠云く「いつがいつまでも、鎖しもらさず」、鎖は納むるの意春色とは正月十六日の入寺なれば爾か云ふ。

㋬判府安撫提領太卿。臨安府劉良貴太守なり、安撫は蓋し兵馬を安鎭し、飢餓を撫育す。提領は提擧なり。大卿は蓋し尊稱なり、提擧は米穀を司る。

㋣都運殿撰大卿。浙西轉使吳勢都運は都轉運使なり。殿撰は蓋し集賢殿の修撰乎。育王錄にも見ゆ、都運は米穀を運轉するを司る、大卿の人二人あり、重ねて擧ぐ。

㋠郡縣官僚　郡奉行、町奉行なり。

㋷門司　楊都知なり、所經の官一人にて三官を兼ぬるなり、事文類聚に、左右監門下、唐凡そ東宮の諸司、籍を以て宮殿に入るべきものは、皆本司其の官爵姓名を具して門司に送る、」之を會して同じければ則ち聽入す、衞士長のやうなものか、太尉は武官の稱、提擧は上に見ゆ。都知楊は後錄に見ゆ。

㋦送入寺。珠云く、「御門を送りて寺に入れしむ、」後錄の偈頌に見ゆ。忠曰く、「日本でも大德、妙心、天使先づ進んで寺に入り、新命を導引す、此れを送りて寺に入れしむと謂ふ者なり。」

㋸趙州八十。或抄に、虛堂八十、淨慈に住す、故に此の問あり」此の緣は後錄偈頌の部の首に出づ。

㋾此香。珠云く、「とつておきの巾ちやくへ入れおいたが、」又云く、「運庵におひまくられ。」

㋻貴買賤賣。珠云く、「身命を拋つて買つて思はぬものどもにおし賣りする。」或抄に云く、「運菴下に於て千辛萬苦して、拄杖頭拂子邊に勤勞して、之を得る故に、」賤賣とは二義門に下りて垂手の故に。或抄に云く、「うり手は運菴じや、智音なきゆゑやすく賣る。」貴買ば向上、賤賣は向下。

㋕南番舶主。一統志に「廣州府に南海番禺縣あり、人物富庶、商賈阜いに通ず。」舶は音白、蠻夷海に汎ぶ、舟を舶と曰ふ、海中の大船なり。言ろは大船に、主の良師に遇はざるが故久年囊藏するなり。珠云く、「よき買ひ手が來たなら、高値にうらんと思へども、」又云く、「大器量大志願を具したる衲子を云ふ。」名香道の地なり。

㋵人天。天使も諸人もみな會ま

る。
(タ)會。音「くわい」とよむがよし。
(レ)不敢囊藏。珠云く、「堪忍袋の緒がきれた、取りてはおかぬ」と。
(ソ)乃云。索話なり、釣語なり。
(ツ)性命。珠云く、「人々本具底。」或抄に「心の身體簡要。」
(ネ)有力。珠云く、「威力財力じや。」以上之因緣は育王の語錄に見ゆると同じなり。龍溪云く、「今正法を以て王臣四衆に付囑すと云ふは、此れは是れ旁付、法官に在りて、能く人を治め法を護するを以てなり」と。
(ナ)今則。珠云く、「今はすなはち、」虛堂和尙が勅を受けて。
(ラ)會。「くわい」前に同じ。
(ム)領得此旨。珠云く、「釋迦如來、國王大臣に付するの端をがてんするがあるならば、」「人天性命をばじや」と或抄に云へり。
(ウ)頂門具眼。或抄に云く、「出陣の句に頌を呈したのじや。」頂門上に眼を具して、四天下を照破す。
(ヰ)聲價轟轟。或抄に「聲價は世に鳴ることじや、」。龍溪云く、「この二句は師の德實嘉名、轟轟として群車の聲の如くなるを、嘆美するなり」と。
(ノ)亟相面天子。問は聘なり。珠云く、「楊都知が天子の虛堂八十住山の問を傳へ來るなり。」
(オ)九重飛詔。公選の鄭重なることを述ぶ、深雲は山を謂ふ。珠云く、「飛詔は雲井を出でて淨慈へ入り來る。」深雲は天上春雲、これまでは頌にのべたるなり。
(ク)中興祖道。珠云く、「達磨の大法を中興するは。」
(ヤ)一句投機。忠曰く、「投機の二字二義兩點あり、機を投ず、謂ゆる學者の機を師家に投ずるなり大悟を投機と言ふ、亦これ機なり。機に投ず、師家學者の機に投するなり、今此の義を用ふ、謂ふ意は請ふ師一句學者の機に投ずべしとなり。」
凡そ問荅往復を言ふなり。珠云く、「投合なり、總じて禪門に生死の根元をきる人の偷心を奪ふ底の機に投ず。三根機上中下根機なり、投は呈なり、投合契投の義。
(マ)南山朝北闕。南山は淨慈なり。
(ケ)夜夜覩明星。是れ祝聖の言なり、南山は淨慈、南屛山といふ、以て南極星の北辰に朝するに比す、論語の爲政に、「政を爲るに德を以てすれば、譬へば北辰の其の所に居て、衆星の之を共(むかふ)が如し」とあり。珠云く、北闕は天子に朝するを云ふ、夜々は豐年の義なり覩二明星一は君臣和合、淸平の象。」或抄に云く、「北闕と北斗に比し、天子の事を云ふ、明星は北極坐ながら明星を覩る、北斗は王者の位に比す、衆拱北は百官の朝宗に擬す。」
(フ)只。托上なり。
(コ)一味無心法。珠云く、「一心不亂の意、邪智なし。」又云く、「きたない

明かにす、(キ)人上國に歸す(ユ)南山の鶴青松に唳る。(メ)皇都を壯にして人傑に地靈なり、(ミ)紫府を窺ふときは洞天風月あり、(シ)聲を透り色を透り、(ヱ)類を絕し倫を離る。(ヒ)妨げず、(モ)手を垂れて鄽に入るも、(セ)畢竟至化を逃れ難きことを且つ闕を望んで恩に酬いんとする如何なるか(ス)祝贊せん。」拂子を擊つて、「(イ)版圖遠奏堯天闊(ロ)萬物呈祥樂聖情。」復た擧す、(ハ)本朝太宗皇帝、因に僧(ニ)朝見す、帝、坐を賜ふ、問うて云く、「卿甚れの處よりか來る。」僧奏して云く、「廬山の臥雲庵。」帝云く、「(ホ)雲の深き處に臥して天に朝せずと、甚に因つてか者裡に到る。」僧對なし。後來、(ヘ)雪竇の明覺大師、代つて云く、「(ト)至化を逃れ難し」と。師云く、(チ)明覺は固に是れ(リ)食息にも忘れず、

ことを云ふ。」
(エ)風靜日月正。珠云く、「太平の氣象。」又云く、「事では風、條(えだ)を鳴さず、理では八風寂靜じや。」或抄に「世淨く天子正しく。」
(テ)雪晴天地春。正月十六日入寺の故に、多く其の節に託す。或抄に「聖人か小人か春のけいきを。」或抄に「雪は小人に比す、春は天子の恩德に比す」と。
(ア)春入湖。これは隔對の句なり湖山は西湖なり、淨慈寺のある處なり、杭州府の西湖は府城の西にあり、宋高宗巳下皆杭州に都す。
(サ)先放花御苑。あたたかであるからに、今春信の早を以て吉慶と爲す、先放ははやさきに、二十四番の花の中で、先づ開く花なり、梅を百花の魁とす御苑は集芳御園、或は南園なり。忠曰く、「澗山勝槩に曰く集芳御園、後に賈平章に賜ふ内に假山石洞あり、通じて湖濱に出づ、名づけて後樂園と曰ふ、蟠翠、雪香、翠嵓、倚繡、挹露、玉蕊、淸勝あり、巳上皆高宗の御題、亦集芳の舊物なり、西湖一曲、奇勘理宗の御書云云。」
(キ)人歸上國。人は師自ら謂ふ、上國は此の地、皇都の故なり。珠云く、「師來て上國の官寺に住す。」或抄に云く、「盛なるけしきを云へば。」
(ユ)南山鶴。南山淨慈の所有の物色、又延長を祝しつべし。珠云く「此の度淨慈も虛堂來りて開堂すれば、鶴も龜も萬歲をとなふ、鶴は壽あり、以て祝語に入る。」或抄に云く「句面祝語底の意、虛堂自らに比す。」
(メ)壯皇都人。これは直對の句。

當時若し㋦臣僧に、雲の深き處に臥して天に朝せず、甚に因つてか者裏に到ると問ひたまはば但だ㋸鞠躬近前して、奏して云はん、請ふ陛下㋾高く天鑑を垂れたまへと、皇情大いに悅ぶことを㋻管取せん。」

當晩小參僧問ふ、「㋕佛法の混濫、今日より甚だしきはなし、㋵正人一たび出づれば、㋟天道還すことを好む。如何なるか是れ爲人底の句。」師云く、「㋹劍は餓人の手に握る。」僧云く、「只だ德山小參㋡答話せず、趙州小參㋡答話せんことを要すといふが如きんば、此の意如何。」師云く、「㋧布袋鄭頭にして相似て重し。」僧云く、「學人今夜、㋔小出大遇、」師云く、「㋶儞箇の甚麼をか得たる。」㋰僧使ち喝す、師云く、「㋒果然。」㋖僧禮拜す。

王勃が勝王閣序にこの言あり珠云く、「いよいよ勢がよくなる、たゞ皇都であるに、よきすぐれものがをるとなり。」

㋯窺紫府洞。紫府は神仙の所居なり、洞天は道士の游ぶところ、禁闕を以て紫府洞天と作して、以て祝壽を致す。珠云く、「窺はうかゞひ望む、尊むの意、紫府以て帝居を稱す、壺中の天地、人のしらぬ景色」人倫不到のうづだかい天子の仁德をうかゞひのぞむこと。

㋛透聲透色洞天の風月の故に聲色を透脫す。珠云く、「音聲を止め風の色を見徹する」と、これより虛堂の體なり、祖宗門下の受用。

㋓絕類離倫。人傑地靈の故に、類倫を逈絕す。韓文にも「絕レ類離レ倫、優入レ域」とあり珠云く、「絕は上下四維無等なり。」或抄に「上の人傑を受けてじや。」

㋪不妨　かまふことでないが、挨拶に云つたなり。

㋲垂手入鄽。珠云く、「虛堂は衆生の爲に方便とでかける。」

㋝畢竟至化。至化は皇化、此の二句、正に出世の本志に歸すと言ふ意は好爵の時節、出來りて鄽中の佛事を作すも、何ぞ妨げんと。畢竟至治の德化を逃れ難きが故に、聖旨を奉じて特に此の地に住すとなり。珠云く、「畢竟君の風化太平の至化に依つて、是の如く法もおこなはる。」或抄に「難逃至化とは外面に謂く雲に臥すも天に朝するも、進退出入都べて天子の德化を蒙むるに非ざることなし、實意に謂く、擧動進止、全く主人公の德用を離れず。」と

㋜祝贊。祝は願、贊は佐なり、頌なり。

㋑版圖遠奏。版は戶籍、圖は地圖なり、領地の義、人の地を訟ふるものを聽くに、版圖を以て之を決す今遠方來歸の祝を致す。珠云く、「四夷八蠻、國の圖をさゝげ、幕下に屬し、帝都に朝す、遠奏は遠方より進め上り、闕は太平廣大の義。」版圖は四海來伏の體。

㋺萬物呈祥。珠云く、「有情非情、祥瑞を上り、聲情は天子の御機嫌を樂ましむ。」情は音「ぜい」とよむがよし。

㋩太宗皇帝。北宋第二主、この緣は聯燈二十九、普燈二十二、並に收む、類聚第一にも出ず。

㋥朝見。參內なり。

㋭臥雲深處。これは所出を審にせざるも、古詩ならんか。珠云く、「層もない處、安逸でゐてはじや。」

㋬雪竇明覺。明州の雪竇山資聖寺に住す、諱は重顯、字は隱之、勅賜號は明覺大師、雲門派にして、この人は宋の太宗皇帝の太平興國五年、日本の圓融天皇天元三年に支那遂州に生る、宋の仁宗皇帝の皇祐四年、日本の後冷泉天皇永承七年に入寂せり。

㋣至化。珠云く、「皇化を云ふ、率土の濱までも王土にあらずと云ふことなし。

㋠明覺。珠云く、「虛堂和尙の意では雪竇は差別智を明し、法理を分つこと古人にも少れなり、との賞讃の意じや。

㋷食息不忘。食息は頌古の跋に見えたり。念念相續不斷の義なり、珠云く、「大法を食息の間も忘れず、食ふもいきするも、法道一片、變色なき大冶精金じや。」或抄に云く「飮食寢息で、寢食の義なり、外面には謂く、日用皇恩を忘れず實意には謂く、日用此の事を離れずじや。」或頭註には「終食の間出入息の間なり。」增韻「に一呼一吸を一息と爲す」と。

㋦鞠躬近前。鞠躬ば身を曲げるなり身をかゞめて近く寄りて申し上ぐるなり。或抄には「鞠躬近前の端的、是れ何物ぞと眼を著けよ。」端的は見識とか理想とか着眼點とかなり。

㋸臣僧。虛堂自らを云ふ。

㋾高垂天鑑。珠云く、「何卒あなたの目がねを垂れさせられよ、」又云く「かくちかより參つたは、なぜじやと御推察なし下され」と。

㋻管取。珠云く、「俗語で領得の義、字書には未だ領得之義を見ず。」うけあうの意、又配するの義もあり。

㋕佛法混濫。邪師混雜して分たず、異說濫竊して正しからず。珠云く、さまざまの風情をする禪僧が出て。」

㋵正人一出。しかるべき人出づれば天も同心なり、こゝには虛堂を指す。

㋟天道好還。珠云く、「自然と天道は古風に還ることを好む、佛法の衰を引き還すことを云ふ。」

師、主丈を拈じて云く「㋨者裏使ち是れ妙高孤頂、何ぞ須いん㋔別峰に相見することを。㋗風颼颼、㋳水冷冷、衲僧家、㋮蹉眼せば得じ。若し㋘江を隔てゝ手を招けば、使乃ち横に趨すと説かば、㋫已に是れ他の影子に落つ、更に今夜㋙答話不答話と云はゞ、㋓漫天の網子、㋢阿誰か知らざらん。㋐既に知得分曉ならば、只だ㋚都城に十二座の門あつて、朝從り暮に至るまで㋖車馬騈闐として、㋴衣冠の文物、㋱出入間なきが如きんば、且く道へ、㋯各各持する所の者何事ぞ。若し也た知得せば、㋛今夜相見て、㋽功浪りに施さず、其れ如し然らずんば、主丈を卓して、㋪凌空の鐵塔鎮長に存す、㋲夜深けて誰か聽く風甌の語ることを。」復た擧す、㋝慈明因に㋜泉大道來り參ず、明云

㋹劔握甄人。前の寶林錄にも見ゆ。珠云く「殺活自在なり殺活時に臨んで、こつちの勝手次第。」又云く「人の爲なら身命をすててかゝる甑人じや。」

㋞不荅話。いはぬ／＼と。

㋡要荅話。さあさあ、問へ／＼。この二縁共に報恩錄結夏小參に見ゆ。

㋧布袋鄭頭。鄭は平なり。曰く、荅話せず、曰く、荅話を要す、底裏齊平、垂手一般。珠云く「前も一斗入りの布袋、後も一斗入りの布袋。」又云く「德山趙州同じようなものさ。」相似重とは一分一厘違ひなく重いならばひき上げて見い。或抄に鄭頭は同じおもさのふくろ布袋頭の重きなり、一荷にかつぎても同じ重さのもの」と。

㋤小出大遇。前の一の卷に出づ。

㋶儞得箇甚麼。僧得便と叫ぶが故に、珠云く「其方になにをくれた、得たとはなんじや、」或抄に「どこだうりに向つて得た。」

㋰僧使喝。所得底を喝出す。

㋒果然。珠云く「そりや、みたか、云はぬことか。」

㋼僧禮拜。珠云く「中々手ぎはのよいやつ、俊逸の漢じや。」

㋨者裏便是。これは碧岩の第二十三則にも「保福長慶、遊山次、福以レ手指云、只這裡便是妙高頂、慶云、是則是」とあり。珠云く「者裏とはこゝがとりもなほさず、別峰相見もいらぬ、偏中正の假諦門のと死にたはこと。妙高孤頂とは犬毒海言語道斷能見所見を斷じた妙高孤頂佛祖もついに見たことない、菩薩の願心あつても、こゝに居れば、聲聞の窠窟じや」と。又云く「貴い處で恐るべき處じや」とは。或抄に「今様にいへば、宇宙の實體とか神の姿とかの意に用ふ。」華嚴經入法界品から出てゐる、華嚴の入法界品に、善財童子と云ふ一學生が、文殊の指圖によつて、德雲比丘といふ佛教のものしりを尋ねて、妙峰山の頂に登つたと云ふ譬喩話がある、これ華嚴の入法界品を一讀すべしといつてゐる。

㋔別峰相見。珠云く、「差別の智」龍溪云く、「今は常露現前の眞際を示す。」或抄に云く「直下に此の處にて相見。」珠又云く「百艸頭上差別の上に德雲比丘を見た、遍一切處の德雲比丘じや、眞實背觸が手に入つたら別峰相見がとつくり有りがたうなる」と。

㋗風颼々。亦颼々に作る。珠云く、「たゞなにとなく風はどう／＼。」或抄に「直示現成なり、直相見底を再釋す、好箇の妙峯頂。」

㋳水冷冷。指して常露現前の證と爲す水がひや／＼流るゝことなり。

㋮蹉眼不得。蹉は過なり、言ふは眼目定動せば、即ち不會得。珠云く、「蹉眼はまたゝき、不得いひちがふ見そこなふなり。」

㋘隔江招手。高亭の緣、報恩錄の退院に見ゆ。珠云く、「隔レ江招レ手、此のやうなちよろいことを、橫趨は高亭が德山に出合ふて早や合點。」或抄に云く「頓機靈利、一見便見の義。」

㋫已是影子。縱ひ是の如くわづかに見て便ち悟り去るも、猶ほ是れ他の影響を見得ずとなり。珠云く、「かげばうしをかついでありく。」德山招くところの扇子の影。

㋙荅話不荅話。珠云く「趙州と德山荅話は妙高孤頂も別峯も皆ここにある。」

㋓漫天網子。老子經に「天網恢恢にして失はず。」珠云く「けやぶつて出るやつがあるかと張つた。」又云く「いかな／＼、佛祖と云へども出ることならぬ、あみよ。」趙州德山の手段は網を張る、學者にひつかけんとした。

㋢阿誰不知。それほどの事は誰も知つたとなり。溪云く「二大老漫天の網を張りて、學人を籠罩す各所レ知。」珠云く「身ぬけのならぬこと、いづれも知つてをらぬことじや「。漫は遍なり、あまねし、或抄に云く「盡天下の人をあみの中に入れることは」と。

㋐既知得分曉。珠云く「漫天の網子を合點いつたならば、既に知得はあみがはづれたかなり、分曉ははづれまうしたなり。」或抄に「上件の樣子をよくがつてんしてあらば。」

㋚都城十二座門。都城は杭州府の古蹟に、宋の大内は鳳凰山の東に在り、高宗南渡州の治を以て行宮と爲す、皇城を增築す、十二門は面に三門、四面に十二門、座は箇なり、十二箇なり。

く、「(イ)片雲谷口に橫ふ、「(ロ)遊人何れの處よりか來る。」泉云く、「(ハ)夜來何れの處の火ぞ、(ニ)古人の墳を燒き出す。」明云く、「(ホ)未在、更に道へ。」「(ヘ)泉便ち虎聲を作す、(ト)明打つこと一坐具、(チ)泉、慈明を推倒す、(リ)明、亦虎聲を作す。(ヌ)泉、退身して笑つて云く、「我れ(ル)七十餘員の善知識に參ず、惟だ師のみ(ヲ)以て臨濟の正宗を繼ぎ得べし」と。師云く、「叢林の中、往往に道ふ、慈明當時、末後に更に一喝を與へば、泉大道をして(ワ)立地の處なからしめんと、是は則ち是、(カ)殊に知らず、(ヨ)際天の洪濤あつて、(タ)以て呑舟の魚を容るべきことを。(レ)夜深久立。」

結夏小參、「(ソ)竺土の大仙、九夏の月に於て、(ツ)漫天の網子を布いて、天下の衲僧を籠絡す。之を禁足護生、尅期取證と謂ふ。(ネ)南山の內堂外

(キ)車馬駢闐。駢聯なり、闐は音田盛なる貌、車馬往來絕えず珠云く、「朝から晩まで車馬ぐらり〳〵。」駢闐とてひきちぎらす、これはにぎはふところ云ふ。
(ユ)衣冠支物。珠云く、「公卿大夫諸官、人皆文華のれき〳〵。」
(メ)出入無問。珠云く、「ではいりひききりなしじや。」
(ミ)所持者何事。所持は即ち人人本具底の事。珠云く、「操持、もつてをるもの。是れがさ、虛堂どうともかうとも。
(シ)知得今夜。或抄に云く、「知得は我れに知得相見は虛堂」と。
(ヱ)功不浪施。虛堂爲人の垂手なり。
(ヒ)凌空鎭塔。外面、六和塔に託す。珠云く、「空を凌いでつゝ立つた、見たか、印籠の富士山が見えたら見えべいじや、鎭長存とは昔しからまめでをいやる。」一山云く、「淨慈の法堂の傍に十重の塔ありて、無は爲無事、閑なる體なり。」

(モ)夜深誰聽。珠云く、「ものさびわたつた、風颭は風鈴の聲・さりとは〳〵閑せいにあまつた人の語るに似た。」
(セ)慈明。楚圓、汾陽昭に嗣ぐ。
(ス)大道。谷泉、汾陽に嗣ぐ、南嶽芭蕉菴に住す、法中で强たたかな衲子、慈明の師弟なり。
(イ)片雲橫谷口。來參路なし」と龍溪は云へり、珠云く、「凡そ佛祖も脚を挿むところ雲でたち切つた。」把住なり。
(ロ)遊人何處來。珠云く、「名のれきかんと」呼ばはつた「大把住なり。」
(ハ)夜來何處火。火は野火なり。珠云く、「くらやみゆゑ、どこからともわかたぬ火が、ひよつくり出てまゐつた。」
(ニ)燒出人墳。棒奔を燒き盡して

古墳を露出するなり。自然現成して來るの意なり、珠云く、「やきはらつて死人をやき出した、片雲谷口に橫ふとは、死人の居處平大いにあてたな」或抄に云く、「いづくの火やら、墳の邊を掩ふたものを燒きはらふた程に、墳がきらりと露出した、把住綿密にせらるれども縫罅が見た」となり。
(ホ)未在更道。珠云く、「まだ〳〵さうでない、どこからじや、さあ云へ〳〵。」
(ヘ)便作虎聲。珠云く、「うふ〳〵とじや、威を現してじや。」
(ト)打一坐具。珠云く、「うぬはよい年かげて居てと、打つこと一坐具す」或抄に云く、「猛虎の勢を一刀兩斷す、猛虛の活處をはたらいた。」
(チ)推倒慈明。珠云く、「泉、靑龍に騎つたが、やぜがれの和上を力にまかせて。」
(リ)明亦作虎聲。珠云く、「こゝじや〳〵と、虎聲を作す。」龍溪云く、

變放雙收、主と作り伴と作る。」
(ヌ)退身。珠云く、「甲を脫ぎすて、あとへさつて。」
(ル)七十餘員。珠云く、「あれやこれやと參じて見しが。」
(ヲ)臨濟正宗。讃嘆するに分あり、珠云く、「あぶなげもない、おれのとこの汾陽も大慶じや。」
(ワ)立地處。珠云く、「をりどころ、足の措きどころはあるまい」と。
(カ)殊不知。珠云く、「とんと御不案內御存じない事、大鵬のふるまふ、鳥雀の評判するやうなもの。」
(ヨ)際天之洪濤。珠云く、「際天は天にわたる、高き浪を言はんと欲するなり、慈明波瀾廣大なことは外ではしらぬ」「慈明の廣大の禪機を云ふ、洪濤は慈明の言句を云ふ。
(タ)呑舟之魚。泉老の竿魚を入れた、龍溪云く、「慈明にして乃ち泉大道を接すべく、彼の尋常汗瀆、豈に呑舟の魚を容れんや、賓主相應何の議すべきことかあらん」となり、

呑舟魚の故事は莊子七庚桑楚篇に出づ。
(レ)夜深久立。小參の禮話。
(ソ)竺土大仙。佛を稱す、石頭の參同契に、竺土の大僊心、東西密相付すと、梵語は天竺此には月といふ謂ふ、佛日旣に沒して諸聖の法敎月の如しと、般若論に云く、「聲聞菩薩も亦仙と名づく、佛、中に於て最尊上の故に、已に一切波羅密多、功德善根彼岸あり、故に大僊と名づく」」事苑二に詳なり。
(ツ)漫天網子。珠云く、「禁足期證の接心だのと、かごの中へ追ひ込む。」
(ネ)南山內堂。南山は淨慈なり、堂中僧多きゆゑ、外に僧堂のかけだしをする。
(ナ)排單下榻。珠云く、「排は排別、榻は坐禪榻長連床などの類、行狀に詔して淨慈に住せしむ、衲子奔集堂單以て容るゝことなし、半は堂外に居る」とあり。忠曰く、「名を以て單片紙に書す、故に單と言ふな

堂に於て、㋤單を排し榻を下して、㋶箇箇生鐵橛の如くなることを致す。㋰期滿するに捱得せば、各人箇の㋒禪鈔子、これを㋼以て賞勞に憑らんことを要す。然りと雖も忽ち若し㋨箇の網を漏るゝ底あつて、未だ㋔制を立てざる已前に向つて、㋗山邊水邊、東を說き西を話つて、驀然として㋳蹉口に爺の名を㋮道著せば、又作麼生。㋘急急に出で來つて、㋫一轉語を下せ。」拄杖を卓して云く、「㋙收レ功較易、㋓補レ過較難。」復た擧す。㋢雪峯、㋐衆を領じて、浮江に到つて、乃ち問うて云く、㋚二百の僧を寄せて夏を過さしめんと欲す。得てんや否や。」浮江拄杖を以て、㋖畫一畫して云く、「著不得。」師云く、㋴「奸峭互に陳べて、對面千里、人あつて僧を寄

り、僧堂の單は紅紙小片に各位の名を書し、一紙一名、各位の床上の壁の外面に貼す、又僧床前の板を單と云ふ、所謂九尺單前、謂ふ意は床後より前に至る六尺、更に單板一尺を加ふるなり、今已に排といふときは、則ち單に名づく而已。

㋶箇箇生鐵橛。沒巴鼻の定相を表す。珠云く、「脊梁を竪起して勤むる坐禪の形相。」

㋰捱得期滿。捱は音涯、延捱と私に延は及なり、到及を云ふきたりきはむなり、至り得てあらばなり。

㋒禪鈔子。禪苑の話柄、鈔錄し來る底の策子なり、臨濟の所謂大策子上に死老漢の語を抄すと云ふが如し、今は夏中、工夫するところの提撕するところの公案を謂ふ、珠云く、「お示しをねがふなんど」と、鈔は策子なり、學者が學得する語言を記して持つなり、この解非なり、忠曰く「古今鈔子の字を解することを得ず、故に强ひて枉解を作す、語脈に背くことを覺えず」夫れ學得底の語を鈔錄して、夏滿して師家に證明を得んと要す蒙昧の愚漢と雖も、此の模樣あるべからず。況んや復内外の堂、專ら禪坐を修して、生鐵橛の如きもの、何の暇あつてか學得の語言を鈔錄する耶故に此の解、甚だ語脈を得ず

㋼以憑賞勞。是れ常式なり、珠云く「軍中などにもあることじや。」或抄に「言詮の證據にせんと思ふ。」或抄に「やくにたつことはあるまじい、去りながら。」

㋨箇漏網底。禁網を守らざる底の大根の漢なり、網をけやぶり、規則に拘はざるをを云ふ。

㋔立制。九十日の制限。

㋗山邊水邊。洒々落々の活衲僧、便に從つて横說竪說す、珠云く、「明師に踏んづ蹴られつゝ、これで命根がきれる、どん底がぬける。」

㋳蹉口。珠云く、「ひよつと、口がすべつて、口を失するの義なりとあり。

㋮道著爺名。爺の名は那一人なり、臨濟の所謂儞秖一箇の父母あつて更に何物をか求めん、儞自ら返照して看よと是なり、道著は悟處なり、珠云く、「諱に觸れたならば」と。

㋘急急出來。爺の名を道著する底の者あらば。

㋫下一轉語。上の二人の境界なり、一轉語を下すこととなられねば、其のとがで尅期修證は用にたゝず。

㋙收功較易。功課を收む、順境界の故なり、珠云く、「手柄高名を擧ぐることはやすい、」又云く、「一旦踏み込むことになりやすい。」或抄に云く、「規矩を守るものを云ふ、排單下榻を修練する底。」

㋓補過較難。過非を補ふは逆境界なり、珠云く、「見そこなひ、しそこなひを取りつくらうことはむづかしい。」又云く、「悟後千鍛百錬、養ひそだつることはかたい、」或抄に云く、「漏網底、大用現前、規則を存せざる如くに規矩に拘はらざるものを云ふ、如來の禁網を漏せて夏制をも守らず、彌天の罪過補ひ難し、此れ本色の衲僧快活の手脚なり。」

㋢雪峯。名は義存、德山に嗣ぐ、雲門の師なり、雪峰山は福州の附近にあり、雪峰は唐の穆宗の長慶二年、日本の嵯峨天皇の弘仁十三年に、支那福建の泉州に生れ、唐の哀帝天祐五年、後梁の太祖開平二年、日本の醍醐天皇延喜八年に入寂す。

㋐領衆到浮江。雪峰の會下は常に一千五百と云ふ、中の二百を領して、浮江は臺州の浮江和尙長安大安に嗣ぐ、五燈會元本傳之を收む、珠云く、「浮江は雪峰の法孫、此の因緣で見れば、油斷のならぬ浮江じや。」類聚十四にも出づ。

㋚寄二百僧。或抄に云く、「底意は二百僧を置いたほど胸中のひろきかと試むるなり。」過夏は夏をわたらせてたまはらんか。

㋖畫一畫云。或抄に云く、「雪峰の賊意は中々許さぬぞと、畫して鎖斷した、著不得はその衆を我が這裡著ることはならぬと把住しつめた一箇もおくことはならずと把住す畫するはすつきりと罷りならぬ。」珠云く、「おこうと云ふたら峰がおとゝひまゐらうと云ふて、いのうに浮江が仕合に、此のようちなことを云ふた。」

㋴奸峭互陳。雪峰奸犯を要す、浮江は直に峭密、共に不知音の故に對面すと雖も千里を隔つるなり、忠曰く、「雪峰贓物を用ひて、他人の

せて夏を過さしめば、ヌ南山大いに東閣を開かん。何が故ぞ、ミ彼此出家兒。」

屋裏に寄せんと欲するが如し是れ奸邪賊意、浮江は峭峻嚴急なり、」正字通に曰く、「姦は奸と通ず音艱行義に合はざるを姦と曰ふ、」又峭音俏急なりと嚴厲なり、珠云く、「奸は雪峰すなほにない、峭は(浮江)峯峻あぶない。對面千里そりがあはん」或抄に云く、「こちからは侵さんとし、あちからはおかされずとす。」對面千里、各自に封疆を守り、放開の手なし、二人ながら不放行なり。

ヌ南山大開東閣。珠云く、「南山は淨慈寺開二東閣一は客寮をたてゝもてなさう、延接すべきなり、或抄に云く、「虛堂の全機廣大、普く含容する底、」開二東閣一は戶を開いて宿をかさんとなり、排韻九に、公孫弘が傳に「數年にして宰相封侯に至る是に於て客館を起し、東閣を開いて以て賢人を延ぐ、」師古曰く、「閣は小門なり、「東向、之を開く、當庭の門を避けて賓客を引く、以て掾史官屬を別つなり」と。

ミ彼此出家兒。珠云く、「此れが云ひたいばかり、前ことばを百も云ふておいて皆の出家たちおれも同じ如來の御弟子でないかと、こりやどうじや、」或抄こ云く、「かれもこれもみな佛法中の人、なんの拒むことなし、眼を着けてみよ、與奪の義あり。」

淨慈寺語錄終

臨安府シ徑山興聖萬壽禪寺語錄

參學エ惟份ヒ文愷編

師、モ咸淳元年八月二十五日、セ辰初に於て進寺。山門を指して、ス此の山路なし、イ門に及ぶものは誰ぞ。ロ會得せば、手を擺つて同じく歸れ。然らずんば、我れに隨ひ來れ。」佛殿、釋迦ハ室を摩竭に掩ふ、甚に因つてか者裏にニ坐在す。ホ炷拜ヘ勤渠、ト之を齊しうするに禮を以てす。」方丈、チ虎頭燕頷、リ鳥觜魚顋、ヌ盡く者裏に向つて欵を納る。」且く道へ、者裏ル是れ甚麼の所在ぞ。」拄杖を卓す。

シ徑山。一統志に、「杭州府徑山は天目の東北にある、路あつて天目に通ずべし、故に徑山と名づく、五峰周抱、奇勝特異、唐の時吳郡の僧法欽(唐の代宗、號を國一と賜ふ)、此に至つて菴を結ぶ、獵師あり告げて曰く、「此れ神龍の據る所、願はくば住すること無けんことを、」欽聽かず、忽に素衣の老人あり、前に拜して曰く、「我れは龍なり、師此に至るより、吾が類安んぜず、願はくば讓りて錫卓するの所と爲さん、」欽靈雞あり、嘗て法會に隨ふ、今靈雞塚存す焉、」名藍圖に、「臨安府徑山興聖萬壽禪寺或は徑塢と曰ふ、又雙徑と曰ふ、開山は國一、天下徑山(總門)、淸涼法海(山門)、龍井(一穴)、龍淵室(方丈)、楞伽室、御愛峰、靈雞塚、萬年正續院(無準塔)、五峰、碁盤石、福池、喝石岩、凌霄閣、凌霄峰(主山)、含輝亭、五髻峰、不動軒、不動巖、淨髮閣流止亭、鉢盂峰等の境致あり」又後錄に大覺寮、千僧閣あり行狀に望雲亭、天澤庵あり。支那五山第一。

エ惟份。份は彬に同じ、後錄の偈頌に「寄二通彬侍者一の頌」あり。

ヒ文愷。偈頌の部に、「愷藏主號

ニ虔爇一瓣」あり。

(モ)咸淳元年。南宋度宗の年號、元年は乙丑、日本の龜山天皇文永二年に當る、師年八十一。

(セ)辰初。忠曰く、「晝夜十二時の一時を八刻有奇に分つ、今は辰の初刻なり、上刻なり。」

(ス)此山無路。路あり、通ずべし、故に徑山と名づく、今翻轉して本地の孤山を的示す、珠云く、「しかも天目へも通ひ路があるに、」或抄に云く、「本分の家山、路の入るべきなし、透過するに路なし。」此の境界を會得したらば入るに及ばぬ、此の山は雙徑山に當つて。

(イ)及門者誰。珠云く、「及は至なり、天下徑山と額をばらつたればなり

(ロ)會得擺手。或抄に「汝等若し會得せば、門に入り來りて虛堂に參ずるに勞せず、須らく同じく歸り去るべし、然らずんば入り來れ、汝が爲に接得せん、」又の義に云く、「汝等若し會後せば、虛堂と其の趣を同じうす、然らずんば同行に非ず、我が後に隨ひ來れ。」不然とは或抄に云く、「無路の門を透る底のものあらばなり、さもなくば、」云く、「會得擺手とは大に眼を着けよ臂をふつてと、同じく是れからかへれなり、然らずんばとは不會なり、其の上を用ひた、」珠云く、「虛堂、おれがしつぽについてこい、しようことがない。」

(ハ)掩室於摩竭。報恩錄に見ゆ、或抄に「蓋し指す所あり、門を出てさていは困甚じや、」

(ニ)坐在。或抄に「出頭し來る。」

(ホ)炷拜。炷は音「しゆ」ともいふてよし、炷香展拜なり、或抄に云く、枉げて人情に隨ふ故に、」又云く、汝こゝに居らうとをるまいと管せずじや。」

(ヘ)勤渠。勤勤渠渠なり、渠も亦勤なり、敬欽の至りなり、請問勤渠といふこと、普燈錄六祖の章に出づ。

(ト)齊之以禮。論語の爲政篇に出づる語なり、或抄に云く、「摩竭と耆婆と齊一にして、隔禮なからしめて之を禮するなり、」珠云く、「禮儀をなさねば心ばかりでは誠がとゝのはん、身心ともにはこばさこや、眞實でない。」

(チ)虎頭鳥觜。後漢の班超字は仲升相者あり、曰く、虎頭燕頷飛んで、肉を食ふは萬里侯の相なり、明章の兩朝に出でて西域を征す、五十餘國を安集す。定遠侯に封ぜらる鳥觜魚顋は共に靈利なる學人の畫相を表す、越王勾錢此の相ありと云ふ、珠云く、「虎頭燕頷は衲僧の奇相、叢林のあふれもの、」或抄に「出格の異相、おそるべき學者の畫相を云ふ。」

(ヌ)盡向者裏。珠云く、「虛堂、法窟の爪牙に入つた故に、頭を下げさせ自然をして見解を呈せしむ、なにとぞ命は御助け下され」と。

(ル)是甚所在。珠云く、「まあ、此の虛堂が處は、どう云ふ處であらうぞ」

勅黄、(ヲ)退欄するに意あり、(ワ)耕牧するに心なし。

(カ)九重より勅を降す、(ヨ)萬國の春の回るが如し(タ)一道の恩光、千日の並び照すに似たり。(レ)法門煥を騰げ、(ソ)巖壑秋を生ず。

(ツ)府の䟽、(ネ)日出でて作き、日入つて息ふ、(ナ)熙熙然として春臺に登るが如し。且く道へ、(ラ)誰が恩力をか承く。」(ム)䟽を拈起して云く、「聽け。」

諸山の䟽、(ウ)山を出でゝ見、(ヰ)戸に入つて知る。(ノ)雞鳳巣に棲む。(オ)隣壁の輝、何ぞ必ずしも(ク)區區として、伊を點綴せん。」

山門の䟽、(ヤ)勤儉して家を起す、(マ)叢林の麟鳳(ケ)門に入つて一見すれば(フ)和氣掬しつべし。(コ)知心は頻に叮囑するに在らず。」

(ヲ)退欄。靜退の謂なり欄圈は牛馬を繫ぐの處隱居なり、皆自身に比す。或抄に「なんの子細じや。」

(ワ)耕牧。出世の謂なり、皆自己の水牯牛に託して佛事を作す或抄に說法爲人底を云ふ、それには心なしと云ふ、世間へ出る心はないぞ」と。

(カ)九重降勅。しかるに九重より徑山へ出でよと綸旨を下されたにより。

(ヨ)萬國春回。蟄居を出てて秋風に沐するなり、和氣靄然たり。

(タ)一道恩光。透空一道の恩光一道は一筋なり、天子御恩に入り渡つて。

(レ)法門騰煥。珠云く、「帝王の息がかゝつた故、一入法門はひかりをあげて。」

(ソ)巖壑生秋。禮記に「麥秋至つて」と云ふ、注に「凡そ物熟するを以て秋となす」と。珠云く、「岩壑たにあひの佛法まで大法の葉實が成熟する」と、龍溪云く、「勅黄の恩に依つて法門煥を騰げ、山林巖壑までも緣法成熟することを得るなり」或抄に云く「岩谷に引込み居る虛堂も、萬事成熟するなり。」

(ツ)府䟽。臨安府の牧主よりの請䟽なり。

(ネ)日出而作。太平の時節、事事迫切せず、この語は延福錄にも見ゆ。珠云く、「府主の仁政德化にあづかるともしらずに暮すを云ふ。」或抄に云く「上古無爲無事の體。」

(ナ)熙熙然春。熙熙は和樂の貌、老子經の絕學無憂の章に、「衆人熙々として太牢を享くるが如く、「春の臺に登るが如し。」珠云く、「なにも心にかゝることなく、民人和悅の謂なり。」

(ラ)承誰恩力。衆人此の如く無爲

法座、「(エ)諸佛出世、(テ)祖師西來、(テ)總に者の座子を離るゝこと得ず、(ア)若し信得及せば、各自に散じ去れ。然らずんば、(サ)更に登ること一遍して、諸人に供養せん。」

師、陞座拈香して云く、「此の香、爐中に爇向して、恭しく爲に

今上皇帝の聖躬萬歲萬歲萬萬歲を祝延したてまつる。陛下恭み願はくば、(キ)金輪統御、(ユ)三代の淳風を踵み、(メ)寶曆祥を開いて、(ミ)萬年の景運を享けましまさんことを。」

次に拈じて云く、「此の香、爐中に爇向して、恭しく、

(シ)皇太后の爲に、上聖壽を資けたてまつる。恭み願はくば、

(ヱ)天下の母儀として、(ヒ)生靈を子とし育す、(モ)

安樂、誰が致す所ぞや、須らく知るべし、府主の德化なることを、この太平のたのしみは。

(ム)拈起䟽云聽。府主の德化、分明に聽取せよと、珠云く「おれも知らぬが、今聞いて讀むぞ、さあ皆のものもきけ、」又云く「天子の恩、脫體現成してゐるか聽たか。」

(ウ)出山而見。其の境を見る。珠云く「山を出づればまじかく見えわたるで、諸山の住持各各山を出でて虛堂を見る。」或抄に云く「諸山の人が山を出て望めば、徑山並にその餘の諸山見ゆ、徑山の人も山を出づれは諸山を望み見る、此れ諸山列利、互に相望むの體を謂ふ。」

(ヰ)入戸而知。其の人を知る、夫れ知見此の如くなることは列剎相望むが故なり、珠云く、「又徑山の戸に入りて能く我れ虛堂を知る。」或抄に云く、「今日開堂の故に、諸山の衆徑山の戸に入りて未だ虛堂が生涯を知らざるなり。」知の字は下にかゝる、

(ノ)雞棲鳳巢。雞を以て自らに比す、鳳巢を諸山に比す、言ふ意は其同類と爲り難しなり、珠云く「虛堂がやうな雞のやうなものが徑山と云ふ、鳳巢のやうな處へ諸山の吹噓に依つて來た。」或抄に云く「處堂自ら謙退して云ふなり。」

(オ)隣壁之輝。漢の匡衡、字は稚圭家貧にして、學を好み、常に隣壁を鑿つて光を引いて書を讀む、延初三年相に拜せらる、珠云く「盡く諸山の光輝を假る。」或抄に云く「吾が德ならしてすむゆゑにじや、諸山の御蔭じや」と、餘光をかりてなり。

(ク)區區點綴伊。區區は分別工夫を謂ふ、伊を點綴すとは䟽文を裁成するを謂ふ、言ふ意は諸山の下風餘光自然に衣被す、何ぞ用ひし特に䟽を製することを、珠云く「伊は䟽を指す、虛堂自らを稱す、粧點補綴せん。」或抄に云く「區區はこせ〳〵とする義、ちく〳〵とした義、又區區はつとむなり、つとめ〳〵て隣壁の衆䟽をかくに及ばざるにかゝれた」となり、或抄に云く「䟽までも及ばぬとなり、吾れは隣峰の威光を借りて住持するほどに何ぞ煩しく䟽を書せん。」

(ヤ)勤儉起家。公務に勤勞し、己身を儉約して家門を興起することは、兩序の職分なり、珠云く「身を責めて吾が家の宗旨を扶起す、」或抄に云く「山門衆僧に當てゝ云ふ、精勤儉約にして此の寺をそだて、自己が事はけんやくに。」

(マ)叢林鱗鳳。直に其の皆英靈たることを稱美す。

(ケ)入門一見。兩序の役僧たち、門に相迎ふるが故に、珠云く「佛界魔界を透過して。」

(フ)和氣可掬。掬は撮なり、和氣前に滿つなり、珠云く「其の氣まへのうつくしさ。」或抄に「掬は手にとるやうな」と。

(コ)知心頻叮囑。面友は或は䟽詰に憑らん、夫れ知心の人は目擊して道存す矣、豈に叮囑に在らん、珠云く「格別の知心に至りては、なんのかのと䟽狀等に及んだことではない。」或抄に「知心は知音なり、言葉を以て委囑することではない互に通じた䟽のうちにはない。」

(エ)諸佛出世。珠云く「釋尊の鹿苑にせよ、祇園にせよ。」

(テ)祖師西來。珠云く「達磨の十萬里を歷て、梁武の朝にもせよ。」

(テ)總者座子。座に托して本地を示す珠云く「總にとは虛堂が即今徑山に住持をするもじや、諸法空空座面前了了。」或抄に云く「外面は佛祖の說法の時は、必ず座に昇るが故なり、底意は指す所あり、衆生化度利益の爲め。」

(ア)若信得及。珠云く「此の端的を信得及せば」と。

(サ)更登一遍。法供養なり、珠云く、「さうなくんば虛堂が此の座に登り、一說法して聞かさう、口に食ふばかりが供養ではない、耳目にききこんで味ふて見よ、」或抄に云く「無位の法施をば供養するに、座子をはなれざる底の一句をいふ。」

(キ)金輪。寶林錄の臘八に見ゆ、統は總御なり、韻會に、天子の止まる所を之を御と謂ふ、前を御前と曰ふ、書を御書と曰ふ、服を御服と曰ふ、皆四海を統御するの義に取る。珠云く「分國の帝王でなく、一天四海をしろめす金輪天子。」

(ユ)三代之淳風。夏殷周の三代、淳厚の風化を踵む(つぐ)なり。

(メ)寶曆開祥。咸淳は度宗昨年即位せ

社稷の功を扶持し、(セ)聖明の化を毘贊したまはんことを。此の香、爐中に爇向して恭しく、(ス)今上と(イ)皇后との(ロ)兩宮の天眷の爲にす。恭み願はくば、(ハ)萬年の松壽、千歲の鶴齡、道、明君を賛け、(ニ)功、帝業を資けたまはんことを。此の香、爐中に爇向して、(ホ)太傅大丞相樞使國公、(ヘ)大參相公、大參相公(ト)樞密相公、合朝文武、百僚の爲に、同じく祿算を增し奉る。伏して願はくば、(チ)德四海を安んじ、(リ)威三邊を肅ましめたまはんことを。此の香、爐中に爇向して、(ヌ)判府安撫提領大監侍郎、(ル)都運敷文提領侍郎

られた建元故に。之を祝したてまつる、今年に改元したるなり、珠云く「度宗皇帝は諱は祺、榮王與芮の子なり、理宗の姪なり、初め忠王に封ぜらる、理宗子なし、立てゝ皇太子と爲る、在位七年壽三十五にして崩ず。

(ミ)萬年之景運。日景の運度、珠云く「字彙に景は大なり、大なる運數を受くるなり、享は受くるなり。」

(シ)皇太后。理宗の皇后、謝氏なり、忠曰く「按ずるに謝皇后咸淳三年に太皇后と爲る、今咸淳元年に皇太后と稱するは國人の通稱に依る乎。」職原(シキゲン)よみは「くわうだいこう」といふ

(ヱ)母儀天下。儀は儀法なり、のり手本なり、天下に母たるののりを施し玉ふ。

(ヒ)子育生靈。萬民百姓を子の如くに育つる。

(モ)社稷之功。宗廟社稷は天下の機務なり、忠曰く「社稷を祭るは天下の要務なり、故に天下を治むるを泛く社稷と曰ふなり、今皇太后内に在つて天下を治むるの功勳を扶翼するなり、」白虎通一に曰く「稷は五穀の長、故に稷に封じて之を祭るなり」とあり。天下の事を略して社稷と云ふ」と或抄に見ゆ、」又云く「社は土地神稷は五穀の神」と。

(セ)聖明文化。毘は輔なり、贊は佐なり、珠云く「無私の聖明の風化をたすく。」

(ス)今上。度宗なり。

(イ)皇后。妃全氏は咸淳三年正月癸卯册命、爲二皇后一と宋史本紀にあり、このときは未だ妃なり、しかれども尊んで皇后と祝壽するかと、忠と珠兩師の抄に見ゆ。

(ロ)兩宮天眷。天は至高無上、以

郡縣官僚の爲に、同じく祿算を資け奉る。伏して願はくば、(ヲ)清朝に股肱とし、黎庶に(ワ)橐籥たらんことを。此の香、前住安吉州道場山護聖萬歲禪寺先師運菴和尚の爲に、用て(カ)法乳に酬い奉る。(ヨ)乃ち云く、(タ)紘師、衣を斂めて座に就いて、(レ)落葉秋を知る。(ソ)是を動ずれば曲を別つて、(ツ)有ることを知る邊の事なり、(ネ)甚に因れ衲子つてか(ナ)黄河北に向つてか流る、會得せば(ラ)物理䟽通せん。然らずんば、(ム)疑あらば請問せよ。」時に僧あり、出でて問ふ「(ウ)金雞曉を唱へ、(ヰ)玉鳳花を啣む、(ノ)一句機に投ず、請ふ師祝聖。」答へて曰く、「(オ)澗底の青松に茯苓あり。」僧

て至尊と稱す。眷は屬なり故に天眷と稱す、天子の外戚方の如く。

(ハ)萬年松壽。萬年の如く、千歲

(ニ)功。つとめ。

(ホ)太傅大亟相。賈似道なり、太傅は日本の太政大臣に相當す

(ヘ)大參相公。綱鑑に曰く「この年二月姚希得を參知政事とす同五月、江萬里を參知政事とす。」日本の參議なり。

(ト)樞密相公。馬光祖なり「忠曰く「王爚なり、宋元通鑑百一に曰く「咸淳元年二月壬戌王爚を以て僉書樞密院事とす。」

(チ)德安四海。珠云く「天子の德は仁心なり、五倫五常を堅持する德なり、文德なり「四海は九夷、八狄、七戎、六蠻之を四海といふと」爾雅六にあり、上に在りて道德を持すれば則ち自然に四海を有つ。

(リ)威肅三邊。三邊は三垂ともいふ、西方南方東方なり、說文には垂は遠邊なり、四海九州の意、肅は敬畏せしむるなり、をさむるなり、しづめるなり、武威を云ふ。

(ヌ)判府安撫。判府は臨安府の大守なり、安撫は日本の按察使提領は藏人、大監侍郎は兵庫頭、國書の文庫を奉行するなり、安撫提領は劉良貴が經る所の官なり。

(ル)都運敷文。都運は日本の太宰(ダザイノ)帥(ソツ)、敷文は史生、兵食の奉行なり、兼學士なり、又撰御書なり、吳勢と云ふ人、この役に當る、淨慈錄にも見ゆ。

(ヲ)股肱清朝。珠云く「股肱は動用の干要なり」「天子の股肱どもなり、清朝の御代に。

(ワ)橐籥黎庶。老子の天地不仁の章に「天地の間其れ猶ほ橐籥(ふいご)の如き乎、虛にして屈き(ツ)せず、動いて愈々出づ」

曰く、「是の如くんば則ち九州四海、(ク)雷の如くに動じ、風のごとくに馳せん。」答へて曰く、「(ヤ)巢は風を知り、穴は雨を知る。」僧曰く、「如何なるか是れ(マ)第一句。」答へて曰く、「(ケ)却つて是れ第二句。」僧曰く、「如何なるか是れ第一句。」答へて曰く、「(フ)須彌山。」僧曰く、「恁麼ならば則ち(コ)葵心日に向つて傾く。」答へて曰く、「(エ)恩を知る人得難し。」僧問ふ、「(テ)太宗皇帝、因に僧朝見す。僧奏して曰く、『陛下還つて記得すや否や』と。此の意如何。」答へて曰く、「(ア)經を將つて寺裏に彈ず。」僧問ふ、「帝の曰く、『何れの處にか相見し來る。』僧曰く、『(サ)靈山に一たび別れて自從り、直に如今に至る』と、還つて端的なりや也た無や。」答へて曰く、「(キ)來風鑑つべし。」僧問ふ、「帝の曰く、『何を以てか驗と爲ん』と、僧無語、又作麼

註に「籥は橐の管なり、橐籥は用て風生ず、其の體虛なりと雖も、之を用ふるに屈きず、動すときは則ち風生ず、愈々出づれば愈あり、」黎民庶物を生化せんことを願ふなり。橐はふいごなり、籥は鍛冶屋のふいごの中の吹き革なり、黎庶は民の總名なり、たくやくとなりは、廣く民を惠めかしとなり、珠云く、「萬民無爲の化育を蒙り。」

(カ)法乳恩。珠云く、「世間では母の乳血養育、出世間では師家の捧喝、瞋拳これを法乳の恩に酬ゆと云ふ。」

(ヨ)乃云。索話なり。

(タ)動絃別曲。伯牙纔かに絃を動ずれば子期便ち曲を別つ、事は報恩錄に見ゆ、珠云く、「琴絃を動ずれば、歌曲の別調を分つ、」絃をぽちんとすると、此れは何の曲じや、何の歌じやと見わける、又云く、「拂を擧ぐれば火吹き竹なることを知る、目を瞬けは磨粉木なることを知る、」又取り違へまいぞ、歌に云く、「磨り粉木と火吹き竹をば取り違へ、吹くに吹かれず磨るにすられず、」知音底の出合なり。師家の爲人底なり。

(レ)落葉知秋。一葉落ちて天下の秋を知る、上と共に頓機鑽利此の句兼ねて入時の時景を序す、鵠林(白隱)大師云く、「おれはこよみで知る」と頓機擧着すれば落處を知ると着語なり。

(ソ)是儞衲子。珠云くふ、「ぶしやうもの骨をらぬやつはくやしくおもへ。」

(ツ)知有邊事。順境界、珠云く、「知る輩のものがたり。」

(ネ)因甚。珠云く、「なんじや、あれは禹王去つたゆゑと、呵呵。箭新羅を過ぐ。

(ナ)黃河向北。逆境界。河源は崑崙積石より發して、漸くにして、中國に入り、九千餘里を經て北海に入る、禹貢の注、幷に一統志外夷西蕃の崑崙山黃河の注に見ゆ、定水の波なり、活境界なり。

(ラ)物理疏通。逆順等に礙塞せられず珠云く、「合點したならば祖師門下の事を竪から橫から見拔いたやつ印をおしてやる。」順境共に會得せばとなり。

(ム)有疑請問。珠云く、「死何れの處に去る、是れいくまい、南泉庭前の一株花、これいくまい。」

(ウ)金雞唱曉。辰の初刻、入寺の故に珠云く、「天上に金雞星あり、今日出世開堂、一切が夢をさます。」

(ヰ)玉鳳啣花。この二句は報恩の入寺に見ゆ、珠云く、「まことに未曾不思議なり、鳳は瑞鳥、何ぞ止だ百鳥啣むのみならん、目出度き御出世。」

(ノ)一句投機。珠云く、「師家學者の機に投ず。」

(オ)澗底靑松。爾雅翼に云く、「松栢の脂地に入りて千歲茯苓と化す」珠云く、「澗底はおいせぬきみ、人に具足じや、靑松と古今四時、ついに風一つひいたことない、目出度いことが。」祝語なり、天子萬年の祝詞なり。

(ク)雷動風馳。祝釐是の如く、則ち天下速に德化に赴かんとなり、珠云く、「萬里衲僧を走らしむ、九州四海と天子の號令なり。」

(ヤ)巢知風穴。各各自ら盛德の變化を知る、事は寶林錄にも見ゆ、珠云く、「おゝよく知つた、へびの道は蛇がしると云ふ、」或抄に、「己が分量を知り、格外の處を知らす」抄とは異なり。

(マ)第一句。或抄に云く、「言句に涉らず、聲前の那一句なり、臨濟の三句と別なり、自己分上に付つい問ふ。」

(ケ)却是第二句。此の句の上に第一句を答へ得るなり、珠云く、「はや第二に落つ。」

(フ)須彌山。珠云く、「そんならば、日と山とは天子を取るなり、衆山の王なり、儞が攀緣の所なしじや。」珠又云く、「これが合點が入つたら第一句が合點行から、」直に第一句を示す。

(コ)葵心向日傾。物々全眞の義なり、珠云く、「格外の衲僧、やれ徑山徑山と走り着く義でござらう、」あふひのはなの心は日光にむかつてかたむく、日車ともいふ、或抄に云く、「自己分上にあるかとなり。」蹄仰の義、承當底なり、天子に對して忠を存する義なり、日は天子、葵は忠臣に取るなり。

(エ)知恩人難得。自ら知を守るが故に珠云く、「寄り傍ふ人はあつても、眞實恩を知る人は千萬にもない、」或抄に云く、「須彌山と云ふ處に恩あり、然るにじや。」

生。」荅へて曰く、「㋴生鐵の秤鎚、蟲に蛀まる。」僧曰く、「只だ今日の如きんば、祝聖開堂、何の祥瑞かある。」荅へて曰く、「㋱秋花眼を照して明かなり。」僧曰く、「㋯泉聲中夜の後、山色夕陽の時。」荅へて曰く、「錯つて定盤星を認む。」僧禮拜す。」

師㋽乃ち云く、「㋪時康く道泰に天淸み地寧し。㋲一人端拱して無爲なれば、㋝萬物各其の所を得。㋜巖間の野客までに、悉く皇恩を荷ふて㋑太平の歌を唱へ、村田樂を和す。何ぞ必ずしも、㋺麟麒瑞を現じ、鳳凰來儀するのみならん。但だ願はくば、㋩帝道平平として、㋥自然に風物楚楚たらんことを。且つ恩を知つて恩を報ずるの一句作麼生。」拄杖を卓して云く、「㋭妙唱以資㆓天子壽㆒、㋬爐煙爲㆑瑞國風淸。」

㋢太宗皇帝。この因緣は育王錄に見ゆ。

㋐將經寺裏彈。舌を彈じて授くるなり、水を擔つて河頭に賣るの類なり、珠云く、「經は寺裏にあるものだに舌を彈して誦ずるなり、無用處なり」、或抄に云く、「靈山の付囑があれば、陛下ももと釋迦屋裡の人なるに、還つて記得すやと問ふたならば、雪上に霜を加ふるやうな無用處じや。」

㋚靈山一別。語、人を驚かす乎どうだか。

㋖來風可鑑。僧の來語の機勘破すべし、珠云く、「此の僧の云ふ口先き、とつくに見て取りてをる、能く勘辨してみよ、此の僧恁麼の語話、其の來機早く鑑知すべし」、或抄に云く、「たしかにさういふか、此の僧の來機は鑑みつべきことじやほどに。

㋴生鐵秤鎚。蛀は音註、木を食むの蟲なり、玆は龍頭蛇尾の意なり、珠云く、「結好な道具に蟲が入つた」、蟲蛀は抑下。

㋱秋花照眼明。現成直示、八月を以て入寺すればなり、珠云く、「其の祥瑞が知りたいが、目には一ぱい、耳に一ぱい、ぎら〳〵あるは。」或抄に「秋の最中、これほどな祥瑞があるか」となり。

㋯泉聲中夜。虛堂和尙の德を讚し、荅話の寄好を嘆ず、この後には淨慈後錄にも出づ。或抄に「這の僧別に又祥瑞を呈して、師の荅話を粧ふたのじや」、或抄に云く「泉聲は中夜の後、あかつきごろ、此の時分が、別して泉の聲が面白いぞ。」

㋛錯認定盤星。荅話の奇を嘆ずる故に抑遏す、珠云く、「世間云ひならはしのお定りではないか、或抄に「錯つて荅話を認むることなかれ」、定盤星ははかりの目なり。

復た擧す。本朝の㋣太宗皇帝、因に㋠大相國寺に入つて、僧の看經するを見て、問うて曰く、「卿、甚麼の經をか看す。」對へて曰く、「㋷仁王護國經。」帝の曰く、「既に是れ寡人が經、甚に因つてか卿が手裏に在る。」㋦僧鞠躬退身して對へず、雪竇曰く、「㋸皇天親なし、惟れ德是れ輔く。」師云く、「太宗㋾古鑑高く懸く、㋻私として燭さずといふことなし。者の僧鞠躬して對へず、㋕經旨歷然たり。雪竇道く、皇天親なし、惟れ德是れ輔くと、又作麼生。」㋵拄杖を卓して、「四海㋟盡く皇化の裡に歸す、㋹三邊誰か敢て封疆を犯さん。」

當晩小參、僧問ふ、「㋞言言言兮、飄風灑雪、㋡默默默兮、雷轟き電掣く。㋧藕絲孔裏、大鵬に騎つて、㋤等閑に挨し落す天邊の月、未審し㋶

㋽乃云。提綱なり。

㋪時康道泰。張蘊古が大寶箴に「天之經地之寧、王之貞」とあり、珠云く、時康は時世民和樂、道泰は王道寛大にしてなり、」所謂天下太平。

㋲一人端拱。一人は君を謂ふ、端拱は端坐拱手、穆々として南面するのみ、育王錄に見ゆ。

㋝萬物共所。共に安寧の義、民禽獸に至るまでも。

㋜巖間野客。隱遁者までも、山林のなり、その内に虛堂も。

㋑唱太平歌。目出た〳〵の若松さまよ、よおい〳〵よいやなはれはいなと、興聖錄の除夜に見ゆ、和訓「きまゝうた」。

㋺麒麟現瑞。これも興聖の入寺錄に見ゆ、吉祥ばかりではない、一切含生、和樂せぬはない。」

㋩帝道平平。書の洪範に「偏なく黨なく、王道蕩蕩、黨なく偏なく、王道平平」、註に「音は騈、蕩々は廣遠なり、平平は平易なり、ひとしきなり、」

㋥自然風物。楚々は陳列の義、珠云く「衣食財寶澤山なやうにとおねがひ申す。」楚々は鮮明あざやかの貌、風物は風色と同じ、凡そ萬物各其色あつて物は有色の義楚々は高く、成長すること、詩經に「蜉蝣之羽、衣裳楚楚。」草木のしげれることにも用ふ。

㋭妙唱天子。妙法提唱、其の功德都べて天子の聖壽に資陪するなり、珠云く、「衲僧の陀羅尼門なり、上堂の何のと萬歲の妙唱のと云ふて、佛法の妙唱祖道のとなへ、入寺法語天子の爲に拈香して、是れ報恩の一句なり。

何人か此の機用を得たる。」答へて曰く、「㋰頭の長きこと三尺、知んぬ是れ誰ぞ、相對して無言獨足にして立つ。」僧曰く、「恁麼ならば則ち九重城裏、㋖大に芳猷を播す。」答へて曰く、「也たこれ㋨波斯、鬧市に入る。」僧曰く、「王常侍、臨濟を訪ふて僧堂に游ぶ次で曰く、『這の一堂の僧、還つて看經すや否や。』濟曰く、『㋔看經せず』と、此の意如何。」答へて曰く、「㋗酒は知己に逢ふて飮む、」常侍曰く、『㋳還つて習禪すや否や。』濟曰く、『習禪せず』と、又作麼生。」答へて曰く、「㋮乾坤を撥亂して、太平を致す。」僧曰く、「常侍言く『既に看經せず、又習禪せず、畢竟箇の甚麼をか作す』、濟曰く、『㋘總に伊をして成佛作祖し去らしむ、』此の意如何。」答へて曰く、「㋫臨濟老兒の性命、㋴常侍が手裏に落在す。」僧曰く、「今夜

㋬爐煙爲瑞。祝香の爐煙、瑞氣となつて國風清寧なり、珠云く「四海九州の風俗、清寧なり、國へ大きな報恩なり」と。

㋣太宗皇帝。諱は炅、太祖の弟太平興國元年即位す、日本の圓融天皇貞元元年に當る、北宋第二主。

㋠大相國寺。大明一統志に「開封府の相國寺は府城内東南の隅にあり、北齊天保の間に剏建趙宋初め此の地に都す。

㋷仁王護國經。姚秦鳩摩羅什と唐の不空と異譯同本二卷あり珠云く「これは賓子坊主ではない、この對はなか〳〵。」

㋦鞠躬退身。珠云く「此の僧あぢをやつた。」鞠躬ば恐る體をなす。

㋸皇天無親。珠云く「皇天には疎親はないと、雪竇の代別なり」或抄に云く「皇天は太宗に比し、高天とみよ、對し得てあらば、皇天は私親なし、惟れ德是れ輔けて、此の經只だ受用し得る底のものは、其の手裡に歸す」珠云く「德ある底のものをたすける」龍溪云く「拈の意味ふべし、此の落句をばじや」話緣は育王に見ゆ。

㋾古鑑高懸。古鑑は本覺の智照珠云く「日輪當午の如くじや或抄に「明眼の天子じや、天鑑無私。」

㋻無私不燭。私は陰僻の地を謂ふ、公界を燭すこと知るべし或抄に云く「太宗、智鑑明徹の故に、微細なるところまでも意を付けて、既に扢れ寡人の經等と拶せられた、好一拶ぞと云ふ義なり。」

㋕經旨歷然。仁王は乃ち般若部なり、無說を以て眞說と爲す今不對の處、此の經の旨要明歷然たり、者の僧を扶けて云

ふ、珠云く「仁王經の意旨見事なり、歷々とあらはるるなり。」

㋵卓拄杖云。或抄に云く「手裡に歸する底の一着」と。

㋟盡歸皇化裡。或抄に「不荅の處皇化をたすく、太宗の底意は主人公の心じや、」これば祝語なり。

㋹三邊誰敢。此の兩句を以て雪竇の意を會すべし、蓋し皇天より德を輔く、故に其の化此の如く遍し之を以て林下も亦之を被らしむるに分あるなり、珠云く「幽幷涼の三邊じや、天子の居所をのけて三邊の夷じや、しかしどこに敵國があらうぞ」と。

㋞言言言兮。言處は却つて色なく聲なし。珠云く「言言言は横說竪說大と說き小と說く、」飄風洒雪は逸堂云く、「沒蹤跡」或抄に云く、「語默の上に於て大活自在を言言言といふ、說の時、默の義、」爾雅に飄は回風なり、つじがせ、洒はきよむるなり、洒雪はみぞれなり。

㋡默默默兮。默處は却つて聲あり、色あり、語默不二、無礙自在の境界、永嘉の所謂默時の說、說時の默、大施門開無壅塞の意なり、或抄に云く「默の時說の義。」

㋧藕絲孔裏。珠云く「此の如く妙用を以て」と。或抄に云く「自由自在を得、大小の上かゝはらぬを云ふ禪話なり、衲僧の活機用上の句を受く、禪話なり。」

㋤等閑挨落。珠云く「無造作に妙用を働く、」挨はうつなり、龍溪云く「大小一致、神用活脫の境界。」偈を以て出陣す、一二句は八言、此の格多し。

㋶何人得此機用。或抄に「底意は虛堂をさす、此の大機大用を得たる」

㋰頭長云々。那一人を指出す、碧巖五十九則の頌なり、この頭長きは趙州が百二十歲まで生きた、福祿壽の先達じや、これば誰じやと云へば趙州じや、長頭は長命なり、まるで福祿壽の立像じやもの、こちらが何を云ふてもあまり不得要領である、丸で無言同樣、つくねんとして起立して居ると云ふことと獨足立ば「ひとりそくりつ」とよむべし、足立は竦立の意で、ぬつくと立つで、立姿を形容したものなり、珠云く「是れ何ぞ、是れ本來の面目。」或抄に云く、「此の人こそ此の機用を得るなり、畢竟虛堂自らに比し、自負するなり。」

㋼大播芳猷。杭都に於て大道を播揚すればなり、猷は道なり、珠云く「和尚の道德はびこりませう、」文選に美稱なりと、畢竟大道を云ふ。

㋨波斯入鬧市。外夷なり、此には大秦と云ふ、（頌古の部に詳なり此の僧人の語言を通曉せず、外夷の中國の鬧市に入るに似たり、珠云く「方語東西を辨ぜず、又落處を知らず、又分曉なし、」又云く「誰もきゝてがない、今は僧の承當の處を抑下するなり、うぬがやうなやつは、祖師門下のものがたりは

忽ち箇の衲僧あつて、出で來つて㋓捉敗了也と道はゞ、又作麽生。」荅へて曰く、「㋢儞、常侍を捉敗するか、㋐臨濟を捉敗するか。」僧曰く、「㋚總に不恁麽。」荅へて曰く、「畢竟作麽生。」㋖僧便ち喝す、荅へて曰く、㋴甜瓜、苦葫蘆を生じ得たり。」僧曰く、「㋱天目の近きに因らずんば、㋯那ぞ斗牛の寒じきを覺えん。」荅へて曰く、「㋛切に忌む、亂りに針錐することを。」僧禮拜す。師乃ち云く、㋽五峯孤峭に㋪萬壑雲寒し。㋲人人佛祖の恩を報ぜんことを懷ひ、㋝箇箇㋜龍蛇を辨するの眼を具す。㋑全賓全主、全放全收、㋺威音那畔に向つて、㋩別に生涯を立し、㋥空劫已前に於て、㋭自己を突出す。㋬目機銖兩、㋣擧一明三、㋠化儀に涉らず、㋷如何が相見せん。」主丈を卓して、㋦白鳥望中に沒し、㋸青山

むだごとじや波斯の人のやうに言葉も通ぜぬに何を云ふとなり。」

㋔不看經。珠云く、「千鈞の弩乎。」

㋗酒逢知已。珠云く「臨濟がにこ〳〵がほ、よき知音に出合ふた、一つささうと盃をもつた勢じや。」溪注に云く「常侍は這中の人なる故に、此の荅へあり。」

㋳還習禪否。珠云く「箭已離レ弦、無ニ返回勢一、臨濟のとゞめをささんとかゝつたところが、臨濟は習學悟證せずとやつた。」

㋮撥亂乾坤。撥亂の二字、共に治むと訓ず、無修無住なれば胸界直下に安平なり、珠云く「看經習禪は太平を得たさのこと。」又云く「臨濟の胸中看經にも習禪にもかゝはりはせぬ、天下太平、をさまり切つてをる。」或抄に云く「若し習禪せば、是れ干戈を動ずるなり、今習禪せざるの故に」と、忠曰く「公羊傳廿八に亂れたる世を撥め諸れを正に反へす春秋より近きは莫し」と、註に撥はなほ治の如しとなり、」撥は絕なり、除なり、亂は治なり、理なり。

㋘總伊成佛作祖。珠云く「好い荅話、身をすぼめて切りこませる、」又云く「勝負が付かぬところ、關門を開けて切り込め切り込め」と。

㋫臨濟老兒。珠云く「臨濟はさすがの老武者なれども、性命は(のどくび)こゝに至つて此の世あの世の界じや、」或抄に云く「兒は猶ほ子のごとし、男子の通稱なり、殺活まゝないの死十分なり、」又云く「去ちと云ふ心ばかりなり。」性命とは或抄に性根をひきしめらるると臨濟を抑下す。」

㋙常侍手裏。常侍に搒倒せられて把住することを得ざればなり。珠云く「あぶない處じや、常侍の了簡一つでいかさうところさう。」と

㋓捉敗了也。珠云く「狼藉ものをくみとめた」となり、又云く「奇異の者を云ふ」と、或抄に云く、「好箇の老賊をとらへた」となり、賊は虛堂を指す、虛堂の性命、某が手裡に落在す、之を虛堂の性命を捉敗すと云ふなり。

㋢捉敗常侍。或抄に云く「此れは虛堂そらとぼけぶりで、我が身の上をうけはづして、ちよつと常侍と臨濟とにゆづつた。」

㋐捉敗臨濟。或抄に云く「勘辨の手を下す」と。

㋚總不恁麽。和尙とは云はずして。

㋖僧便喝。或抄に云く「捉敗をとり出す、捉敗の機用なり、此の僧作家なり、上にて捉敗了より此のかた互に敗の事に付いてばかり商量して、休す期なき程に、一喝して賊の窠窟をずんど截つてはなした金剛王寶劍の喝なり。」

㋴甜瓜葫蘆。前味已に失するの義今問意、相續せざる故に、珠云く、にが〳〵しいせつかくあまい瓜を喰はんと思ふて作れば、案外のまちがひ。」或抄に云く「甘い瓜かと思ふたれば、存じの外苦いやつじや」となり、證明の句なり。新抄の義は非なり。

㋱不因天目近。徑山は即ち天目の東北の峰なり、天目に近き徑山へ上らずばとなり。

㋯覺斗牛寒。この山絕高の故に、星漢の寒きを覺ゆるに堪へたり、託して以て虛堂和尙の高邁を嘆ず、斗牛は北斗、七星九星の義、或抄に云く「本分向上の處を得難しとなり、」「斗牛も手にとるやうに覺ゆる、虛堂の荅話の向上を云ふなり

㋛切忌亂針。人を唱咏すること莫れの類なり、僧の讃嘆を容れず、珠云く「くそてんごうしをつても亂針錐で、好肉上に瘡を剜るまいぞ」或抄には「病をもみず、みだりに。」

㋽五峰孤峭。當山の境を擧す、五髻峰といふあり、向上の嶮峻にたとへる、珠云く「此の徑山は五峰高くとりかこんで、谷には雲がたなびいて、おくふかく見ることならぬものすごい、」又云く、「虛堂、鳥居を立てて飛べよ越せよはせむる、こゝを越したやつは天下第一人じや。」

㋪萬壑雲寒。或抄に「把住綿密、この二句は地靈を叙す。」

㋲人人佛祖。珠云く「四弘の誓願にむち打ちてじや、」又云ふ「虛堂會下のものうつかりとならぬ。」

㋝箇々。人々なり、みな〳〵を云ふ。

㋜辨龍蛇眼。龍蛇は擇法眼で、この二句は人傑を云ふ。

㋑全賓全主。この二句も對機を謂ふ夫れ一賓一主、一放一收・機に臨んで缺くることなし、皆全と曰ふ

斷處に幽なり。」

復た擧す、當山の(ヲ)國一禪師、因に馬祖、僧をして書を馳せて至らしむ。書中に一圓相を作す。國師緘を啓いて之を見て、遂に(ワ)圓相の中に於て、一點を著けて(カ)封回す。師云く、「(ヨ)可惜許。當時只だ好し(タ)案上に留在して、(レ)日炙り風吹くに一任するに、(ソ)唯だ馬祖の舌頭を坐斷するのみに非ず、亦天下の衲僧をして、(ツ)摸索の處なからしめん。(ネ)事既に往んぬ矣、還つて國師の爲に(ナ)拔本する底あり麼」といつて、主丈を卓す。

上堂、(ラ)山高うして水深く、雲閑にして風靜なり。(ム)佛法至妙、妙は中和に在り、中和は則ち且く置く、(ウ)賓主歷然、又作麼生、主丈を卓して、(ヰ)薪を拾ひ澗を汲んで茶を煎る外、(ノ)杖に

珠云く「賓は總に賓、主は總に主、瓦礫光を生じ、眞金色を失するじや」或抄に云く、「虛堂と大衆となり」と。

(ロ)威音那畔。或抄に「以下は衲僧の行履を言ふ、威音は本分の家卿なり」珠云く「威音那畔とはどこじや、鼻のさき舌のさき。」

(ハ)別立生涯。珠云く「佛祖の中間でもない。」或抄に「手立てをするなり」

(ニ)空劫已前。珠云く「正中偏なり、威音那畔よりさきの其のさき。」

(ホ)突出自己。此の二句、操履を謂ふ、皆實際に立在するなり珠云く「背觸の中から面目どのをつきだす。」

(ヘ)目機銖兩。機は會なり、十絲を銖と爲す、十銖を分と爲す十分を兩と爲す。珠云く「ちらりと見て、文目をちがへぬなり」或抄に云く「機は動の微なり、ちらりとみるとは、輕重を知る伶利の漢を云ふ」と、或近代抄に云く「銖兩を目機すと讀むべし、銖兩の二字で、一分一厘ほど極少量の重量、目機は目分量で、その重量を推完すること」

(ト)擧一明三。これは近代鈔に云く「一をあげて三をあきらかにすと訓じてもよい、德利を持つて來いと云はれて、盃も御馳走も持つてゆくといふやうな氣轉利きたる類なり。」龍溪云く「此の二句は頓機靈利今は作家の相見を表す。」

(チ)不涉化儀。化儀は建化門の儀式なり。珠云く「本地のまゝ如來の儀式にもよらず、祖師の分皮分髓にもよらず、世諦の上の建立の邊のじや。」

(リ)如何相見。此の二句は本分の相見を要す、珠云く「まつから是の如きとき、どうみなと出合ふたものぞ。」

(ヌ)白鳥望中。水邊なり、珠云く「白鷺(さぎ)が飛んでも雪のやうなとみる中に、どこかへ行つた、」又云く「虛堂何の爲にこんなことを云ふた、境を以て云ふた乎、惡水驀頭にそゝぐ、」徑山より遠く見わたす境致なり。

(ル)青山斷處。山邊なり、珠云く「この二句は現量の性境化儀に涉らず日本でならば比叡山、愛宕山、ながめ見るところに甚深の意味がある、」或抄に云く「今時の上に就いて、直に威音那畔化儀に涉らざる底を示す」「又云く「相見眹迹を止めず、是れ衲僧の境界なり。」

(ヲ)國一禪師。開山道欽は牛頭下の鶴林玄素に嗣法し、唐の代宗、號を國一と賜ふ、傳燈の本傳此の緣を收む、禪師は蘇州の崑山の人、姓は朱氏、年二十八にして出家し、玄素の弟子となる、唐の大曆三年代宗詔して闕下に至らしむ、親しく瞻禮を加ふ、後特に國一と賜ふ、貞元八年十二月(日本の桓武天皇延曆十一年)寂す、壽七十有九敕して諡して大覺禪師と曰ふ、鳥窠道林の師で、法系は。

四祖道信―牛頭法融―牛頭智岩―牛頭慧方―牛頭法持―牛頭智威―鶴林玄素―徑山道欽―鳥窠道林、

國一の入寂は臨濟の入寂より六十二年前なり。

(ワ)是圓相中。或抄に云く「馬祖の意はたとひ三世諸佛、歷代の列祖も馬祖圓相の圈圚を出づること能はざるなり、國一一點を着くるは馬祖の圓相是れ甚麼の閑消息の直下坐斷して出頭に路なからしむるなり。」

(カ)封回。圓相を封破す。

(ヨ)可惜許。をしむべきかなじや、まだなか〳〵の意なり。

(タ)留在案上。机の上にうちすてゝをいて。

(レ)一任日炙風吹。珠云く日があたらうが風が吹かうがほこりがかゝろうがそこにあるともせず、見向きもせずんば。

(ソ)非唯坐斷馬祖舌頭。他の來書虛設と作る故に。

(ツ)無摸索處。珠云く「とりつきやらももがきやうもあるまいものを。」

(ネ)事既往。論語に云く「既に往をば咎めず、」珠云く「くやんでもせんないが。」

(ナ)拔本底。本利を拔得するものありや、珠云く「後ち過たことではあれども國師の爲めに「本手をとり回へす」者があろう乎拔本は「もとを取かへす」の意なり。或抄に「かたうとするありや、」拔本は鄉談俗語也、賈人得利の謂ひ也。」

(ラ)山高水深雲閑風靜。現成法爾珠云く「山高は妙峰孤頂じや、佛魔も窺ふこと能はず、水深は法性海中じや。」

(ム)妙在中和。本分の中和じや。珠云

倚つて閑に雲の去留するを看る。」

兩班を謝する上堂、擧す。㋔石頭、衆に示して云く、「㋗言語動用、㋳交涉沒し。」藥山云く、「言語動用に非ざる、㋮亦交涉沒し。」頭云く、「我が這裏は㋘針劄不入。」山云く、「我が這裏は㋫石上に花を栽うるが如し。」師云く、「㋙智師と齊しきときは、師に半德を減ず、㋓智、師に過ぎて、方に傳受するに堪へたり。且つ㋢中に於て優劣の處、㋐還つて人の緇素得出するあり麼」といつて、㋚主丈を卓す。

開爐上堂、擧す、百丈因に溈山㋖深夜に侍立す。丈云く、「看よ、爐中火ありや否や。」溈之を撥つて云く、「無し。」丈躬ら之を撥つて、小火を得て云く、「爾無しと道ふ、是れ甚麼ぞ。」溈山㋴當下に悟り去る。師云く、「㋱洞房花燭夜、㋯金牓

く、「其妙處は彝倫の中に在り、それならば孔子さまの執事にでもなれよう乎。」中和は儒道の中庸に曰く、中は天下の大本也、和は天下の達道也と今は中道實相をいふと、龍溪はいへり、中は一機未發、和は一機已發なり。

㋒賓主歷然。即今目前、賓あり、主あり、自ら分明也、珠云く、「臨濟が賓主歷然と云ふたが、これがいけない、根本差別が分明ならぬ。」

㋼拾薪潑潤。珠云く、「これが賓主歷然か、日本で云ふならば千家の宗匠、遁世の趣きのやうなもの」と。「此の句は山高水深より出づるなり、自得逍遙の境界なり」、又云く、「中和圓融の上に於て更に一關を設け、差別を辨知するの旨を提く、」

㋨倚杖閑看。この二句も大無心三昧、はじめの兩句と相應して結ぶ、珠云く、「淵明の南山を見る底のやうな。」或抄に云く、「倚杖閑看は主なり、雲は賓なり無心の現成。」

㋔石頭。希遷、青原行思に嗣ぐ、珠云く、「青原下の一人で、にぎはふた、馬祖と鋒を交へた」又云く、「車輪の如き目を見開いて。」

㋗言語動用。珠云く、「佛教祖錄神通自在」、又云く、「佛と云ふても如來と云ふても、川向ひのせんさくじや」、或抄に「佛語祖語、金語妙句、擧足下足行住坐臥。」

㋳沒交涉。佛法と沒交涉、珠云く、「そんじもよらぬ、そんなことではない」。

㋮亦沒交涉。無業と白雲と情念未だつきざれば、情忘頓に盡くの話の如き、寶林錄に見ゆ珠云く、「千山萬水へだて〻居

挂ㇾ名時。是れ則ち一時の快意、當時若し㋛馬祖に再參する底を用ひば、溈山の門戶、㋾未だ寂寥に至らず。」

上堂、擧す、仰山、溈山に在つて㋪牧牛、時に㋲踢天の泰上座、問うて云く、「㋝百億毛頭、百億の獅子現ずるとき作麼生。」㋜仰答へず、歸つて溈山に侍立する次で、忽ち泰上座來る。仰云く、「適來百億毛頭の百億の獅子を問ふ、豈に是れ上座にあらずや。」泰云く、「㋑是。」仰云く、「㋺正當現ずる時、㋩毛前に現ずるか毛後に現ずるか。」泰云く、「㋥現ずる時、前後あることを說かず。」仰山、㋭拂袖して便ち出づ。溈山云く、「㋬師子腰折れ了れり也。」師云く、「仰山㋣祇だ溈山の證明せんことを要す、自ら謂へり、㋠暗地裡に便宜を得と。泰上座當時、他の毛前に現ず

るゝと。

㋘針劄不入。劄はけづる、把住綿密、珠云く、「絹針を入るゝすきまもない、これはみそくさい。」或抄に云く、「竹のへらの針じや、風吹けども入らず、水洒けども着ずとなり」針劄不入は或る新抄に云く、「針のさきでさしこむほどのすきもないところ」、議論の餘地はないとの意味なり。

㋫石上栽花。沒蹤跡の處、却つて蹤跡を示す、會元に藥山の章の此の話の次に云く、「頭然ㇾ之」とあり、珠云く、「是れ甚麼ぞ、そだゝばいくらなど栽ゑて見よ、こちからいやとは云はぬ、」或抄に云く、「石上は把住、栽花は放行、根脚露出す、全體放行、かくすことなし、或抄に云く、「古語に云く石上栽花後、生涯共是春ど、又無用處の義なり、針劄不入用ひざるなり。」枯れるともまゝか、つぼませるか、柳も花もうゑますか、我が這裏乎沒交涉乎。」

㋙智與師齊云々。或抄に、藥山といふものはさて〳〵。

㋓智過於師。百丈に此の語あり碧岩十二則の評に見ゆ、溈山亦此の言あり、臨濟錄に見ゆ、智を見に作り、受を授に作る珠云く、藥山は石頭の弟子なり、智とは藥山を指す、臨濟錄の夾山抄に謂く、弟子の見地師と一般なるものは必ず師匠の半德あり、これ傳授するに堪へざるものなり、弟子の見地師に過ぎたるものは多くは師の見地に同じかるべし、これ方に傳授するに堪へたるものなり。」

㋢於中優劣處。强ひて關竅を設く、珠云く、「うきしづみがあ

る、」或抄に云く、「石頭と藥山との中に於て、人の分別あり麽。」

(テ)還有人緇素。黑白分曉にし去る麽或抄に云く、「虛堂自ら緇素得出するの機鋒なり。」

(サ)卓拄杖。珠云く、「是れを究めねは優劣はわからぬ。」溪云く、「此の上堂、超師の緣を擧して以て兩班を謝す、其の底裡は主伴優劣なきことを辨ぜんことを要す。」

(キ)侍立深夜。珠云く、「古德の隨從脇席に至らず、夜もすがらおそばさらずと見へた。」

(ユ)當下悟去。珠云く、「虛空消殞し鐵山碎く、晝夜の依立の潛密のおかげ。」

(メ)洞房花燭夜。洞は深なり、深宮暗室などを云ふ、花燭は歸田錄に所謂鄧州の花蠟燭の類、其の華麗を謂ふ、此の句は暗室に燭を得るの快意なり、忠曰く、「洞房は婦人の居處、花燭夜は婚姻の期なり、」珠云く、「婚嫁祝言の座敷なり、」或抄に悟りて歡喜踊躍の體なり、これは夫妻婚婉の喜なり。」

(ミ)金牓挂名時。聞見錄に、「張文定公廷試に赴く、金牓の通判と稱す。」此の句は窮士登第の快意なり、古詩に「久旱逢二甘雨一、他鄕遇二舊知一、洞房花燭夜、金句挂レ名時、」未だ所出を詳にせず、蓋し每句一時の快意なり、忠曰く、「此れを四喜の詩と名づく、」珠云く、「金牓は及第して名を金牓に題するも喜なり」又云く、「頓に祿位を得て、榮幸涯りなし、」又云く、「一時の快意で、萬劫の餘殃を受け去る」と。

(シ)再參馬祖。寶林錄に見ゆ、珠云く「馬祖威を振って一喝、百丈三日耳聾する底の手段を用ひられた、この受用底は三十年後漸く合點のいくことじや」或抄に云く、「此れ溈山の去り去つたところを抑下して云ふ、未だ十分に徹底せずと抑へた宗師の活手段なり、」言ふ意は溈山十分の所得に非ず、若し百丈の再び馬祖に參じて、祖の喝下に四日耳聾すと云はれたほどの徹底ならば、かやうに溈山の門風は衰へまじきものを」となり、溈仰宗は七世にして滅する故にいふ。

(ヱ)未至寂寥。衰微すまいものを、殘念なりと。

(ヒ)牧牛。或抄に云く、「悟徹の後の聖體長養を謂ふ、」この話は聯燈第八に出づ。」

(モ)蹋天秦上座。或抄に「百丈に嗣ぐ」とあり、蹋天は蓋し號に非ず、此の後錄に「蹋天弄井得二人憎一」の句あり、彌天道安、罵天大惠等の如き乎、蹋は字彙に他歷の切、足を以て物を蹴るなりとあり、珠云く、「蹋天は蓋し雅號なり、俗語に蹋天弄井を以てと西遊記に見ゆ活衲僧を稱するなり、大惠を杲罵天と云ふに同じ、機鋒峻發の故に此の如く云ふなり。

(セ)百億毛頭。華嚴宗の十玄門の第四因陀羅網境界門などより出づる話

るか毛後に現ずるかと問はんを待つて、但だ(リ)天に仰いで大笑一聲せば、仰山(ヌ)拂袖して出で去らんと要すとも、也た未だ得ざること在らん。」

上堂、「人人、(ル)此の一段の生死底の話頭あることを知る、(ヲ)進退揖讓、言語酬酢するに至るまでに、(ワ)歷歷分曉なり。甚に因つてか(カ)困じ去れば、便ち落處を知らざる。設ひ能く(ヨ)夢中の佛事を作す者あるも、(タ)猶ほ暗中に物を取るがごとし。(レ)且く道へ、病那裏にか在る。今日(ソ)徑山、眉毛を惜まず、普く諸人の爲に、此の障礙を去けて、倶に(ツ)平實の田地に到つて、(ネ)受用無窮ならしめん。還つて信得及す麽。」主丈を卓して、(ナ)「自携レ瓶去沽二村酒一、(ラ)却著レ衫來作二主人一。」

なり、珠云く「仰山牧牛するの何のと云ふが、正當與麽の時、又百億の師子だまるものではない、百獸身のかくし處はない。」

(ス)仰不荅。珠云く、「此の處丈夫なところがある、」又云く、「句につまつた、後に荅へんと云ふ乎、但し分明に答へ得た乎。」

(イ)是。いかにも。

(ロ)毛前。珠云く、「一寸とついて見た。」

(ハ)現時不說。珠云く、「泰上座、是に於て腰がぬけた、果然としてこれは散々の荅なり、毛前毛後の句にはやとり付く狂狗逐塊の漢なり。

(ニ)正當現時。或抄に「直下に活師子を現じて見せた、さて此の獅子は毛の前に現じたか、毛の後に現じたかと一挨するなり、勘辨の手を下すとなり」

(ホ)拂袖使出。或抄に「首座を肯はざる底なり、全體作用、眞箇の獅子を現出す。」

(ヘ)師子腰折。泰上座の拶折せらるゝを判す、珠云く、「こりや喧嘩のあとの挨拶乎、威を失つた猫にもおとつた。」或抄に云く、「みごとな師子でありしが、拂袖することとゆゑに、」又云く、「抑下の托上なり、拂袖の上を褒美するなり。」

(ト)溈山證明。故に適來荅へず、珠云く、「天晴れ」とはたらきしてみせん」と、或抄に云く「適來荅へずして、溈山の前に於て商量す、其の意此に在り」

(チ)暗地裡。珠云く、「人のしらぬまにどこやらが、かちずもうと見えたが、便宜はかつてなり、これは適來荅へずして溈山の前で荅ふるを云ふ乎。」

(リ)仰天大笑。珠云く、「そら、むいてあきれ果てた、のつけか

へりてじや。

(ヌ)要拂袖出去。珠云く「あぢだらうと思ふた、かなはばこそ。」

(ル)此一段生死。生死大事の因緣、珠云く「一段とは出息入息、油斷のならぬ大事じや、識得せざれば生死、識得すれば即ち大圓鏡、智識得せざれば則ち大圓鏡智、識得すれば則ち生死底。」

(ヲ)進退揖讓。珠云く「仁義道中、日用底自己、受用を離れて外にあるではない、語言醍醐とは寒温安否じや。」

(ワ)歷歷分曉。魏府華嚴、長老示衆に云く「佛法の事は日用の處にあり儞が行住坐臥の處、喫茶喫飯の處語言相問の處に在りの意なり。」珠云く「歷々分曉は、さら〳〵、さつと面前了々分明なり。」

(カ)困去便落處。困は困睡を謂ふ、珠云く「ぐう〳〵、前後不覺にねいつたときはじや。」或抄に云く「落處は主人公なり。」

(ヨ)夢中佛事。夢に佛事に奉じて雜緣なきを謂ふ、珠云く「今寤寐合一を謂ふなり、正念相續の事夢中の西來意とも云つた。」

(タ)猶暗中取物。明了著實ならず、とぼ〳〵としてたしかにないこと。

(レ)具道病那。珠云く「此れを一旦苦にせぬものはない、身共も大いにためられた、只だ雜透の話に參ぜよ、只だは三生六十劫にも得られぬ、是れはいかうづゝなかつた、大惠などもきつう病んだ、古人も皆々さうじや」或抄に云く「寤寐合一にあらざるの病。」

(ソ)徑山眉毛。或抄に「口業を惜まずの義。」

(ツ)平實田地。珠云く「眞實の義なりそめぬ昔がましじやもの、」或抄に「寤寐合一の田地、又は本分の田地を云ふ、歸家穩坐の地なり。」

(ネ)受用無窮。珠云く「佛界に入り魔界に入り、一生受用じや。」

(ナ)自攜瓶去。珠云く「たすきがけまへだれがけで、德利をひつさげ、これは意味密密。」或抄に「上の句は伴を謂ひ、下の句は主を謂ふ。」言ふ意は賤民が壹一日瓶を持ちあるいて酒をうるなり、さて我が家へかへれば、のつしりと主人になる此れ主伴異なりといへども、もと一人なり、今所謂寤寐合一にして平實の處なり。

(ラ)却著彩來。珠云く「當世風の長羽織で、のさと座敷に坐して檀那がほ。」大慧が調達謗佛、墮獄の因緣を拈じて、此の兩句を著く、頌古の部に詳なり、龍溪曰く「主伴自在の境界なり、以て困覺不異の義を曉す、是れ平實底なり」と、或抄に云く「主伴無碍、自由自在なる境界なり、如此ならば死生に大自由を得るなり。」

(ム)佛法在正。正は邪に對し、盛は衰に對す、珠云く「此の句は今時には辨じにくい。」「在ㇾ正は一把茅底、折脚鐺内、煮二野菜根一喫し、鷹

上堂、(ム)佛法正に在りて盛に在らず、(ウ)正に在るときは、則ち鬼神も其の由を測ること莫し、(ヰ)盛に在るときは、則ち鬼神も能く其の福を妬む。(ノ)五峯は固に是れ、其の間に屬せず、(オ)甚に因つてか終日區區地なる。」拂子を擊て「(ク)霜葦岸頭雙屬玉、(ヤ)一聲淸響忽驚飛。」

(マ)新薦嚴(ケ)寶葉長老を謝する上堂、(フ)崑山の片玉、(コ)桂林の一枝、(エ)貴しと爲るに足らず。(テ)水邊林底、(ア)三四十年、(サ)東を說き西を話る(キ)「此れ之を貴しと爲也。」(ユ)更に松源の三轉語あり、(メ)此れを(ミ)茂苑に行つて爲に流通せよ。」

上堂、擧す、(シ)紫胡和尙、衆に示して云く、(ヱ)三十年來、紫胡に住す、(ヒ)二時の粥飯氣力粗なり、(モ)無事にして山に上つて行くこと一轉す。(セ)借問す時の人會すや也た無しや。」(ス)師の云く

をかぶつて正念相續して、辨道の世話をやく、是老僧と日々相見報恩底の人なり」と、大燈國師も遺ㇾ誡せられた、盛は多衆鬧熱なり、或抄に云く、「正は正知見本色の衲僧の境界なり、盛は臨濟の所謂這箇機緣を具ふと云ふものなり、時に逢ふて繁華の地に住して富み榮えて時を過すなり、」

(ウ)在正鬼神。由とは珠云く、行由縱由なり、正念工夫相續して道心あつければなり、」

(ヰ)在盛則鬼神。珠云く「鐵棒を提げ、しり目でにらみ、ひまをうかがう。」

(ノ)五峯固是。珠云く「五峯は徑山、もとより正にも盛にもよらず、中が間はづれ、」溪云く「邪正盛衰以て懷とせず」と。

(オ)因甚終日。區區として小事を營む、珠云く「此れにもうまい處がある、虛堂がよく料理をしておいた、」或抄に云く、「虛堂は正盛に任せざれば、高事休すべきが、何とて日日區區として事をとやかくやと營むは何としたことぞと、諸人に一拶するなり、」又云く、「區區は些子の義、なにとして吾れは些小な體であるといふなり。」

(ク)霜葦岸頭。屬玉は鳥の名、張揖が曰く「鴨に似て頸長く、赤目紫紺色、屬音燭なり、」珠云く「あしの枯れ葉をたよりにて、ぐう〳〵とつれだつて居た」或抄に云く「雙の字、正と盛と二つにかゝる、屬玉は日本のあをさぎの類、水鳥なり。」

(ヤ)一聲淸響。淸閑自得の境界、珠云く「なにかがたらんとした、えへんとせきばらひ、驚飛はとびあと沒蹤跡。」或抄に云く「一聲は擊拂の聲なり、

「紫胡(イ)年老いて心孤なり、(ロ)東行西行して、又(ハ)人に問うて、會すや會せずやと道ふ。徑山は崇岡峻嶺、面前に列在す、(ニ)又雪の寒さに値ふて、但だ未だ去ることを得ず。(ホ)春の融せんを待つて、也た須らく行くこと一兩遭すべし。只だ是れ人に會すや會せずやと問はじ、何が故ぞ」拂子を撃つて、「(ヘ)水月以喩兮、古來己多、(ト)我今不レ然兮、所レ陳伊何、(チ)參。」

冬夜小參僧問ふ、「(リ)冬至一陽生ず、(ヌ)東山水上に行く、(ル)時節因緣、願はくは法要を聞かん。」答へて云く、「也た(ヲ)只だ是れ一定の法。」僧云く「既に是れ東山水上に行く、(ワ)甚麼に因つてか却つて一定の法と成る。」答へて云く、「(カ)老僧口は是れ禍門。」僧云く、「(ヨ)洞山冬夜の果子の次で首座に問ふ、『一物あり、(タ)黑うして漆に似たり

驚飛は正と盛との二位に住せずに故に云ふ。」

(マ)鷹嚴。崑山は蘇州にありこゝに鷹巖あり。

(ケ)寶葉。續集傳燈五に「虛堂禪師の法嗣、四明定水寶葉長老道源禪師」とあり、蓋し新に鷹嚴の請を受け來て、師を省訪す、故に上堂して之を謝す。

(フ)崑山片玉。忠曰く、「崑崙山は蘇州なり、一統志八引に曰く、「晉の時陸機、陸雲、此に生る時人之を崑山の玉を出すに比す、因つて名づく」と、今は崑山の緣に托して此の事を用ひて、其の所得の貴を表す、珠云く「これは寶葉の寶の字を打す。」世に希なことを云ふ。

(コ)桂林一枝。これは葉の字を打す、松源も鷹嚴に住したゆへ

(エ)不足貴。珠云く「此の寶葉長老、法財無量なり、世寶を以て比すべけんや。」

(テ)水邊林底。道行の地、珠云く「師と水邊林底、淸閑の境なり世間を離れ切つて、これは未悟已前。」叢林などに偏參するを云ふ。」

(ア)三四十年。珠云く「參禪辨道の衲子と云ふものは」寶葉長老底なり。

(サ)說東話西。珠云く「頂門の一著より末後の大事まで、根底を盡し、うひものじや、辨道をくんづほぐしつ、世話をやいた。」

(キ)此之爲貴。或抄に「明眼の自己底を云ふ。」溪云く「世寶を貴しとせず、法寶を貴しと爲す故に。」

(ユ)松源三轉語。此の錄の五卷の頌古の部に出づ。

(メ)此行。忠曰く「このたびと點ずべし」と。

(ミ)茂苑。古抄に云く「松源茂苑の虎丘寺に住ず、茂苑は平江

(レ)常に動用の中に在り、(ソ)動用の中收不得。且らく道へ、(ツ)過什麼の處にか在る。』座云く、『過動用の中に在り。』洞山、果卓を掇退せしむ、此の意如何。」答へて云く、(ネ)官馬厮踢む。」僧云く、「今夜和尙、忽然として首座に問はんに、一物あり黑うして漆に似たり、常に動用の中に在り動用の中收不得。且く道へ、過什麼の處にか在ると。徑山の首座も、亦過動用の中に在りと云はゞ、又作麼生。」答へて云く、「(ナ)也に兩盤の果子を與へん。」僧云く、「只だ洞山の如きんば、果卓を掇退し、徑山は又一盤を添ふ、(ラ)還つて優劣ありや也た無しや。」答へて云く、「蓋し(ム)他はこれ箇の擔板漢なり。」僧云く、「(ウ)學人今夜、大衆の威光を借つて、別に一問を置かん、得てん麼。」答へて云く、「(ヰ)偷心の鬼子・人の憎を得た

府にあり、鷹嚴も平江府にあり云云、松源鷹嚴に住す、故に此の囑あるか」茂苑は長洲苑なり、蘇州長洲縣に在るなり、崑山亦蘇州崑山縣に在り已にこれ隣近の名勝、故に云ふ、長州茂苑に於て松源の三轉語を流通すべしと、茂苑は野客叢書に杜牧之が詩に曰く「長州茂苑草蕭々、暮烟秋雨過ニ楓橋一」と、長州と楓橋と共に蘇州に在り、今其の地に據つて流通を作す。

(シ)紫胡。會元に、南泉願の法嗣衢州子胡、巖利蹤禪師、澶州の人なり、姓は周氏、幽州開元寺に出家す、この話傳燈十に出づ、唐の咸通年中の人、廣明中寂す年八十一。

(エ)三十年來。傳燈十の師の傳には子湖とあり、これは偈頌なり。

(ヒ)二時粥飯。粥飯は齋粥、粗は麁と作す、溪注に「辰午粥飯の氣粗なり、微なり、略なり、自ら、からだもかひなもほねもよはい。」

(モ)無事上山。珠云く「自適逍遙の意薪拾ふでもなく、只だ杖をついて、一轉は一返あるいて來申した。」

(セ)借問時人。借問は問汝に作る、此の頌は無爲の作爲を示す、會なり、なんとこゝろへたかと云ひかけるなり。

(ス)師云。拈提なり、珠云く「評判をつけ、三昧をしたらば、手をやぶらふ。」

(イ)年老心孤。孤峻にして人を抑遏す、珠云く「氣みじかになつて、いつともなくさびしくなつた。」

(ロ)東行西行。珠云く「うろ〳〵してゆくまゝに、又はぢかくして人に問ふ。」

(ハ)崇岡峻嶺。珠云く「天をつき

り。」僧便ち喝す、答へて云く、「(ノ)果然。」僧禮拜す。」

師乃ち云く、「(オ)日短く夜長し、(ク)晷運新に一線を添ふ。(ヤ)高く來り低く去る、(マ)洪鈞九淵より轉ず。(ケ)陰魔潛伏して道芽生ず、(フ)陽氣發する時硬地なり、(コ)十二時辰を使ひ得る底は、(エ)元酒大羹、聊か薄禮を旌さん。(テ)十二時辰に使はるる底は、(ア)漏巵瓦缶をも、尙ほ且つ甘ばず。(サ)任教あれ(キ)葭管灰を吹くことを。(ユ)箇の裡本遷謝なし。驀然として箇の漢あり、出で來つて(メ)老師情景未だ脫せず、(ミ)二十四氣に使ひ得られて、(シ)七顚八倒すと道はしむ。(ヱ)山僧只だ休し去ることを得ん、何が故ぞ。(ヒ)家肥えて孝を生じ、(モ)國覇あつて謀臣あり。」

復た擧す、馬大師、藥山に問ふ、「子近日(セ)見

ぬく劍の峰、雲をひき切る鋸ケ嶽。」又云く、「劍戟をうゑたる如く見てもぞつとする、」或抄に「紫胡のやうに山へ上ることはならぬ。」

(ニ)又値雪寒。珠云く、「身がすくんで、紫胡の如くえのぼらぬ、遊山せんとすれどもじや。」

(ホ)待春融也。珠云く、「此のやうな言句の啓などと云ふものは是れを見ても精を出さなければ日多の孫とはいはれぬ、紫胡にまけはしない、一返二返もまはらう、なんの用じや、同じ穴の狐ではない乎。」遵は巡なり。」

(ヘ)水月以喩。珠云く、「水中の月の如く、物に應じて形を現するなど、」或抄に「紫胡の示衆を抑下するなり。」

(ト)我今不然。珠云く、「おれはさうでない、どうじやなんじや陳ぶる所はどうじや。」龍溪云く、「是れ歌行體なり、」言ふ意は水月鏡像等の比喩、方便古より儘多し、我れ今然らず、指陳するところは伊何なり、伊は發語なり。

(チ)參。上に陳ぶる所は乃ち佛祖不傳底、聲前の妙旨なり、人の漫に聽過せんことを恐る、故に之を言ふて苦口に參尋せしむ。珠云く、「是れは雲門の普の字、「露の字と同じ、」或抄に云く、「沒巴鼻沒滋味なり、强ひて解せば、虛堂が今擧拂のところは水月の幻炎(マボロシ)か、諸人參じて見よとなり、」或抄に「參じて知れ、分上に會せよ、」珠云く、「此の上堂は絕勝なり。」

(リ)冬至一陽。珠云く、「平生心意識情、都て行はれず、天地ひへかへつて、嶮崖撒手、虛空消殞冬至一陽生ずるの端的、東山水上行。」

(ヌ)東山水上行。或抄に云く、「外面は一氣を言ふ、發動の勢、陽氣動くが故に、」溪注に云く、「雲門の語、徑山後錄に見ゆ、是れ禪話不思議解脫の境界、今の意は育王錄に所謂一氣潛回、八角の磨盤空裡に走ると云ふが如し。」

(ル)時節因緣。珠云く、「一日一日一時一時と遷謝して、此の時節に至つた。」因緣はわけ。

(ヲ)一定之法。定法は思議すべし、今は僧の故意を抑へていふ、珠云く「それはおぬしたちが定りじや、みんな云ふことよ、」或抄に云く、「時の人の窠窟のるゐ。」

(ワ)因甚應却。珠云く、「希有不思議でないとは、なにをたてに左やう仰せらるゝ。」

(カ)老僧口是禍門。箇の老賊、珠云く「一千五百人の知識、これ又すさまじい語じや、贊嘆し及ぼさず、われ〳〵も口はきけども、さて〳〵」この語ば頌古の五祖演の話に見ゆ

(ヨ)洞山冬夜。首座は泰首座なり、この話は報恩錄に見ゆ。

(タ)黑似漆。珠云く、「無形無相、なんともしれぬ。」

(レ)常在動用。珠云く、「行住坐臥、六根門頭。」

(ソ)動用中收。珠云く、「見るものがさうかと仕ても、とらへられず、聞かうと仕ても手元へまはらず。」

(ツ)過在動用中。珠云く、「洞山に三十棒打たれるならんと思ふて、それでは、闇中魔界に入ることはならぬ。」

(ネ)官馬廝踢。方語に八兩半斤、賓主互換、今首座を扶起す、珠云く、「洞山と泰とは只だの問答ではないが、併し勝負ある、」又云く、「よりつくこともならぬを云ふ、」又云く「なにも是は公事のさばきやうはない。」

(ナ)兩盤果子。珠云く、「それこそ駿河屋の羊羹か、龜屋の蒸菓子でも、二た皿がそへて馳走してやらう、」或抄に「大放行なり、」これは徑山の首座をほめてなり、」

(ラ)還有優劣。珠云く、「洞山は果卓を撥退し、「和上只一盤を添へなんと」」

(ム)他是箇擔。一向に作し將ち去る底なし、宜しく供養すべしと、珠云く、「生死涅槃にかゝはらざる擔板漢」或抄に云く、「他は洞山を指す抑下の托上なり。」珠又云く、「如來禪祖師禪、最初末後、とんと見向かぬやつかいものを、擔板漢といふ。」

(ウ)學人今夜。珠云く、「某甲不肖ものなれば、大衆のいきほひおかげを借つて。」

(ヰ)偷心鬼子。早く其の賊精を知る、珠云く、「うぬは內心にはつまみぐひせうと、わるこんじやう、油斷のならぬこせがれめ、人がかはゆがらぬやつ、」或抄に云く、「全體抑下。」馬人の語なり。

(ノ)果然。そりやこそ、そのことよ。

(オ)日短夜長。或抄に云く、「冬夜の小

參より已前を云ふ。」

(ク)晷運新添。晷は日かげ、この語は報恩錄に見ゆ、今日より新に一線を添ふは、唐の官人、日の長短を揆る、冬日後は一すぢを增すと、これより出し語。

(ヤ)高來低去。高は陽を云ふ、低は陰を云ふ、猶ほ報恩錄に「小去大來」と云ふが如し。

(マ)洪鈞轉自九淵。洪鈞は造化なり、洪は大なり、杜詩に「八方開ニ壽域一、一氣轉ニ洪鈞一」と、九淵は至深をいふ、前の興聖錄にも見ゆ、珠云く「洪鈞は造化の一元氣摻して云く、竹篦背觸と。」九淵はどんぞこより一陽來る、或抄に云く「元氣なり、陰氣來りて地下に發するなり」「九淵はきはめてふかきふちなり」列子に九種の淺淵の事出づ。

(ケ)陰魔潛伏。陰魔は（前の寶林に見ゆ）六陰の魔潛伏するときは、則ち無上の道芽生長すべし、珠云く「一陽の大光明が出づる」と、古則公案は鬼に煎餅。

(ワ)陽氣發時。慧日の陽氣發する時、凝結氷の如くに解け、雪の如くに消して、自然に堅硬の地なし、硬地は凍つたところなり、珠云く、「凡そ萬象の內、蟻のひげほども目にかゝらぬ、大鐵圍山小鐵圍山、くづ餅みたやうになる。」

(コ)十二時辰。この語は寶林の冬至に見ゆ、珠云く「片時もあらざれば死人に同じき如く、硬地なき底を全體受用し得る。」或抄に云く「道眼圓明なれば則ち日に斗金を費すも格外とせずじや。」

(エ)元酒大羹。元は當に玄に作るべし禮記の樂記に曰く「大饗の禮、玄酒を尙「かみ」にして腥魚を爼にす大羹和せざるは遺味ある者なり、」鄭玄が注に「大羹は肉湆、調ふるに鹽菜を以てせず、玄酒は水なり、旌は表なり、」珠云く「世界では元酒大羹は莫大な饗應なれとも是の如き人へは十分でない、」卿はおもんじやうのしるしがないから、非薄の禮儀、或抄に「元酒は上古のまつりのうすい酒、大羹 野菜薄禮はなにほどちそうしてもたらぬ」と、これは若し如上の人あらば虛堂は沒滋味の那一物を以て供せんとなり。

(テ)十二時辰。珠云く「自己を捨てゝ物を逐ふ底。」或抄に云く「道眼淸明ならずんば、滴水も消し難し。」

(ア)漏巵一瓦缶。われさかづき、かはらけのるい、淮南子氾倫訓に云く「江河不レ能レ實ニ漏巵一、」缶は瓦器、皆賤物なり、升は杯四升を容るゝ大きさのもの、珠云く「かけがうして雜水一椀くれることではない、」缶は說文に「瓦器、酒醬を盛る所以なり、或は瓶に作るべし」口小にはら大なる器一石六斗を容るると。

(サ)任敎。珠云く、「こちらはかまはぬ。」

(キ)葭管吹灰。この語、前の報恩錄にあり、或抄に云く「世相は遷變するに依つて。」

(ユ)箇裡本遷。箇の裡急に眼を著くべし。珠云く「威音以前今日に至るつひに盆のあつたこともなし、正月のあつたこともなし、」或抄に「虛堂が這裡はもと遷變なしじや。」

(メ)老師情葺。珠云く「老師は虛堂もと謝遷なしと、巴鼻が見える、ぐちかわ〱分別だらけ、情量は見地なり。」

(ミ)二十四氣。報恩錄の七十二氣候に見ゆ、珠云く「やれ立冬だの冬至だのと、」或抄に云く「畢竟時節に使はるゝなり。」

(シ)七顚八倒。顚倒極數。珠云く「すゝはきだの餅搗きだのと、七てん八たうしてをじやる。」

(ヱ)山僧得休去。珠云く「それなら大ひまあきしてやつたものじや。」

(ヒ)家肥生孝子。珠云く「家が繁昌すれば、大舜の如き漢武の太子文帝の如き孝子ができる、家が衰微に及ぶと、不孝不仁がでゝくる、或抄に「虛堂が黠胸なり、吾が會下に我を罵る者あり」と。

(モ)國覇有謀臣。珠云く「智仁勇兼備權柄職の人あれば、左輔右弼與國の人が出る、」謀臣は龍の如く虎の如き衲子をいふ、」覇は國語の註に「覇（はたがしらは）把なり、諸侯の權を把持す。」龍溪云く「今の意は徑山は地、靈なるの故に、人傑もありとなり。」

(セ)見處如何。珠云く「このごろのみすえた處はどうじや。」

(ス)皮膚脫落。珠云く「法も非法も佛法も祖道も、今時那邊向上向下、こつぱざらひなくなつて。」

(イ)唯有一眞實。珠云く「色も香もなくなつた處でさ。」

(ロ)協於心體。珠云く「心に得て手に應ず。」或抄に云く「通身是れ遍身と同じき褒美なり。」珠云く「布ニ於四肢一は、全身に充塞するをいふ。」溪云く「俯行相應なり。」

(ハ)何將三條。衲衣を被りて、竹篾を佩び上古住山の模範なり、言ふ意は撥草參玄を罷むべきなり、古來此に於て鐵腹外道の事を引く、未だ出處を審にせず、故に取らず珠云く「三條篾は三ぐりに竹なはおびでもしていへをもて、束ニ取肚皮一は、はだをきつとひつしめて、」束取は珠云く「自身にみがまへしてといふ程のこと、他を希ふに及ばぬ、自己をひつしめて、」隨處は機緣あるところになり。

(ニ)退言住山。證據を謝す。

(ホ)未有長行。珠云く「上求菩提と一志に進むときは、竟には毘盧頂顚上を究むる所で、とつくり長養する。」行不レ行住非レ住と云ふ義なり。珠云く「そこに留つては二乘窠窟下化衆生の願輪に鞭つて、はげみ修するのじや、」溪云く「行住窮通時あつて拒くべからず、」此れは自利を謂ふ。

處如何。」山云く、「(ネ)皮膚脱落し盡して、(イ)唯だ一眞實のみあり、」祖云く、「子が所得、謂つべし(ロ)心體に協ひ、四肢に布くと。既に然く是の如くならば、(ハ)何ぞ三條の篾を將つて、肚皮を束取して、隨處に住山し去らざる。」山云く、「某是れ何人ぞ、○敢て住山と言ふ。」祖云く、「(ホ)未だ長く行いて住せざるものはあらず、(ヘ)未だ長く住して行かざるものはあらず。益せんと欲して所益なく、(ト)爲さんと欲して所爲なし、(チ)宜しく舟航と作すべし、久しく此に住すること勿れ」(ヌ)他家の兒女を呪詛す。且く道へ、藥山(ル)甚に因つてか肯て馬祖に承嗣せざる。出で來つて(ヲ)一轉語を下せ看ん。然らずんば、(ワ)來夜首座を請じて、衆に對して說破せしめん。」

(ヘ)欲益無所益。珠云く、「一切を利せんと思つて利する衆生はない、一切が目に入る分齊では、菩薩行ではない、」又云く「手前から人の爲にならんとしてはなられぬもの、時節至れば自ら人がそだてる。」

(ト)欲爲無所爲。珠云く、「行はんと思つて行ふべき法はない」溪云く、「施爲の間、所相なきなり」此れは利他を謂ふ、四句共に付囑の言なり。

(チ)宜作舟航。濟度を以て事と爲よとなり、世の爲めに舟航となつて。

(リ)借手行拳。母陀羅尼の印を結ぶの謂なり、珠云く、「馬大師己が手を石頭に借して以て藥山を拳す。」又云く「馬師、石頭の手を借つて藥山を拳す」忠曰く、「馬祖己が手を其の師石頭に借して、以て藥山を拳して警策するなり」借は晉、「しや」なり。

(ヌ)呪詛他家。子を呪詛することは寶林に見ゆ、他家とは藥山終に石頭に承嗣す、日本では東福の虎關、五家辨あり、馬祖に系く、然れども今論ずべからず、珠云く、「他家は石頭を指す、兒女は嗣子に比す」呪は詛「のろふ、」『まじなふ、」借「以て」の心なり。

(ル)因茲肯承。已に馬師の句下において悟り去る、なにによつて去つて石頭に嗣ぎ去る。

(ヲ)下一轉語。或抄に云く、「畢竟馬祖の力を假らざるなり、是れ虛堂學者への爲人。」

(ワ)來夜請首座。珠云く、「虛堂和尙どうもいへぬ。」

(イ)慧命。珠云く、「最上乘の禪、別傳の妙道。」

(ロ)危若懸絲。弘忍大師の所謂授衣の人は、命懸絲の如きなりと皆危きこと甚だしきなり。」糸一すぢかけた、あぶない。

首座を謝する上堂、佛祖の(イ)慧命、(ロ)危きこと懸絲の若し、(ハ)開士の垂範を求めずんば、(ニ)後昆何を以てか(ホ)叢林の元氣を挽回せん。(ヘ)南巖老子鏡空禪師、(ト)鏡本私なし、(チ)形に因つて顯はる、(リ)空本跡なし、(ヌ)象に因つて彰はる、(ル)衆德の歸する所を知らんと要せば、(ヲ)此の羣情の鶴望を慰せよ。(ワ)龍驤雲起、(カ)虎嘯風生。」

除夜小參、僧問ふ、(ヨ)年窮り歲逼つて、烏龜壁に上る、豈に是れ和尚の語にあらずや。」師云く、(タ)年老い心孤にして暫時の狼藉なり。」僧云く、(レ)還つて轉身の處ありや也た無しや。」師云く、「有ることは則ちあり、(ソ)儞が脚を著くる處なし。」僧云く、「(ツ)大いに徑山門下の客に似たり。」師云く、「(ネ)多少の人錯つて話頭を領ず。」僧云く

(ハ)開士垂範。開士は釋氏要覽に經の音疏に云く、「開は達なり明なり、解なり、士は則ち士夫なり、經の中には多く菩薩を呼んで開士と爲す。」範は法なり、首座は衆中の綱頭の故に珠云く、「開士は首座を謂ふなり、明眼達道の士、垂範は垂誡規範なり、法度なり。」

(ニ)後昆。のちの代なり、子孫などにかくることば、昆は嗣の如しと、この二字は上の句に附くべし、今且く古來の句讀に隨ふ。

(ホ)叢林元氣。元氣は元は始なり今は叢林の古風に回復するを云ふ、珠云く、「禪林上古朴略の風、元氣根元、色香の付かぬ根本のもの。」或抄に云く、「元氣は古風なり、天の元氣佛祖の慧命。」

(ヘ)南巖老子。光孝の鏡空普心は無準に嗣く、この人の事は、徑山後錄にも出づ、珠云く、「本光孝に住す、此の光孝は四川成都府の南岩に在り、故に云ふ、」宗派圖には鏡堂普心となす、首座たるによりて喚び出すなり。

(ト)鏡本無私。鏡の字を打す、珠云く、「胡漢擇ばず」と。

(チ)因形而顯。鏡本私已なく、形を照すに因つて鏡體顯はる、珠云く、「人人の法身も此の通りなり。」

(リ)空本無跡。空の字を打す。

(ヌ)因象而彰。空本蹤跡なし、象に對するに因つて空體彰なり鏡空の號に寄せて、蘊む所の德實を讃歎す、彰は珠云く、「鳶が飛べば鳶、鴉が飛べば鴉。」

(ル)衆德所歸。鏡體空體、能く諸般の形色を容る、謂つべし衆德所レ歸と。珠云く、「鏡空と

(ナ)「北禪露地の白牛を烹て分歳す、和尚今夜、什麽を將つてか、諸人の與に分歳せん。」師云く、(ラ)「東山下の左邊底。」僧云く、「恁麽ならば則ち大衆、(ム)德に飽き去れり也。」便ち禮拜 、師云く、「(ウ)貧多爵不レ細。」師乃ち云く、「年窮り歳盡く、東村の王老夜錢を燒く。(ノ)臘盡き春回る、樓上に人あり、頻に酒を勸む。(オ)此を以て、佛祖不傳の妙を發揮し(ク)此を以て、衲僧衣下の功を契證す。(ヤ)革故鼎新を論ずることなく、(マ)只だ時を知り節を識らんことを要す。且く(ケ)結交頭の一機、如何が顯露せん。」主丈を卓して、「(フ)惟だ愛す清臺の新曆日、(コ)韓子が送窮文を觀るに懶し。」

は衆德のあつまる處を賞くわんして付く。」

(ヌ)犖情。鵠望は(延福錄に見ゆ)有德の故に衆望を慰するに堪へたり、珠云く「人にも知らせたい故、大義でも一臘をしてたもれ。」或抄に云く「說法を首座にせよとなり。」

(ヲ)龍驤雲起。驤は擧するなり、古には襄と作す、珠云く、「龍が出てくると自然と雲が起る甘露の法雨を澍ぐ、」又云く、「すぐれたものがあると、法は自然と起ると。」

(カ)虎嘯風生。其の峻機威用、徒衆を接引するを表す、虎の如き衲子が出ると、邪黨のもの其の威におそれる、これは首座の機用也。

(ヨ)年窮歲迺。也た是れ冬至一陽生ず、東上山水に行くの機なり、珠云く、「參禪の衲子も、此の場處がなければならん、」

又云く、「衲僧の節季は老鼠牛角に入る時節、冥途のまつくらやみをふみ破る下地じやものを、それを知らぬと、ほへづらをさげる。」烏龜は行きつまつたなり。

(タ)年老心孤。箇の老賊、珠云く「おれも年老いて氣短かに成つた、ちよつと暫時のありていを云ふた。」心をとりみだしたとなり。

(レ)還有轉身。珠云く、「究り通つたとき、還つて成佛作祖の場がござるか、」

(ソ)儞著脚處。珠云く、「熱鐵橛の如く、大火聚の如し。」或抄にこれ轉身の處。」

(ツ)大似徑山。珠云く、「こいつも大抵なやつではない、さてもすさまじいものじや、和尙會裏の衲子のありさま、」龍溪曰く、「脚を著くる處なし」と、是れ即ち眞箇の容接の處

故に云ふ、大いに師の門下の客に似たりと。

(ネ)多少人錯。只だ儞耳錯りて領話するに非ずとなり、珠云く、「みなのものが、了節ちがへをするよと。」

(ナ)北禪。この語、興聖錄に見ゆ。

(ラ)東山左邊底。この語も育王錄に見ゆ、珠云く、「おゝ〳〵ある、此れを一とほうばりほうばれ、それは煮て食ふものか燒いて食ふものか、」或抄に云く、這邊那邊の機なり、一口の太刀、この語南堂靜より創る、東山左邊に南東あり、故に靜を東山左邊底と云ふ、爾後靜に限らず、演の子孫皆相擬して東山左邊底といふ。」或抄に云く、「五祖演師、甞て東山左邊に菴を占めて、元靜禪師師を居らしむ、之を南堂と云ふ、其の後を東山下左邊底と云ふ」と、此の說は不可不可、これは牛過二窓櫺一、疎山壽塔に骨折らねばゆくことでない」と珠は付け加へたり、珠又云く、「佛祖不傳、妙は難々と、一休和尙の云はれたもこゝじや。」

(ム)飽德去也。珠云く、「展待の恩德どう食つたどう賞翫した。」

(ウ)貪多嚼不細。更に須らく子細にすべしの意なり、五祖の云ふが如く更に須らく爛嚼すべし、多くは見る是れ渾圖に吞却することを、圖「まどか。」珠云く、「いやしんぼの大ぐらひかみもせいで、味はわからぬ。」少を得て足れりとす。

(ヰ)燒錢。珠云く、「錢を燒いて先祖の亡靈を祭り、きげんとりていんでもらう。」

(ノ)臘盡春回。珠云く、「今夜一夜かぎり、明朝は春じや。」

(オ)以此佛祖。珠云く、「世諦門を以て衲僧向上宗乘の境界となして、發越揮散、今擧揚の義。」此れはこの處なり。

(ク)以此衲僧。珠云く、「衲僧骨を折りて見出した證據。」龍溪云く、「此れとは時節因緣の到來を謂ふ、この語は百丈、潙山に示すの語、傳燈の十一に出づ、」或抄に云く「衣下の功は年來袈裟下の工夫の功勳なり、」契證はかなひさとる。

(ヤ)革故鼎新。差別智に喩ふ、或抄に云く、「上の句は差別智を、下の句は自然智なり、」言ふ意は諸人が差別智を論ぜず、只だ自然智をばかり求むるなり、又の義に、虛堂は世間のやうな故きを革め新きを鼎め、或は錢を燒いて鬼を送る、或は酒を勸むるやうなことは論ぜず用ひぬ、只だ時節因緣の到來を知るまでなりと、此の義、末の二句に相應して好し。

(マ)知時識節。自然智を謂ふ、珠云く「今夜は除夜、明朝は大年朝と云ふことを知れがたしとこそ思ふ。」

(ケ)結交頭一機。年尾年頭、結交彼此混融の一機、珠云く、「誠のとどくくゝりはどうじや、」又云く、「三百六十日、結算仕をおせた處はどうじや、どうみなに見せたものじや

頭の字は付け字。

(ラ)惟愛清臺。清臺は司天臺なり、禮記には「夏には清臺と爲す、商には神臺と爲す、周には靈臺となす」龍溪云く、「清臺は氣候を望象し、以て調曆を考ふるの處なり。」面白い建立門なり。

(ム)韓子送窮文。韓退之の送窮文、元和六年正月乙丑の晦云云の文、龍溪云く、「惟だ新歲を迎ることを燮して、世間の窮達得喪を管するに堪へざるなり、」珠云く、「まう〳〵見るもいやきくもいや大年の借金拂の帳面。」掃蕩門なり。送窮火は晦日のことに用ふ。

徑山寺語錄終

國譯虛堂和尚語錄　巻之四

(イ)法語

(ロ)蓬萊の宣長老に示す。

(ハ)本色の衲僧、(ニ)透關の眼を具して、風驚き草動くにも、(ホ)悉く來機を辨ず。蓋し(ヘ)他の做處、穩密にして、(ト)聲前句後に落ちず、(チ)得處既に妙にして、用ひ出し來つて、(リ)自然に蓋天蓋地すればなり。豈に(ヌ)依草附木の輩と、(ル)日を同じうして語るべけん哉。(ヲ)濟北の瞎驢、(ワ)初め高安灘頭に到つて、(カ)既に踢踏すること能はず。却つて黃檗山中に還つて、(ヨ)探頭せられて影を露はす。看よ(タ)他の老漢、(レ)人を驗むる

(イ)法語。(以下略脚注に注者の無名は龍溪なり。)夫れ論語の法語の言、孝經の先王の法言、皆是れ世間法のみ、吾が宗の所謂法とは、釋迦不出世、達磨不西來、已に天下に徧き底なり、故に涅槃に說く、諸佛の師とする所は所謂法なり」と、此の法を以て群機に語る、苟も僻了するときは則ち世間の事法を覷ずること猶ほ夢中の如し、豈に把捉するに勞せん乎、此れより眞讃に至るまで編者の名なし蓋し同じく惟份、文愷の手に出づる乎、東明日禪師法語の嗣芳侍者に示す語に曰く、「法語の作は進道勉勵の助の爲めにす、先輩是れ皆已むことを得ずして一言半句を出し、一機一境を示す、揚を穿つの箭の如し、發せずんば已んぬ、發すれば則ち必ず中る、近習師法嚴ならす、法語を以て已が長を稱し、胸中の不平を發越するが爲めにす、何ぞ本分の事に益あらん、況んやまた已が長と不平を發越する者、それ亦鮮し矣」と、又凝絕冲禪師錄法語の巽升維那に示すの

眼目、一見して便ち㋞斷貫索を抛出して道く、來來去去せば、甚の了期かあらん、㋡未だ毒手を展べずと雖も、㋧早く是れ去死十分。便ち㋤箇の款狀子を通じて道く、㋶只だ老婆心切なるが爲なりと。㋰猶ほ不實ならんことを恐れて險處に向つて、更に一拶を與へて道く、大愚饒舌なり、見えんを待つて他に㋒一頓を與んと。箇の些子、㋼滴油箭よりも過ぎたり、稍自ら眼力到らずんば、㋨喪身失命せんこと疑なし矣然れども㋔步驟既に高し、㋗徒に陷穽を設くるなり。反つて黃檗に一掌を與へて云く、甚の見ゆるを待つとか說かん、即今便ち打たんと。已に是れ㋳驢鞍橋を將つて、阿爺の下頷と作す、㋮父子投機、㋘既に縫罅なし。方に且つ言く、者の風顚漢を引いて、㋫參堂し去らしめよ、㋙

語に曰く、「所謂法語とは蓋し前輩有道の士、佛祖不傳の妙を提持し、學者を警語す云云」とあり。

㋺蓬萊。山の名、新添錄には宜長老に答ふる書の中に云く、「蓬萊は海上の名山、前翟行道の地」と、一統誌を按ずるに、「浙江寧波府の蓬島山は、奉化縣の南四十里に在り、」宋の劉次高が詩に、「雨從㆓牛嶺巖窩㆒出、雲在㆓行人脚下㆒生。」宜公は無示と號す、報恩錄を編集せり。

㋩本色衲僧。珠云く、「この文四段、つけやきばではない、眞實木地の色、報恩錄にて辨ず」

㋥具透關眼。或抄に云く、「自由自在に横行する眼を具する漢を云ふ。」

㋭悉辨來機。溪云く、「現來底の機境、一一に辨了して其の惑を受けざるなり。」

㋬他做處穩。珠云く、「他とは具透關眼底、做處とは法身三種の病等なり、行に就いて言ふ」溪云く、「工夫を做すの處、をんびんめん密なるが故に。」

㋣聲前句後。溪云く、「聲前句後の坑子に落ちず、」珠云く、「聲前は默、句後は語、」或抄に云く、「學者の言句におちぬ。」

㋠得處既妙。悟故の處深妙なり珠云く、「得力無事、禪でない妙悟と云ふ、用出來は言語の中をけやぶつて」と、或抄に、「解に就いて言ふ。」（以下溪註は名を略す）

㋷自然蓋天。覺行圓滿、法界に周徧するなり、珠云く、「菴内の人、甚に因つてか庵外の事を知らざる等の如き。」

㋦依艸附木。言象に依附して特達せざるなり、或抄に云く、「言句に依托してをるものを云ふ。」

彼此便宜に落つ、豈に今時濫りに㋓師席に據つて、㋢實法を以て來學を籠罩して寮舍の穩便を以て、㋐人才を養育して、以て㋚衣を推り食を讓つて、㋖苟も繼紹を圖つて、㋴以て遞に相援引して、㋱本宗を盛にせんと欲するものに比せんやと。㋯苦しい哉苦しい哉。正音絕ゆること矣、㋛古來の尊宿、動もすれば㋽劍刄上に於て人を求るすら、尙ほ一半を得ず、㋪何に況んや繩墨の法を耶。若し是れ眞正本色の衲僧、㋲透關の眼を具せば、未だ必ずしも甘心して、㋝黃檗臨濟の句下にも死在せじ。

㋜　妙源侍者の病めるに示す。

㋑佛は是れ大醫王、善く㋺衆病を觀る、衆生㋩信じて之を服するときは、則ち㋥病瘵えずといふことなし。蓋し其れ㋭從本已來、㋬深く此の

㋸同日而語。此の一節までは總論なり、本色修に證の方を論ず。

㋾濟北瞎驢。臨濟は地に因つて名を得たり、臨濟を稱す、小院は滹沱河の側に住す、故に濟北と稱す、瞎驢は臨濟の語なり、今は驢に寄せて語を設く、或抄に云く、「本色　僧の做處、得處を逃ぶるなり、」瞎驢は漢、俗人を罵るの辭。」

㋻初到高安。大愚の處に到るを謂ふ、珠云く、「大愚は歸宗常に嗣ぐ、高安は江西瑞州府高安縣にあり。」

㋕不能蹋踏。驢脚未だ實地に踏着せず、珠云く、「けとばすことがならなんだ、」臨濟大愚に承嗣せざるをいふ、大愚の「汝が師は黃檗なり」と云はれた處。

㋵探頭露影。探頭は勘驗をいふ臨濟錄に「所謂老和尙探頭すること莫くんど好し」と云ふが如し、言ろは黃檗に勘驗せられて、驢の影迹を露はすとなり、珠云く、「さきをくゞられ、先手を見こされた」忠曰く、「今黃檗に試驗せられて、少し驢の影迹を露す」となり頭は助字、爾雅に探は試なりと、註に「刺探甞め試むなり」と。

㋟他老漢。黃檗なり。

㋹驗人。珠云く、「來風を勘驗す」

㋞斷貫索。驢を繫くの具、或抄に云く、「ちぎれた牛の紖（はなつな）なり、言句を云ふ、言句に本用處なきを以てなり」珠云く、「一句語なり。」

㋡未展毒手。珠云く、「黃檗未だ棒喝の毒手をば延べず、惡辣の手段をば延べず、」

㋧早是去死。朝野僉議に「船に乘じ馬を走らしめ、死を去ること一寸」と、一寸は即ち十分